
君ならどうする？ この状況。

EXDEATH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君ならどうする？ この状況。

【Nコード】

N61111

【作者名】

EXDEATH

【あらすじ】

いきなり女神に異世界に飛ばされた少年、そして友。
ファンタジーだ！メルヘンだ！そんな世界で生きていく少年達の物語。

最近、『正義とは何だろう？』って考えてます。

更新を停止しました。

ありがとうございます。いつかこの作品をリメイクしたいと考えていますので、それまで待っていて下さいね。

追記

リメイク作を公開しました。『謳われない英雄への鎮魂歌』で検索をお願いします。

◆異世界への訪問（前書き）

こんにちは。

エクスデスです。

小説を書くのは初めてなんで、駄文オンパレードですね。

駄目だコイツと思ったなら、見捨てて別の人の小説を読んだ方がいいです。

ちなみに……ジョジョネタ結構刷り込む予定です。

◆異世界への訪問

―1月26日―

その日、全ては変わった。

どこがどう変わったかという点、詳しくは説明は出来ないんだけどね。

そうそう、突然だけど異世界って信じるかい？

人によるけど、大人になるにつれてそういう事は忘れて行く。

でも、俺が言いたいことは、そんな夢を見たっていいじゃん！てこと。

あ、少し前振りが長くなったね。

では行こうか。 夢にさ。

―1月26日…19時25分―

俺―松下和哉は学校の補習が終わった後の地獄の居残り学習を終え、帰路についていた。

荷物は無論置き勉。 自宅で学習する分の荷物だけは鞆にぶち込んでいる。

「終わったあああゝ」

ハッキリ言って、学校なんぞちっとも楽しくはない。 意味のわからない領域やら関係詞やら学んで何に使うのかと愚痴るほどに嫌いだった。

それでもテストは普通であるという人間なのである。

「そういや、電車は…っと」

松下は携帯をパカッと開きディスプレイを表示し、画面上の時刻を確認する。

19時25分と表示がなされている。

電車の発車時刻は19時40分なので10分ほどそこらをブラブラし5分で電車に乗ればいい。

そうと決まると近くにある『西友』にしともに方向を変えて西友に入っていた。

10分後――

「んな!! もう10分経ったのか!?!」

本屋に寄っていた松下は携帯の時刻を見て驚愕した。

あと五分。間に合うかどうかギリギリの時間だが、走れメロスの如く走り出した。

「うりゃあ!!」

何とか『ピウウウウッ』というホイッスルが鳴る前に電車に飛び乗る事に成功した。

ぶっちゃけ、超ギリギリでした。

「席…お!?!」

松下は席を探して1両目に移動すると、そこには懐かしい顔があった。

「久しぶりだな…矢島あ？」

「お！ 久しぶり！」

彼『矢島祐樹』は車両間を結ぶドアの一番近くの席に腰掛け、松下はその隣に座った。

彼は松下とは違う公立学校へと進学し、今は青春を謳歌している。ちなみに容姿はかなりのイケメンだ…。

本人はあまり自覚はしていないだろうが、おんにゃの子がそれに釣られて寄ってくる。

性格も良いから更に人気は鰻登りだと。

「お前さんの外見の良さはいつ見ても変わらんな。 コレが差別か？」

「違うだろ…」

まあ性格の良さもあってかそんな奴でも憎めないんだけどね。

そんなこんなで電車は走り出し、次の駅に停車した。

ものの数分だが、感覚として10分ほど揺られたか…なんて気がしたりしていた。

そして、この物語の三人のうちの最後の一人の主人公（副）が登場する。

「おッス！ 松下とイケメン。」

その男は停車した駅で乗り込んできた。

男は二人を一瞥すると向かいの席に座った。

「おうおうー久しぶりだな。十五年ぶりか？」

「んなわけないだろ…。約一ヶ月ぶりだ。覚えとけよ…」

「冗談だよ、冗談！」

冗談じゃなきゃこんなにほのぼのと話してないだろうが、と松下はこの男に返す。

二人目の主人公『伊藤勇樹』はそんな冗談混じりで松下達と会話を進める。

一応ルックスについて触れておくと、伊藤は結構背が高く、ややほっそりとした印象を受けるが実はプロレスが好きで体を鍛えている。

しかも顔はイケメンときており女子からの人気は高い。

そんなカッコいいイケメンズと話している松下は：平凡以下。

見た目もひ弱、顔も女子からは『キモッ』と面と向かって吐かれる程度。

しかもオタク。男子からは人気は高いが女子の人気はほぼZERO%。

そんな三人組で女子から言われていることは、『引き立て役』。

バレンタインになると彼ら二人は確実にチョコを受け取る。

しかし、松下は『バレンタインデー？　なにそれうまいの？』なんて言う始末。

結果的に女子とは全く関わらない立場にいるために女子に触られると拒否反応が起きたりする体質である。　いや、マジで何を言っているのかサッパリわからないが：

「そういや、数学が最近サッパリ分からなくなりました。」

いや、サッパリわからんのさ、などと伊藤は言い、助言を求めたが松下は無視した。

だって面倒なことは隣にいるイケメンが、

「見せてみな：ああ、ここはパラメーター表示で解けるぜ。」

と、何でもやってしまうからだ。

心強いのは確かだが、矢島は女子からも質問を受け付けているので、席が隣が多かった中学生時代は素晴らしいほど虚無感を味わった。

なんかねえ…やってられねー的な意味で。

「ん…？ いま大きく揺れなかったか？」

「ああ、確かに。」

「この区間でそんな場所あったかなあ…」

その時は遂に来了。来ちゃったのだ。
平凡な生活に別れを告げるような時が。

「…ちょ、ヤバくね？」

松下は我が目を疑った。目の前に大きな青白く輝く奇妙なモノがあったからだ。

奇妙なモノは大きさが大人一人ぶんの楕円形の…早い話が『ZER
Oの使い魔』のサ〇トを強制召喚したあのワームホールと考えてい
い。

とにかく、それに該当するものがこつ然と前振りもなく出現したの
は事実。

「…テジャブ？」

「意味が分かって使ってるのか？」

松下はお構いなしにその『奇妙なモノ』に触れてみた。てか…つつ
いた。

その感触は、特に何もなく、ただの空間としか言いようがない。
ただ…

「入ってみようぜ」

松下は興味津々に『奇妙なモノ』を観察し：遂に腕を突っ込んだ。

「別になんとも：あ、ちょ抜けない！！」

松下は突っ込んだ片腕を抜こうとするが何故か固定されたように引き抜く事が出来なかった。

しかも先程よりだんだん引きずり込まれ始めていた。

「松下：お前のことは忘れないッ！」

「何だかよくわからんが俺を引き抜いてくれええー！ 痛みも何も無いのが怖い！」

「分かってる！」

矢島と伊藤は懸命に引き抜こうとするが、どういう訳か全く動かない。

固定されたように力が入っているため、迂闊に力を入れるわけにも行かない。

そこまで考えて松下はもういい、と言った。

しかし：松下は得体の知れない出来事を逆に考え始めた。

（どのみち俺はコイツに飲み込まれるッ！ だが逆に考えるんだ：『この先には俺の天国があるかも知れない』と：）

そこまで考えた時、ある行動に出た。

「おい松下：何をする！？」

「最後のあがきか！？」

松下は二人の制服を思いっきり引っ張り、『奇妙なモノ』の中にぶち込んだ。

「展開としては…!!」

そして、松下は現代に別れを告げた。

END↓

◆異世界への訪問（後書き）

どもーエクスデスです〜。

ここに出てくる名前は、リアルな友達の名前を参考に、下の名前だけ変えた名前です〜。

一応学生ですが、受験生じゃないので、まだまだ書けます。

では、G r a z i e !

◆行動開始

さて、異世界ってのはあまり理解がし難いといえそうなんだろうけど、これから物語が始まるのさ…。なんて言ってる本人が一番良く分かってなかったりするんだけどね。
こういう場合さ。

―始まりの丘…松下視点―

「うげえ…何だ…？」

俺は奇妙な平原の中心にぶっ倒れていた。

とりあえず体を起こし周囲を見渡してみたがあるのは空と大地とイケメン二人。

二人は何だか気絶している様子でくたくたと伸びている。

「フンッ…やはり二次小説とかによくある『異世界』っと言うやつか…。ああ、最高だぜ…」

ぶっちゃけ、松下はこの世における『オタク』と呼ばれる人間。常日頃こういう妄想はしていたので今更驚愕はしない。

むしろ歓迎すべき状況だ。

「ふはははは…最高にハイってやつだアアアアー！」

「五月蠅い！」

既に復活したらしいイケメンズからお怒りをいただく。

全く…そうおこるな、そう言おうとイケメンズの方を向いた―

「「：！？」」

三者三様に同じ反応。
まあ無理はない。 服装が制服から…変わっていたのだ。
どんな服装かはご想像にお任せするが、とにかく服装が『カッコ良
く』決まっていた。

「な…なんだ？ なにがどうなっている！？」

「とりあえず、松下、伊藤！ 俺のそばに近寄るなあああ！！」
「いや近寄らなきゃ解決無理っしょ。」

「ああ、ごめん。」

とりあえず辺りを見渡す。

見渡しても特に目につくものはない。有るのは草と青空と…黒いバ
ック。

なんと言えいいか…わかりやすく言えば部活動で良く使われるあ
のバックと言えわかるだろう。

松下はバックをヒョイと持ち上げ一開けた。

「うほっ！ 底が見えん。」

中は見たとこ見事に底無し。

日の光で当てて見ても底を伺い知ることは出来なかった。
そこで、手を突っ込んで何かないか探してみた。

「ん…？ なんじゃこりゃ」

かき回した手に何か吸い付いてくる感覚があった。

金属…？

ヒョイと持ち上げてみた。

「…………刀だ・・・長くね？」

それは刀だった。が、取り出そうとしたがなかなか出せない。しょうがないのでバックから離れながら取り出した。

「うほっ！ いい刀ッ！」

矢島も伊藤もそれに見とれているようだ。

松下は銘を確認したところ、『正宗』と打たれている。これじゃまるでセフィ○スのあの正宗だ。

「てか以外と軽いな…。刀ってかなり重くなかったっけ？」

「ああ、確かにかなりの重量はあったと思う。模造品でもキロ単位はあった筈だが。」

まあしょうがないので正宗を地面に突き刺しておき、再びバックを漁りだす。

「あのさ、松下…」

「なんじゃ、妾はいま忙しい。手短に言え」

『妾』は女性の言葉だぞ、と溜め息混じりにイケメン矢島は吐くと、こう言った。

「ここ何処？」

「異世界。」

「は？」

矢島は目を丸くした。

「だから異世界。」

「…………なにそれ天国？」

「俺にとつては、な。」

「理解できん」

「後でうんちく垂れてやる。」

松下はそのまま作業を再開し、矢島らは周囲を見渡した。

「またか！？ またコレか！？」

理解が出来なかった。

手当たり次第に漁くると、ふと手に感触を覚えたので引き揚げたら――『正宗』だった。

つまり、もう一振り『正宗』をゲットしたのだ。 要らねー。これで二刀流無双でもしろと言うのか。

「なあ…」

伊藤は何か困ったような顔で、何かを肩に担いでいる。…『エナメルバック』だった。

「お前もか！」

ツッコまずにはいられなかった。

――三分後――

そこにはバックを漁る二人の人間がいたという。

「松下あー」

けだるい声を発しながら漁っているもう一人を呼ぶ

「こんなん出で来たんだが…どうするんだよ！」

伊藤はバックを漁って出てきた『刀』を地面に突き立てる。

「そりやどうするったら使うんだろ？　武器は手に入れても装備しなきゃ意味がありません。」

「それはよく分かっているさ。　で、結局何がしたいの？」

松下はさあ…と答えた。　もし答えられる人間がいたなら今すぐ連れてきてくれ。替わってやるから。

「その刀の銘は？」

「ああ…『むらまさ？』　って書いてあるが…村雨じゃ無いのかー！
！」

「馬鹿：妖刀村雨は実在しない。　正しくは『妖刀村正』だ。」

伊藤は頭を捻った。

「『村正』と言うのは元々あったブランドでな、徳川家に色々因縁があったんだそうだ。で、徳川家はその村正を事実上敬遠する形で部下に持たせないようにしたんだ。」

「へえ…」

「だが、それで徳川に反発する人には良く使われたりした。　だから『妖刀』というあだ名がついた訳よん。」

伊藤は『コイツは何故無駄知識を覚える程の能力を　勉強にまわさな　い　！？』と思ったが一応心に留めておいた。

「一応聞ぐが―」

「ん？」

「帰れるか？　現実…」

「軽く無理。^{はあと}」

コイツはふざけているのか、と叫びそうになったが喉で無理やり抑えた。

「ふざけているのかって言うような顔しているな？　　ったく…説明してやんよ。」

かくして、講義は始まったのよ。

「パラレルワールドって知っているか？」

「いや、SFとかの題材によく使われる設定の一つというぐらいしかしらんなあ…」

「ケツゆとり教育の弊害か」

「あんたもだろうが！　いいから説明しろよ。」

「いいか？　パラレルワールドってのは、ある世界（時空）から分岐し、それに並行して存在する別の世界（時空）を指すんだ。「四次元世界」とかとは違って、我々の宇宙と同一の次元を持つ世界なんだ。ま、普通に並行世界・平行世界と訳されるがね。（出展…無料wiki）」

「………？」

伊藤は首を捻る。　はつきり言うと、『理解が出来ない』

「元の世界の事象から言えば…ある世界、俺達の元の世界と平行して存在している世界…？　　かな…」

「サッパリだが……」

「五月蠅い。説明が難しいんだ。　専門家じゃないのにゆとり相手に説明が簡単に行くものか。」

やや愚痴化してきたが、伊藤が興味を完全に失ったので講義は結局お開きになってしまった。

「おい！」

そこら辺りで偵察をしていた矢島は『ある物』を『肩に掛けて』此方に来た。

：『エナメルバック』だった。

「「オマエモカー！」」

そう二人して叫んだ。

—三分後—

「で、結局何がしたいのかい？」

矢島は呟く。

「I don't know」

「Me too」

「日本語で喋れ。 ややこしい。」

何故かネイティブ化している二人を見限りつつ、矢島のバックから取り出したモノを見る。

まあ前例通り武器なんだがね…

「光ってるな。」

「ああ、光ってる。」

「なんかこう…光を発してる的な？」

「まあ確かに…」

議題に上がっているのは、矢島の武器である『剣』にあった。 無

駄に発光し、いかにも『勇者』が使いますよー的な煌びやかな外見。

そう、伝説の剣…エクスカリバーだった。

「フ…ファンタジーだ！メルヘンだ！まさかエクスカリバーが出るなどとオー」

「ファンタジーやメルヘンの世界なんて…信じらんない・・・」

軽いカルチャーショックを受けている矢島を尻目に松下はエクスカリバーを掴もうとし・・・
バチバチバチツ
と、火花が散った。

「痛…おいしい、マジにエクスカリバーかよコレ…」

松下は一応『ダメージが1しか出ない真っ赤な偽物』かを判断すべくこの剣を掴んだのだが、見事に弾かれた。エクスカリバーは選ばれし者が装備できる剣。
ああ面倒くさい。

「矢島あゝ持ってみな」

「お・おう…」

やや躊躇しながらも恐る恐るエクスカリバーに手を伸ばす。

すると、火花は出ず、逆に暖かい何かが体に入って行ったのを矢島は感じた。

「・・・流石イケメン！俺達に出来ない事を平然とやってのける！」

「そこに痺れる！ 憧れるウウー！」

別に『ズキュウウン』とか『女の子に無理やりキス』とかしてないのは分かって頂きたい。

まあそれで矢島がエクスカリバーの適合者ということが発覚したわけ。

エクスカリバーが本物か分かったわけで。

「なあ・・・」

「なんだ？ イケメン矢島。」

イケメンと呼ばれたのが少し気に食わないのか少し顔をしかめたが、構わずに先を進む。

「俺のバックに手紙が入っていたんだが・・・」

矢島はエクスカリバーを手取る際、それまでもついでに引き上げていた。

「見せな…ナニナニ？ 『女神です！ 新世界はどうか？ どうか？』」

「…ナメてんのかコイツは？」

文字は日本語だが、字が丸く女性独特の文体だ。　しかし…おちよくってんのか？

「続き…『そういえば、手紙と一緒にマテリアと腕輪、入ってなかった？』」

それをあげるからこの激動の時代を乗り切ってね』…だと。殺意が沸いてきたぜ」

かなりムカつく文だがマテリアが入っているらしい…マテリアだど！？

「矢島ッ！ そのバックの中に宝石みたいなヤツと腕輪がないか確認してくれないか！！」

矢島は渋々だがバックを漁り、何かを取り出した。

それは、美しいエメラルドグリーンの輝きを放つ宝石（×3）と、腕輪（×3）だった。マテリアと呼ばれたその宝石は元の世界において、名作と呼ばれるゲームの中に登場するアイテムの一つ。しかし所詮はゲームであって。

現実には存在せず。

しかしここにその名を冠するモノがある。興奮せずにはいられない。

松下は素早く腕輪にセットし、腕にはめる。

その時、松下の頭の中に数々の名前が浮上する。少し頭が痛くなりそうだがその中の特に自分が見知った名前を発する。

『ファイア！』

すると、体から何かが抜けるような感覚があり、それが右手に集中する。

腕を上げ、感覚的に解き放つ。

「うおッ！ 何でいきなり火が！？」

『それ』は伊藤の足元に着弾し、周囲を焦がした。

「…多分コレは『マスターまほう』のマテリアだと思う。」

「マスターまほう？」

「某有名最終幻想ゲームに出てきた『すべての魔法が使用可能にな

る』アイテムだよ。

ややチートの匂いがするが有り難く使わせて頂こう。」

「チート…」

「さ…流石ファンタジー！ 一般常識以上の事が起きる！」

テンションが上がってきた伊藤を放っておき、さてさて松下は手紙が二枚組になっていることに気付き、読んだ。

「…『まあ、レベルを50まで適当に上げておいたからその世界で死ぬことは無いでしょう。』

安心して死ぬまでRPGの世界に浸ってね〜！ じゃあね！』…死ぬまでか！？」

それはちよつと困る。 そんな事するとSBRも読めないし、お気に入りアニメが見れないッ！

ちよつとどころじゃない。とてつもなく困る！

「松下」

「なんじゃ、手短に。」

「レベル50についてのツッコミは？」

「別にいいじゃん。そんなありがちな設定に関して言うことはないね。」

いや、そこがもつとも重要なのだが、と思ったがこれ以上面倒なことになるそうなので言わずにおいた。

なにがともあれ、無事異世界に着きましたとさ。やれやれ、これからどうなっていくのやら…。

そのことについて頭を悩ませる矢島だった。

次回に続く。

◆街

街があった。

あの後、重い腰を上げてそこらを散策している途中で、街があったのだ。

ご都合主義だかなんだか知らないがとにかくあったモノは仕方ない。

「問題はあの街に人間が住んでいるか、他の生物か…」

此処は異世界。一般常識から離れた世界ということはそりゃこう思う事も必然である。

「入るか？」

「入るか？じゃなくて、入るしかねえだろう…？」

「まあな。とにかく入るしかない。」

「だな。」

とりあえずその街に突入してみた。するとそこは、立派な中世の街並みをした建物がお出迎えした。

そして、ちゃんと人間もいた。

しかし、素朴な疑問が浮かんできたのだった。

「なんか美人多くね？」町に入ってから辺りを確認して思ったのだが、道行く女性が皆美人なのだ！。

松下は興味が無いようだが、他のイケメンズは興味深々である。

「矢島：気にはしてはならん。その煩惱が身の破滅を招き、最終的に笑うのは女と決まっている。」

俺のようにそのことを悟るがいい。」

「しかし…ねえ…」

「矢島…覚悟を決めろ。どうせ元の世界には帰れない…。」

いや、逆に考えるんだ、ここで体験出来ることは元の世界では出来ないとかんがえるんだ。」

「前向きにか？」

「ああ」

「ふ…成長したな…松下…」

「何語り合ってたんだ？お前ら」

冷静に女性を視姦・・・観察していた伊藤が冷静にツッコんで来る。なんだか恥ずかしくなりすぐに止めたが、周囲から若干笑われている。

少し・・・快感？

「バカか？」

すいません。バカです。

ちょうどその時だった。

ある一枚の手紙が空から舞ってきたのである。

「……………」

ヒューン

「……………」

ひゅーん

「……………」

ひゅひゅーん

「U z e e e e e !」

パシ！

「O a h o o ! オークション出品だな。」

「いやいや、ルーブル美術館に…」

「いやいや、中身を読んでみr『却下』…。」

コレを三回ループ後、

「はぁ、読めばいいんだろ？読めば！」

かなりしつこいのでパッシと捕まえ、封を破く。
内容は以下の通りである。

『やっほー！女神さんだよ』

ちよつとした事を教えとくね

そのこの世界の名前は無いけど大陸名はあるの

その名も『メサイア』

目の前の街は『マーノラス』って言うの

じゃ、またね！』

……………。

よし、あの女神殺そう。

「この女神子どもっばいな…」

「色々と都合が良すぎる…」

「はぁ、泣けるぜ…」

少年達は深い溜め息を吐き、この世界に召喚した本人のふざけた態度に失望をおぼえた。

これが夢なら覚めて欲しいほど『オーマイガッ！』というヤツだ。

「……………」

もはや言葉にもならない。

「…なぁ、ジョン・タイターって…まあいいや。」

景気付けに雑学を語ろうとしたが、あまりの二人のテンションの低

さに中止せざるをえなかった。虚しい。

◆宿にて。

街を見て回って数時間：日が暮れ始めた。

流石に宿を取ろうかと松下らは話し合っていた。

しかし、矢島が放った発言が、波紋を広げることになる。

「宿を取るって言ったってなあ：金有るのか？」

「……あっ！」

「…え？ どうした：まさか、考えてなかった・・・というオチ！？」

『Exactly.』

そう、彼らは金が無いのだ。こればかりはどうしようもない、ゆゆしき問題だ。

試しにバックを漁るが何もない。大事な事を女神は忘れていたようだった。

「俺達：野宿か…」

伊藤はテンションがLOWになり、肩を落とす。

しかし、松下は更に発言する。

「野宿どころか俺達、食うもんねえぞ？下手すると死ぬんじゃない？」

金が無ければ宿に泊まらない。

更に食べ物すら買えぬ。しかも思春期真っ盛りの男児三人を養える程の金が無ければならない。

三人は先の見えない底なし沼にハマったような憂鬱になり、三人を

暗いふいんき（↑何故か変換出来ない）を包んだ。

「今になって、初めて親に感謝を覚えたよ…。

俺達の為にお金を稼いで貰うってこと、こんなに感謝しなくちゃいけないかったのか…」

そう、後になってようやく親の有り難さが理解出来たのだった。

「おゝい！」

その時、天使が舞い降りた。ようだった。

なんか向こうで此方と呼んでいる人がいる。声からして女性だ。コレがご都合主義か何か知らないが、一応近くまで歩みを進めた。仕方なかったからである。

「なんか、呼びましたか？」

一応聞いてみる。違ったら恥ずかしいが、もしかしたら食べ物とか貰え…ないな。その人は言った。

「あなたがたが『召喚されし者』ですね？
主人が呼びです。」

召喚されし…者だと！？
実際召喚されたがそんな大層なものではない…と言おうとしたが、相手の美しさに少し見惚れてしまい、言いそびれてしまった。

「うふふ…見とれちゃいましたか？」

若干のほほんとしており、気を許しやすいが、此処は異世界。 気

を引き締めてかからないと。

「うふふ…こちらです。」

そんな思春期真っ盛りの男児の反応が面白いのか、微笑みながらも建物に入っていく。

えっと…『女神亭』…？

女性は建物内をスタスタ歩き、半ば仕方なしに引きずり回された挙げ句、赤い扉の前に来た。

「ではお入りください。」

女性はそう言うのとびらを開けた。

その先に、白い服を着た女性がいた。

「あなたは……？」

「私は大天使ガブリエル。ここの総支配人です。」

「……はあ？」

「あの女神に召還されたのでしょうか？」

予想外の質問が来た。

「あの女神を知っているのか！？」

率直に聞いてみました。

「ええ、大天使ですからね。」

当たり前だ、と言わんばかりの答えだった。

てか大天使ってなんだよ？

「とりあえず…あなたについてお聞かせ出来ますか？」

若干恐縮しながらも、丁寧な言葉使いで矢島が聞いた。

「い・や・で・す♪」

「なんだってエエエエー!!」

その一言に部屋の空気温度が下がった。
まあ大体3℃程。

「だって、教えたら怒られるから♪」

「：仕方ないですねえ。で、我々を呼んだのは何故です？」

松下は内心何が『教えたら怒られるから♪だど!？』とブチキレ
ていたりしたが、おくびにも出さなかった。

「この辺りに、魔法学院があるのよ。入らない？」

Yes

No

答え

No! No! No!

「そんなこと言わないで入らない？」

Yes

No

答え

No!

「そんなこと言わないで入らない？」

Yes

No

答え

No

「美少女沢山いるわよ♪」

Yes

No

答え

Yes! Yes! Yes! (松下以外)

「GOOD! それから今日は泊まって行きなさい。お金は要らないわ♪」

なんと太っ腹な経営者なのだろう、そう思わずにはいられなかった。

「美少女…沢山…」

「ん? どしたよ伊藤」

何か伊藤がハアハア言っている、と思った瞬間!!
ブフォッ!

「い…伊藤オオオオー! なんじゃそりゃああああー!」

盛大に鼻血をぶっ放した。

松下はティッシュを貰い、伊藤に手渡す。

しかしいきなりだった…

「大丈夫、俺は生きてる、俺は死なない、こういう時に素数を…」

伊藤は戯言を繰り返し、血まみれになっていた。　　どんだけエロいんだ、伊藤。

「三人相部屋ね、明後日に学校の始業式だから。教材はもうあるから心配しないで。」

ガブリエルさんは矢島にチャット鍵を手渡し自身は仕事があるとかで何処かへ去って行った。

しかし…今は伊藤を運ばなければッ！

「2. 3. 5. 5. 7. 11. 13. 17. 19. 23. 29. . .
」

気を失いそうになりながらも健気に素数を数える伊藤はハッキリ言
って…

「哀れだな。哀れ過ぎる。」
その一言に尽きる。

T
o
b
e . . . ?

◆朝早くに

青い空だ。

朝早く目覚めた松下は、窓を開け、爽やかな風と共にそう感じていた。

「この世界に来てから二日目か…」

そう呟きながら、中世の街並みを眺めていた。

ただでさえ、異世界に召還されたというのに何という冷静さであろうか。

普通、パニック状態を常人なら起こしていること間違いなしのこの状況下で、うろたえたものの、パニックとまでは行かない松下の精神力は伊達ではない。

「魔法…か、魔法学院と言う場所があるなら皆使えると考えて間違いない。まあ大天使ガブリーさんに聞けばいいかな。」

ゼロの〇い魔の世界は魔法が使えるか使えないかで貴族か否かが決まっていた。

この世界も同じような世界の設定なら魔法学院は貴族学校なのだが、それは聞いてみないと分からない。

ちなみにガブリーさんとは、ガブリエルの愛称でそう言わされている。

「松下あ？速いな…」

矢島が起きてきたらしい。

「高校へは電車で行ってるからな。6時前に起きるなぞ簡単だ。そういうあんただって今6時少し過ぎたところだぞ？」

「俺も電車通だ。」

「さいでした」

そんな他愛もない話をして40分程潰したとき、やっこのことで、伊藤が起きてきた。

「あのさ、バックの中身見せてくれない？」

「はつきり言う中に入っている武器を見たいだな？」

「Exactly.」

「あんたも見せろよ？」

そう言ってまだ起きたばかりの伊藤に喋りもせずに二人は部屋に戻った。

そうして、彼らは今再び武器の鑑賞を始めた。

矢島は、バックを漁って「ほら」と手渡してくる。

その武器はなかなか大きかった。

「美しいな…まさかあれか…？」

その剣は白く輝いており、不思議な力さえ宿っている雰囲気を出していた。

「恐らくそれは『エクスカリパー』だろう。」

『エクスカリパー』

それは、初めて文献にかかれたのはあの『アーサー王伝説』である。

その効果は絶大で、攻撃力は言わずも分かるだろうが、特筆すべき事がある。

それは所有者の傷を癒すことが可能なのだ。

それのお陰で、アーサー王は戦場に出ても傷をおってなかったと言われる。

「…これ、『エクスカリパー』じゃないよな？」

「それはない！」

ちなみに『エクスカリパー』というニセモノもある。

かのギルガメッシュもエクスカリパーをつかまされた苦い過去がある。

「お前のは？」

松下はバックを漁って、

「ほれ、」

と、2つ渡してきた。

「これってあれだよな？」

「アレだな」

それは、刀だった。

それも、半端な長さではない。

「正宗って書いてあるんですけど…」

「まあ、正宗だな。」

正宗だった。しかもセフィ○スさま愛用の武器である。

長さは松下の身長に合わせてあり、難なく振り回せるが、問題は、

「何故2つある？」

正宗が二本あつた。

「そりゃ双剣として、じゃないか。」

この正宗は二刀流で扱えるのか不安になってきた。

「普通は一本しか使わなくてもいけるだろうな。」

それより、伊藤の武器は何なんだ？」

実は伊藤は二度寝していた。

「二度寝するか…ま、いいか
疲れてるんだろぅな。」

松下の優しさが少し、見えた。

その頃の女神は：

「あははははははいやだめだはははははははは！」

R2000を読んでいた。

「ブツダさん最高」

結構楽しそうであった。

伊藤の武器は、

妖刀『村正』

妖刀といえば『村雨』であるが、実在した妖刀とは『村正』の方である。

村雨は物語の中でしか登場していない。

『村正』は実はブランドものであり、徳川將軍を暗殺するのに使われた刀のブランド名である。（暗殺は失敗）

後は、説明が面倒なので、トロステで見るといい。

「…三人とも凄い武器持ってるな」

「どうやら魔法使えば、異空間に収納可能みたいだぞ？」

そう言う矢島はエクスカリバーをフツと消して見せた。

「そして…」

矢島は目の前にエクスカリバーをフツと現した。

「と、言うことは、あのバックも同じ魔法がかけられているみたい

だな。」

松下は、正宗二本をフツと消し、四次元バック（命名）を見た。

松下はすぐ視線を戻すと、こういった。

「もう一度ねるか」

「飯は？」

「その頃に起こしてくれな」

「はあ：（勝手にしろよ、もう）」

すると、松下はベッドにバタツと倒れた。
しかし、突然ムクッと起き、いきなり
喋りだした。

「ああ、豆知識として教えてとく。

大陸名が『メサイア』と言っただろ？』

「ああ」

「あれな、『Messiah』と書くんだけど、アレには2つ呼び方がある。」

「ひとつはヘブライ語で『メシア』。

もう一つは『メサイア』だ。」

「で？」

「メシアは救世主という意味がある」

「で？」

「『メサイア』は賛美歌で、あの有名な『ハレルヤ・コーラス』が44番目に入ってる。」

「で？オチは？」

「いや、凄いなって…」

「それだけ？じゃあ寝てろよ。」

なんか矢島が酷い。

松下は溜め息をつき、寝始めた。

「オチが欲しいのか？」

松下は考えていた。が…

「オチ…」

いつまでたっても思いつかなかったので、松下は…
—考える事を止めた—

T
o
b
e
．．．？

学院編のまえ

―昼―

昼飯を食べた後、聞きたいことがあった。
それは、

「何故こちらの世界に米があるのでしょうか？」
そう聞いたのは伊藤だった。

その疑問は、昼飯の内容に由来する。

昼飯―それは、チャーハンだったのである。

「ここらへんの気候は日本とかなり似ているの。だから育ちやすいのよ♪」

「いや、そうじゃなくて、何故米がこの世界に有るのかを聞いているんです。」

「何言っているのか分からないわね。元々この世界にもあるものよ。そっちの世界だって遥か昔から存在してるんでしょう？」

ちなみに米はこちらの世界において、昔は価値があるものだった。

米、田んぼを多く所有していた者は地主などになり、今で言う金持ちである。

「つまり、この世界にも昔から作られてきた食物って事ですか？」

「さつきからそう言ってるじゃない？ちなみにパンもあるわ」

という事は小麦もあるのか、と思った松下だった。

「この人は皆魔法が使えるのか？」

朝から気になっていた事だ。

「ええ、皆使うことは出来ます。ただし一般人はあまり使えません。」

「何故？」

「恐らく血統の問題だと思います。一般人の家系は皆魔法が苦手らしく農業を営んだり、商業を発展させています」

「（おいおい、ゼロの〇い魔みたいな所だな）」

「それに対して、魔法が自由に使える人は家系的にも魔法が使える人が多く、一般人より収入がかなり多いです。」

「つまり私たちが行く学校は金持ちの学校と言うことですね？」

「ええ、そう考えて間違いありません。」

「入学試験とかは受けなくていいのですか？」

「問題ありません。魔法が上手く使えるか否かが問題なんですから、あなたは資格があります。しかし」

「しかし…？」

「マテリアを使用する事で初めて使用する事の出来る魔法と、マテリアを使わずに行使する魔法は違いがあります。詳しく言えば属性…みたいのが違います。」

「ふーん」

「簡単に言うとファイナルファンタジーとドラゴンクエストの魔法の違いといったところですね。」

「なる程、わかりやすいな。」

そこで朝から何も喋ってない伊藤が初めて口を開いた。

「ここに魔物はいるか？」

この部屋がシーンとなった。別にしらけた訳じゃないが。

「…ええ、存在します。ここら辺には少ないのですが、学院の近くに意外といます。どうやらワザと呼び込んで近隣の街などの負担を少なくしています。もちろん学院から約三キロは強力な結界があります。まああなた達なら容易に破壊出来るでしょうが。ちなみに魔物は…モンハ○に出てくるモンスターに酷似しています。」

「つまりモンスターを狩るハンターもいるわけですね？」

「ええ、もちろんです。ただ、最近モンスター達が戦争に使われたりしているようですが。」

「大体把握しました。ところで、学院はどのくらい大きいのでしょうか？」

ガブリーさんはにっこり笑うと、

「あなたが確認してみてください。ちなみにここは学院の敷地内の端っこにあります。」

「……は？」

「だ・か・ら、ここは学院の敷地内にあるんです♪」

「つまり、ハンパなくデカイと…?」

「Exactly.」

「どんだけデカイんだよ…」

これからの生活に鬱になりかけた矢島だった。

その後2、3質問したあと部屋に戻った。そして、松下はこういったために、

「クソ！なんでこんなに苦労しなきゃならんだ！そうかあの年増の女神か！あいつが全部わruウボアー」

雷が落ちた。室内なのに。

「…今のはサンダガの二段階ほど上の魔法だな。」

松下は9999ダメージくらい、『せんとうふのう』になっていた。

「コレはどうするっ?」

「仕方ないなあ…アレイズ！」

丸裸の天使が降りてきた訳ではないが、取りあえず生き帰った。

「はあはあ…やはり、女神には勝てんか…」

「だろうなあ」

「しかし、FF7CCのミネルヴァをレベル87で撃破したこの私に不可能はない！」

「じゃあ今すぐ元の世界にかえしてみろよ？」

「サーセンw」

この後、武器の手入れをしたあと、適当に武器を扱ってみた。

「おりゃーとりゃー！」（矢島）

「無駄無駄ア！WRYYYYY！」（松下）

「オラオラオラオラオラア！」（伊藤）

かけ声が三者三様だが、思っていたことは、

（（か・軽い！））

「コレがガンター○ヴの力…」

「いや、違いますから！」

「そう…」

武器がかなり軽いのだ。もっと重いはずなのだが、肉体の強化のお陰で振り回せるようだ。

30分ほど続けたのち、宿にかえりご飯を食べ、ガブリーさんから教科書を貰い、明日に備えるために準備をしていた。

「流石四次元バック！何でも入るぞ！」

四次元バックに荷物を詰めていた松下は感嘆の言葉を発していた。すると、受け取った教科書を読んでいた矢島が話し掛けてきた。

「文字が日本なのは助かるからツツコミしないけどさあ、内容が中2レベルなんだけど…」

そう、教科書が簡単なのだ。

「まあ高校入試の勉強頑張った俺らには簡単なんだろうが、こっちじゃ難しいんじゃないの？」

「そうか？…まあいいやゝ無駄な勉強しなくて済むしなw。ところで、教科書に英語が無いんだけど。」

「なんだと！！」

「国語も現代文のみ…」

「なん…だと！（by大統領）」

「世界史の代わりに分厚い魔法史と『近代魔法と錬金・召還魔法に

ついて』と言う本が…」

「なんとお！」

「数学も中2レベル…」

「やるじゃない！」

「聖…書？」

「なんと…貸してみろ。」

吟味中…

「…この聖書は違うみたいだな…ヨハネの黙示録や創世記、良いサマリア人の話、もとよりイエスさえいない。そして…非常に言いにくいんだが…」

「？」

「これに書かれ、そして今崇められている神は…」

「？」

「…あの年増の女神だ…信じられん…」

「は…？」

「ある一説を読んでみよう。『人間はあたしが作ったのよ！私を崇めて崇めて崇め倒してお供え物を出さない！その代わり魔法を使えるようにしてあげるわ！』だと…」

「何したいんだろ？」

「更にだ、『変なモンスターがいる？連れてきなさい！へ…？むり？ああもう！役立たず！私が行くわ。』…そのあとはあえて読まないが、モンスター達が悲惨な目にあってる事は想像に難しくない…」

「この聖書（？）を持たされるって事はあいつ宗主か！？」

「間違いないな」

「…名言とかないよな…もちろん。」

「待ってな…『作物が駄目になった？それなら隣村を襲えばいいじゃない。』というマリー・アントワネットまがいのセリフがある。」

「嘆きたい…」

その後、三人は眠った。そして朝になり昨日の話を思い出し…嘆いた。

魔法学院編―入学

今日は魔法学院の入学式である。

三人の少年達は荷物を既に昨日まとめていたので後は学院へ行くだけである。

「ガブリーさん、学院までどうやって行くのですか？」
と、矢島が聞く。

「馬車です。なにせ遠いですから。」

「I see.」

「ま、気長に行きましょう！」

三人とガブリエルは馬車に乗り、ゆっくり道を進んだ。

街から少し外れて小一時間―

「あれです。あれが『マティウス魔法学院』です。」

その『マティウス魔法学院』は凄まじくデカかった。

それは六階立てであり現代建築物の構造であった。

「ちなみにあれは寄宿舎。貴族が多いからあんだだけ大きいの。」

デカいと思っていた建物は寄宿舎だった。

「学校はあれよ。」

その先を見ると寄宿舎の四分の3ほどの大きさの学校があった。学校の方が寄宿舎より小さいのは少し変であるが。

「学校の構造はあなたがいた学校とさほど変わらないでしょう。ああ、これから入学式があるんでしたね？場所は…講堂ですね。行きましようか。」

ガブリーさんの後を付いて行くと、ちらほら新入生らしい美少女がいるではないか！（注意…松下と美少女たち、もとい女性達とフラグは一切立ちません。リアルでも。ただし伊藤と矢島には立たせる予定です。）

その少女達も講堂へ向かい始めた。新入生という点はあながち間違いないようだった。しかし、この美少女達を見て、

「はあ…この美少女達とフラグは一切立たないだろうな……作者言ってたし。」

松下は嘆いていた。

そんなこんなで講堂に入ると、資料を受け取った。クラス、番号、名前が書いてあり、講堂のどこに座ればいいか記してあった。

その資料によれば、三人は同じクラスらしく、番号こそ違うがラッキーであった。

資料に書いてある通りに座り、時を待った。

そして25分後――

「ただいまより、第128回入学式を開式致します。先ず最初に校長先生よりお言葉をいただきます。」

このアナウンスが流れ、講堂は静かになった。

そして、アナウンス通り校長先生らしき人が出てきた。

「Nuuuuu…まぶしいな…太陽光を克服したとはいえ、まだ外にでるよりはましかな…」

という呟きがマイクから聞こえたような気がした。

「諸君！この学校は基本的に自由である。恋愛、嫉妬、三角関係、など自由にせよ！だが、絶対にSchool Daysまがいの事は絶対にするな！過去に実際あったんだが事態の収集が全くつかず、しかも捨てられた女子が暴走し、大変なことになった！だから気をつけろ！以上だ！」

全員が固まった。

「…以上でカーズ校長のお話を終わります。続きましてフィルナ生徒会長、お願いします。」

すると、腰まである金髪を風に流しながら超絶美少女が入ってきた。すると、全員が喚声を上げ始めた。

「会長オオオオ！つき合ってくれえええ！」

「何を言うか！つき合うのはこの俺だ」

「会長！会長！会長！」

「会長！会長！会長！」

「会長！会長！会長！」

「ああ…お姉様…う…美し過ぎますわ！」

「私…あなたに一生付いて行きますわ…」

「オーラが違います…バタツ（オーラに魅せられ倒れた）」

「……ナシだな。興味が沸かん。」

数々のつき合ってくれ発言や百合発言、族長コールが喚声としてあちこちから出てきた。ちなみに最後の発言は松下なのだがそこは秘密だ。

「静かになさい。」

その発言で喚声が止んだ。なんというカリスマ性。いや、多分気に入られたいから命令に従っているようなものだろう。

「新入生の皆さん、私がフィルナ・クルスト・チャート・ブランフオードです。この先、様々な形で関わり合うと思いますがよろしくお願いします。」

その時、講堂が喚声で満たされた。内容はあえて言わないがそこは察して欲しい。
すると、

「ああ、生徒会に入りたいなら能力を伸ばしなさい。次の魔法試験

で上位二名が我が生徒会に入ることが出来ます。頑張ってくださいね♪」

今度は前回以上の喚声が響いた。皆、闘気が目に見えるほどみなぎっていた。

「以上で入学式を終了します。各生徒は教室に移動してください。」

そのアナウンスにより入学式が終了した。そのまま全員が教室に移動した。

以下はその移動中の会話である。

「松下く生徒会長美人だったなあ」

矢島が話し掛けてきた。

「そうか？そこまで美人だったか？」

「あんな美人初めて見たぜ…そうだろ？」

「興味ないね。俺はそこら辺歩いている女子の方がいいとおもうが。」

」

「…お前、人を好きになった事あるか？」

「…：今までの人生の中で他人の人生に興味を持ったことはない。

興味を持てば別れが辛くなるし、その人が他の男と付き合うとなれば、いっそ恋なんてしなければ良かったと思うからだ。（そんな経験まだ俺にはないが）」

「そうか…。」

「ああ。」

「そう言えば、生徒会長は校内最強の魔術師らしいな。」

「あんなシリアスな会話してたのに、テーマは話を戻すのか？」

「ああ！」

「呆れた…。お、教室ここじゃないか？」

「そうだな。1・Eの教室だ。」

「入ろうか。」

ガラガラッ

「遅いな…」

「「伊藤!？」」

「早いな…相変わらずに」

「まあ座れ。我らは幸運なことに固まっている。松下は隣。矢島は俺の前」

「すまない。」

以上が講堂から教室の移動中の会話である。

「なあ、俺ら三人は多分恋愛フラグ立たないぞ。」

いきなり松下が言ってきた

「なんで？」

「周りを見てみる。」

言われて周りを見る二人。

「（。□。；）」

何故こんな顔かと言うと、周りの男子がイケメンだらけなのだ。

「だが…」

松下は続ける。

「お前たちは安心していい。作者が彼女を出してくださるらしい。」

「なにい！？もちろん美人だよな！？」

「大丈夫だ。作者を信用しろよな。」

「お前は？」

「リアリティのある学院生活を書くと言っただろ？作者が体験しているリアルな経験を。」

「つまり…まさか！」

「ああ、恐らく女子とは必要最低限の会話しかないだろう。女子と会話する日の方がかなり珍しいな。」

「恐ろしいな…」

「なーに、こちらが徹底的に女子と会話しないように仕向けているだけだ。休み時間はずっと寝てる…」

「悲惨な…」

「しかも前の席のイケメンや、クラスの人気者が女子との会話権を独占しているからな…。」

「……お前…」

「しかも、学校で一番頭がいいクラスにいる所属してるんだが、落ちこぼれでな。学年なら300人中50位なんだが…」

「………」

「俺は基本的に自分の能力は隠す方だな、ことわざなら『能ある鷹は爪を隠す』と言った所だな。実際、前に中学で大地賛頌の指揮者しただろ？それで他校に名前が知られていることは知ってるな？」

「ああ、知ってる。」

「俺が指揮者と分かった奴はクラスで三人しかいなかった。」

「………」

「女子なんて相手にしない方がいい。俺は小学校からの女子ぐらいしかつき合いはない。」

「同情する。」

「だから俺は獣医志望だった。この世界では何になるかは決めてないがな。」

「だが、運命の出会いと言うものが…」

「お前は運命を信じるのか？俺は信じない。全ての事柄が全て『運命』という言葉で片づけられるからだ。『運命』とは乗り越えゆくものであり抗うものだからだ！『運命』とは『必然』であり、それが全て『悲しみ』に繋がる輪廻だ。だから俺は『運命』を信じないし全て『愛』だとか『恋』なんて全て否定する！」

「演説だな…」

「世界では飢え・飢餓などで死んでいる人の目の前で『これも運命だから受け入れろ』と言えるか？答えは否である。運命だからといって抗うことを止めたら、その人は人でなくなってしまう！」

「なんでこの話に…？」

「この世はそう甘くはない。運命は…（長くなるので省略）…だ！む…先生がきたか…」

「長かった…。」

「暇があったらまた語ってやる。」

この話で女子は松下とはあまり話さなくなる一因だったりする。

魔法学院編―？

さて、今クラスは新しい先生について盛り上がっていた。

「新しい先生ってイケメンらしいよ！」

「えゝマジゝ？先公なんてキョーミねーってのw」

「男らしい。」

「ケツ男か…」

以上が抜粋した生徒間の会話である。

そしてチャイムがなり、生徒はドアを見ていた。

しかし、

「パリーン！！！」

意外！

それは！

『窓』！！

スタッ

「成功だな…」

「「どっから入ってんじゃああ！」」

全員がツツコミを入れた先には！

男が立っていた。無傷で。

「バカなのかマジなのか？」

「これが…担任！」

そして、

「そうだ…私が、このクラスを受け持つ…担任だッ！」

「コイツが…担任だと！！！」

「グレートなほどクレイジーだぜ…担任…気に入ったア！」

この担任が窓を突き破って入ってきたことに無駄にハイッて奴になる生徒達だった。

「今から…Home・Room…略してHRを始めるッ！」

「「オオー！」」

「まず自己紹介だ…めんどいから私のことを担任と呼べ！そして…次、一番！立て！」

「はい！私の名はエマ・オブ・ライエンです！15です！以上です！」

「よろしい。次！」

こんな感じで自己紹介は進んだ。そして、全員の自己紹介が終わったあと、

「今からこの学院における注意を言い渡す。まず恋愛は自由。三角関係、嫉妬大歓迎だ。だが校長が言ったことは守れ！そうせねば…死ぬぜ…」

若干脅しであるが言うことは正しい。

「諸君らはこれから魔法を中心に勉強していくわけだが、学校とは人としてあるべき姿を教えることを忘れるな！」

言うことは正しい。

「今日は昼で終わりだが、午後は校内を見て回るといい。広いからな…。解散する！立て！礼！解散！」

他のクラスよりかなり早くHRが終わってしまった。

「三人で見回ってみるか？」

そう聞いて矢島達の方を見ると、

「わ、私、プ、プリミル・プリミッシェルと言います！これから、あの、かが学校を見回りませんか？」

矢島が女子に誘われていた。女子は少し緊張ぎみである。

流石作者：手を回すのが速すぎるぜ：矢島、後で覚えてろ。まったく、伊藤行こうぜ。」

そして伊藤を見ると、

「私の名前は、カリィ・ハイブランド。ちょっと付き合って。」

「…いっぺん、死んでみる？」

世界に絶望を感じながら、そう呟いたという。

ちなみに、この二人のことについて話しておこう。

名前 プリミル・プリミッシェル

地位 貴族

趣味 ピアノ

ランク A

特徴 初恋が矢島。

落ち度 初恋が矢島。

容姿 スゲー美人。やや藍色の髪の毛のショートカット、胸なかなか。

名前 カリィ・ハイブランド

地位 貴族

趣味 読書

ランク A

特徴 伊藤が好き(?)
)

落ち度 なし

容姿 スゲー可愛い。長門にそっくり。

ちなみにランクについて説明してなかったので説明しよう。

低い方から

C↓ B↓ A↓ S↓ SS↓ Y である。

Yは神のレベルと言う意味である。つまりあの女神のことであるのだ。

大体ランクAほどになれば軍で幹部になれる程凄いのだ。この少女達は学院ないで三人の中の二人である。あと一人はもちろんあの生徒会長だ。

おまけに言うが、レベル50である松下達は既にSSレベルである。FF4ならレベル50あればゼロムスさんに勝てるか勝てないかわからない。FF7なら余裕でセフィロスに勝てる。要するにラスボスと対等に張り合う事が可能なレベルなわけだ。女神以外。

あの女神は殺しはしないが死ぬ寸前まで容赦ない。恐ろしい女神がいたものだ。

話を戻そう

「ケッこいつらも所詮人間であつたか。」お前もな。

「多分これからこいつらも二人は俺に構わなくなるだろうな…やはりこいつらもから距離をとって行動すべきだな。」

大体彼女が彼らにできる事は知ってたので、仕方ないと思う。が、羨ましいことにはかわりはない。

しょうがない。と思いつつも、

「見学と行きますか！」

まず図書館。ここには、数々の魔法書、新聞、さらにはこっちの世界でライトノベルと呼ばれる本が大量にあったことが判明した。

「これなら世界のことも調べることが可能だし暇つぶしもできるな。素晴らしい。」

ちなみにソロモンの鍵は無いそうだ。

次、食堂。広い。メニューが沢山。スゲー。以上。

次、グラウンド。うん。文句なしのフツのグラウンドだ。

その後もあちこち回って教室に帰還した。

「矢島は…いない。伊藤も…いない。」

間違いないな。

「まあそうだろうな。ついでにキスやなんやかんややってんだろう。殺す」

彼女ができないのはかわいそうだが、現に作者も彼女いないので安心してほしい。

「解散ってことは今日は終わりか…帰ろう。」

とぼとぼ一人で歩いて学生寮に向かった。

魔法学院編―？ 思案

―朝―

「あ…あああああ!!」

朝、松下は飛び起きた。

その原因は奇妙な夢を見たことにある。

それは、矢島が俺の目の前で…まあなんだ、キスをする夢を見た。俺じゃ無いぞ！断じて。

あの顔でキスをするとか…正直…具合が悪くなった…。

しかも相手がプリミルだぞ!?

『美女と野獣』の真似事か!?? って夢でツツコミましたよ。

まあそれはさておき、正直学校に行きたくない。

吐き気、寒気、熱があるっぽい。おお、見事な風邪じゃないか。

「…学校に伝えて貰うか？」

一度はそう考えたが、ここは波紋で切り抜けることにした。

「あゝかったりゝなあー」

と、ぼやきつつもキッチリと教科書を鞆に詰める。無論、置き勉などしていない。

「…彼女ほしーな。けど…無理だな。」

意味もなく願望を口にしたが、完璧にこの顔では、女子に話しかけるのも犯罪におもえてくる。

正直、どう考えても俺と同じぐらいの顔なのにどう違うわけ？納得

いかないなあ俺は。

第一何で美人のプリミルが矢島に惚れるのかなあ？ありえないぞチクショウ。

そんなことを考えながら、顔を洗い、髪を整え、キッチリ顔を整える。まあ整えたって意味は無いんだけど。

寮内は学校よりデカイとあって、正直迷う。食堂に行き、朝食を取っている時、こう思った。

（せっかく異世界に来たんだから、世界を見てみたいなあ…あ、学校辞めりゃいいか。）

物凄くバカな考えだが、本来、ファンタジー小説を読んでいると、学院に在籍しながら冒険するというのが一般的だ。

しかし、よくよく考えると、冒険するなら大抵一週間はかかるのだ。学院はどうする？リアルに考えるといっそ学校辞めた方が何かしら便利であるのは間違いないである、と作者は考える。

つまり、『学校で三年過ごすよりは世界を見て回った方が面白い』という考えであるのは間違いでしょいか？

という事を考えながら朝食を取り、学校に行く。

「おーい！松下！」

「ん？矢島…と、プリミル…だな。美女と野獣そのものじゃないか。」

「おい、いま物凄く失礼な事考えたか？」「いや、美女と野獣について考えてただけだ。失礼な事など考えていない。」

「…美女と野獣というところに少し引かかると…」

コイツ、なかなか鋭い。関節的に侮辱している事に気付きやがったな。

「んなことよりさあ、あんたら、二人で登校しなよ。」

思いつきり話題を変えてやった。

いいリアクションを頼むぜ。

「え？何でさ？」

…は？何だそのリアクションは？

「え…？付き合ってるんだろ。あんたら。」

「でもさ、一緒に行くぐらい…」

…うわ…最低だな…

「…テメーも女の気持ちを理解しな。鈍感人間がっ！」

「鈍感…」

言うだけ言ってやった。

「ほら、松下さんもそう言ってるんだし、はやくいきましょ！」

プリミルも急かす。やはり二人でいきたいようだ。

「あ…ああ、またな、松下！」

「さらばだ。」

半ばプリミルに引きずられて、矢島はいった。

そして、わかった事がある。

『モテるなら、鈍感であれ。』

この理論は既に数々の小説で実証済みだからみなわかるだろう。

いま、矢島に当てはまったのはコイツである。

どうやら天然鈍感な女を引きつけることが可能であると同時に、人々から愛されている。

コイツを持つ人間には自分を卑下する癖が良くある傾向がある。

例を挙げてみたいのはやまやま何だが、コレは関係ないので省くべきだろう。

話はそれだが、結局は『矢島は鈍感』ということである。

また逸れた。読者からクレーム来るので先に進むぜ。

―学校の昼休み―

「ねえ、矢島君はどんなタイプの人が好き？」
ああうぜー。放課後にしろよ矢島。

「俺は：プリミルみたいな人が好きだな。」

「え：うん。ありがとう／＼／」

クソ！青春しやがって！

あっちでヤレ！あっちで！

：真剣に辞めたくなった。

―放課後―

「さて、俺は帰るが：矢島はプリミルとか？」

「ああ、プリミルがどうしても、てさゝ」矢島はそう言っている。
顔がニヤニヤしている。殺す。

「わかった。じゃあな。」

「じゃあ。」

「ああ、矢島。」

「はい？」

ここで言っところ。

「俺というツツコミがいなくなってもさ、頑張れよ！」

「わかったよ。じゃあな。」

絶対分かってないなコイツ。

もう決心した。この小説は今から学園物にはさせん。
ファンタジー&冒険、という形に取らせて貰う。

そう呟いていた。（作者が）

END ↓

魔法学院編―？ 思案（後書き）

読者から意味がわからないとのご感想を頂いたので。改定しました。無理やりですが、やはりシリアスよりは面白さを優先した結果です。しかも一時間で書いたものですから、駄文になっています。次話も少し改定します。

魔法学院編―？ 魔法検診

入学してから早1ヶ月。

これから学院生活を公開しよう。

朝8時20分、朝礼。

「全員、起立！礼！」

これを行っているのは伊藤である。

つまり、学級委員である。

ついでに副委員長は、カリィである。

「ヒョッコども！今日も元気そうで何よりだ！今日は五時間目に魔力診断がある。楽しみにしておけよ！以上！副委員長、」

「…起立。礼。」

「「ありがとうございます！」」

―昼―

「矢島くん 一緒に昼ご飯食べましょ！」

そう言うのはプリミルであった。

「ああ、ちょっと待ってくれ。松下あ…あれ？いない…」

「松下って、あの1人で孤立してるあの松下ですか？」

「ああ、三人で食べようと思ってたんだが…伊藤にはカリイがいるし。」

「私はあなたと2人で食べたいの！第一今日松下は休みよ？」

「そうか…仕方ないなあ…じゃ食べようか。」

「はい！（私は仕方ないレベルなの…？）」

その頃松下は学校を休んで考えていた。

（よく考えてみれば退学理由はコレでいいのか…）

（しかし、彼らには少し飽きてきた。彼女がいて構ってくれないから…。ま、結局学校は辞めよう。あれ？でも理由が…）

前話でなんとなく語った作者だが、正当な理由無くして放學できない。

（そう言えば俺って身を守るだけの強さはどのくらいだ？）

そう、問題はそこなのだ。放學したら学校にはいられない。そして自らが強くなければならない。

（む…ランク試験…か…力試しに受けるかな…？）

ちなみに今この世界に来て、あまり世界情勢がわかっていない。自分がいまどこの国であるかわかっていない。だが、『ランク試験』というものがあるということはわかった。

（よし！ランク試験受けよう。そういえばどこでやれるんだろ？）

自分の強さはどの位なのかと興味が湧いた。

（しかし、今は…まだ動くときではない。）

自分に言い聞かせて、学校に行かずに二度寝する。

「とりあえず寝よう。」

再び眠りについた松下だった。

―再び学校―

―五時間目―

1Eの女子は保険室にいた。

「じゃあ始めますね。」

まだ若い美人保険医はそう言うと言いつつ一番から魔力診断を始めた。

ちなみに魔力を調べるとき、機械を使う。「えーと…1578ね。なかなか高いわね？オブライエン。」

「ありがとうございます。」

「じゃ、次！」

ちなみにこの学校の魔力平均は1300である。

そして、

「5番、カリィ・ハイブランド！」

「はい。」

「診断中」

「えっと…16478!？　ちょ、壊れてんじゃねえの!？」

「そこまで動揺しなくても…」

「…もっかい」

「リトライですか？」

「再診断中」

「16748…本当のようですね…。もういいですよ。次」

そして、

「28番…プリミルさん。」

この女医、やる気を無くしている。

「はい。」

「動かないでね…えっと…17860…またですか…またですか
アアア!？」

「ひえ!？」

プリミルが少し脅えている。

「もういいです。ちょっと眼科医検診してきます。ジェシカさん。
こーたいしてー」

と、言うわけで若い美人の保険医は帰っていった。
しかし、男子は嘆くであろう。

保険医が美人で男子には人気だったからである。

そうとは知らず保険室の前に集まった男子。

「全員、我らの肉体美をあ的女医に見せつけてやろうではないか！
！」

「オオオオ！！」ガラッ

「ん？来たわね。そこに並びなさい。」

そこにいたのは、帰った保険医に引けを取らない美人だったそうなの。

「…………お…オオオオオ！！」

「美人だ…」

「全員！戦闘体制に入れ！！」

ババッ

一瞬の内に全員体操服姿になった。

「な…何を期待してるのか分からないけど…とりあえず始めますね。
最初の人が出てきてください。」

「我が輩である。」

「じゃ、服脱いでください。えっと…1358ね。いいですよ。次
」

これが進み、

「次々伊藤君。はい。じっとして…189637ですって!? バカ
な…」

「？」

「もっかい…します。…189637…ですか。この学校は怪物だ
らけですね…次の人…」

「矢島です。」

「…190212…」

「？ 何ですか？」

「何でもないです。本当に。帰っていいです。」

なんか奇妙だ。

その後、この保険医は眼科医にいき、機械を取り替えたそうだ。

「何だったんだろ？」

彼らはそう呟いたそうだ。

―放課後―

以下は、この件に関しての校長と先生のやりとりである。

コンコン

「良いぞ」

「校長！大変です！」

「どうした？」

「き…規格外の…ハアハア…魔力を…」

「落ち着け。よくわからん。波紋法の呼吸をしろ。」

「は…はい…コオオオ！よし！話に戻りますが、生徒の中に有り得ない程の魔力を持った生徒が4人います。」

「で？なんだ？」

「校長！これは凄いことですぞ！早く王宮に報告を！」

「する必要はない。」

「え？今何と？」

あっさり切り捨てられた先生は、目を丸くしている。

「報告する必要はないと言っている。」

「なぜですか！！彼らの才能を無駄にするのですか！！」

先生が抗議した。

「考えてみる。報告したらたちまち戦争に使われる。彼らの人生を破壊するのか？」

「い・いえ…すいません。確かに報告したら彼らは人を殺すでしょ

う…しかし！」

「仮にお前が彼らと同じ年齢で無理やり戦争に駆り出され、人を殺したとしよう。」ゆっくり諭すように校長が語りかける。

「はい…」

「お前は耐えられるか？まだ精神が成熟していない彼らは間違いなく…」

「…罪の意識に悩まされるでしょう。私なら確実にトラウマになる…」

はっとしたように考える。

「そうだ。他人の命を奪ってしまったら後には引けない。敵だとしても。」

「…」

「人を1人殺したら人殺しだ。だが1000人殺したら勲章もの、ましてや10000人殺したら英雄だ。」

「…分かりました。この件に関しては箝口令を敷きましょう。彼らの未来のために。」

先生はそう決めた。少年少女の未来のために。

「そうしてくれ。」

「では。」

しかし、この少年少女たちは、いずれ戦争に参加することになる。
松下と戦うことになる戦争に。

―放課後の教室―

「や・じ・ま・くん♪」甘い声でプリミルが話しかけてきた。

「ん？どうしたの？」

「魔力診断どうだった？私は17860だったけど。」

「俺は：たしか190212だったな：うん、190212だ。」

辺りが静かになった。

そして、

「矢島くん！付き合って！！」

「なによ！私が彼女よ！私が最初にアプローチかけたの！！」

戦争が始まった。

「冗談じゃない：早く帰ろう。」

女子の間をすり抜け、廊下にでた後、逃げ出した。

10分後、

「あれ？矢島くんは？」

彼女らはやっと矢島がいなことに気づいたそうだ。

END ↓

魔法学院編―？ 魔法検診（後書き）

読者の方にご指摘受けまして、改定しました。

魔法学院編―？ 退学申請中

魔力診断から翌日。

そして、学院に入学してはや1ヶ月。

松下は校長室を訪れていた。

「すると、君はこの学院を辞めたいと言うのか？」

校長はゆっくり聞いた。

「はい。そのつもりです。」

「なぜ？」

「私は…自分の力がどこまで通用するか見極めて見たいんです。」

「…なるほど。で、君は学院を出た後、なにをするつもりか？」

「私はランク試験を受けたいと思っています。」

「つまり、君は王宮に仕えるのか？」

ランク試験を受けて、Aランク以上は王宮に仕えるのが可能なのだ。ただし、本人が拒否した場合や、学生の場合などは免除される。

「いえ、傭兵を兼ねたモンスターハンターにでもなろうかな…と思います。」 「そうか…君の思いには負けたよ。本来、この学校は放校など認めていないんだが、君は女神に選ばれし戦士だからな」

「あの女神をご存知で!？」

意外な名前が校長から出てきたことに驚愕する。

「知ってるも何も、私も連れて来られた最初の吸血鬼…いや、生物だ。」

「?…つまり」

「あの女神の暇つぶしの存在だ。昔は人を殺すことに何も感じなかった。だが、あの女神に会って戦ったが…初めて恐怖を感じた。今でもこの世界を従える力を持っているが、そんなことをすると…殺される。」

「いろいろあるんですね…」

意外な校長の弱点が出たのだった。

「いずれにせよ、この学校を出て行くなら金は必要だ。ほれ。」そういうと、ギッシリ金貨が詰まった袋を渡してきた。

「あの…すいませんが、イマイチ金の価値が分からないんですが」

松下はこの世界にきて、1ヶ月が立ったが、お金は持ったことはなかった。

「お前たちの世界の金銭価値は知ってる。今から教えよう。」

？金貨は元の世界で約1万円。

？銀貨は元の世界で約1000円。

？銅貨は元の世界で約100円。

？鉛貨は元の世界で約10円。

？アルミニウムみたいなやつは約1円。

？金貨の呼び名は簡単で、金貨はクル、銀貨はシル、銅はスン、以下は省略する。（物語で使わないため。）

「分かりました。ありがとうございます。…ところでいくら入ってるんですか?」 「うむ、1000クル入っている。」

「…えっと…1クルで1万だから…1000万…ですって!?!」

「ん? ああ、その金は自腹だし、こう見えてもかなり金はあるからな…全く痛くないぞ。」

この校長、なかなかやるではないか。

「こんなに持ってたら変に思われますよ! バックには入るけど、取られたら終わりです!」

そんな大金を持っていたても盗まれたら意味はなさない。

「この世界には銀行もある。必要なだけ持ち歩け。」

「そうですか…」

ちなみにこの銀行は校長が作ったそうだ。

「ランク試験を受けるなら、隣国のクルドという国に行くといい。」

あそこは誰でも受けられる、しかも民主主義の国だ。」

「ほう、民主主義ですか…いいですね。」

民主主義、つまり身分関係なく国のあり方を示す主義をもつ国があることに、感心した。

「ああ、そうそう。」

校長は何かを思い出したようなしゃべり方をした。 「松下くん。君は魔力診断を受けてないね?」

「ええ。それが…」

「君の力の一端を調べてみないか?」

「まあ、あの日は考えてる事があったんで休んだんですが…」

「丁度ここに機械があるから調べていいかね?」

何でもある校長室である。

「構いませんが…今ですか？」

「Exactly」

（診断中）

「ふむ…257960か…凄いな。」

「そうですか？」

「この力、悪い方には使うなよ？」 「はあ…。（そんなに凄いのか？）」

イマイチ分からない松下だった。

「物は相談だが、あと一週間は学院にいてくれないか？ 実は生徒が自分の使い魔…というのか分らんがそういうのを召喚する儀式があるんだが…」

唐突に校長は言ってきた。

「いえ…心の中で思ったならすぐに行動する派なので。」
あまり学院にはいい思い出はないので、拒否した。

「じゃあ今すぐやりなさい。」

「ハイ!？」

「今すぐやりなさい。そっちの方が便利だから。」

「いや…しかしやり方が…」

「『自分の使い魔よ! 来い!』 って願って『召喚!』 と叫べば良いから」

かなりおおざっぱである

「分かりましたよ。人間は召喚されませんよね？」

「あるなら見てみたいぞ。」

「良かった…室内でするんですか？」

「ああ、やっちゃってくれ。」

「（仕方ないなあ…我に相応しいモンスターよ！出でよ！）…召喚！」

室内に魔法陣が形成され、辺りが暗くなる。そして、一瞬の閃光の後、

「なんだ？あれ。」

そこにあつたのは、黒い卵だった。

すると、その卵が横に少し動き始めた。

「なんだなんだ？生まれるのか？」

卵の内部から蹴っている様にも思える。とりあえず松下は近づいてみた。

「生まれるのか？」

松下は卵に触りながら呟いた。と、次の瞬間！！

パキ！パキパキパキ！

「きゅー！」

そこにいたのは、黒いドラゴンだった。さらに、翼が左右に3枚ずつ、計6枚の羽があった。

「こいつは…バハムート…零式…か？」

「きゅーきゅきゅー！」「ん？ドラゴンの中でも最高級のバハムートか？この世界にはいないはずだが…」

「…女神の差し金ですかね？」

「さあ？そこんとこ何だが俺にもようわからん。」

「きゅきゅっ！きゅー！」

バハムート零式の子どもが甘い声で鳴いている。

「に、しても…どうしますか？」

「使い魔にするほかあるまい。親がこの世界にはいないからな…」

「まあ、どこぞの異世界では人間が召喚されたいらしいからな。それよりはマシかな。」

「ほれ、名前をつけなさい。」

校長からせかされると、松下はバハムート零式の名前を付け始めた。

（そうだな…零式からとって…『レイシキ』…『ゼロシキ』…『ゼロ…シキ』…『ゼロ』…よし！）

「お前の名前は『ゼロ』だ。いいか？名前は『ゼロ』。わかった？すると、『ゼロ』という名を賜ったバハムートは、理解したようにきゅきゅっとう鳴いた。

「ああ、俺の名前は松下和哉。松下と認識してくれ。」

「きゅいきゅい！」

なかなかかわいい奴だった。

「今日は寮にいいが、明日から学校には通えなくなる。来たいなら書類を私宛に送ってくれば、歓迎してやろう。」

「たまには遊びに来てくれ。」

「わかってますよ。」

退学に関する書類に判子を押し、松下に手渡した。

そして、松下は校長室をゼロと共に退室した。

「さて、寮に戻って生活用品をバックに詰めるか。」

そうして、3時を過ぎたくらいに松下は寮に戻った。

戻ってから一通りバックに詰めると『ぐうぐ』と腹が鳴った

「そういや、腹減ったな…食堂行くか。」「きゅいきゅい！」

生理現象には勝てないらしく、二人…いや、1人と1匹は食堂へ駆け出した。

—食堂—

食堂にいくと、ある人物がご飯を食べていた。

「次の生徒会長選挙で2連勝するにはどうすればいいのかしら？ね？フリーズ。」

そこには生徒会長、フィルナ・ブランフォードとその使い魔、カーバンクルことフリーズがいた。

尤も、松下は全く興味はないので彼女の隣ではなく向かいの5つ右の席に座った。

ちなみにフィルナは唐揚げ弁当、松下はチキンカツ弁当を食べていた。

そんなフィルナが松下に気付いたらしく、話しかけてきた。

「ねえ、あなた！」

「……………」

「ちょっと、そのあなた！」

「：俺か？」

「あなたはこんな美人がいるのに隣に座らないの？最低でも向かいには座らないの！？」

「はあ？」

松下は困ったように首を傾げる。

「俺はあんたなんか知らないし興味もない。第一、あんたは隣に俺が座られて嫌だろう？」

「な：私を知らないですって！？私はあのフィルナ・ブランフォードよ！？ファンクラブも存在してるし告白を毎日受けて毎日フッてなお『そんな会長がいい：』と言われているあのフィルナ・ブランフォードよ！？」

「知らん。」

「な：。」

『会長はしばらく放心状態になった。そして、考えるのを止めた。』

「そういや、赤ちゃんのお前は何食うの？」

「きゅい？きゅいきゅい！」

ゼロはハイハイしながら（そう見える）チキンカツ弁当の方へ歩みより、

「かぷ！」

つと食らいついた。

「これが：沸いてくる保護欲：萌え：」

その後チキンカツの一個を食べると、丸まって寝てしまった。

「かゝわいゝ」

いつの間にか復活したフィルナがゼロを見ていた。

「このドラゴンの種類と名前は？」

フィルナはすっかり気に入ったようだ。

「∴種類はバハムート零式、名前はゼロ。」

「へゝ可愛いわね？」

「要はそれだけか？じゃあな。」

「え？ああ、あなたの名前は？」

これは答えていいかし迷ったが、

「∴松下和哉だ。じゃあな。」

結局答えた。どうせ明日にはいないからである。

そのあとゼロを抱えて食堂をでていった。

「松下和哉∴私を知らないと言ったことを後悔させてあげるわ。」

フィルナはそう呟いたそうだ。

End↓

冒険の準備中

万物の終わりが迫っています。だから思慮深くふるまい、身を慎んでよく祈りなさい。

何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。

不平を言わずにもてなし合いなさい。

ペドロの手紙―4・7―9

生徒会長と分かれた後、ゼロと共にそこら辺を歩いていた。すると、向こうから知った男が歩いて来た。

「お！松下じゃないか！何をしてるんだ？」

「いや？別に。」

「そうか。今暇だな。」

「いや、暇を潰すのに忙しい。じゃあな。」

実際暇である。

「いやいや暇を潰すのに忙しいなら暇なんだろう？ちょっと相談したい。」

「やだ。」

「そこをなんとか…」

「ったく、しょうがない。」

と、この一連の会話により相談をするそうな。

「ここじゃ誰かに聞かれるかも知れない。ついてきてくれ。」

そんなに聞かれたらヤバイ相談か?と思いつつ、松下は伊藤についていった。

伊藤は元々悩みを隠すタイプではなく、他人に言うタイプであったが、このように他人の目が無いところに連れて行かれたことはないので、余程重要な悩みであろうことは推測できた。

「ここなら誰もいない。」

そこは寮の伊藤の部屋だった。

「どうした?カリィの事についての相談か?」
「違う。」

伊藤は神妙な口調で答えた。

「じゃ、なんだ?」

カリィの事ではないらしい。

「俺は:この学院を辞めたい。」

それは意外な告白だった。

「フ:フアフア!」「な:なんだよ!? いきなり笑いやがって
!!真剣なんだよ俺は!」

いきなり相談相手に笑われたことに伊藤は憤慨した。

「いや、すまんすまん。そうか。お前も俺と同じに考えていたのか
:。」

松下は納得したように頷く。

「?:どゆこと?」

「簡単だよ。『俺はすでに学院を辞めている』」

「:what?」

伊藤はそのことに頭がついて行かないらしい。

「つまり:え?どーゆーことすか?」

「だから、俺は既に学院辞めてるわけ!その証拠に、ゼロ!出てこい!」

「もきゅきゅ?」

ゼロが顔をだした。

「おお!？」

伊藤はかなりビビったようだ。

「コイツはバハムート零式の子どものゼロだ。ゼロ、挨拶しなさい。」

「きゅきゅい!」ゼロは松下のもとを離れると、伊藤の方へ向かった。

そして、ゼロは伊藤の服をよじ登り、可愛く伊藤の目を攻撃したそうだ。

「URYYYYY!」

その後、気を取り直して話をした。

「つまり、あんたは校長に掛け合って学校を辞めたわけかい？」

「さっきからそう言ってるだろう？」

「しかもその際、一週間早い召喚儀式をやったわけだ。」

「そーだな。」

「さらには一千万を活動資金としてもらったと。」

「間違いない。」

「よし!行ってくる。」

「ああ、ついていこうか？」

「来てくれるのか？」

「ああ、友達だろ？」

「G r a z i e !」

こうして、男たちの友情は深まった。

「君もか？」

またか…という感じで言った。

「私もここで三年間過ごすより、世界を見てみたいんです！」

「…どう思う？ 松下くん。」

校長は松下に話を振った。

「そうですね。私は彼が思うとおりになせたらいいと思います。私たちにはそれを抑制することは出来ませんから。」

「そうか…伊藤くん…本当にいいのか？」校長は改めて問う。

「…ええ。決めました。」

彼の決意は固かった。彼の思いは誰にも砕けないだろう、そんな心の現れだった。

「分かりました。あなたの放校を認めましょう。」

この人達には何を言っても無駄だろう、そう思った。

「あ…ありがとうございます。」

「あと、きみに1000クルを軍資金として渡しておこう。」

「感謝いたします。」

「そして…」

校長は言い溜めるようにつぎの言葉をつむぐ。

「今から召喚儀式をしておおう。」

「へ？ ああ、わ、わかりました。やりましょう。して…やり方は…？」

「ああ、それなら俺が教えよう。」

松下が割り込んできた。

「心を落ち着けて…『我に相應しい者よ！ 我の前に姿を表せ』と思つて、『召喚！』と叫べ。」

「それでいいのか：案外簡単だな。よし、（我に相応しい者よ：我の前に姿を表せ：）召喚！」

そして、伊藤の周りに魔法陣が形成され、辺りが暗くなる。

そして、そこにいたのは：

『卵』！！

しかも：金色！！

そして：生まれる。

そいつは：

「みゝみゝ」

「なんだ？コイツは？全身金色だと！？百式か！？」

「見たことがあるぞ：たしか：バハムート烈か！？」

そう。クライシスコアでジェネシスが召喚したバハムート烈だった。

「きゅいきゅい！」

「どうしたゼロ？」

ゼロがいきなり顔を出し、床に降りると、子どものバハムート烈の元に向かった。

「きゅゝきゅゝ」

「み？みゝみゝ」

「おお：二匹で遊んでおる：仲睦まじいな。」

どうやらゼロは気に入ったようだ。

「しかし：名前はとうする？」

「自分で決めな。それが親の勤めだろう？」

「わかった。…と言っても…何にするか…」

「なんでもいいからはやく」

松下は急かす。

「まてまて…む、『ソル』ってのはどうだ？」

「み？みーみー」

なんか喜んでいるように見える。

「ソル？いい名前じゃないか」

松下も同賛する。

「そうかそうか気に入ったか。いまからお前は『ソル』だ。よろしくなソル。」

「み」

こうして、バハムート零式『ゼロ』と、バハムート烈『ソル』が仲間になった。

「俺と行くというなら、カリイは…どうする気だ？」
校長室から出て来た後、松下はそう質問した。

「カリイは…俺を慕うより他の男と結ばれる方がいい。俺は…」

「それでいいのか？」

松下はいきなり突っかかってきた。

「え…」

松下の意外な返答に一瞬戸惑う。

「本当に他の奴と結ばれて、それでいいのか？」

「よくはねえよ!!俺だって…カリィを渡したくはねえ!だがよ…
あいつの将来を考えても他の奴に貰われる方が…幸せに決まってる
…」

伊藤は本心を露わにした。彼は彼なりに彼女の事を考えていたのである。

「それがお前の思いか…」

「ああ。」

「なら…お前はカリィに相応しい男になれ。この旅で成長しろ。そして、カリィを奪え。」

「…わかった。」

松下は歩き出した。これから何がおこるかわからない、この冒険の初めの一歩だった。

「すまない…」

その後ろ姿を見て、伊藤はそう呟いた。

End↓

冒険の準備中（後書き）

実は最初伊藤の召喚したやつは、オーディンの馬、スレイプニルにする予定だったんだけど、すげー書きにくいのでバハムート烈にしました。

文句は言うなよ！○○君よ！

ケータイについて

Time misspent in youth is some
times all the freedom one ever
has

若い頃に無駄に過ごした時間が、人生で唯一の自由であるかもしれない

Anita Brookner

翌日、朝の学校にて――

「おはよー矢島くん。」

「ん？プリミル…すげー眠そうだな。」

「え？分かるの？実はそうなのよ…昨日夜更かしし過ぎて…

「じゃあ朝礼まで寝とくといいいんじゃないか？」

「ん…そうしとくね…じゃ…

すげー他愛もない会話である。

「いない…」

「ふにゃ？どうしたの？カリィ。」

不意に起きたプリミルがカリィに話しかける。

「いない…。」

「は？」

「伊藤がいない…」

カリィは異変を感じた。

伊藤はあれでも委員長なのだ。普通ならもう来てるか、休むとしてもカリィに何かしら言うはずなのだ。

「寝坊でもしてるんじゃないの？彼だって完璧じゃないわよ。」

「そう…」

しかし、ついに現れることはなかった。

朝礼にて――

「おはよう諸君！よし、すまないがカリィくん、号令を」

「？…起立。礼。」

「「おはようございます！！」」

「着席。」

「初めに、皆にもう一回委員長を決めて貰わなければならない。」

その時、先生はかなり暗い顔をした。

そして、生徒達はそれを見た。

「なぜですか？担任。」一人の生徒が手を挙げた。

みな、もう一度委員長を選ぶことなぞしたくはない。

「そうだな…それから説明しなければなるまい…。」

生徒はみな、頭に『？』を浮かべていた。そして、更に顔色を悪くした担任は、その口を開いた。

「…先日、この学校を辞めた生徒が2人いる。どちらも私のクラスだ。」

「え…？まさか…伊藤が…？」
生徒全員が目丸くしている中、かろうじて放心状態から解放されたカリィが口を開いた。

「そのまさかだよ。君の恋人、伊藤だ。そして…」

「「なんだってエエエ！！」」

担任は松下と言おうとしたが、あまりの驚き様に、口をつぐんだ。

「カリィ！君に彼氏がいたのかい！？」

「いやまて！伊藤が辞めたとなれば俺たちにチャンスが！！」

「カリィちゃん…あなたにも春は来てたのね…」

「おお！？委員長の座が開いているではないか！！委員長になれば更にカリィちゃんに近づく事が出来る！」

「担任！今すぐクラス会議を！！」

「…お前らは友達がいなくなって悲しく無いのか？」

冷静にツツコむ担任だった。

ちなみに誰一人、松下がいなくなったと気づいてなかった。

矢島でさえ。

「まー彼が自分で決めたんだからしょうがないでしょ？」

プリミルはカリィを慰めていた。

「でも、一言言ってくれば…」

「あなたに迷惑掛けたく無かったんでしよう。彼なりの優しさよ？」
プリミルはしっかりと伊藤のことを理解していた。

矢島の親友ともなれば、しっかりと観察する女であった。松下のことは眼中に無かったようだが。

「でも…」

「ああもう！しっかりなさい！それでもカリィ・ハイブランドですか！さっさと忘れて他の男を見つけて幸せになりなさい！」「うん…」

結構強めに言ったが、それは彼女なりの優しさだった。

―初めに来た街とは違う街にて。

「なあ伊藤。この世界に来て、驚いた事を言ってこーぜ。」

黒い小さなバックを肩にかけた松下は隣の少年に聞く。

「んあ？構わねーよ。じゃー最初は俺ね。」

その隣を歩く伊藤という少年は少し考えた後、答えを出した。

「テレビがない！！」

「…そりゃあファンタジーならそうだろうな。だが…一番キツいの…」

松下は溜めるように答えた。

「エロゲがない！！」

ズキュウウン！！

「当たり前だろ！！ファンタジーな世界にゃねエよ！」

「うるせーカリィで童貞卒業した奴が言うんじゃねー」

「ばかもーん！！カリィとはまだだよ！」

「お？つまり将来的にはしたいと？」

「Yes！」

なんと正直な野郎であろうか。

「…たく、話に戻ろう。そうだな…美人が多い！」

「男子の貴族イケメン！」

「ライトノベルがある!」

「女子の胸がけしからん!」

「女子の太もがいい!」

「女子のあのスカート丈の短さ! 犯罪だぜ!」

「女子の雨に濡れて少し透けたあの制服!」

「女子の美しい手にハアハアする!」

「爆弾魔か!？」

これが30分続いたそうだ。

「おい…真剣にやろうぜ…」

「しゃーねーなあ。それにしてもさあ、ここの街の人、みんなケータイっぽいもの持つてるような気がする…てゆーかケータイですよ? あれ。」

「ですぬ。ですよねーあなたにもそう見えますよね。聞いてみますか。」

そう言うと、少年達はすぐ近くのいかにも『大人』といえるボン・キュ・ボン! な女性に近付いた。

「あのーすいません。あの…」

「あらなにかしら? 坊やたち。まさか私と寝たいの?」

「違ーう。全く。」

「あらそう?」

完全否定されて、少しがつくりきた女性だった。

「あなたはケータイ持ってます?」

「え? ケータイかい? あるよ。」

そういうと、女性はストラップを2つ付けたケータイを取り出した。

「どこで手に入れましたか?」

「私はb uで手に入れたわよ? ああ、あっちにb uの店、向こうに

SOCOMOが、隣街にhardbankがあるわ。お薦めはbuだけど、どこもそこまで変わらないわねえ。」

「そうですか。ありがとうございました！」

「はい。あと三年たったらサービスしたげるわよ？」

「…考えときます。」

こうして、女性と別れた少年達だった。

buの店にて――

「つまり、通話料はかからないと？」

「はい。使用者の微量な魔力で交信しているので、使用料はかかりません。」

なんと！使用料はかからないそうなの。

「それは平民でも使用可能ですか？」

「はい。魔力を持たない人はいませので、基本的に使用可能です。」

「機種は？」

「はい。このようにパカッと開くタイプかスライド式がございます。」

「ふむ。元の世界と変わらんねえ。」

「さらに…」

「さらに…？」

「最新式で、まだ市場に出回ってないレア物！耳にかけてマイクを口の横に置く、この斬新なケータイ！さあ買った買った！」「これは…」

読者の方々には、少し想像していただきたい。これの外見ははっきり言うと、スパイ映画で耳を押さえて「こちらスネークさん。了解。

」というのに似ている。

分からないなら、想像して欲しい。

「買った!」

「あいよ! 5クルだよ! 2人で10クル!」

「(む: 高いな。まあいい。ジョセフみたいに値切るのはやったことではないからな。) よし買った!」

「使い方は、まず相手のケータイに魔法(微力)で繋げるだけだよ。それで相手のケータイにかけられる。」

「どうかけんの?」

「ちよつと片方かしてくれない?」

「おお、オッケー」

ちよつとびっくりしたが伊藤は相手にわたす。

「まずかけ方だけど、最初に耳のこのボタンをおして、相手の顔を思い出す。そしたら、脳の魔力をコイツが感知して相手を特定したあと、『この人でよろしいですか?』と聞くから心ではいって思えば自動的にかけるから: はあ、つかれたわ:。さあやりなさい。」

なかなか上から言ってくる女性である。

「じゃ: 伊藤、外に出てくれ。俺がかけてみる。」

「おK」

伊藤はタカタカと出て行った。

「よし、(伊藤: 伊藤: と、『この方でよろしいですか?』ご主人様? …… good)」

プルルルル…ガチャ！

「松下か？」

「凄いな…これ…」

「ああ、凄いな…」

「え？あんたは出ただけだよな？」

「次は俺だ。感じるがいい！『萌え』を！」

なんかおかしい。伊藤は出ただけである。

（なんだ？まさかかかる方も何か秘密が…『ご主人様？伊藤という方がこちらに…その…あ、電話をかけてこようとしてますう！どうなされますか？ご主人様？』…ああ、いいよ…『許可』するよ…）

「伊藤…」

「凄いな…かける方もメイドが…」

「ようこそ…」

「へ？」

「男の世界へ…」

その後、少年達は男の階段を一步あがったと感じた。

宿にて――

「やはりメイドさんには眼鏡&カチューシャだ！」

「いや！主人公の幼なじみがいきなり主人公専属メイドさんに轉身！」

「ようこそ…」

「『『萌え』の世界へ…』」

実はこれこそが、現実世界で孤立する一番の原因だった。

END↓

え？いま？戦闘中

Death is nothing to us,
since when we are, death has not come,
and when death has come, we
are not

死は我々にとって何ものでもない

なぜなら我々が存在する時には、死はまだ訪れていないのであり、
死が訪れたときには我々は存在しないのだから

Epicurus

―翌日の宿―

ペシペシ！

「なんだ？まだ寝かせろ…スースー」

ペッシペッシ

「？ 誰だよ全く、寝かせてくれよお」

ザスッ

「URYYYYY！」

何者かに頬を切られた。

「敵襲か！バカなまだ敵は作ってな…ゼロか。起こすために俺の頬を切ったのか…いたい。」

「きゅきゅっと！」

「ん！？ きゅきゅっと？ ついに『と』をしゃべれるのか！偉い！」

「きゅきゅっと！きゅきゅっと」

「でもあまり可愛くないから『きゅきゅ』でお願いします。」

「きゅきゅっと…きゅきゅ！」

「『と』はね、人間の言葉が話せるようになってから使いなさい。それまで『きゅきゅ』だよ？ いいね。」

「きゅきゅー！」

「よし。いいぞ。」

それにしても、なぜきゅきゅっとなのか？

答えは、作者が『きゅきゅ』と入力しようとしたら『きゅきゅっと』とミスったのでそのまま使っちゃえとなったらしい。

「伊藤、隣国の…どこだったか…そいだ、『クルド』に行こう。」
宿から出た松下は、伊藤にこう告げた。

「いいけどさあ、どうやっていくわけ？ 飛行機は無いぞ。ファンタジー世界なんだから。」

「…？ なーに言っとる。徒歩だろうが。ファイナルファンタジーだって歩きだろうが？」

「ですよねー。ファンタジーなら徒歩ですよねチキショウ。」

「大体ファンタジー小説なのに、まだ魔法をまともに見せて無いんだぞ？ 更にモンスターに会ってないし、正宗二刀流さえしてないときた！そろそろやるべきなんだ。」

「はいはい。わかりましたよ。」

その後、テント、地図、方位磁石、食料を買ってバックに入れた。

その時、フツと気づいた。

「銀行行こう。ゴチャゴチャしてきた。」

バックがゴチャゴチャしていた。

原因は金貨だった。

「あゝ校長が言ってたなあ。銀行行くべきだよな。」そして銀行へ行った。

「では、松下さまの口座を作りました。カードを発行致しますのでサインを。」

サラサラとサインし、すぐに渡すとカードを受け取った。

「では、他にご要望は？」

「ああ、預金に。」

「では、カードと預ける分のカードを」

この世界はカード一つで全て管理出来るらしい。

「：980クルと3シルですね。ありがとうございます。カードをお返しします。」

「どうも。では。」

松下と伊藤は銀行をでた。松下の所持金は、17クル7シルである。

「あれ？伊藤…口座作った？」

「ああ、作って全額放り込んだ。」

「そうですか。」

松下達はランク試験を受けるために隣国『クルド』に向かった。

幸運なことに、国境に近かったために2日3日あればいけるそうだ。

「ついにバトルか！」

目の前に現れたのは、狼っぽいモンスターの群れだった。懐のバックから武器を取り出す。

松下は正宗を一本取り出す。流石に二刀流はまだ無理だからだ。

「これが…戦場…」

「油断するな…いくぞ!!」

松下がまず走った。瞬間、狼が飛びかかる。

すぐにかわすと、松下はリーチが長い正宗で風ぎ払った。その攻撃は見事に当たり、狼一匹を真っ二つにした。

「グギャアア！」

「伊藤！」

「分かってる！」

伊藤は妖刀村正で狼を切る。

その動きはまだ素人っぽさを感じさせる。しかし、狼たちの攻撃が彼らに当たることはなかった。

レベル50の能力補正が戦いの素人である松下達を手伝っているのだ。

それ程苦戦はしなかったが、七匹ほど倒した後、狼たちは逃げていった。

「大丈夫か？伊藤。疲れてないか？」

「疲れてはいないけどさ、精神にくる。」

「まだ行けるか？」

「ああ」

ドラクエやFFなどではプレイしてなにも感じなかったが、リアルでやるとかなり怖い。

命のやりとりは、戦いである。

それは戦場であり、弱肉強食の世界である。
ここで武器の操作に慣れ、恐怖に打ち勝たなければならない。

「伊藤。これだけは言っておく。」

「み〜み〜」

「あんたは伊藤じゃない。まったく、いいか、恐怖は完全に捨ててはならない。」

「なんで？アニメとか、よく『俺は恐怖を乗り越えた！怖いものはない！』とか言ってるじゃないか。」

「そいつはそのあと確実にやられているな……。ともかく、恐怖を持てば少なくとも相手を舐めてかかることはない。それに……」 「それに……？」

「恐怖を完全に捨てられるのは、神か狂人だ。」

「……わかった。ん？あれは？」

伊藤が指を指した先には、フスン落ちていた。

「さっきのモンスターからの戦利品か……。一匹1スンだな。」

「ファンタジーらしいな。」

そのあと、クルドをめざしながら歩き、時には猿っぽい奴、更にイノシシっぽいというかイノシシですよね？という奴らに追いかけて回し、追いかけて回されて1日、2日と過ぎ去った。

3日目――

「おお！コイツは！」

「素晴らしい……真っ赤なドラゴンだ……ライブラ！」

松下は、真っ赤なドラゴンに向かってライブラをかけた。

名前

炎帝龍

強さ

結構強い。（松下達なら十分戦える。）

特徴

ブレスが驚異。普通出会ったらすぐさま逃げる事を推奨する。

弱点

ま、そりゃあ水か冷氣あたりかな。

戦うなら？

がんばれ。

（…後半アドバイスなってねー）
と、思った。

「とりあえず…ヘイスト！」

「さて…」

「「殺りますか！」」

二人が地面を同時に蹴った。

「グオオオオ！」

元々いた場所が尻尾で攻撃され、少し陥没した。

「あれを試してみるか！『魔法剣ブリザガ』！」

松下は魔法を自分の正宗にかけ、凄まじい冷氣を持つ刀へと変えた。

「グオオオオ！」

炎帝龍はその危険性に気づいたのか松下を狙って膨大な熱量を持つ炎の塊を吐いた。

「無駄アアアア！」それをよけ、一気に近づき、斬る。

一撃、二撃と、確実にダメージを与えるが、まだ武器に不慣れな松下はなかなかやりにくい。

第一正宗は凧ぎ払うように扱う武器であり、セフィロスのように扱うのならかなり時間を必要とする。

まだまだ練習が足りないのだ。

「伊藤！いけるか！」

「当たり前よ！腹に潜る。引きつけてくれ。」

「あいよ！了解！」

松下は一気に飛び上がり炎帝龍の頭を狙う。

松下に気が向いている間にすぐさま伊藤は炎帝龍の腹に潜り込み、素早く切り裂いた。

「くらえ！『適当な剣の舞』！」

「グオオオオオ！」

腹のダメージがかなり効いたのか、苦しそうな声を上げる。

「おいおい、いいのか？よそ見をしてさあ。」

さっきから気を引きつけていた松下が炎帝龍の頭の目の前で大きく凧ぎ払った。

「グオ…オオオ…オオオ！」

それが決定打となり！炎帝龍は事切れた。

「松下、やったな！」

「ああ、狩ったな。」

「そして…いま剥ぎ取っていると、言うわけですか。」

「そうですね。」

やはり素材や金目のものは剥ぎ取るべきですね。

「大体剥ぎ取ってしまったな。」

「行こう。今日にはつくはずだ。」

そして、一時間程歩いた。と、その時！

「おい、あれか？」

「多分：地図でも合ってる。あれが『クルド』だ。」

少年達はやっとクルドにたどり着いた。

少年達は小さいバックを持ち直すと、走り出した。

END↓

フン…来るか…

Freedom consists not in doing
what we like, but in having the
right to do what we ought
自由とは、ただ好きなことをするというのではなく、我々がな
すべきことをなす権利を持つことにこそある

John Paul II

友人同士は未来を語り合わなくても未来に再会することを確信して
いる

恋人同士は絶えず未来を語り合うが、未来は彼らの恋愛には無い

ボナール

―マティウス魔法学院―

「諸君！今日の六時間目に召喚の儀式を執り行う！この儀式は一生
のパートナーを決める神聖な儀式だ。まあ何が出てこようと責任は
取らんがな。」

松下達が学院を出てから一週間、担任による朝の会でそう告げられ
ていた。

召喚の儀式は松下達が先に行ったものと同様のものである。

「ねえねえ、矢島くんは何を召喚してみたい？」

プリミルは矢島にべったりくっついてる。

矢島は魔力がとてつもなく高いので、超絶モテモテなのだ。こういう風にプリミルがべったりくっついていないと矢島が取られてしまう。

「そーだね：ま、適当に出てきたモンスターを使うよ。」

「じゃ、私を召喚して？」

「多分無理。」

実は松下の方が魔力が高かったりするのだが、矢島に一切教えていない（会ってない）。

もし、それが分かっていたなら松下は『孤独』ではなかっただろうが、既に遅い。

――六時間目――

「『召喚！』」

「あら、カリィさんはシルバードラゴンでございませんか。まあ可愛いですわね！」

六時間に召喚するため、みな運動場へ出ていた。

いま召喚したのはカリィ・ハイブランド：と言うことは分かるだろう。

しかし、なぜか生徒会長付きである。

「名前はなんにしますの？」

「：『ルナ』。」

「あら、いい名前ですわね。大切にするのですよ。次の方」

シルバードラゴンというのは、ぶっちゃけ銀リオと考えてください。ここでモンハンの考えると、やはり伊藤のバハムート烈が『ルナ』にしたほうが良かったか：と少し思った作者だったりする。

「次はプリミルさん。召喚を。」

「はい…召喚！」
ぼん！

なんと、そこにいたのは、

『猫』！

しかも、可愛い子猫である。

しかし、猫と大きな違いがある。頭に大きな赤い宝石をはめ込んでいる。

「あら不思議…カーバンクル・キャットじゃない。」

カーバンクル・キャット…それは、カーバンクルと似た赤い宝石をもつ幻獣である。

かなりレアな幻獣で、召喚例は報告されていない。

しかし、かなり高い魔力を有しており、カーバンクル・キャットは飼い主に魔力を渡すことが可能である。

「名前は…『アリス』ちゃん！よろしくね！アリスちゃん。」

アリスと呼ばれたカーバンクル・キャットはプリミルの顔を舐めた。

「次は…男子ね。」

まあ、特筆すべきことはないので省く。

「はい、次、矢島くん。」

「はい！じゃ…うおー！召喚！」

なぜ叫んだのかは不明だが、出てきたものはすごかった。

「みゅーみゅー」

なんと、『バハムート改』だった。

まあ例に漏れず子供だったが。

「ウオオオオ！バハムート！しかも赤い！」

「え？見たことがないドラゴンね。バハムートって言うの？この子。可愛いわねえ」

「きゃああああ！かつんわいい！」

「み？みゅーみゅー！」

他の女生徒たちが沢山群がってバハムート改を眺めている。

「はあ：返しな。名前は：『ネメシス』でいいかな。適当に。」

「みゅうみゅう！」

理解したのか顔を舐めてきた

「まあ、いいんじゃない？じゃ、次：ってあれ？終わり？松下は？」

どうやら、やっちゃったようだ。松下はフラグを立ててしまっていたようだ。

まあ後で建てた旗は回収するが。

「え？松下あー：あれ？松下ーどこだー」

ぶっちゃけ、この時まで松下が『いない』と言うことに気づいていない。ある意味凄いものである。

「担任ー松下は？」

「：伊藤と共に旅立った。」

「：：：は？」

見事に全員フリーズする。

「あいつは放學して隣国に行った。」

「：プ」

「フ：フ：ハハハハハ！」

まあそりゃあもうクラス全員爆笑。

爆笑爆笑爆笑。

「バカだわあいつwww」

「まあいい厄介払いになったんじゃないw」

「そうだなw」（そう言えば松下って矢島より高い魔力を誇るといわれたなあ…あ、他言禁止か…）

全員に笑われていた松下だった。

担任は校長から言われた事を思い出したがいわないでおいた。

―『クルド』にて―

松下一行はギルドに到着し、ハンター手続きをとっていた。

ギルドの建物は広く、多くのハンターが出入りしていた。

松下は受け付けの人に話しかけ、必要事項にサラサラと書いていく。最後に名前を書き、受け付けに渡した。

「では、松下様、伊藤様をハンターと認定します。では、軽く説明致しますので聞いてください。」

その説明を要約すると、

？ハンターとは、いわばモンハンの職業で、対人任務もある。

？ランク試験のランクとは別にハンターランクがあり、D↓C↓B↓A↓S↓SSというランクがある。

？ランクにあった任務を受けられ、それに応じて報酬がかわる。

？ランク上げをするには、ギルド側から出される試験を突破すること。かなり難しいので、数人で行くことを推奨される。

？その試験はいつでも受けられる訳ではなく、失敗したら3ヶ月受けられない。

と、言うわけである。

「伊藤くランク試験受ける？ハンターランク試験受ける？」

「とりあえず：普通のランク試験で。」

「わかった。じゃ、またあとで、お姉さん。」

「またのご利用、お待ちしております。」

―『ランク試験申し込み所』―

松下達は『ランク試験申し込み所』なる場所についた。

「ここが：戦いの場：」

「フン：オドオドせずいくぞッ伊藤！」

「了解！」

松下達は戦いの場へ踏み込んだ。今から殺し合いをするわけではないが：

「たのもー！」

古い。古過ぎるぞ！松下よ。

「はい：？」

その声に反応して、受け付けがこちらに来た。

「ランク試験を受けたい。」

「わ：わかりました」

少し気迫が強いのか、少し引いている。

「ど：どの級でしょうか：」

「手始めに：『A』」

「わかりました：『A』ですね：。一人づつ行います。それではご記入と試験内容をお読み下さい」

必要事項を書き、試験内容を読む。

簡単だった。

『試験モンスターを魔法のみで倒す。』

簡単に書いている。

「えーと：相手は：『炎帝龍の子供』：ああ、あれね。楽そうだ。」

「え！？あの炎帝龍ですよ！大人の一番弱い奴でもランクAが最低

10人必要なんですよ!」

「へー。アレに10人必要なんだ…。」

「そうですよ。子供でもかなり強いんですよ。」

勝ち誇って受付嬢は語った。

しかし…

「ああ、もしかしてコイツ?」

懐から出した巨大な翼を見せた。

もちろん受付嬢は、

「(。□。;)」

の状態であつた。

「今から始まります。付いてきて下さい。」

そう言われ、トコトコ付いて行った。

その先にでかい競技場があつた。

ここの構造は、ハッキリいうとコロッセオに似ており、戦う場所の周りに観客席がある。

そして沢山の観客がおり、試験の戦いを楽しんでいるようだ。

「今日は特別に王女様がおいでになっております。くれぐれも負けないでくださいね?」

「負けませんよ。」

言い返すと、獲物の所へ向かった。

「始め!」

宣戦され、魔法対モンスターの決闘が始まった。

最初に動いたのは炎帝龍の子供だった。(以後子帝)

「グシヨオオオ!」

「ほう…我が方に近寄ってくるか…『ウォール』」

松下は先に物理・魔法を半減させるウォールを発動させ、子帝の攻撃を避ける。

避けられた子帝は、松下を見失いキョロキョロと探している。

「グルル…？」

「止まってんじゃない！勝った！死ねい！『ブリザガ』！」

子帝の周りに発生した冷氣が、子帝を包み込み、瞬間、相手を氷柱が相手を閉じ込め、絶対零度に近い温度に触れさせる。

そしてその氷柱が割れ始め、子帝は解放される。

しかし、子帝は耐えられずに既に絶命していた。

「ふん！軽いな。ウォール使わなかったじゃん。Sは期待したいな。」

観客はこの短い戦いにみな口を開けていた。

「なんですの…あの魔法…威力が桁違いに高い…いえ、高すぎますわ…」

王女はそう呟いていた。

「よー伊藤！簡単だったぞ！次はお前だ。」

「ああ、行ってくる。」

松下と伊藤とタッチをかわして松下はベンチに座り、伊藤は獲物と戦いに出る。

END↓

厄介だ…変わってください。

Louis Think like a man of action, act like a man of thought

行動力のある者のように考え、思考力のある者のように行動せよ

Henri Bergson

―競技場―

次は伊藤の番である。

伊藤は既に壇上に上がり、戦いに備える。

（さて、相手は…確かベヒーモスの成体前…人間なら16歳ぐらいかな。）

その時、向こうの門が開き、ベヒーモスの成体前が現れた。

観客は待ってましたとばかりに歓声をあげる。

『始め!』

その一言を放った瞬間、相手にライブラをかける。

（なるほど…弱点は特にない。

どうするかなあ…なら!）

伊藤はいきなり駆け出し、ベヒーモスと距離を取った。

「…来たな!」

ベヒーモスはかなりのスピードで突っ込んで、伊藤をその鋭い爪で裂こうとする。

しかし…

「おーらファイガ！」

鋭い爪に当たる前に相手の顔に熱い炎をお見舞いする。

「ベネ！当たった！」

「グオオオオ！」

当たって予想外のダメージを負ったベヒーモスは、地面に倒れてもがいていた。

すると、伊藤はベヒーモスの元へ行き、

「一度やってみたいことがあるんだよねw」

と言い、ある攻撃をした。

それはなんと！ベヒーモスの目に自分の親指を突っ込み！殴り抜ける！！

「GYA O O O O ! !」

すごく…痛そうです。

「そろそろ終わりにしようかな。トライン！」

そう言うと、ベヒーモスの周りに三角形のガラスみたいなものがベヒーモスを囲み、突如爆発した。そして、

「GYA A A A A A A !」

その断末魔が、ベヒーモスの最後を告げた。

「えー試験は合格、これで晴れてAランクでございます。これが合

格バッチとハンターカードに記載致しますので貸してください。」

「ハンターカード…ですか？貰ってませんが…」

「え？ああ、今日ハンター申請したんでしたね。では、貰ったらまたここへ。」

「わかりました。あと、ランクSに挑戦したいんですが…」

「…やりますか？」

「「やります。」」「はあ…では記入を。今回はお二人で挑戦できます。相手が強すぎですからね。」

受付嬢はため息をつけながらも必要事項に記入を催促する。

「二人ですか…どんな相手ですか!？」

試験なのに二人掛かりとはどんな相手なのだろうか。

「相手は…炎帝龍二匹です。」

「炎帝龍二匹!？まじすか？」

炎帝龍は一応難なく倒せたが、二匹は出来るかどうかかわからない。

「マジです。」

「…やりましょう。」

「はあ、わかりました。では、一時間後にまたここへ。」

「わかりました。では。」

そう言うと、松下達は街に出て、ギルドに向かった。

「すいませ〜ん」

「はい。何でしょう？」 甘い声で出迎えたのは、まだ入り立ての新人のようだ。

「あの、まだギルドカードを貰ってませんか？」

「ああ、お名前は？」

「松下と伊藤です。」

「マツシタ様とイトウ様ですね。おまちください。」

そう言うと、受付嬢は奥へはいって行った。

「なあ、伊藤よ。」

松下は暇なのか、伊藤に話し掛けた。

「なんじゃ？」

「あのさあ、作者は学院編でリアルな学院生活を描くって言ったよな？ どー考えても描いてないんだが。」

「ああ、それは…あまり学院生活に馴染んでないからじゃね？」

「そうか？ てっきり松下は美少女に間違っ立ててしまったフラグを気づかれないうちに回収する、いわゆるフラグクラッシャーになるって聞いてたんだが。」

「ああ、とあるリアルの友人に相談してみたら、『あんたの顔が美少女と関係を持つこと自体有り得ない』といわれ、泣く泣くそこはカットしたらしい。」

なんとも悲惨な一幕である。

「そうでしたか…」

「第一、お前女興味無いからな。ハッハッハ！」

「いや、『二次元の美少女』なら喰える！」

「：さりげなく『喰える』という文字使わなかったか？」

「気のせいだ。そもそも、なぜエロゲの主人公：いや、最近の漫画にはいつもハーレムなんだ？」

「エロゲなら仕方ないにしても、最近の漫画はいつもハーレムだ。しかしジョジョは女性はめっちゃ強いからなあ：」

「最近の漫画とジョジョを比べるな。あれは時代と共に進化した人間讃歌！しかも既に原作者が究極生命体なのだ。他にそんな漫画家いるか？否！断じて否である：」

「まあ待て。受付嬢が来たぞ。静かにしないか？」

「ウ：ウリィ：」

なんやかんやで黙った松下だった。

「これがギルドカードです。どうぞ。」

それは普通のカードだった。色は黒く、身分証明書にもなるらしい。

「ご利用ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

軽く返すと、再び競技場に戻った。

「武器は使用不可能です。では参りましょう。」

待っていた人にいきなりそう言われ、連行された。

「では、幸運を。死なないように。」

「いや、死ぬ気はありませんからw」

いや、死なれたら作者も困ります。

『開始！』

そう言われると、向こう側の檻から二体の炎帝龍が出てきた。

（どうやって捕獲したんだろ。）

伊藤はそう思ったが、いきなり炎帝龍が空に飛んだので思考を中断した。

「おい松下。飛ぶなんて聞いてませんよ。」

「まあドラゴンですからね。そりゃ飛ぶだろう。問題はどう落とすか……だ。」

「どうする？ 指示に従う。」

松下は少し考えると、何かを思いついたように伊藤に行った。

「弱いメテオをかける！ 援護してくれ。」

「おう！ 任せろや。」

ちなみに松下が言った『弱いメテオ』と言うのは、落下範囲が狭いメテオである。

このままだと観客に当たるためだ。

その代わりその軌道にメテオを集中させる。

「……ブツブツ」

「げ！ ブレスか！？ ウォール！ そしてリフレク！ そして……逃げる！」

伊藤は松下をおんぶし、全力で逃げた。

「ブツブツ……」

「まだか！？ えーいヘイスト！」

伊藤はスピードアップして逃げまくっていた。

伊藤の体力は恐ろしいものである。

「戦えー！」 「逃げるなよ」 など、末恐ろしい歓声が聞こえる。

「知るか！ こっちも必死なんじゃあああ！ ！」

「よし！ 伊藤よ、よくがんばった。下ろせ。」

「出来たか：ハアハア」

「：もう少し頑張れ。いくぞ！」

「ハアハア：いいですとも！」

「『メテオ』！」

その瞬間、相手の頭上からおびただしい数のメテオが降ってきた。炎帝龍は避けようとするが凄まじいスピードで迫り、しかもおびただしい数の隕石である。圏外へ脱出をしようにも当たってしまった。

「ギャアアア！」

「GYAOOAAA！」

うーわ：目を覆いたい。なぜなら、目の前で地獄絵図が出来ているからだ。

それは、炎帝龍二匹がメテオから逃げられず腹翼、頭、etc：にモロにぶち当たり、さらに地面に激突した。

ここまではまだ生きていただろう。しかし、運命は非情だった。炎帝龍二匹の上にさらに降ってきたのだ。それが全身に降り注ぎメテオの山を作ったのだった。

彼ら炎帝龍の命はもう無いだろう。

さらに言うなら姿も潰れていることだろう。

哀れ、炎帝龍二匹。黙祷。

「ちょ：あんなに強いのか？メテオは…」

「よくゴル○ーザ生きていたなあ…」

「まあともかくSランク昇格だな。」

「よし、寝よう。」

脳天気な二人だった。

「…で、ではSランク昇格です…」

まあ当然であろう。いきなり来ていきなりSランクになってしまったのだから。

「ではSSランクに…」

「SSランクは英雄に与えられる称号なので受験できません！」

「そ…そうですか…」若干引いた。気迫に。

「さて、飯行くか？」

「ああ待て。ギルドカードを提示しないと。はいよ。」
「で、では…」

ポンと二回押し、伊藤、松下のギルドカードを返した。

いざ出ようとすると…

「お待ちになりなさい！」

「……………」

そのまま外に出ようとした。が

「「ぐおああああ」」

と、ライダーキックを食らった。

「つてえな！？恨みでもあんのかコラ！？」

「人にライダーキック入れる前に名乗れ…痛い。」

松下がめっちゃ痛そうに名前を聞く。

まあその前に伊藤が不良と化しているが。

「あら、そんなに痛いのか？まあいいわ。私は『エリン・フランソワーズ・ル・ブラン・クルド』よ！覚えときなさい。」

そこにいたのは、あまりない胸を張る、ツインテール娘がいた。年は…俺らと同じ位。

「まあ礼儀だ。私は松下和哉。」

「俺は伊藤勇樹。伊藤でいい。」

「分かったわ。ゴミ。」

「んな！？ゴミ…」

「それより要はなんだ。飯奢ってくれるのか？」

（いや、それは無いだろう。松下…）

内心つぶやく伊藤だった。

「いいえ。話が…」

「行くぞ伊藤。昼はパーと肉でも食おうか！」

「ちょ…待ちなさい！私は『エリン・以下略・クルド』よ！？」

「帰って寝てろ。」

「は！？この国の王女にむかって何という口調…」

おお、このツインテール娘は王女さまでございました。

「…それが？」『権力を恐れない男、松下』誕生。

「…まあいいわ…話を聞きなさい。」

「聞くだけだぞ。」

「構わないわ。『私の騎士』にならない？」

「「……………」」

「…聞してる？」

二人して無口なので不安になるエリン。

「…ん？ああすまん。聞き流してた。」

「その態度あと三秒続いたら切れるわよ♪」
とあるアニソンにある一説を言った。

「…いこーぜ」

「むああああていいい！」

「……………」

「ハアハア…返答は…」

大きな声を出したせいか息が切れている。

「…あんたが俺らを雇うとかならいんだが…私兵でいきなり騎士になれとかさあ、誰でも断るって。」

「じゃあ雇う！雇うから！傭兵を…」 「あんたな…騎士団があるだろうが…それつかえ！それを！」

まあ大抵王宮には騎士団というのは存在する。

「私はあなた達の实力を買ったのよ！だから来なさい！」

「まあ…騎士団なら給料は悪くはないかな…」

「じゃあ…」

「だが断る。」

「何ですってえ！」 やってしまったのだ。

あの名言をベストのタイミングで使ったのだ！

「この松下が一番好きなくおああああ！」

キレたエリンが松下をぶん殴った。

「もう良い！どことなり失せろお！わああああん！」

ぶん殴った途端、泣き出してしまった。

「……………」

しかし…松下は知っている！いや…男は知っている！

『泣いて相手を服従させる』

これが！！

『泣き落とし』だ！！

「…昼飯何食う？」

「ん？肉。」

『泣き落とし』はわかっているので無視して歩き出した。

「までええい！」

後ろから声が聞こえるが、思いっきり無視して走り出した。

「はぁはぁ…来てないか？」

「ああ…撒いたようだな。」

「つたく…泣けるぜ…」

「しかし、どうする？宿を決めないとさ。」

既に日は落ち始めている。

直ぐにでも決めないと、野宿になる危険性があるのだ。

「うーん…テントで寝るしか無いかなあ…」

「私なら家を用意できますが？」

「うん、テントでって…またお前か。ツインテール娘！」

「あら人聞きの悪い。わたしはエリン・クルドですよ？出来ないことは無いのです！」

「…若干キャラ変わったな…」

「どうしますの？私と来るか、これから野宿か？」

松下はその問いに即答した。

「勿論ここで野宿さ♪」

「ああ、これから宿にこう連絡しますわ。『二人のランクSの怪しい男が来たら追い出せ』…てね。」

「んな！？そこまでするか！？」

「ええ、何せ初めてランクSを持つ人ですからね。」

「…住む所を提供してください。エリン王女様…」

「はい♪これから私の指示に従ってもらいますからね♪」

この先が物凄く不安になった伊藤と松下だった。

END↓

ロリコン疑惑？

I don't wait for moods. You accomplish nothing if you do that. Your mind must know it has got to get down to work

私は気持ちに乗ってくるのを待ったりはしない。そんなことをして
いては、あなたは何も成し遂げられない

「とにかく仕事に取りかかる」ということを知らなければならぬ

Pearl S. Buck

―学校では―

「ネエネエ知ってる？ランクSが遂にでたんだってー！」

「え！？それ本当？」

「それが本当らしいのよ。しかも二人だって！」

「へへえ。で、強いのか？」

「さあ？Sクラスだから強いんじゃない？」

「でもでも、その人たち、隕石を降らせて炎帝龍二匹を倒したんでしょ？隕石を降らせる魔法なんて聞いたこと無いわよ？」

「まあ…確かに聞いたこと無いけど、実際に使ったんでしょう？」

「ええ、新聞紙に書いてるわ。これ。『あの炎帝龍が岩の下敷きになっていた』らしいわ。」

「まあ…どんな人なのかしら？」

「噂によると、なんと私たちと同じ年齢らしいのよ！」

「ああ、会ってみたいわ…」

「そうね：意外と松下と伊藤だったりして」
「まさか！そんなことないわよ。あはは。」

以上、学校の女子の会話でした。

矢島編はまたあとで。

―城―

「と、言うわけで、私に従事しなさい！」
さっきから疇高い声で我々に命令してきている。

「あのなあ、姫様。我々はあんたに従事する気はないって言うてる
だろうが！」

松下は噛みつく。

「こっちにはハンターの仕事が…」

「あら、心配無いわ。」

「んな！？」

「こっちのして欲しい仕事は少ないもの。ハンターの仕事はいつでも
出来るわ。あと、ランクSだから、ハンターランクもSに上がった
らしいのよ。ま、頑張れ♪」

「…は？ハンターランク試験は？」

「ああ、炎帝龍なんてランクS以上の奴なの。それを二匹同時にや
つつけるなんて、そりゃあハンターランクが上がらなきゃおかしい

でしょ？」

そのとき、松下は

（この世界は…大雑把なんだなあ…）
と思っただけらしい。

「ここがあなた達の住む家よ！」

エリンに連れられて来たら、なんとそこにそびえ立つ豪邸があった。

「コレが家か…？」

「いいえ、私の別荘よ」

「なるほど、別荘ですか。金持ちなんだな。」

「当たり前じゃない。これでも王家なんだから！」

「これが当たり前か…」

これから住むことになる家は、まあそりゃあデカかった。
例えるなら…あなたの知ってる豪邸を想像してください。
ともかく、玄関に歩み寄っていった。

「なあ、エリン。興味で聞くんだが…」

「なに？」

「ここ開けたらいきなり『お帰りなさいませ！ご主人様！』という
のはあるのかい？」

大抵の小説でもそうだが、こういうのには必ずメイドがつく。
想像するなら、プリン○スラバー！である。

「開けてみたら？」

答える気は無いらしい。

「…行くぞ！」

そして、少年は扉を開いた。そして――

『『お帰りなさいませ！ご主人様！』』

いた。一列に並んでいた。

「…お…おお…」

「…やるじゃない！」

この二人もまた、喜んでいた。

――豪邸内にて――

「私をご主人様のお世話係りの『リムル・ファタイル』です。そして、この小さな娘が『リベリア・プロシル』です。私たちがご主人様達のお世話を致しますのでよろしくお願いします。」

「おいおい、どういう事だ？俺達に専属メイドがつくのか？」

「はい。そういう事です。伊藤様には私が、松下さんにはリベリアがつきます。」

なんてこった…リムルさんはまだいい。キッチリと体が成長していて美人だからだ。だが、リベリアは…パツとみて、紙は金髪、腰まである…が、よくて小学生の〇年生だぞ？
つまりロリだロリ。

「……………（上目遣いで）」

や…止めて！俺はロリコンじゃない！だから見ないで！そんな何かを懇願するような目を向けないで！

「では、私はこれで。伊藤様、こちらへ。」

「あ、ああ。じゃあな…松下…」

ああ、伊藤が連れられて行く…こっちは、「ぎゅ…」という擬音つきで俺の服を引っ張って爪を噛む仕草でいる。しかも目を涙目にして。

「なあ、リベリアちゃん？俺の部屋はどこかな？」

一刻もはやくこの状況を脱するために、話題をふる。いい方向へ行けばいいが。

「ご主人様…こっちです…」

俺の腰ぐらいしかない身長で上目遣いで見ながら服を引っ張る。止めて！萌えるから！

「じゃ…じゃあ案内してくれるのかい？」柔らかく聞いてみた。

「は…はい！ご主人様！」

なんか顔を赤くしてぱたと駆け出す。

（ああ、妹系か…goodだよ…）

危険な思想に染まりながら付いていく。

案外近くにあったらしくすぐついた。

扉の前で俺を待っているらしく、こっちを見ている。ああ、ちなみに素晴らしく赤い目だ…リベリアちゃん…

とりあえず目の前の扉を開ける。そして、俺は目を疑った。

流石豪邸、と言うべきだろうか、凄い広いのだ。

前いた寮の倍はある。流石王家、伊達じゃない。

くいきい

「ん？どうした？ゼロ。」

懐からゼロが顔を出した。懐ってそんなにデカいの？という質問は受け付けないぞ。「きゅー！」

紹介しろ、と言っているらしい。

「リベリアちゃん、コイツは俺の相棒の『ゼロ』、仲良くしてやってくれな。」

「…かわいい。」

チクショーリベリアちゃんが可愛いぜ！

「ご主人様、ゼロちゃんと遊んでいいですか？」リベリアが聞いてくる。

まあ遊び盛りなんだろうな。

「いいよ。遊んでやってくれ。あと、ご主人様、つてのは無しにしてくれないかな…？」

「…？ どうして…ですか？」

「あまりご主人様、て呼ばれるのは好きじゃ無いんだよね。『お兄さん』、とでも呼んでくれ。」

「…はい！ご主人…お兄ちゃん。」

「よし！良くできました！さあ、ゼロと遊んでやってくれ。」

「うん！お兄ちゃん。」

ああ、素晴らしい…お兄ちゃんという響き…
疲れた…寝よう。

「お兄ちゃん！お兄ちゃんてば！」

「…知らない天井だ…」

「何言ってるの？お兄ちゃん。晩御飯だよ？」

「あゝわかった。待っててくれ。」

「はやくしてよ？」

「はいはい。」

そう言われてリベリアに起こされた俺はリベリアの後についていった。

すると、デカイ扉が目の前に…

「…デカ！」

「はやく入ろ？」

「わかってます。いきましよう」

まあなんだかんだで、リベリアの口調が少し変わっているような…

「なんか失礼なこと考えた？お兄ちゃん。」

「いえ、何にも。」

危ないなあ、勘がなかなか鋭いな。

まあ気を取り直して扉を開けた。

「おお！テーブルがデカイ！流石王家！」

「お兄ちゃんがいいよって言うんなら、私達メイドもお兄ちゃん達と一緒に晩御飯を食べられるんだけど？」

む、そうか、主人とメイドは大抵一緒にご飯を食べないのか。

「ああ構わない。一緒に食べよう。いいよな？伊藤」

いつの間にか後ろにいた伊藤に聞く。

「構わない。」

「…だそうだ。皆さん一緒に食べようじゃないか！」

「はい！ご主人様！」

その後、皆で晩御飯をとり、風呂に入った。
ついてたんだな。風呂。

一応もしもの為、絶対に俺達が風呂に入っているときには他のものは入ってはならないと強く念を押した。

いきなり『お背中流し致します。』とか言われながら入って来られたら困るからな。

理性が持たない。

特に風呂では面白いことは無かったので割合する。

え？あったらろって？いやいや、世界はそんなに甘くは無いですよ
：ファンタジーやメルヘンですから…。

風呂から上がって自分の部屋に戻ると、そこにはリベリアがいた。

「あのーリベリアちゃん？ネグリジェだけじゃ寒いでしょう？何か着なさい。」

何故か寝間着姿で。

「いーや！お兄ちゃんと寝るのお！」

やゝ止めてリベリアちゃん！萌えるから止めて！

「えゝ何ゝもしかしてお兄ちゃん私のこんな姿に欲情するんだ？」
「まだ小さいから欲情はしませんよ。さあ出て行ってくれえ…」

頼みます。

しかし…

「…………（上目遣い&目をうるうる）」

リベリアの悩殺的な目つき！めっちゃ可愛いぜ！

「わかりましたよ。一緒に寝るだけですからね。はあ」

「ふふん♪お兄ちゃんやさし」

「もう寝るぜ。疲れたしね。」

「はーい♪」

こうして、夜は更けていった…

※ロリは恋愛には入りません。生暖かい目で見てください。ちなみに作者はロリコンではありません。信じて…

END↓

ザ・ドリル

Concentrate all your thoughts
upon the work at hand. The sun
's rays do not burn until brought
to a focus

現在行っている仕事に全神経を注ぎなさい
太陽光線も、焦点が合わないと発火させることはできない

Graham Bell

「ご主人様、王女様がお呼びです。」

朝、朝食を食べていると、リムルさんがエリンの伝言を伝えに来了。

「めんどい。ヤダ。」

なんか嫌な気がするので、とりあえず断った。
どうせマシな事じゃないからな。

「え？お兄ちゃん行かないの？」

…と、リベリアが抗議した。

やめて！その目で見ないで！…と、松下はその時思った。

「え？いや、だから…」

「行かないの…？（うるうる）」

「…あゝもう！行くから！行くからその目を止めて！」

松下は懇願した。が、

「ホントに…？（すーぱーうるうる）」

更に上の攻撃力を持つ『すーぱーうるうる』をしてきた！

「は！？コレが…真の…『リアル萌え』…ぐは…」

そして、松下は気を失った。

「はぁ、どうしようか？これ。」

気を失った松下を指差しながらメイドの一人は言った。

「まーとりあえず王女のとこまで連れて行くべきだな。」

伊藤も気を失った松下を見ながら言った。

「じゃあお兄ちゃんは今伊藤さんが背負ってえ。（うるうる）」

「任せろ！」

一発で落ちた伊藤だった。

「は…！？ここは…」

昏睡から立ち直った松下は、辺りを見回した。

「ここは、私の城、『クルド城』よ！」

「んな…？あんた誰？」

皆さん、ドリル…といったら分かるだろうか。無論、あのドリルではない。髪だ。

金髪のドリル…いや、縦ロールがそこにいた。

「んな…！？私はエリン・（以下略）・クルドですわ！忘れないで欲しいですわ！」

「エリン：ああ、あのツインテール娘か。どうりでな：あんた、ツインテール辞めたのか？」一応松下はあのツインテールを気に入っていた。現実では見れないから。

「あれは、時間が無かったからただ髪を結んでいただけよ！今のロールが正しい髪型ですわ！」

「ああ：そうですか：（あれ？ツインテールから縦ロールに変えられるのか？不思議だ。）」

松下は結構ガツクリきた。

「さあ、俺達を呼んだ理由はなんだ？」
「やっと本題に入った。」

「あなた達の最初の仕事ですわ！」

「「断る！」」

松下と伊藤はすぐさま拒否した。

「あなた達の仕事は：」

「聞け！」

「二週間後に開催される大会に出場することよ！」

「は？」

大会？なんぞそれ。

「隣国の『エンプラス』で、武術大会があるの。それに出ていただくわ。」

「隣国？で、武術大会？」

「ええ。」

「：そのエンプラス：だっけか、そこに『マティウス魔法学院』てあるかい？」

実は松下達は自分達がもっていた国を知らなかった。

「え？あるわよ？それが：？」

「いや、何でもない。（そうか：矢島達の国の人と戦うのか：）」

「まあともかく、頑張ってね♪」

「…とりあえず聞くけど、拒否権は？」

「ありませんわよ。それが？」

即答された。酷くね？

「…まったく、出てやる。」

「ええ、頑張ってくださいね。」

そう言うのと、エリンは微笑みかけた。

その微笑みは美しかった。が、松下と伊藤はエリンには興味が無いので特に何とも思わなかった。

「ああ、待ってくださいらない？」

「んは？なんぞわれ？」

退室しようとした松下達をエリンは引き止める。

まあ松下達の返事にご愛嬌ということだ。

「わが騎士になったからには、あなた達は軍に編入・部隊を編成させます。まー実質二人だけです。」

「で、なんだ？」

「つまり、部隊を編成しますから、名前を考えてください。」

「（いきなりだなあ…いきなり名前を考えてくれなんてなあ…作者も初心者だし…）あ、そうだ、『AWAKEN』なんてのはどうだ？」

そこでフツと脳裏によぎったのは、ジョジョ第六部だ。赤ん坊と合体する神父のコマの題名がそうだったはず。

「あうえいくん？」

「そうだ。俺の国で『目覚め』とか『覚醒』という意味だ。ダメかい？」

エリンは『あうえいくん』とブツブツつぶやいていた。
そして、

「いいわ。許可致しますわ!」
気に入ったようだ。

「大会の概要は後ほど知らせます。」

「わかった。」

松下達は頷き、部屋を退室した。

「お兄ちゃん♪」

「なんでいるの?」

部屋から出た俺達を待っていたのは、リベリアだった。

「一緒に帰ろ? (うるうる)」

「あ・ああ、帰ろうか…」

少し動揺した。

「あのさ…」

「ん? なぁに?」

「少し離れないか?」

帰り道、リベリアがくっついてきた。

ちなみに伊藤はさっさと帰ってしまった。出番最近少ないから活躍させようとしたのに…

「リベリアのこと…嫌いなのか? (うるうる)」

「い…いや、リベリアちゃんの事は大好きだよ。」

「じゃあこのままにいるー」

「…はあ。ダメだこりゃ」

離れさせるのに失敗した松下だった。

「あ、そういやリベリアちゃんは今何歳なの？」

そういえばお歳を聞いてないな。

「え？今年で…12歳！」

「え…？12…？」

立派なレディではないか。けしてロリ…ではない。幼児体型ということである。

「どうかしたの？お兄ちゃん？」

「いや…ロリコンとか言われなくてすむなーって思っていただけだよ。」

12歳と遊んでいるならロリコンではなからう。

「…ちっちゃい娘といえるだけでもロリコンだよ…」

「…そうかい？」

少しシヨックだ。

「うん！」

ヤッベかわええ！

「はあ、帰ろうか…リベリアちゃん。」

「うん。今日のご飯はな〜にかな！」

その後ろ姿は、さしずめ兄弟のようだったと、目撃者は語る。

END↓

ザ・ドリル（後書き）

どうでもいいけど隕石で作られた刀って実はあったらしいね。

みてみたい。

『AWAKEN』と『白騎士団』

Freedom is never voluntarily
given by the oppressor; it must
be demanded by the oppressed

自由が、圧制者の側から自発的に与えられることは、決してない。
それは、虐げられている側から要求しなくてはならないものなのだ

Martin Luther King, Jr

―学院―

「喜ベヒヨッコども！今日は転入生がくるぞ！しかも女だ！」

朝、担任が告げた。転入生が来るらしい。ファンタジーではありがちだが。

無論、男子は「うおおおお！」と叫んでいた。

「噂によるとかなり美人らしいわよ？」

「なにい！美人！？」

「今朝見た人が言うには、すごい美人！しかも、頭が凄くいいらしいわ。」

「おお…完璧だなそりゃ。」

クラスが騒がしくなる。皆転入生のことだ。

「よし！はいれ！」

担任が呼ぶ。

ガラガラッと扉があく。

そこに…

「失礼します。」

「「！」」

クラス中の時が止まる。

その少女は…美しかった。蒼い髪を腰まで伸ばし、目はパツチリ、スラッとした身長、あと胸がデカイ。

「お…おお！」

「……！」

そして時は、動き出した。

「「うおおおお！かわええええええ！」」

「付き合ってくれ！」

「いや、俺と！」

「む…胸…ぐは！」

皆絶叫していた。一人はラブコール、一人は鼻血を吹き出し、倒れていた。馬鹿だな。

「どう？矢島。」

プリミルが言った。その問いに、矢島はこう切り返した。

「うん、美人だな。」

「そうね♪（怒）」

プリミルは笑顔でキレた。うん、見事なヤンデレ。素晴らしい。

矢島は問答無用で殴られた。そして、気絶した。
その後、矢島はこう語る。

「いやゝその時に彼女に逆らったら命は無いって理解しましたね。」
と。

「では、自己紹介を。」

「はい。」

しっかりとした返事をしたあと、自己紹介に入った。

「私の名前はパス・クルーエル。年は15歳です。あと、ランクはAです！皆さん、よろしくお願いします！」

「うおおおん！」

「かわえええええ！」

自己紹介が終わった瞬間、クラス中が割れるような喚声に包まれた。
パスも流石に引いていた。

「席は…カリィの隣に。そこだ。」

担任が指を指す。

パスはカリィの隣に行くと、カリィに挨拶した。

「久しぶりね！カリィちゃん！」

「…？」

「あら？忘れたの？小さい時遊んだじゃない。」

「…あ。」

「あ、思い出した？」

「うん。」

「ちよっと、二人は知り合い？」

プリミルが二人に質問した。

パスはその問いに笑顔で答えた。

「ええ、小さいころのお友達。あなたのお名前は？」

「私はプリミル・プリミツシエル。そしてこの気絶……してるのが私の彼氏のヤジマ・ユウキ。よろしくね。」

プリミルは手を差し出した。

パスは「こちらこそ！」といい、プリミルの手を握り返した。

「あーそうそう、矢島、カリイ、プリミル、パスの四人は放課後に校長先生の所へ行くように。理由は『昼は寝たいから放課後に』、だ。」

「「えー」」

気絶した矢島以外の女子から声上がるが、担任は無視して出ていった。

―放課後―

「「失礼します」」

放課後、矢島らは校長のいる校長室にいた。

「うむ、良く来たな。来ないかと思っていたが……」

「校長、少しは生徒を信頼してくださいよ。」

「分かっている。では、そこへ掛けなさい。」

校長が指差している先にはソファがあり、矢島らもそれに掛けた。

「さて、君たちを呼んだのはある依頼をして貰うためだ。」

「はい？依頼：ですか？」

意外だった。依頼なら他に当たればよいではないか。

しかし校長は続ける。

「そうだ。君たちには：武術大会に出てもらおう。」

「：Why？」

「なぜなら、本来ならば生徒は出ることは出来ない。しかし、プリミル・カリィ・パスはランクがAだ。能力がある。しかも武術大会と言っても死ぬ訳じゃない。」

「：はあ」

理由に殆どなっていない気がする。
国にあたれば他にいるだろうに。

「他にも当たったが、なにしろ年齢制限が25歳までらしいからな。
君たちぐらいしかないんだよ。」

話をよくよく聞くと、一番強い年齢が20歳ぐらいだという。それで武術大会を開き見込みのある生徒を国がスカウトするという思惑もあるらしい。

「ですが、私達は戦い方が：「あ、問題ナイナイ。」：はい？」

少し抗議をしようとしたが、校長が割り込んだ。

「君達は訓練所に行ってもらう。無論、学校内にあるから心配しないでもいい。」

「しかし！授業とテストが：」

「心配するな。授業は公認だ。テストも公認にしてやろう。」

「え？」

矢島達は目を丸くした。テストが公認に：と考えるとこの事は悪くは無いかもしれない。

「相談するがいい。ゆっくり決断して構わん。」
言われた通りに矢島達は相談を始めた。

「なあどうする？プリミル。」

最初に発言したのは矢島だ。

「どうって…うん」

プリミルは正直迷っていた。

（確かにランクはAだけど…勝てるかしら？あ、でも、テストが公認…うん…）

「私はやりたい。」

その時志願したのは、カリィだった。

「ん？カリィはしたいのか？」

「あの人に会えるかもしれないから…」

カリィはいつになく真剣な声で答えた。

「…そっか。パスは？」

「カリィが参加するなら♪」

パスはかなり軽い人のようだ。まあそれでもランクAらしいから不思議である。

「わかった。じゃあプリミルはどうする？」

「…どうしょ…」

プリミルはテストか大会か真剣に迷っていた。そして…

「…参加する！」

テストは嫌らしい。

「よし！」

「まとまったか。」

校長が訪ねてきた。

「はい。私達は…参加します。」

すると、校長は真剣な眼差しでいった。

「…いいのか？君達はこの国代表として出るわけだ。負けることは許されないのだぞ？」

校長が確認する。

校長たるもの、常に生徒を心配しているものだ。

「わかっていますよ。私達は、その覚悟は出来ています。」
四人は真剣な目をして校長を見た。

校長はその目をみて頷き、机の引き出しから紙を取り出す。

「それは団体参加申し込み書だ。参加するならサインをしてくれ。
サインしたなら戻れない。」

「あ…はい。」

四人はサラサラとサインを済ませた。
と、あることに気づいた。

「あの…団体名はどうします？」

「それは君達が決めなさい。」

そして、またまた相談タイムに入った。

「どうする？」

「矢島に任せるわ。」

「同じ。」

「矢島君、頑張って♪」

容赦はしないらしい。てゆうかめんどい。

「ひでえよ…仕方ない。…そうだな、なんだ、あれだよ、『白騎士団』でいいんじゃない？」

「えゝ『星の白銀』とか『銀の戦車』とか『ジャスティス』がいいゝ」

パスが反対する。

「なら最初からいえよ！あんたは俺に任せたんだろうが。」

「むきゅゝうゝ」

パスが鳴きながら下がった。少し『かわいい』と矢島は思ってしまった。

「矢島♪いまパスにかわいいって思った？」

「え？うん…は！？」

「この…ばかあ！」

グシャッ

「おっぱああああああ」

矢島…リタイア（再起可能）

「はあはあ…『白騎士団』に…決定！はい先生」

「あ…ああ、ありがとう…ございます。」

校長は目の前の惨劇にビビりまくっていた。

「じゃ、行きましょう。」

そう言って、気絶した矢島を引きずりながら校長室を出て行った。

「怖えゝ」

そう校長は呟いたと。

END
↓

面接…なのか？（前書き）

最近俺の小説って本当に面白いのか？と思うようになってきた。

面接…なのか？

I t i s n ' t w h a t y o u h a v e , o r w h o
y o u a r e , o r w h e r e y o u a r e , o r
w h a t y o u a r e d o i n g t h a t m a k e s
y o u h a p p y o r u n h a p p y . I t i s w
h a t y o u t h i n k a b o u t

あなたを幸せにしてくれるものは、あなたが持っているものや、あなたが何者か、あなたが何処にいるか、なのではないそれは、あなたが何を考えるか、なのである

D a l e C a r n e g i e

―クルド城―

朝、我々はクルド城にいた。

理由は『A W A K E N』の入隊選考会のためだ。

何故選考会をしているか、それは大会が団体戦で戦う事になっているらしいのだ。

団体の参加人数は四人。伊藤と松下を含めて、後二人ほど足りないのだ。だが…

「で？集まったのがピッタリ二人か…。しかも女…」
集まったのが二人だった。しかも女…

「じゃあ自己紹介お願いしますーす。」

「は！」

最初に蒼いマントを羽織っており、長い金髪をしている女性を指名した。

「私の名は『コゼット・アナスタシア』と申します！年齢は16、ランクはAです。私は『暗殺任務』が得意です。」

「暗殺：君はどこかの組織に入っていたのかい？」

「はい。クルド王国軍より元々暗殺部隊に入るために子どもの頃から訓練させられました。」

「そうか：つらかっただろうな：」

松下は感慨深い目でコゼットを見た。

まだ幼い部分（特に胸）が残るものの、体つきは戦闘に特化しているように思える。

「で、入隊理由は？」

「それですが、実は王女様より『AWAKEN』の入隊選考会に行け、とのお達しがあったものですからね。」

「エリンから？」

「ええ、王女様からです。」

そうか、エリンの差し金か。

エリン：恐ろしい子…。

「わかった。じゃあ次の人へ」

「あ、はい。」

次の人も女性である。

「コゼットの妹のフェイルです。よろしくお願いします。」

「ん？妹さんなのか？」

「ええ、フェイルは妹です。私は主に剣を使いますが、フェイルは魔法を主に使います。」

松下の問いにコゼットは答えた。

「と、言うことはフェイルも暗殺部隊に？」

「いいえ、普通の魔法部隊に属しておりました。」

「では、入隊理由は？」

「ただ単に姉についていただけです。」

「……」

この姉妹は、剣、魔法と、得意は異なる。だが、その分能力は高い事は想像出来る。得意なものを集中して伸ばすのは基本的だからだ。大会に出ても、活躍出来るだろう。

「わかりました。あなたがたを『AWAKEN』に歓迎します。と言うか志願者が二人しかいなかったのだから既に決まっていたのですがね。ははは」

松下は丁寧な喋りながら笑った。

「あ、別に丁寧語を使わなくてもいいですよ？」

「ん？そうか。じゃ、君達も丁寧語使わなくていいですよニャ。」

しかし、松下はこの後少し後悔する。なぜなら…

「そうか。わかった。いつものように話そう。」

「良かったのです！姉様！」

この姉妹の口調が少し変化しているのだ！特にコゼットが変わりすぎている。

「…あれ？」

松下が首を傾げていると、この姉妹はこう言った。

「私たちはこの口調が好きなのです！姉様は男らしい喋り方で、私は『なのです』を語尾につけることなのです！」

変わった姉妹だなあ、なんて思っていると、

「まあそんなところが良いんだけどね。」

と、ずいっと沈黙してきた伊藤が喋った。

「すまない。存在を忘れていた。」

「いや、別にいい。いずれ活躍させてもらうから。」

「は？何を言っているんだ？君は何時でも活躍してるじゃないか」

「…だそうだ。」

「…はあ、作者よ。伊藤を忘れんでくれ。全く…」

「おい、何を話しているんだ？」

無駄な話をしている時にコゼットが割り込んできた。

「いや、別に…」

「なら、マツシタ…と言ったな。実力を計らせてもらいたいのだが？」

「え？まさか…」

コゼットは手袋を投げつけ、「決闘しろ。」と、言った。

―決闘場―

「では、姉様VS松下さんの決闘なのです！FIGHT！なのです！」

むう、面倒になった。女性を傷つかせたくないからなあ…と思って
いると、既にコゼットが接近してきていた。

「もらったアアア！！」

「ちいッ！」

なんとかかわすことが出来たが、傷つかせたくないなどと悠長な事を言っている場合では無さそうだ。

「君の獲物は忍者刀…か？」

コゼットが持っている武器は、こちらの世界でいう忍者刀だった。
刀身は短く、扱いやすい。威力はあまり期待出来ないが手数でダメージを補うタイプだ。

「しかも魔法を剣に込めているのか…厄介だな。」

コゼットはあまり魔法は得意ではないが、魔法剣にするための魔法は得意である。

今コゼットがつけている魔法は氷、松下の魔法でならブリザドといったあたりか。

しかも魔法で少しリーチが長くなっている。いうならば、見えない何か
が刀の先にある…ということかな。

だが、所詮は忍者刀、以前リーチは短い。それを補うのは彼女のスピードだ。

さっき体感したが、かなり速い。

「やるしかないか…」

そう言うのと松下は正宗を出現させた。
そして、拔刀術の構えをした。

「ふん！たかが長い刀なんて扱いづらいだけよ。」
コゼットは吐き捨てるように言うのと、松下に全力で走った。

「死ねえ！」

コゼットは地面を思いっきり蹴ると、松下を捉えた。

「…！！」

だが、松下を切る事は出来ていなかった。いや、出来なかった。

「お前さんの負けだよ。」

松下の正宗は、コゼットの胴体に突きつけられていた。

「馬鹿な…そんなに長いのに速く拔刀出来る訳がないのに…」

「あゝそれなんだがね…この刀、俺にとって軽いんだよ。つまりね、リーチが長くて軽くて速く拔刀が出来るなら、ほとんど俺に近づけない事になる。武器の相性関係なくね。」

拔刀術はやり方次第で神速になる。その速さで相手を切る。しかし通常の刀の長さなら、よけられることが稀にあるのだ。

よけられたらどうなるか…無論殺される。だが、リーチが長いと、かなり避けにくいのだ。

それこそ胴体を狙ったならば、一撃の下に相手を葬り去ることが可能なのである。

「…まいった…」

「…勝者は松下さんなのです!」

コゼットは降参し、呆然としていたフェイルは試合終了を告げる。

「お疲れさん。怪我は?」

「大丈夫だ。コゼット! 怪我はないか?」 「私も大丈夫だ。怪我もない。」

良かった。怪我はしてないのか。女を斬るなんてしたくないからな。

「んじゃ、記念として、うちで飯を食っていくかい? なんなら泊ま
っていいけど」

「え? 良いんですか? やったあなのです!」

「じゃ、決まりだな。行こうか。」

「はい!」

そうして、家に向かった。しかし、厄介なことが起こるのを誰も予想はしていなかった。

—家—

「ただいま」

「お帰りなさい! お兄ちゃん!」

迎えに出たのはリベリアだった。そして…

「お兄ちゃん? 後ろの『かわいい』女の人、だれ?」

「ああ、客人だよ。今日泊まっていられるから、失礼の内容に…どうした? リベリアちゃん?」

「お兄ちゃんの…お兄ちゃんの…」

なんかリベリアの様子が変だ

「お兄ちゃんの…馬鹿あ！」

そして、リベリアのラッシュがスタートした。

「馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿あ！」

「ウボアアアアア！」

松下 リタイア（再起ギリギリ可能）

「ハアハア…嘘つき！結婚してくれるって言ったじゃない！それが何よ！女連れちゃってさ！しかも二人も！もう終わりよ！」

「いや、後ろの二人はただの部下だから…」

なんか凄い勘違いをしてるな…

「そんなこと言っていかがわしいことするんでしょ！？」

「いや、子どもだし…」

「性的接触開始平均年齢は17歳ぐらいだって誰か言ってたよ？」

「いや…ただのお客さんだから…」

「本当…？」

「いや、だから最初に言ってるでしょ…」なんかリベリアがヤンデレになってる気がする。

「だよね。やっぱりお兄ちゃん大好き」

「おいおい…」

「え？松下さんってロリコンなのですか？」「…いや違うよ？」

「ですよ」

そして、晩御飯を食べ、二人には泊まってもらった。

そして、リベリアが二人を鋭い目で見ていた。いや違う。見ていたんじゃない。松下を夜這いしないように『監視』していた。全く、恐ろしい娘である。

くオマケく

夜遅く、リベリアはコゼット達のいる部屋の前にいた。時刻は二時。よい子は寝る時間である。

「ふふふ…まずは小手調べよ…」

リベリアは部屋に入り、まずはコゼットの所に行った。

「フ…身体検査よ…」

布団に潜り込み、徘徊する。

そして、胸を掴んだ。ハズだった。

「ん？胸…が…スカスカ…男のシンボルはついてないし…あれ？」

スカスカ…

「あれ？ないなあ。」

「何が無いですって？」

「うん、胸がないの…」

「誰の？」

「うん、それはね…あ…なた…の…」

リベリアが顔を上げたその先には…完璧に起きたコゼットの顔があった。

「…失礼しま「待ちなさい…」…な…何でしょうか？」

「あなたを…女にしてあげるわ…覚悟なさい…（怒）」

「い…いやああああ!!！」

そして、夜は更けていった…

END↓

伝説？

Thanks to words, we have been
able to rise above the brutes;
and thanks to words, we have
often sunk to the level of the
demons

言葉のおかげで野獣よりは、上にあがることができた
また、言葉のおかげで悪魔の域まで沈むこともしばしばだ

Aldous Huxley

「お兄ちゃん行ってらっしゃい。お土産よろしくねー」

「あたぼうよ！良い子にしてるんだぞ。」

「うん！お姉様も：行ってらっしゃい！」

「ああ、分かってるよ。行ってきます」

小さなメイドは主人と自身が尊敬する人に別れを告げた。
コゼット

―クルドの隣国『エンプラス』の国境近く―

「で、なぜツインテールの王女様がついて来てる訳だ？」

「私も見学に行くのよ。ねー？ゼロちゃん♪」ゼロと遊びながら、
髪をツインテールにしたエリンが我々『AWAKEN』専用馬車に
乗っていた。

「いいじゃないか。王女さまだぞ？」

「そうですよー。王女様ですよ？」

「まあ良いじゃないか。ツインテールにはなかなか会えんからな。」
上からコゼット、妹、伊藤の発言である。てゆーか伊藤の言っている事はちよつとニュアンスを間違っているぞ。

「護衛は付けないのか…って俺達が護衛か。」

「そのとおり。父上に言っただけ付いてきたの。」

わがままな娘だ。まあ王も相当親バカではあるが。つーかバカだろ。なんかイライラする。遊んでみるか。

「…なあ、お前さあ…俺に惚れたのか？」

「…はあ？馬鹿じゃないの？」

即答だった。少しはツンデレを見せろよ…

「……………」

遊んで見たものの、楽しくない。

「空を見てよう。暇だ。」

結局ボケーツとする事にした。

そのうち、伊藤は何かエリンに話しかけていた。

「なあツインテールさん。なんか面白い話とか知らんか？」

「例えばどんなの？ファンタジーとか学園物とか？」

「うーん…伝説…とかある？ここ。」

（伝説で…無いだろ）

「あるわ。面白いのがね…」（あるんかい！…ああ、ファンタジーやメルヘンだからか…）

一応話を聞いていた松下が心の中でツツコむ。

伝説は以下の通り。

『3608の七の月、女神は三人の使者をこの地に遣わす。

その子らは女神に選ばれた戦士である。その子らは、一人は安定の地に、二人は国を渡る。

その後、二人の内一人は、愛する人と戦う。

二人の内一人は、残った一人と戦う。

二人は身分を隠す。厄介を避ける為である。

三人のうち、一人は死ぬ。女神により再臨するためである。』

「長いです。しかも意味が分かりません。読者からクレームが来ます。」

なぜか棒読みで伊藤が言う。

「説明するから、棒読みだけは止めて。キモイから」それは誰でもそうである。キモイ：

「じゃあ、説明〜！」

？3608という年まで、あと6年（年号が昔と変わってなければ。）

？中腹はわかるだろうが、最後の『死んだあと再臨する』というところが不明。（同様にしばしば議論に出される。）

「こんな所かしら？」

「う〜ん：奇妙な伝説だな。」

「伝説なのはここからよ？続きあるんだから！」

無い胸を張る。だがなぜか悲しみに満ち溢れるような気がする。

「んじゃ続きますわよ。」

『三年後、再臨する。悪を討つためである。

悪は大いなる厄災を持って地上に降りられる。』

「以上よ。」

短か！

「それだけ？」

「そう。これだけ。」少ないじゃないか。てゆーか厄災って何すか。

「厄災ってのも、いま議論百出ですわ。大飢饉とか、異常気象とか、いろいろ言われてるわね。」

「続きはないのかー？」

「続きって言っても、これ、古代遺跡の『アトランティス』っていう所から偶然見つかった物なの。」

「そうか。じゃあまだ続きがあるのか？」

「多分。だからまだ発掘が続いてる。」

エリンは懷から地図を取り出し、指を指した。

「ここの海沿いの遺跡から見つかったの。その周辺からなんか四本足の黒くてデカくて『Ω』って書いてある金属製の物体が発見されたいの。かなり損傷がひどくてぶっ壊れてたみたい。」

「へー博学なんだな。」

「当たり前よ。王女たるもの勉強をしているわ。」

また無い胸を誇らしげに張った。

「その割には今してねえじゃねえか。」

得意げに説明していたエリンに対し、起きた松下は言った。

「今は見学にいくのよ。道具が無いのは当たり前でしょ？」

「まさかあんた：勉強が嫌で付いてきたな？だから王に頼んだのか
…」

「ち：違うわよ！ただの見学よ！」

なんか凄く焦っている。そのエリンの表情を見た松下は追撃する。

「確かに、王族の馬車だったら、教育係が数人で監視してるだろう
な。」

「違うってば！」

「俺達をスカウトした日も逃げ出していたな？で、スカウトしに来
た時も一人、普通従者を一人、二人つけるのが普通だ。」

「むきゅううう」

凄く悔しがっている。なかなか合っているぞ。ツインテールに悔し
がるが。

「フ：凶星だな。」

「う：うえーん」エリンが泣き始めた。え？なんか泣かすような事
したっけか？俺…

「ひっくひっく…」

おいおい泣き止めよ。

「松下さん…酷い…です」

「今のはあなたが悪いぞ。女の子を泣かすなんて言語道断だ。」

「全くよお…ツインテールを泣かすなんてさ、松下お前はそこまで酷かったのか？」

なんだよ…そんなに悪いか？俺は正しい事を言ったじゃないか。確かに俺は悪い奴だよ。ああそうだよ！心は腐っているよ。でもそこまで酷く言われる筋合いはねえ！

「それより早く謝ってください、です。」「早く謝れ。」

「ツインテールが好きならその人も好きであれ。さあ早く告れ。」

俺は悪役か？てゆうか告れは無いだろ。主人公は俺だぞチクショウ

「あゝごめん。」

「ひっく…土下座…」

え？なんか聞こえたぞ？

「だからごめん…」

「うう…土下座…して…」

え？ DOGEZA？

「ドゲザ…だって？」

「うん…土下座して」

「いや…土下座は謝る最上級であってねえ…BetterじゃなくBestですか？こういう場合は…」

「うん！地面にひれ伏して頭をこすりつけなさい！」

「クソッ鬼畜が！」

松下は地面にひれ伏そうとして、気づいた。

「泣いて無いじゃないか。むしろあくどい笑顔を称えているぞ。」

「あ、いや…うわあああ！」

「泣いたってネタはバレてるんだ。嘘泣きだってな。」

勝ったな…さあいびるぜ！

「酷いじゃないですか？松下さん、です。」

「酷いな。女の子を泣かすなんてな。嘘泣きでも優しくするのが男だろ。」

「お前は現実世界で女子から相手にされないんだろ？相手にされる今を大切にしろよ。」

言いたいことを言いまくる三人。酷い。

「く…お前たちはエリンの仲間か！？」

全員頷いた。俺が悪いのか？そうなのか？

「もうすぐで隣国に着く。準備をしてろ。特にその被害妄想男」

「被害妄想…って、俺かい！」

コゼットからも酷い扱われ方だ。

「はあ…泣きたいのはこっちだよ。で？試合会場はどこだ？コゼツト。」

「試合会場？確か…『マティウス魔法学院』だ。」

―マティウス魔法学院―

「矢島くん。決闘場にいこ？」

朝礼が終わったあと、プリミルが言った。

俺達は朝礼には顔を出して後は決闘場で戦闘練習をしている。

「矢島、決闘場で待っている。さらば！」

担任もそう言い残し、窓から外にでる。

一応担任が相手になってくれて、かなり戦い方を教わっている。

担任は元々軍隊に入っていたらしく、実戦を切り抜けてきた猛者だ。

「じゃ、行こう。」

担任の待つ決闘場に向けて学校を出た。

「あ、そうそう、面白い噂があるんだけど…聞く？」

道中、プリミルが切り出した。

「噂ってのは、今度の大会何だけど…大変なのよ。」

（大変ってなんだよ。バーサーカーでも出るのか？）

「なんと、隣国クルドからランクSの二人が出るらしいのよ！」

「え？ランクSが？」

「どちらも刀を装備していて、魔法も使う『魔法剣士』であるのは間違い無いわ…」

「さて、戦う気か？」

「私が勝ち進んだら戦うでしょ？是非とも勝って国直属の魔法研究に入るのよ。」

そう言うプリミルの目は燃えていた。

（そういや、あの伊藤と…誰だっけ…まあいいや。とにかく二人はどこにいるんだろうか？）

そう言う矢島は、既に松下のことを忘れていた。哀れな松下である。

END↓

大会編―前日

Time is a great teacher, but unfortunately it kills all its pupils

「時」は偉大なる教師だ

しかし残念ながら、その生徒をすべて殺してしまう

Hector Berlitz

―国境―

松下らはエンプラス国境に到着した。

「あ、私はここまででいいです。」

エリンはそう言うと言車をおり、国境警備隊の隊長を呼びつけた。

「私はクルド第一王女エリン・クルドです。私を城まで送りなさい。」

と言いのけた。

「おい、エリン。いいのか？」

松下は馬車越しに質問した。

「ええ。ここでお別れよ。まあ帰りは一緒だから安心しなさい。」

そう言うと、エリンは警備隊と共に城へ行った。

「城に何の用だろうな？」
「さあ？」

―宿屋―

松下達はエリンと別れたあと、マティウス魔法学院近くの宿を取り、部屋に荷物を運んだ。

「学院の決闘場だな？」

「ええ。今の時間帯だと、学校代表が練習中のはずです。」

「見学するのです！」

「あ、ちよい待ってくれ。」

「はい？」

頭にクエスチョンを浮かべるコゼット達を後目に松下は続けた。

「服を変える。伊藤もな。」

「なぜだい？」

「いや、学校に行くとなると、知り合いとか居るじゃない？ なんか会うの恥ずかしいからさ」

実際、矢島とかに会いたくない：訳じゃあないがね。

「あゝね」

「じゃあまず服屋にいくのです！」

―服屋―

「いらっしやいませ。」

「うわ…でかいな。かなり服があるくせに整頓されていて移動しやすいぞ」

松下達が来たのは、なかなか大きな服屋だった。その名も『メタリカ』

「ここはエンプラス随一の服屋だからな。支店も多い。かく言う私もよく行く店だ。」

「へー男勝りのコゼットにも乙女らしい所ぶほあッ！」

なんか殴られた。ひでえよ…誉めたつもりなのに…

「誉めてねえよ！さ、行こう。」

ヨロヨロの松下を叩き、立ち上がらせると、コゼット達は自分の目当ての服があるところへ散っていった。

「あれ？伊藤はともかく、なんでコゼット達が行くわけ？買うのは俺達の方だけなんだが…」

「おい松下。探そうぜ。」

伊藤が手を差し伸べてきたので握り返して爺みたいに『ヨイシヨ』
といいながら立ち上がった。

松下と伊藤はとりあえず、男性用の売店へ出向いた。

まず驚いたのは、服がとにかく沢山あるのだ。これでは探すのに時間がかかるだろう。

「さて：何がいいのか」

「鎧の上に羽織るタイプを探そう。そうすりゃ余り探さなくてすむ。」

そうそう、言っただけでなかったが実は鎧を付けているんだ。鎧と言っても黒くて赤いラインが所々に入った、言わば『邪悪装備』という奴だ。しかも無駄な装飾がなく、扱いやすい。コレを着ると、着る前と後のすばやさが変わらないというスグレモノ。

防具屋で唯一ニセツト余ってたのを買った。なんか『邪悪装備』と言う名前に騙されて買われなかったと店長さんは嘆いていて、安く譲ってくれた。

防御力は申し分なく、傷一つ付いてない、かなりの掘り出し物だった。

「そうだなあ：黒に合う奴にしとこうぜ。松下。」

「ぬ！コレは！」

そう言う松下が手に持っていたのは、コートだった。後ろに星マークがあり、更に所々にも星：例えるなら第六部の承○朗のコートだ。ただし色は黒だが。

「どうだ？伊藤よ。」

適当に羽織ってみたのだが、なかなかフィットしている。動きが阻害されることもない。

後は見た目だ。

「おお！すげー似合ってるぞ。」

「ぬ、賛辞の言葉として貰っておこう。なら俺からも選んでやろうか」

そういい、松下は伊藤と歩き出した。なかなかの多さに苦戦しながらも、なかなかの珍品を見つけ出した。

「……………」

「似合うぜ。きつと。」

「……………」

「着てみるよ。うん。似合うと思うぜ。」

伊藤は着替えた。何も言わず。

「……………」

「に…似合ってるぜ！最高に…ププッ」

「カ…」

「ん？なんだって？」

「カメエエエエ！」

伊藤が着たのは…カメの甲羅だった…。

「何もありだなここは。」

「まあまあ、良いじゃないか。コスプレ出来て。」

結局伊藤がチョイスしたのは黒い革製のコートだった。例えるならBIO5のウェ○カーのコートと似たものである。

「これならサングラスもだな。」と、伊藤はサングラスを2つとり、松下達はレジに向かった。

「あ、いたいた。ずっと探していたのです!」

「全く、隊長殿を探すのに時間がかかったぞ。」

レジに行く途中でコゼット姉妹に遭遇した。両手に服を持って。

「まて、その服はなんだ?」

「何を言ってるんだ? 隊長殿が買ってくれるんだろ?」

なぜそうなるんだよ…てゆうか貢がせるきか!?

「いやいやいや買わないぞ。自分で出しやがれ。」

「え…? 買って…くれないのか…? 隊長…(うるうる)」

「買って…ください…お願いします…松下さん…なのです(うるうる)」

おいおい…なぜリベリアの『うるうる』をマスターしているんだ? 第一なぜコゼットの俺の呼び名を変えてるんだ?

「松下…あきらめろ。」

伊藤が肩に手を乗せてくる。て、なんで諦めなきゃならんのだ。

「いやしかし…」

「ここで拒否れば、罪悪感に苛まれることは間違いない。しかも、彼女達からぶつくさ言われるぞ。」

伊藤があきらめろと催促してくる。

松下はコゼット姉妹を見た。まだうるうるさせている。うゝんなか

なか似合っているなあ…。リベリアが大きくなったらこの位出来るのだろう。クソッ

「わかった。買ってやる。」

「やりましたね！姉様。」

「うん。うるうるは使えるな。」

ケツやはり計画性があつたか。これだから女は苦手なんだ。

なんだかんだいいながらレジまで持っていき、先に松下と伊藤のコートとサングラスを置く。

『以上で金貨五枚です。』

「あ、カードで。」

松下はカードを出すと、店員さんに渡した。店員さんはカードリーダーに入れ、ポチポチと何かを入力し、暗証番号を入力するよいに求め、松下は入力、店員さんはカードを返してきた。

（ちなみになぜ通貨単位が金貨なのかと言うと、『クル』やら『シル』とかだったらやたら分からなくなるので金貨にした。）

『ありがとうございます』

素晴らしい営業スマイルだった。

「で、お前らは…なぜバックなんて持ってるんだ？」

コゼット姉妹がレジに置いた品物は、以下の通りである。

―コゼット―

？戦闘用の黒い羽織りもの

？私服と思われる服三着

？あからさまに高そうなバック

？化粧品

―妹フェイル―

？戦闘用の黒い羽織りもの

？私服と思われる服二着

？あからさまに高そうなバック

？雑誌2つ

？化粧品

それらが既にレジに置かれ、合計額が出ていた。

『以上で金貨47枚です。』

「…あ、はい…。」

かなり肩を落としながらカードを差し出し、会計を済ませた。

「…どういう事かい？日本円で約47万だぞ？高いぜ！」

店を出た4人は宿屋に戻るための道を歩いていた。
勿論荷物は男持ちだ。

「おい、聞いてんのか？」

返事なし。

「おい！」

返事なし。

「はぁ…飛びたくなった。」

「松下。」

「ん？」

「同情する。」

同情する…て言われてもなぁ…泣けるぜ。

「なぁ…学校行くんじゃないかったけ？」

あ、忘れてた。

—マティウス魔法学院—

宿屋で着替えた松下達は、校門前に来ていた。

「隊長、なかなか似合っているぞ。」

「その言葉、賛辞として受け取っておこう。」

松下は髪を少し立て、サングラスをしている。昔の松下と今を比べても似つかないだろう。

対するコゼット姉妹は、軽く化粧して、黒い羽織りを着ている。つまりパーティー全員暗い色なのだ。正にマト○ックスである。

「で、どこ行くのか？隊長殿」

「決闘場：場所が分らん。とりあえず生徒に案内を頼むとしようか。」

松下はそう言うのと、たまたま通りかかった生徒に声を掛けた。

「なあ…その人、」

「はい？」

なんと、その人は…（元）同級生の女子だった。

かなり顔をひきつりながら会話をする。

「すまないけど…決闘場の場所を教えてくださいませんか？」

「え…？もしかして大会に出場する人ですか？」

「あ…ああ。まあな。」

若干引きながらの会話だった。

「どこの国から…ですか？」

「クルドだ。」

「ああ、いつも一回戦敗退の小国クルドですか。決闘場なら体育館の向こうですよ、じゃ。」

相手が『クルド』と認識するや否や、態度を変えるのにたいし、コゼットはブチギレ寸前だったことが後に愚痴られた。

「…広い。広すぎだ。」

決闘場を探してはや30分。見つからない。

ていうか広すぎなんだよ。

「あら？どなたですか？」

後ろから何か聞いた事のある声があった。

後ろを振り返った先にいたのは…

「失礼しました。私の名はフィルナ・ブランフォードと申します。

この学院の生徒会長を勤めさせております。」

フィルナが丁寧にお辞儀をし、自己紹介した。松下達もそれに習い返礼をする。

「私達はクルド代表『AWAKEN』で、私はこの部隊の隊長を勤めております。名前は…『アルス・グランデイス』。気軽に隊長、とお呼びください。」

とっさに偽名を使った。なぜなら一度会ったことがあり、何かしらデメリットがあるような気がしたからだ。まあそれ以前に覚えてるのが問題だが。

「では、アルスさん。ドミネ・クオ・ヴァデイス？（どこに行かれるのですか？）」

（いや、隊長でいいから…ってなんでドミネ・クオ・ヴァデイスなんだよ…）

「今決闘場の場所を確認に来ていたのですが、なにせ広すぎて迷ってしまいましたね。良ければ案内していただけませんか？」その要望に少し悩んだあと、

「構いません。私も決闘場に用がありますので、連れて行ってあげましょう。」

「ぬ、すまない。」

こうして、フィルナと共に決闘場に向かった。

―決闘場―

「うわ…コロッセオかよ…」

体育館から先に進んで約十分。

やっとコロッセオタイプの決闘場が見えてきた。

この学院の決闘場は近年建てられたらしく、まだまだ新しい所が沢山ある。

このコロッセオタイプの決闘場の中からガキーン！という剣の擦れ合う音や、ドォォン！という魔法による爆発音が絶え間なく聞こえ

てきている。

「私は二年生代表チームとして出場予定ですので、これから練習いたしますの。」

「へえ〜。では、生徒会長であるあなたは一番強いのですか？」

しかし、フィルナはその問いに首を振った。

「実は一番強いのは一年生の代表チーム『白騎士団』。白騎士団の隊長『矢島』という人物が一番強いです。」

「な…に…？」

松下と伊藤はまさか…と思った。まさかあの矢島ではないか、そう脳裏によぎったのだ。

「え？…どうかなされましたか？」

松下達の様子に、フィルナは頭にクエスチョンを浮かべていた。松下は何でもない、と返事はしたが、まだ首を傾げていた。

―決闘場観客席―

松下達はフィルナと別れ、観客席にいた。まず相手の確認をするためである。

「いま戦っているのは二年生代表チーム、フィルナさんがいるところだ。隊長。」

「まあそうだな。なかなかの強者揃いみたいだ。」

二年生代表チーム、名称『5th・ルナ』。

なぜそんな名前に決まったのかは知らないが、明らかに逆シャアの隕石じゃあねえかよ。

それぞれ、杖、剣×2、ナックル、である。

フィフスは杖で仲間のサポート及び攻撃呪文を使うようだ。

他は近距離のfighterだ。中距離はフィルナのみのようにだ。つまり近づいたら殺すタイプか。

それを二時間ほどコゼット姉妹と伊藤で戦力を分析しながら見ていた。

「ん？交代か？」

「その様だな…ん？次は一年生らしい。つまり矢島だな。」

次に二年生と入れ替えで出てきたのは…矢島達だった。

「あいつ…ハーレムを作りやがって…」

「カリィ…矢島の方がいいのか…shit！」

「え？どうした？隊長…ヒヤ！？」

松下・伊藤は立ち上がって矢島達を睨みつけた。そして尋常じゃない殺気を放ち、コゼットを震え上がらせた。

「なあ伊藤。俺さあ…物凄く闘争心が沸いてるんだよな…」

「ああ、俺もだ…殺そうぜあいつ。」

「いやいや、試合で絶対的な絶望を矢島達に与えてやろうじゃないか…ククククッ」

「クククク…いい案だなあ…俺も乗ったぜ…」

「裏切り者には…」

「深き絶望を…」

「ハーレムには…」

「苦き苦しみを…」

「姉様！松下さん達が暗黒面に捕らわれてますう！」

「分かってる…しかし話しかけづらい…」

暗黒面に捕らわれている松下達の周りにはダークフォースが渦巻いていたという。

「姉様！とりあえず彼らを調べましょう。」

「あ・ああ。わかった。」

矢島達の武装…

矢島…エクスカリバー

プリミル…ルーンの杖

カリィ…小さい杖＋コンバットナイフ

パス…堕天使のレイピア

矢島達の防御武装

矢島…聖なる装備一式（素早さが若干低下）

プリミル…聖なるローブ、聖なる網タイツ（なんだそりゃ）

カリィ…白い羽織りもの、スカート（ミニ）、パンツ（いちご柄）、

短パン（白）

パス：白い羽織りもの、マント（白）、スカート（白）、短パン（白）、パンツ（黒）

全体色は白。攻防共に優れたメンバーである。

「ってなんで作者はパンツの色まで指定してるんですか！」

いや〜どうせ短パン穿いて分かんないだろ？

「そういう問題じゃない。しかも網タイツは無いだろ。」

まあ良いじゃないか。ローブで隠れるんだから。

「この…変態が！！」

はいはい。ほら、物語を続けるぞ。

矢島達の装備はどっから手に入れたのか、かなり価値のあるものばかりだ。

その上かなり使い慣れている。剣裁きはかなりのものだ。

「あのカリィさんは多分、魔法で素早さを増して懐に入ったところを刺すタイプなのです！」

「ああ、その分多人数戦闘には向いて無いがな。」

冷静に分析している隣では…

「クリスマスってよくXmasでよく書くよなあ〜？あれってよ

「ギリシャ語なんだよ！書くならC'massって書けよ！なんでギリシャ語を使うんだ意味わかんねーよクソ！」

「クリスマスってさ：彼女いない人にとってはただ男女がイチャイチャするのを横目で見る無駄な平日でしかねえんだよ：クソ！」

暗黒面から哀愁面に変化していた。

「そろそろ帰りましょうか。」

「ん？もうそんな時間か：うん。帰ろう。」

コゼット姉妹は、ふと隣の魂が抜け出した後のような二人を見る。憐れみの目で。

「この魂が抜け出した物はどうします？」

「引きずって持って行くしかない。仕方ない。フェイル、副隊長さんを頼む。私は隊長を引きずる。」

「はいなのです！」

二人は松下・伊藤のコートを外し、引きずって帰っていった。

END↓

大会編―前日（後書き）

最初のエリンが別れる部分がイマイチ表現が足りないように感じる。

だが、まだ文章力が足りないものでいつか改定したい。

ちなみにサンタの元ネタは聖ニコラウス。

大会編――？

ルパンはとんでもないモノを盗んでしまいました

あなたの心です

ルパン三世 カリオストロの城

――宿屋――

朝である。大会当日である。本日快晴。

（んゝ朝…か。もう少し…）

松下は寝起きはかなり良い方だが、悪い時はとことん悪い。二度寝の常習犯である。

（…なんか…小さいが…柔らかいもの…ある…）

松下は何か小さくて微妙な柔らかさを持つものに手を触れた。

（んゝ触れん…）

スカスカ…スカスカ…

「ん…な…に？」

『松下ではない』何者が喋る。

そして、その何者かはいま自分が何をされているか確認する。

「あれ？隊長…の…手が…私の…胸に…」
いま自分のされている事を確認したのはコゼットだった。
なんと、コゼットが松下に絡みついているような体制だった。松下の手は無意識にコゼットを押しつけようと働いたものだが…恐らく勘違いするだろうな。

「ぎにゃああああ！！」

「な！！なんだ敵か！」

物凄い甲高い声に飛び起きた松下は周囲を確認する。

「…なんであんたが俺の部屋にいて、なぜ俺に絡みついているんだ？キツいんだが」

「はあ！？あなたが私を夜這いしようと夜な夜な潜り込んだんでしょ！？そして…私の…豊満な…胸を…！」

「いやいや、貴女は胸無いでブフォ！」

「胸が…何だって？」

（ヤバイ…暗黒面に捕らわれているぞ！ここは口裏を合わせるほかない！）

「い・いや、その豊満な胸を触ったのは事故で…」

「いーえ！故意よ！私の豊満な…」

そうこう言い争っている内、事件は起こる。
察しの良い読者は分かるだろう。

「松下！なんだあの…悲鳴…は…」

「松下さん！だい…じょう…ぶ…」

「「え？」」

言わずもがな。人が来たのである。
不幸は、予想もしない時に来るものだ。

「あ…ああ…松下…ついに…」

「はあう！ 恥ずかしいですう／＼／＼」

「おい！ 勘違いだ！ ただコゼットが夜這いしてきただけだ！」

「誤解を広げないでください！ ただの事故で…その…行為には…／

／

「だああああ！ 違う！ 朝起きたらコゼットが隣にいただけだ！」

「そうだ！ 部屋を間違っただけだ！」

そこでフェイル達は、最初から分かっているような口調で、

「分かっているですう。姉様はまだ処女だったのだから、ベッドが汚れてない事で行為には至っていないのは当たり前ですう！」

「そうだな。第一松下は女性があまり好きじゃ無いはずだ。ベッドに引き込むことは無いだろうなあ」と言った。

「第一姉様の部屋と松下さんの部屋は相部屋ですからね！」

「「は！？」」

松下達は目を丸くした。そして…暴露した。

「松下さんは昨日は寝るのが速くて、姉様は私が直々に連れて行つたから判らないのは当たり前ですう！」

「「な…なんだってえええええ！」」

「つまり…騙したのかぁー！」

「いいえ。元々三部屋しか取ってませんからね…てへっ！」

フェイルが猫のポーズをとる。なんか憎らしいが可愛らしい…クソ！

「はあ…今日は大会当日だろ？準備するぞ。」

「ふえ〜い」

フェイルが生意気に返事をした。泣けるぜ…

—魔法学院…決闘場—

『さあ今年もやって来ました！大武術祭です！レポーターは私、ア
プカムが勤めさせて頂きますウ！』

「やけにハイテンションな奴だな…」

「あれがウリのレポーターらしい。」

松下達は観客席の一角に陣取っていた。

周囲は生徒で賑わっている。どうやら学校は休みらしい。

『なananとお！今日はクルド王国ウ！王女エリン様とオ！我らが
姫エ！フェイン様がお越しになられているウ！』

二人が紹介され、エリンとフェインが手を振っている。。そのせいか、絶叫する者、スタンディングオーベーションをするなど、場内が沸きあがった。

ちなみにフェインはなかなかスタイルがいい。

『ルールを説明するウ！ルールはチーム同士のガチの勝負だ！一方のチームが敗北宣言するか、気絶するまで戦うウ！地獄の競技イ！あ、ちなみに腕とか切り落とされても大丈夫のように、国中から医療系の人を連れてるので安心だア！しかし、召喚獣は許可しないイイ！』

「おいおい…ゼロ達をつれてけないのか…」

「きゅー」

「みー」

長らく出番がなくて、しかもかなり成長した召喚獣、バハムート零式、烈はともに人間の大人の腰ぐらいまで成長していた。人間の言葉はもう少し掛かると見る。

「ごめんけど、今回も出番が無いみたい。本当にごめんなさい」

「きゅっ！きゅっ！」

「みー！」

なんか許してくれるみたい。

この頃コゼット姉妹と一緒に寝てる様だが…

「そう言えば胴体切られても治療したら大丈夫だった…なんてことが度々あったらしい…」

なんか隣のコゼットがぶつくさ言っている。まあいいか。

『最初のオオ試合はアアア！マティウス魔法学院二年生チーム『5th・ルナ』VSガールランド魔法学院代表『カオス』だアアア！』

その紹介をされたとき、双方の出入り口から両方のチームが出てきた。

「5th・ルナside」

「皆さん、行きますわよ？生徒会の名にかけて。」

「はッ」

よし、連帯感はバッチリね。相手に負けるわけにはいきませんから。

『開始イイイ』

「風よ…彼らに疾風を…ヘイスト！（本当は違うが、一応FFに準ずる。）後はサポートします！やっちゃいなさい！」

その発言を皮切りに、殴る斬るの闘いになった。幸いにも相手チームは全員近距離専門らしく、乱戦になった。

「なに！速い…ぐっ！」

「ちよおま…うわ！」

相手チームは確実に速さに翻弄され、圧倒されてきている。

「行きますわよ…熱き炎よ…ファイラ！」

「あ！？ちよ…逃げ…ウボアア」

相手チームは皆気絶し、再起不能になった。

『決着ウ！勝利は『5th・ルナ』だアアア！五分足らずで殺っちまったー！』

その表明に、会場は盛り上がる。中には『好きだー！会長！』や「付き合ってくれ！会長！」と、入学式と変わらない声が飛び交う。

それに答えるように手を振る会長に、更に会場は盛り上がった。

「わお…」

「目の覚めるような闘いだったな…」

その後、キレのあるレポーターと共に数組が散り、又は勝利した。
(ただ単に作者が飛ばしたとも言える)

『次はアアア！優勝候補『白騎士団』だアアア！ネーミングセンスが感じられないし、隊長がハーレムな優勝候補だアアア！』

「ん？次が矢島たちか？」

「隊長…口調が普通なのに顔が黒いぞ。むしろ怖いな…」

―矢島side―

「用意はいいか？俺は出来てる。」

矢島は当たりを見回し皆の反応を確かめたあと、矢島は装備品一式を体に身に纏う。

「お前達はここで待っていてくれ。なぐに、勝ってくるよ。心配するな。」

矢島はそれぞれの召喚獣達を控え室に置いておき、矢島は控え室を

退室し、戦う場所へ移動する。

「いよいよ本戦ね！ワクワクするう！」

「油断は禁物だぞ？その調子だと足をすくわれるぞ。パス。」

「分かってるって。それよりカリイはどう？緊張してる？」

「大丈夫。ありがとう…」

カリイは朗らかな笑顔を見せると、矢島の側に少し寄る。

そんなカリイを見て、パスは何かに気づいたようなニヤ〜とした顔を見せると、

「あ〜なるほど、過去は捨てたわけね。ね？カリイちゃん。」

「違う：／／／」

「あ〜赤くなってるー」

「何をやってるんだ？あんたら…」

顔が若干赤くなってしまったカリイの頭に無意識であろうが手を置き、なでなでする矢島。

それに更に反応して赤くなるカリイ。

その矢島を刺すような視線を投げつけるプリミル。

それをみて爆笑するパス。

仲が良いのか悪いのか判らない4人だった。

（帰らない人を待つより…こっちの方がいいかも…）

カリィはこの時以来、矢島を意識するようになる。

e
n
d
↓

大会編―？（後書き）

俺の小説の悪いところ

？無駄話が多い。

？話が進まない。

？つながりが巧くない。

？投稿する度に読者様に対する罪の意識がある。（これで満足して頂けるのか？）

？何だかんだ言って、本編と間章の区別がつかない。

？何だかんだ言って、作者は彼女いない歴〓実年齢。

以上が私の小説における問題点だと思うから、これらを主に改善したいと考えております。

大会編―？ R15

戦場でおびえたことを、恥じることは決してない。

恥ずべきは、人間の尊厳を根こそぎ奪い取る、戦争や社会体制なのだ

浦沢 直樹

『両者とも入場してきたぞオオオ！『白騎士団』に対するは『童貞ズ』だアアア！彼らはハーレムに強い嫌悪感を持つ人達との情報が入っているウ！勝つのは一体どちらだアアア！？』

「さて…見せて貰おうか。矢島の真の実力とやらを！！」

「隊長。顔が黒いぞ。」

松下はホットドッグを食べながら、試合を観戦していた。
左にコゼット姉妹、右に伊藤を配置している。

「ふん…私だって、神技ぐらい作ってきたさ…心配はいらない。」

「いや…誰も心配してないってば！」

「まあ、エクスカリバーの能力も見せてもらうかな。」

「いきなりシャ○ボイスからいきなり戻ったな…」

そんな脳天気な松下は、眼下の矢島チームを見て、何かに気づいた。

「しかし…ハーレムの中に見覚えのない人が混じってるな。しかも

カリィは矢島にくつついている。」

「何？」

その言葉にすぐさま反応したのは伊藤である。
彼は一応はカリィの彼氏：である。

「ーて、おいおい、顔が少し紅くないか！？：アイツまさかカリィ
まで侍らせやがったのかよ！？」

「――」

伊藤は既に何も言わなかった。ただ、修羅の如く目を細め、カリィ
と矢島を睨みつけていた。そして一言放った。

「俺は矢島を：いっぺん殴り倒したい。」

と。

―矢島 side―

『試合：開始イィイ！』

「私が先に行く！」

ゴングは鳴った。まずカリィが先制を仕掛けに行く。
相手は全員剣士。まず一人を狙う。

「ふん！一人でくるか！！舐められたものだなア！」

「それ：！」

カリィは剣士Aの懐に近づくと、いきなり回し蹴りを放つ。
ブルりん

「いきなり回し蹴りか！生意気な。受け止めてくれるわ！」

カリィの放った回し蹴りは当たる前に剣士Aの腕に受け止められ、逆に剣士Aに掴まれてしまった。

「グヘヘヘ：オナゴの肌はスベスベしていいのう…」

「…！！触らないで…」

何か掴まれている足が必要以上に触ってくる。気持ち悪い…仕方ないので、持っているナイフで剣士Aの腕に突き刺し、怯んだ時に頭をひつつかんだ。

「痛ってエエ！この餓鬼なにしやが…」

「女の子の足を…気軽に触らないで…」

そう言うと、剣士Aの足を引っ掛け、そのまま地面に顔から叩きつけた。

そのせいか、剣士Aの顔あたりの地面から鼻血と思われる鮮やかな血が広がった。

「おう…鼻血があ…」

「穢らわしい者が…私の足に触るなんて…その罪は重いわ…」

そう言うと、まだ意識がある剣士Aに追撃を始めた。まず頭を地面に何回もぶつけては頭を引っ張り、ぶつけては引っ張りを繰り返し、更に追撃は続く。カリィは彼女のナイフで恐ろしい事をやり始める。

「当たったら…諦めて…」

「…あ…止めてくれ…」

剣士Aの手を強制的に広げ、指の間をナイフで刺し始めた。親指から人差し指、人差し指から中指…の間をコツ…コツ…と刺している。
「あ…」

そして、明らかにわざとらしい言い方、そしてやり方で、指を刺してしまった。

「うおああああ!!」

当たった指は人差し指。ナイフが刺してしまった為に鮮血が溢れ出している。更にカリイはその指を集中的に刺し始めたのだ。

「…フフ…死んじゃえ…」

そして遂に、骨は割れ、遂に指は本体と離れ離れになってしまっていた。

「…は…はは…あはははははは!」カリイは立ち上がり、高らかに笑い出した。その純白の羽織りものは真っ赤に染まり、手には鮮血のこびり付いているナイフ。

しかし、両軍共、この暴挙を止めようとはしない。いや、出来ない。皆、この拷問を見たことにより、だれ一人として動けなかった。

観客も誰一人として声を上げない。むしろぶっ倒れている観客がチラホラいる。

松下でさえ固まった。

「さて…この汚物を誰か片付けてくれない?」

その言葉で我に帰った医療班が担架を持って入って来、剣士Aと切

断された指を回収、すぐさま治療を始めた。

本来、戦いの最中に回収する事は有り得ないのだが、カリイの目を見ると恐ろしくてたまらなかったのだろう。

カリイは満面の笑みと共に童貞ズの方を見るとこう言った。

「いっぺん…死んでみる？」

―相手―

な…なんだよアイツは…悪魔じゃないか…Aにあんな事をするなんて…許さねえ…

あ…でもAの二の舞を踏むのは嫌だから止めとこう…

こうなったら、あの男を攻撃するしかない！童貞にとってモテる男はウザいだけだからな…クソ！

「よし、作戦は…って、何怖じ気付いてるんだお前ら！」

剣士Bが後ろを見ると、頭を地面にこすりつけている剣士C、Dがいた。

「おい！どうした！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「…おい」

「降参するから許してくださいごめんなさいごめんなさい…」

「ダメだ…クソ！俺が逝くしかないか…」

剣士Bは意を決して剣を構え、矢島の方へ突っ込んで行った。

―矢島side―

今、目の前で恐ろしく悲惨な光景が展開されている。

カリィが…血にまみれたナイフを手にとって敵さん達をにこやかな笑みを浮かべ、殺害予告をしたのだ…キャラ変わりすぎだろ…なんか怖いな…

「んどりやあああ！」

「ん？なんとお！」

いきなり敵さんが突っ込んできていた。あんな惨劇を見た後なのに怖くはないのか！？なんて考えつつ、背中に下げている鞘からエクスカリバーを抜く。

「チエストオオ！」

「痛ってエエ！こんなにやろガアアア！（この野郎オオ！）」

剣士Bの牙突が左腕を掠った。そこから血が滲み出る。

抜いたは良いのだが、なにせいきなり突っ込んで来たので、十分な防御が出来かったためだ。

「ちい！エリアブラスト！」

矢島はそこからエクスカリバーを一薙し、剣士Bを巻き込んだ。それによって巻き込まれた剣士Bの武器であるロングソードがポツキリ折れてしまった。

「俺のロングソードが…クソ！」

「…降参しなよ。君の獲物は既に折れてる。もう使えない。降参しない。」

矢島は投降を呼びかける。剣士Bは膝をおり、地面を殴りながら泣き始めた。そして、降参を認めようとしたその瞬間！！

「いっぺん…死んでみる？」

剣士Bの後ろに血塗られたナイフではない、血塗られた剣を手に持つ『悪魔』が降臨していた。

その『悪魔』の後ろを見ると、更なる惨劇が広がっていた。

剣士Cは腕を切り落とされ、また剣士Dは足を切り落とされていた。更に、血塗られてしまったために切れ味が悪くなったのであろう、柄の部分まで血塗られたナイフが放置してあった。

どうやら『悪魔』はナイフから隠していた剣に持ち替えたのだろう。

その『悪魔』は今まさに剣Bを襲おうと、後ろからジリジリ歩み寄ってくる。

「おいカリィ！やめるんだ！」

「え？なんで？こんな奴ら、皆殺ししちゃえばいいのよ…アハハハ！」

「なんかおかしい…カリィは確かにキレたら怖いけどあんな拷問紛いのことはしない子なはずだ…まあ取りあえず」

矢島は早急に剣士Bを保護、C、Dに関しては既に運ばれていた。

「う…」

「カリィ!？」

カリィはいきなりぶっ倒れてしまった。

矢島はカリィを担ぐと、医療班の所へ送った。

しかし…普通のカリイを見ていなくても普通はこんな酷い事はしない。

何かに操られているのだろうか？

「あれが…カリイの裏の性格だよ。アイツ…試練の山で戻ったんじゃないかったの…？」

「それはどういう意味だ？パス」

待合室に戻った矢島達は、パスが何やら知っているみたいな素振りをしていたので、取りあえず聞いてみた。

「そのまんまよ。彼女は昔から引っ込み思案な性格と邪悪な性格を持ち合わせていたんだ。一年に一回は時期が来ると必ず暗黒面を出すからカリイの親はその時期を予想して閉じ込めていたんだ。」

「なぜ？」

カリイを抑えながら聞いた。

「さあ知らない。そして閉じ込めるのは更に悪化させることに繋がるから『試練の山』にある山小屋に一年間送ったんだ。そしてそこで剣やらナイフやらの練習をしていたって聞いている。食料は毎日地元の人がカリイのいない時間帯に小屋に置いていたみたいで、餓死は心配無かったみたい。」

「そうか…」

「そして一年後、戻ったカリイは今日に至まで完璧に暗黒面を封印していた。でも…」

「先ほど解放してしまったのか…」

「ええ。多分さっき暗黒面が出たから大会に出るのは心配ないだろうけど、ちょっと心配だわ…」

パスは結構友達思いらしく、あとで大丈夫か聞いてみると言っていた。

「ねえ…」

「ん？どうしたんだい？プリミル。」

プリミル、久しぶりの登場である。

「矢島さあ、さっき左腕を切ったよね？大丈夫？」

「ああ、あれか。あの怪我なら既に治ってるよ。」

「え？…あ、本当だ！治ってる」

「だろ？俺はエクスカリバーの能力のお陰で怪我には心配しないでいいからね。」

「いゝなあー」

「はははゝいーだろ？」

そんな話をしながら観客席に戻って行った

―松下side―

「ククク…そうかそうか…矢島のエクスカリバーはマーリンから与えられたもう一振りの剣だったか…カリイの事も驚いたが…なるほど…」

「隊長…どうしたんだ？凄く黒いぞ…」

「いや、矢島の傷が治っていたからな。面白くて笑えるさ。」

「それが…何なんだ？」

「一言で言えば、エクスカリバーの弱点が見つかった…いや、矢島の自信が弱点かな…」

「どういう事だ？」

「矢島達と戦う時に教えるさ。アーサー王の死の原因とでも言うのかな？」

「誰よアーサー王って。」

「弱点をどうしても矢島達との戦いまで待てない、と言うなら、『エクスカリバー』で検索。」

「はあ…正直隊長という人間がわからない…」

コゼットは溜め息をつくと、懷から大会の順番が書いてある髪を取り出した。

そして、コゼットは気づいた。

「え！？次？ちょ、ヤバい！」

「にゃ？姉様どうしたのですか？」

フェイルはいきなり大声を出した姉・コゼットを見た。

「次なのよ試合！時間がないわ…準備に行くわよ！速く！」

いきなり怒鳴られて、時計を見たフェイルは目を丸くする。

「え？次！？後10分しか無いですよ！」

「10分ありゃあ何とか出来る！さあ速く！隊長も速く！伊藤も！」

「わかったよ。」

「了解。」

松下チーム『AWAKEN』の初戦が、始まる。（着替えが間に合えば）

END↓

大会編―?

お前の物は俺の物。

俺の物は俺の物。

ジャイアニズム

―決闘場―

『さあ両者とも出てきましたア！ゲート？から出てきたのはクルド代表『AWAKEN』だア！大会では一回戦落ちの常連だが今回は勝てるのかアア！？ 対するは『エスカテイク』だアア！コイツはなかなかの強豪チームウウウ！ この強豪チームにどう立ち向かうのか！？』

「やれやれ…なんとか…間に合ったぜ…」

「まったくよ…」

松下達はなんとか着替えを済ませ、全力で走って来た。疲れては無いが、なんとなく脱力感がある。

「いいか…負けるんじゃないぞ！」

「わかってるさ。伊藤もな。この試合をさっさと終わらせて次のパ―トに早くいかねばならんからな。いくぞ！」

松下は相手チームを睨んだ。そして『試合開始イイイ！』とアナウ

ンスが轟く。

瞬間、松下は正宗を展開すると、いきなり走り出した。無論、向こうからの魔法攻撃を避けながらである。まず前衛の一人に向かった。

「無駄無駄ア！」

松下は前衛Aの鎧ごと正宗で切り裂く。勿論死なない程度にはなんとなく調整したが。

前衛Aは作者からセリフももらえずにぶっ倒れて気絶、再起不能になった。

「伊藤！コゼット！フェイル！」

「わかってる！オラァ！」

伊藤、コゼットは既に前衛B、Cに接近、攻撃していた。

伊藤は前衛Bの攻撃を村正で受け止め、更に刀を左側に押し威力を受け流して相手に見事な回し蹴り、そして『親指を突き出したままのグー』で相手の顔を殴り抜ける！

「ふん！いいザマだ。」

そう捨て台詞を吐かれた相手は、何故か目から血を出して気絶していた。

コゼット・フェイルはというと、まず前衛Cに接近したが、前衛Cが先制の魔法攻撃をしてきた。近く中距離攻撃であるため思うように近づけなかった。

「ちい！近づけない：そうか、フェイル！魔法を！」

「はい！姉様！」

コゼットがフェイルに魔法の指示を出すと、フェイルは呪文を唱え始めた。

『天地遍く光よ：サンダラ！』※一応変えてあります。

フェイルが相手目掛けて雷系・サンダラを前衛Cに向けて放った。

その魔法が近く中距離攻撃を展開していた前衛Cに直撃、あえなく再起不能になった。

「さて：残りはテメーだけだぜ：覚悟は出来てるか？俺は出来てる。」

残りはリーダー格（以後相手隊長）の無駄にムキムキした奴だ。それに無駄に長い剣を持っている。ほんと、俺は無駄なものは嫌いだ。無駄無駄：

「な～にゴチャゴチャ言ってやがるんだあ？ お前らみたいな弱小チームぐらい俺様が捻り潰してくれるわ！」

「んだとオラ？（なんだと？おい？） なめてんのかカスが？（なめているのか？このカスが！）」

相手の挑発に乗ったのは、意外にも伊藤だった。

「おいおい：挑発にはのるなよ：」

「少し見てな。最近出番が無くてイライラしてたんだ。任せておけ。」

そういうと、いきなり走り出し、相手隊長が剣を構える『前』に村正を一薙した。

それが相手隊長の胴体に見事に当たり、血がにじみ出た。

「むぐう…小癩なア！ぶッ殺す！」

「ん？ぶッ殺す？ぶッ殺すだど？」

相手は剣を握り締め、伊藤に切りかかってくる。

「んおりゃああああ！」

「『ぶッ殺す』と心の中で思ったならッ！」

相手隊長の無駄に長い剣が伊藤に迫るウウウ！

「その時スデにッ！」

伊藤は村正を頭の上に挙げ――

「行動は終わっているッ！」

相手の迫る剣を――『斬った』。

比喩ではない。

見事にッ

一刀両断したアアアー！

「オラオラオラオラ！」

更に伊藤は村正を相手隊長目掛けて切りかかり、何度も切り裂いた。

そして、連撃が終わった後、そこにあったのは血まみれの相手隊長と返り血を浴びた伊藤だけだった。

「いいか！ 戦闘中に『ぶっ殺す』なんて言葉は存在しねーんだ。あるのは『殺るか殺られるか』だけだ。『ぶっ殺す』なんて俺たちは使わねー。使う前に既に殺っちまっているからだ。『ぶっ殺す』なんて使う奴らは実力のないお前みたいなゴミだけだ。『ぶっ殺した』なら使っている。覚えとけ。」

その時、相手チーム『エスカテイク』の敗退が決定した。

『えー？ エスカテイク負けたのー？』

『クルドが残るよりエスカテイクが居た方が見栄えがいいのにー』などというエスカテイクの敗退を惜しむ声もチラホラあったのだが。

「伊藤、戻るぜ。」

「ん…了解。」

『なんとオオオー！優勝候補の『エスカテイク』が敗れてしまったアアアー！快挙です！凄いッ！意外ッ！この戦いに対してどう思われますか？ 戦闘解説員の山中・ルイージさん』

『そうですねえ… 最初のアルスさんの切り込み隊長としての突撃が素晴らしいですねえ。あれによって全体の志気があがってパルス

さん、コゼットさん、フェイルさんの攻撃もやりやすかったですね。』※松下と伊藤はそれぞれ偽名登録している。

『なるほど…あ、選手が退場していきます。それにしても、今大会の観覧者の倒れ込む人の数が多いことについて、どう思われますか？』

『うーん…確かに倒れ込んだ人が今回多いようですが、これは戦いの場であり、血を見るのは仕方ない事なんですよね。それに今回倒れちゃった人の多くは、どうやら見に来てる生徒なんですよね。』

『では、生徒の観覧を規制した方がいいという事ですか？』

『いえいえ、そういう事じゃありません。ただ、血に弱い生徒や、グロテスクな事に弱い生徒に対しては、観覧するのは控えた方が良いでしょう。』

『確かに、そういうシーンは避けられ無いですからねえ。』

『いま大人気の漫画『その日暮らしの泣く頃に』というのがあるんですが、そのような本を読んで耐性をつけるのもありかもしれません。』

『ありがとうございます。次の試合は20分後の予定です。以上、現場からでした。』

―待機室―

「まずは一勝だな。」

待機室に戻った四人は、取りあえずの一勝を祝っていた。

「この一勝を足掛かりにして、少なくとも決勝には行きたいよな。」

「そうなのです！ 目指すは優勝なのです！」

「優勝ねえ…出来るかな？」

なんか珍しくコゼットが弱気になっているようだ。取りあえずここは前向きな事を言うべきだな。

「優勝は頑張り次第だな。しかし、なんでそんなにテンションが低いんだ？ コゼットらしくないな。」

「あ…うん、なんていうか…私達は国の代表で、しかも特殊部隊でしょ？ 優勝して目立っていいのか…なんて」

「むう…確かに、目立っちゃクルドの戦力がバレるのか？ いや…なあコゼット、『エンプラス』と『クルド』の両国は仲がいいのか？」

「いいえ、余り良好では無いみたい。クルド側の鉱物資源を巡って色々いざこざがあるらしいの。」

クルド側の歴史から見れば、昔から鉱物資源がかなり豊富で、エンプラス側が色々いちゃもんをつけてきたようだ。今までエンプラス側が武力行使をした事はないが、はっきり言って、クルドとエンプラスの間は冷戦状態らしい。

「なるほど：つまり、今回王女が付いてきたのは、エンプラス側との話し合いだな。で、俺達はそのカモフラな訳か。」

松下は納得したように頷く。

伊藤は椅子に腰掛けると、持っていた水をガブガブ飲み始めた。

「おいおい：そう焦って飲んだらむせるぞ
という松下の忠告通り、『ごぼ：ぐは』とむせていた。

「ハァーハァ：危なかった：ま、俺達が色々言える立場じゃないぜ。
今は目の前に集中すべきだ。」

「ま、そうだな。今は大会を勝ち抜くか。」
松下達は待機室で寝ていた召喚獣、ゼロを見つけるとそのまま抱えて観客席へ戻っていった。

大会編――？

生は永久の闘いである。自然との闘い、社会との闘い、他との闘い、永久に解決のない闘いである。闘え。闘いは生の花である。

大杉栄

有り得ない事が起きた。それこそ大会編が成り立たないような有り得ない事。

それは：

――決闘場――

次は、矢島達の出番なのだが：

「あれ？ 相手チームは…？」

矢島達はポツリと呟く。それは、『相手チーム』がまだ出てきていないのだ。

「あつれ〜？ 今回はこの美少女パスちゃんが活躍しようと思ってたのに…」

「しょうがないよ。今着替えをしてるのかもしれないよ？ ね…？」
プリミルは少し戸惑いながらも、パスを励ます。対するパスは特に気にする素振りを見せていないが。

「それにしても遅くないか？ 遅れるならせめて人に言って欲しいんだが…」

次の対戦相手は『ハノイ』。魔法が得意なチームと聞いている。成績は一回戦止まり、あまり実績はない。十分勝てる相手だ。

その時、思わぬニュースが入ってきた。

『申し上げます。チーム『ハノイ』は棄権を選択し、参戦権を放棄しました。よってチーム『白騎士団』は不戦勝とし、準決勝へ進む権利を獲得しました。』

「えー？　なんで？　なんで棄権するのよ。」

チーム『ハノイ』がいきなりの戦線離脱、しかもそれに伴って矢島達是不戦勝が確定したことをアナウンスは伝えた。

『理由は…あのチームには悪魔がいる！　だそうです。』

って、原因はカリイかよ！　まあ前の試合を見ていたらトラウマになるのはわかるけどね。
俺だったら逃げます。

「うーん…残念！　じゃ、帰ろっか。」

しかし…テンション高いねえパスは。持ち前なんだろうけどさ。

「えっと…不戦勝だから、次は…準決勝！？」

矢島はその結果に驚いた。まあそりゃ、初出場で二勝しただけで準決勝は…珍しくないな。チーム数は少ないみたいだし。準決勝なら

残るチームは四組か？

「私：そんなに怖かったの？」

はい。怖かったです。なんてカリイの前では言えないよな。女の子相手に。

「帰ろっか。」

「ああ、そうだな。」

矢島達はクルリと踵を返すと、ゲートに歩いて行った。

「あ：」

「ん？ どうした？ カリイさん。」

「トイレ」

「ああ、行ってらっしゃい。」

「すぐ戻る。」

「ついでにパスも」

「じゃあ、すぐ帰ってくるんだよ。」

二人は頷くと、仲良くトイレへパタパタと走って行った。本当に仲良いな。あの二人は。

——トイレ——

「ふう：スッキリしたあー」

パスは蛇口で手を洗い流し、ハンカチで手を拭く。

「：スッキリ。」

カリィはそう呟くと、パスと同じように手を洗い流し、ハンカチで手を拭く。

「いこ…？パス」

「あ…ちょい待って」

パスはカリィを呼び止めると、いきなりパスはカリィの目の前に立ち、真剣な眼差しでカリィを見た。

「な…なんなの？ いきなり」

「あんた、好きな人はいる？」

パスはカリィの目を見る。そして、カリィは顔を縦に振った。

「そう。じゃあ…その人は…矢島？」

「……………」

カリィは途端に喋らなくなった。ただ変化は現れている。

「凶星…だよね…？」

「……………（コクッ）／／／」

「じゃあさ、過去の彼氏は？ 確か…イトウ…だっけ？ その人の事はどうなの？」

「……………」

カリィは再び沈黙する。

「決着はつけた？」

「え？」

「あなたはイトウの事を振ったの？ それともイトウが振ったの？」

「：貴女には関係ないこと。私はただ：」

「ただ何？ 関係ないって？ 貴女はどうせまだイトウと決着をつけて無いんでしょ？ そんなあなたが新しい恋を見つけるなんて：おかしくない？ ねえ！」

パスは何時もの天然的な口調とはかけ離れている、強い言葉をカリイに浴びせる。

「だって：」

「え？」

「だって：いきなりいなく：なっちゅう：んだもん：グスツ：別れたくなかった：でも：」

カリイは泣きながら言葉を途切れ途切れにだす。パスはそれを見つめていた。

「でも：いきなり松下と：旅立っちゃうから：好きだったのに：」

「え？ マツシタ？ 誰よ？」

「知らない：ただ目立たない男子：だった」

カリイはなんとか落ち着き始め、ゆっくり喋っていた。パスはカリイをじっと見つめていた。

「：そう。ごめんなさい：あんな事言っ」

カリイはふるふると頭を横に振った。

「私は：あの人に逢って決着をつけるまでは：夜這いしない。」

「いや、違うでしょ！ 夜這いなんてしちゃ駄目でしょ！ 聞いたの人の話を！？」

カリィは無表情からフツと柔らかい笑顔を見せた。その笑顔は、男だけでなく女でさえ惚れそうな、素晴らしい笑顔だった。

「戻ろっか…」

「うん。」

彼女らはトイレを出て、矢島達のいる所へ向かう。カリィの両目は、既に元の澄み切った瞳があった。

「パス！」

「ん？ なに？」

「…ありがと。」

――松下side――

「…えっと…どゆことっすか？」

今は大会の対戦相手と対戦している訳だが…

「見たですか！ 私の魔法の威力を！ 一撃で倒しちゃいました！
！」

「あ…えっと…うん。凄いね…」

目の前に広がっているのは、正に爆発が起きたようなクレーター。爆発でクレーターなんて出来るのか…

「あのさ…試合開始と同時に発動したのは何故？」

伊藤が引きつった顔で聞く。

大体あのルイ〇のエキスポージョンみたいな爆発を出来たのか？

「簡単ですよ。試合前に呪文詠唱を終わらせていましたから…なんて」

「…フェイル？ 次からやつちゃ駄目だよ？」

「え？ どうしてですか？」 「考えてみなさい。 呪文詠唱を開始前に終わらせて良いなら、どこのチームだって試合開始直後に爆発やらなんやらしてくるでしょ？」

コゼットがフェイルに優しく説明し、フェイルはコクコク頷いている。 ああ、コゼットが俺達にあんな口調で話し掛けてくれたらなあ…

「だから、今回の責任は隊長で。」

「何故!？」

責任転換するなよ！

「部下の責任は隊長の責任。 隊長は隊長の責任。」

ジャイアニズムかよ！そこで使うか!？

「松下…」

肩に伊藤が手を乗せてきた。 慰めてくれるのか…ガツンと言ってやれ！

「諦めろ。 女にはかなわん。」

「お前はどっちの味方だ!」

全く…酷い仲間を持ったものだな。

「隊長」

「いは？ 何ですか？」

「戻りますよ。」

「…イエッサー」

なんかコゼット姉妹の尻に敷かれている俺。 悲惨だ。

『いやゝ開始直後に決着が付きましたねえルイージさん。 どうでしたか？』

『そうですね…えゝ開始直後の魔法起動はなかなか難しくてですね、えゝあのチームには優秀な魔法使いがいるようですね。はい。』

『今のチームが最後でしたから、次の準決勝には四チームが残るわけですね。』

『ええ。 『白騎士団』と『5th・ルナ』、『BAD』、そして『AWAKEN』ですね。』

『はい。で、次の試合ですが…『5th・ルナ』vs『BAD』、『白騎士団』vs『AWAKEN』という結果になっています。』

『いやゝ楽しみですねえ』

『ええ。さあどんな試合を見せてくれるのか…次の試合はCMの後！』

END↓

―オマケ―

以下の会話は、カリィ達がトイレに行っている間に交わされた会話

の記録である。

ナレーションは挟まないで、何となくで読んでください。

「ねえ、矢島？」

「どうしたの？ プリミル」

「浮気してない？」

「してないしてない。」

「本当？」

「本当だって！」

「最近カリイとかパスとよく話してるじゃない？」

「いや…あれは作者が悪いんじゃないかと…」

「カリイって可愛いわよね？ パスも。」

「まあ確かにね…」

「今『確かにね…』って言った？」

「え？」

「私以外の女をを可愛いなんて…その時点で浮気じゃないかしら？」

「あ、いや…勘違いを…」

「あゝ？ 何か言いました？」

「い…いえ、別に…」

「とにかく、私以外を好きになっちゃダメよ。」

「ぜ、善処します！」

「浮気したら…ウフッ」

「（ヤバいな…最近カリイやパスも可愛いなんて思ってきたからなあ…）」

「（一度カリイ達と話し合いの席を設けなければ…多分あの子らも矢島を好きはず…）」

以上。

TrueEND↓

大会編―？ Look Like We Made it.

男がどんな理屈を並べても、女の涙一滴にはかなわない

ボルテール

私達は、常に何かを犠牲にしている。

それは時間であったり、お金だったりする。それは今も昔も変わらない。例えば、戦争なら人民を。生きる為には他の命を。女の闘いなら愛を。

―松下side―

待機室。そこには『AWAKEN』のチームが集っていた。

「いいか：矢島は私がやる。君らは他の相手を任せる。」

「ああ、構わないが：。一人で大丈夫か？」

「当たり前だ。とにかく近づかせるな。彼らはかなりの手練れの様だからな。」「じゃあ：カリイって人とプリミルって人は任してくれ。隊長も気をつけて。」

「分かってる。フェイルも頑張ってな？」

「うん。任せてなのですう！」

松下はフェイルの頭をなでなですると、フェイルは気持ちよさそうな満足顔でにやける。

「なあ、矢島の弱点を教えてくださいよ。気になるだろ？」

伊藤は水を飲みながら松下に問う。

前にもいったが、エクスカリバーにはウィークポイントがあるらしいのだ。

「ま、いいだろう。それはな…（ゴニョゴニョ）…という訳だ。」

「なんと！ そんな弱点が…知らなかったわ…」

伊藤は目を見開く。そのおかげで水が少し零れた。が、本人は気づいてない。 気づけよー

「ふむ、読者のみんなは闘いの時に教えよう。」

「誰と話してるのですか？ 松下さん」

「あ、いやゝ別に…」

フェイルは頭にクエスチョンを浮かべ、首を傾げていた。

「しかし…いきなり試合とはね。 前の試合はマトモに闘ってないからって、順番を繰り上げなくてもなあ？」

実は本来明日に準決勝をやる予定だったのだが、この二チームはマトモに闘ってないから、という理不尽な理由で順番が繰り上ったのだ。 嗚呼めんどくさいめんどくさい。

「それには同感ですう。 今日には松下さんの奢りで外食行ってくて姉様と計画…あ…」

「なんだって？ 俺の奢りで？ 外食う？ しかもコゼットと共謀？ 聞き捨てならんなあ？」

なんだ？ また奢らせる気か？ ちった人の財布の事を考えて欲しいものだ。

「ど…どうすればいいんですか!?　ね、姉様あゝ!」

コゼットに助けを求めているフェイル。　む…なかなか絵になるな。
俺の脳内プライベートフォルダに保存だ。　無論、ロック付き。

「フェイル、隊長の前であの話はするなって、注意したわよね?

まったく…悪い子ね…可愛がりがありそうだわ…」

「ね・姉様あ!　百合はっ百合はやめてえええ!」

「ああん可愛い!　貴女はどんな味なの?」

「あ…止めて…姉様あ…あん…」

おお…目の前で百合な風景が…しかしなんだ、百合物ってリアルで見るとそそるものがあるよね。　よし、俺の待ち受け画像にしとう。

「ああん!　やめてえええ!　そこはよわいですううん!」

まあ、名残惜しいがそろそろ止めるか。　この小説が15禁になっちまう。

「あの…お取り込み中失礼するんだが…試合の時間が迫ってるんだが…」

すると、フェイルの服を外しに掛かっているコゼットは惚けた顔をこちらに向けた。

「貴方も参加する?」

「する!」

「いや…拒否れよ…」

伊藤のツツコミが虚しく響く。

「…こほん。失礼。少し暴走してしまった。」

「そ・そうね！早く行きましょう。」

「ううゝ」

良かった。危なかったな…感謝する！伊藤よ。だがな…俺は本能に従ったただけだ。男の性だよ。

「うるせえ！さっさとストーリーを進めろ！」
へーい。

―決闘場―

『さあ次は予定が早まったの試合イイー！『白騎士団』VS『AWAKEN』だアアアア！』

『うおおお！！』

回りの歓声が決闘場にこだまする。ある者はお菓子を食べながら、またある者は『白騎士団』というプラカードを持っている。

「まったく…うるせえな」

「ええ。にしても、なんでケータイを装備してるのだ？隊長」

「気にすんな。勝ったら奢ってやる。」

松下达は既に舞台上上がっていた。周囲が醸し出す雰囲気と歓声を嫌そうに感じる松下は、なぜか耳装備ケータイ（メイドver）を装備していた。

「決闘と言えばリンゴォ・ロー〇アゲインだな…」

「誰よ？」

「ダンディな人。」

「ふーん」

しかし、まだ午後2時を過ぎて間もない。太陽は容赦なく照りつけ、空には障害物は何もない。しかし季節的にはまだまだ秋辺りなので涼しい。

「来たか…肉体…」

「いや来てないし肉体は来ないし来たのは白騎士団だし大体肉体は何だよ!？」

ツツコミを横から受けつつ、前から来た矢島チームこと『白騎士団』を睨みつける。『頑張ってえー』だの『矢島さん!頑張れー』だの言ってるやがる観客には嫌気が差す。特に元俺のクラスの奴らがいるのだから溜まったものじゃない。

「お前たちは三人を頼む。」

コゼット姉妹、伊藤はそれぞれ頷くと、それぞれの武器を展開させる。

『試合―開始!』

そして、闘いの時は動き出す。

―同刻…コゼットside―

『試合―開始』

その声が響くと同時に私達姉妹は飛び出した。目標はプリミルとパスだ。

「魔法剣！　ブリザラ！」

コゼットは体を巡る魔力の塊を意識し、その塊を忍者刀に移す。すると、その忍者刀は美しい氷に包まれ、冷気を帯びていた。この間、僅か一瞬の刹那にも満たない。

「フェイル！　あなたはあのプリミルをお願い！！」

「任せてです！　猛る炎よ…ファイラ！」

コゼットは、一気にパスに近づく。その頭上を炎の固まりがいくつも飛ぶ。

「あら不思議。　無謀にも突っ込んでくるわ…あはは！」

「……………」

パスは墮天使のレイピアを持ちながら笑っている。それを黙らすようにコゼットは全力で走り抜ける。

そして、パスは気づいた。　相手が既に攻撃をしようとしている事を。

「戦闘中に喋るなんて…素人ね。」

「ひっ!?!」

間一髪で体を仰け反らしたパスは、正に紙一重の所で『刀本体』の攻撃をかわすが…

「な・なんで…頬が…」

パスの頬がパツクリ切り裂かれていた。何故なら、松下と戦った時と同じようにカリィの忍者刀は『射程距離』が少し伸びる。

「あなたは戦おうとする意志が感じられない。ただ遊びに来て
る、またはおふざけで貴女は来たの？」

コゼットはそう言うと、パスの腹に忍者刀を突き刺した。そこか
ら血がにじみ出、次第に出血量が多くなっている。

「あ…ああ…」

パスは次第に襲う苦痛を避けるように気絶した。

「パス！ この…氷の槍！ アイスロッド！」

プリミルはコゼットの方を向き、呪文詠唱する。この間一秒に満た
ない。

「！！ ちい！」

コゼットはパスに刺した刀を抜いたが、なにせいきなりの横槍なの
で、いささか対応するのが遅すぎた。

「う…うう…」

「姉様！」

氷の槍はコゼットのわき腹を貫き、その激痛に膝をつく。そんな
コゼットに駆け寄ろうと走り出したい衝動に駆られるフェイルだっ
たが—なんとか押し留めた。

（ここで駆け寄ったら後で姉様に叱られる。だから！）

フェイルはプリミルの方を向き――

（私は貴女を倒す！）

――フェイル side――

フェイルはプリミルの方を向き、呪文詠唱を始める。

「私はここに立つわ：姉様の為に。みんなの為に。」

瞬間、フェイルは電撃を迸らせた。その電撃は正に光のスピードでプリミルに迫り、直撃させた。しかし、惜しい事にプリミルは既に耐魔法の呪文を展開しており、ダメージは薄い。

「矢島の為：堕ちなさい。」

「この：モンスター乳が」

「誰がモンスター乳よ！ファイラ！サンダラ！」

言い争いしてる間にプリミルは攻撃を仕掛け、フェイルはサンダラは避けられたのだが、ファイラが命中し、かなりの衝撃を被った。

「くううう：ウォータ」

フェイルはなんとかまとわりついた炎をウォータで消す。しかし、かなりのダメージだ。火傷もした。魔法耐久力が低かったら今頃骨であろう。

その中でフェイルは2つの魔法を完成させる。

「ハアア！」

まず一つ。エナジーである。

この魔法は超上級の魔法であるが故にかなりの魔力を必要とする。

エナジ―を手に入め、フェイルはふらつく体を強引に動かし真後ろに飛ぶ。そして――

「行け！ エナジ―！――」

真っ赤に染まるその球体は超高速でプリミルに迫り、プリミルを『避けた』

「当たらなきゃどうという事は……な！？――」

エナジ―はプリミルの『真後ろ』に着弾、破裂し、込められた魔力が次々に爆発し、プリミルはフェイルが『下がる前』に立っていた場所に飛ばされてしまった。

「う……この……」

「甘いわ！ この程度で終わらない！ 展開！」

2つ目の魔法。罠。

爆風で飛ばされる場所に罠を仕掛け、逃げる隙を与えない。

この罠は相手を捕縛する罠である。

何処からともなく網がプリミルを捕縛した。

「あなたの負け……です。」

「う……そのようね……」

プリミルは捕縛されながら気絶し、フェイルもその場にぶっ倒れる。

「頑張ってくださいね…… 松下さん……伊藤さん……」

直後、気絶した。

END↓

次回 魔法大会編―？ This One's for you.

大会編―？ **L o o k s L i k e W e M a d e i t.** (後書き)

うーん…あまり戦闘は得意ではない…

頑張る

大会編―? This One's for You.

恋の灯は時として友情の灰を残す

アンリ・ド・レニエ

―矢島side―

「パス！プリミル！クソ！」

矢島は指をくわえて二人の闘いを見続ける事しか出来なかったからだ。

何故なら、向こうに立っているのは敵である『AWAKEN』隊長、アルスが攻撃もせず、かといってこちらがプリミル達を助けに行こうとすると攻撃をするのは明らかであり、更にこちらが動けない程のプレッシャーをかけている為である。

「この人達を倒すしかない…」

「分かってる！でも…」

「焦らないで。すぐ倒せる。」

そんな苛立ちを見かねたカリィは矢島を励ましながらも叱責する。と、『AWAKEN』の隊長、アルスが行動を取った―

―松下side―

「久しぶりだな…矢島…」

松下はそう言うと、矢島の方へジリジリ進み始めた。

「クッククク…本当に久しぶりだ。何ヶ月ぶりか…矢島？」

「え…？　なんで俺の名を…？」

「数ヶ月で友を忘れるのか…これでも…？」

松下は指をパチンと鳴らし、後ろの人物に指示をおくる。その人物は装備していたサングラスを外す。

「あんたは…」

「伊藤！！」

カリィは目を見開く。その瞳にはただ一人、伊藤が写っていた。

「久しぶりだね…カリィ」

「伊藤！　会いたかった！」

カリィは走り出し、それを松下に政宗で止められる。

「あなたは関係ない…邪魔」

「言ってくるねえ。お前は戦場で敵に抱きつく気か？」

「…あなたには関係ない。下がって。」

「そうには行かない。それより進んだら私は貴様を斬る。」

松下は長い政宗をカリィの首元のそばに突きつけ、下がる様忠告する。

「政宗を下ろしてくれ。カリィは任せろ。リタイアするように説得する。」

「しかし…戦場で説得か…いや、任せよう。」
「ああ。すまん。」

松下は政宗を下ろし、矢島の方を向きなおす。

「さて…やるか。」

「あんたは一体…誰なんだ!？」

「そろそろ気付けよ…」

そう呆れながら松下は政宗を構え、矢島にこう語る。

「戦って思い出しな…」と。

―カリィVS伊藤―

「ねえ伊藤? なぜあなたは私の前から消えたの?」

「……………」

「なんで!?!? ねえ…なんでよ!?!」

カリィは泣いていた。見る者を吸い込み、魅力するような瞳に涙が貯まっている。その瞳は悲しみに捕らわれていた。

「……………」

「私はあなたが去った後、どれだけ泣いたか…わかって…いるの? ねえ…答えてよ…」

カリィは今どうしようもない怒りを感じていた。かつての初恋の相手に。そして目の前にいる男に。

「俺は…この世界の人間じゃない。」

「だから!?! だから何ッ? あなたはその理由で愛を裏切るの! ? ねえ! 答えて! 」

「俺は戦わなくちゃならない。 多分そのために俺はここに立っている。」

伊藤は学院にいるとき、常々考えていた。 俺はなぜ召喚されたんだ、と。 それ故に松下に学院を出ることを伝え、旅立った。

「じゃあなぜ…私に声をかけなかったの…」

「好きな人が傷付くのは見たくない。」

伊藤は淡々と答える。 例え傷付けるとしても、こうしか出来ないから。

「もう…あなたとは終わり…。 ここではあなたは敵。 全力で始末する。」

カリィは涙を拭き、ナイフを構える。

「体が重いと足跡も深くなる。 恋心も強いと傷が深い…か。 その通りだな。」

伊藤も村正を構え、相手を待つ。

「あなたとは…出逢わなければ良かった…。 そうだったらこんなに涙なんか…出ないのに…」

拭えども拭えども涙が溢れていく。 もうあの日々は戻らない。 毎日が宝石だった、あの頃に。

「もう後悔しない。」

そう呟き、カリィは走り出す。

目標は伊藤ただ一人。

後悔はしない。 逃げもしない。 戦う。 私は自分自身と決着をつけるッ！

「く…速い…」

戦いは今伊藤が劣勢の状態である。 カリィはいまヘイストを自分にかけ、速さで翻弄しつつ攻撃を繰り返している。 既に体のあちこちに傷がある。

「速いな…これはヤバイ…かなりヤバイ…」

一応視認は出来るが、なにせ速い。 目を離したら居なくなっている。

「俺はどうする…？」

伊藤は考える。 なぜ説得出来なかった？ いや、説得すら出来なかった。 カリィは傷付けたくない。 既に関係途切れているが傷付けたくはない。 ならば…

「なら…風を感じよう。 視覚に頼るから見失う。 この闘い、目

は必要ない。」

伊藤はゆっくりと目を閉じた。そして体内の魔力を空気へと乗せ、風―カリイを体で感じる。つまりはレーダーを空間で作る。

「そんな事で私を…探せるか！」

カリイはその意味を吐き捨て、攻撃を刺すべくナイフを投げる。

「命中させる―」

ナイフは完璧に首に刺さるコースを通る。慈悲はない。ただ当てる。

「―！！」

しかし―伊藤は軽く避けた。

それは、伊藤は既にレーダーで飛んでくるナイフ、及びカリイの場所を特定していたから。そして目を開き、カリイに向かって瞬間移動（そうしか見えない）した。

「……………」

「…え？……………」

そして、伊藤は手刀を繰り出し、カリイを気絶させた。

「…なあ松下…取り戻せなかったよ…カリイを…」

伊藤はそう呟き、カリイを抱き締めた。

そして、泣いた。

END↓

大会編―? Remember the time.

私は少し歴史を学んだ。

それで知ったのだが、人間の社会には思想の潮流が二つあるんだ。生命以上の価値が存在する、という説と生命に勝るものはない、という説とだ。

人は戦いを始めるとき前者を口実にし、戦いをやめるとき後者を理由にする。

それを何百年、何千年も続けて来た……

田中芳樹

―今、カリィ達が横で戦っている。

そして、親友同士の争いが始まる―

―カリィ達が闘いだしてまだ30秒もたっていない。しかし、新たな闘いはすぐに戦いは始まるだろう。矢島との因縁の闘いの幕開けである。

「…行くぞッ」

松下は正宗をセフィ○スの如く構え、矢島に向かって走り出し、切りかかった。

「無駄無駄ア!」「くッ…」

矢島はエクスカリバーで松下の正宗をなんとか受け止め、鏖迫り合

いになった。

しかし、鏢迫り合いを早急に断ち切り、松下は後ろに下がった。

「矢島…やはり反応が鈍いじゃないか？」

「あんたは一体誰なんだよ！？　なんで俺を知っているんだ！」

矢島はそう言うのと、エクスカリバーを構え、走る。

「…無駄だな。」

「URYYYYAAAA！」

※『うりー』は矢島の声です。

松下は切りかかってきた矢島の剣筋を読み、左にスツとかわすと矢島の鎧ごと腹を切った。

「フン！　やはり…」

松下が予想した通り、松下が切った矢島の傷がだんだんと塞がれ、ついには完治した。

「残念だったね…物理は効かないさ。」

そう得意気に話す矢島を尻目に、松下はクッククク…とサディステイックに小さく笑うと、後に声高らかに笑い始めた。

「H A H A H A！　こりゃ…面白いなあ？　矢島あ」

「…？　なにがおかしいんだい？」

「そりゃ、お前の自信にだよ。フ…フフ…笑いが止まらん。」

意味深に笑う松下はいきなり腰を落とし、足に力を入れ、全力で矢島の方へダッシュした。それを視認した矢島も松下に斬り込もう

とエクスカリバーを構える。

そしてあつという間に接近した松下は正宗をなぜか装備しておらず、矢島のエクスカリバーを持っている手と鎧の首元を掴み、「無駄ア！」という掛け声と共に足を引っ掛け、俯せに倒した。

「う…いきなり何を…」

「直に分かる」

松下は矢島が背中に背負っていたもの―エクスカリバーの鞘を奪った。

「なあ？ コイツをあの男のところへ送ってみたら面白くないか？」

まだサディスティックな笑みを浮かべ、矢島を足で押さえつけながら完璧な悪役顔になった松下は唐突にそう言い始めた。

「…グ…あの…男？」

「つまり…次元の狭間だよ…クックック…『デジョン』…！」

松下はデジョンを唱え、暗黒空間を作り出しそこに鞘を投げ捨てた。

「…！！ あんた…何を…」

松下はその質問には答えず、かわりに足を退かした。

「立て。 矢島。」

矢島はよろ…と立ち上がり、エクスカリバーを構えた。

「ひとつ質問だ。…本当に俺がわからないのか？」

矢島は頷く。矢島にとって、何故この男が自分を知っているのか、何故馴れ馴れしく接するのか、冒頭からサッパリ分からなかった。

「え？ マジで？ 何年間も共に学んだ仲なのに？」

え？ 学んだ仲？ この世界に来てからだいぶ経つが学校であんな奴は二人しか知らない。

「…冒頭から悪役なんてやるんじゃないかったな…。まあいい。どうやらマジで分からねえみたいだからな…仕方ない」

松下は自分のサングラスを外し…そして、矢島はその姿に驚く。

「久しぶりだな…矢島…」

※以下は全てそれぞれの思っている事である。

―矢島 side―

思い出した…。まさか…まさかあいつが…ここにいるなんて…。思い返せば、召喚されたときに松下の正宗を俺は見た…。

俺は伊藤しか頭になかった…。だから伊藤と一緒にいたのか。

この世界に来たときは鮮明に思い出せるが…学院に通ってからサッパリ松下を見かけていない。

兎も角にも、今は…

―松下 side―

え？ なんてそんなに驚くの？ 伊藤がいたら俺もいる事を分から

なかったのか…？ 酷くね？
…まあいい。兎も角、今は…

回想終了

「思い出した…あんた松下だな？」

「やっとか。」

「何故ここにいるんだ？ 何故大会に…？」

「質問は一つずつしろ。第一俺は貴様に答える必要はない。今は大会試合の最中だ…。」

松下は再び正宗を構えようと、矢島を挑発するように指を招いた。
矢島はその挑発に乗るようにエクスカリバーを構え、遂に第2幕が開始する。

END↓

大会編―? Remember the time. (後書き)

今回、クソつまらないと予想されます。
しかも短い。

だからここにお詫びを申し上げます。

早く大会編を終わらせてコメディ路線に戻したい…

ちなみに今回はMichael・Jacksonより、Remember the time.

戦闘描写下手ですんません。 高校生なんで時間が…

大会編―？ The World's Enemy.

あなたは弱さから逃げることはできない。時には最後まで戦わなければならぬし、死んでしまうこともある。

戦うなら、何故今でないのか、あなたは何処にいるのか？

ロバート・ルイス・ステイヴンソン

「どうした？ 臆したか？」

松下が挑発をして、剣を構える。

矢島も同様にするが、動かない。

「…臆したか、と言われれば確かに臆しているかもしれない。だが、カリイやプリミル達、俺の仲間を傷つけられて、臆する訳にはいかないだろう…？」

「感情論か。」

「そうかもしれない。」

「バカ…お前は感情で動いているのか！？ 戦場では感情など戦況を変えられない…ただの不完全なシステムでしかない…」

松下は矢島を叱責する。 松下にとって、感情で動くなぞバカのすることだと思っているからだ。

「感情で戦場を生きれるか、答えはNOだ。感情で動いたら、その他の人まで巻き込み殺してしまう。」

「確かにそうだが…」

「戦闘中は戦闘に集中しなければならぬ。死にたくなければ…な。」

さあ、話はここまでだ。　続きは剣で語ろうじゃないか…」

松下は正宗をぎゅっと握りしめ、地面を蹴る。

「…八刀一閃ッ！」

瞬時に八回攻撃の技、八刀一閃を繰り出し、更に間合いを詰めこむ。

「くッ！」

「……………」

八回攻撃の内七回をなんとか威力をそらすことには成功したが、最期の一回を流しきれずに腕を斬られた。　無論、矢島はすぐ治るだろうと思う、再びエクスカリバーを握り締めたのだが…

「あれ…傷が塞がらない？　どうして…」

「やはり…か。」

「なに？」

「矢島、あんたの剣筋がゆるゆるだぞ？　さしずめ、喰らってもダメージ回復が自動的に行われる事からの自信からだろうがな…」

「なんのことだ？　何を言っているんだ？　答えろ　松下！」

矢島が叫ぶ。　いま矢島は意味が分からなかった。　何故リジェネが発動しないのか、それについて松下が知っているようだった。

「…そんな事より、ケアルかなんかで傷を治したらいいんじゃないか？　だが治ったと同時に貴様に八刀一閃を叩き込む。　さあ　立ちな！」

「クソッ　松下如きに…」

矢島はケアルをかけ、傷が完治する前にエクスカリバーを握った。
その判断は正しかったようだった。

「無駄だ。 八刀一閃ッ！」

「まだだ！ まだ殺られる訳には…！」

松下の一撃は重かった。更にそれを短時間に繰り返すので冗談じゃない殺傷力を持つ攻撃だ。さっきは腕で済んだが、モロに喰らうと、一撃の下で葬り去られる事は明白だった。故に当たる訳にはいかなかった。

しかも何故カリジエネが効かない事もあり、絶対に当たるわけにはいかない。

ケアル等で治す事も出来るが、その余裕を松下が与えてくれる筈は松下の性格を考えても有り得なかった。

「どうした？ 保険がないと怖いのか？ クックック…」

もはや、松下がこの小説の主人公に似合わない程ドス黒く暗黒面に捕らわれている。その顔を見ると、正に主人公向きでは無い鋭い双眼が静かに光り、瞳の中には絶対的な悪が潜んでいる。

「状況が…ヤバイ！ どうか…」

「状況？ 状況がどうした？ 状況は俺が創る…！」

松下は更に近距離でファイガを唱え、矢島はそれをなんとか避ける。そして矢島はエクスカリバーを横に薙、何とか松下を引き剥がし、常々練習してきた技を繰り返す。

「これならッ！ 『桜ノ雨』ッ！」

矢島は体内の無尽蔵にあるエネルギータンクから引っ張るイメージを瞬時に作り出し、エクスカリバーにぶち込む。エクスカリバーが矢島と共振しているのを感じた時、姿勢を低く、剣を右手側に構え剣にある『爆発』を解き放つように振る。すると、その剣筋が白い光を伴い松下に迫り、腕から血が吹き出した。

「まだまだア！」

そうだ。まだまだ『爆発』が残っている。矢島は全てを解き放つように剣を振り、それを『爆発』が収まるまで振った。

桜ノ雨の名前の通り、攻撃とは思えない程の美しさの波が幾多の風の如く松下を斬りつけ、松下は鎧のあちこちを斬られ、守られていない部分にはザツクリとした傷跡を残していった。

もちろん、松下は幾多の風を斬りつけ、その攻撃を防いでいたがかなりのダメージを負っている。

「…痛いなあ…フフ…フハハ…」

松下は瞬時に傷を癒やす。無論戦闘に支障が出ない程度の応急的な処置だが、しないよりはマシであろう。

「この痛み！ この痛みこそ私が存在する証…なあ矢島？ 何故人間は存在すると思う？」

松下は自嘲しながら矢島に質問をする。

何故そうしたのかは分からない。ただ聞いてみたかった。

「…それは…わからない。」

矢島は俯いて少し考える。

このハーレムの良いところはどうでもいいことに真剣に考えてくれ

る。だが…

「だから…戦闘に集中しろって…言っただろ？」

いつの間にか接近した松下の正宗は…矢島の右肩を貫いていた。

正宗を上を持ち上げ、そのまま刺さったまま矢島も体が浮く。

「ぐ…は…」

「お前は弱さから逃げることはできない。時には最後まで戦わなければならぬし、死んでしまうこともある。戦うなら、何故今でないのか、お前は何処にいるのか？」

正宗から血がゆっくりと伝わり、松下の手に絡みつく。その血が地面に滴り落ち、小さな血溜まりが出来ていた。

「俺も、お前も、心に弱さを持つ。それは愛だったり…友だったりする時すらある…」

松下は矢島を貫いている正宗を更に矢島の体に侵入させ、次第に滴り落ちる血の量が増え続ける。

「この痛みを…永遠に忘れるな…。次に逢うとき、おそらく私はお前の敵だ。だから」

松下は正宗を左に振り、矢島を振り飛ばす。

「次は私を殺す気で来い。そうじゃなかったら私はお前を殺す。分かつ『ご主人様！ エリン様から緊急のお電話が来ております♪』…………え？」

最期の決めの言葉の最中にいきなり電話がかかってきた。 シリア
スな雰囲気ではっきり言う立場違いである。

「エリンだと？ 緊急…か。 よし、繋いでくれ。」

『かしこまりました♪ ご主人様』

一応繋いで貰う。 まあ権力者からなら仕方あるまい。

「矢島は…気絶してる…。」

矢島は疲れたのか気絶していた。

「はい、もしも『急いでこの国から脱出するわよ!!』…へ?」

かなり息が荒いようで、あっち側（エリン様）の急ぎであることは察する事は出来るが…。

『こっちでやっていた極秘会談が失敗したのよ。 いま学内の決闘場の前にいるから速く来なさい！ 急いで!! ガチャ…』

………仕方ない。

「審判！ 我々『A W A K E N』はこの大会から棄権する。 勝者はこいつらにしておいてくれ。」

『え？ でも』

「…いいから。」

周りの観客はどよめき、口々に言い合う。

「おい、コゼット…フェイル…ダメだこりゃ…伊藤！ あんたはフェイルを担いでくれ。 脱出する。」

「……………」

伊藤は目を赤くしていたが涙はない。無言でフェイルを担ぐと退場門へ出て行った。

「…また逢おう。遙かなる時の中で…矢島よ。」

松下は正宗を異空間に収納し、コゼットを肩に担いで伊藤の後を追った。

―決闘場前―

そこには早馬を繋いだ馬車があり、エリンが『急いで!!』と言っていたので、なかなか重…軽いコゼットを馬車に担ぎ込んだ。宿に置いていた荷物もちゃんとある。

「どういう事だ？ 何故脱出する必要があるんだ？」

「後で話すわよ。今はこの場を離れるのが先。」

あまり女性が得意でない松下にも、エリンの焦ったような態度に気づき、何かしらあったのだと思った。

速く出すように従者に命令を出すと、かなり速いスピードで学院を離れて行った。

END↓

Now I'm Here.

It is as hard to see one's self
as to look backwards without
turning around

振り返らずに後ろを見ると同じくらい、自分自身を見つめることは困難だ。

Henry David Thoreau

―エンプラス国境付近―

「んで？ 理由を聞かせて頂こうか。」

「まあ…そうね、いいわ。話してあげる。」

急ぎ学院を脱出したあと、国境付近に近付いていた時、痺れを切らした松下はエリンに理由を聞いたのだした。

「実は試合の途中、あの『ツンツン』王女と城へ向かったわけよ…」

「ツンツン…ああ、エンプラスの王女の…フェイン…だっけか？」

「ええ、フェイン・エクセル・エンプラス。ただのスタイルがよくて愛想振り撒いてる小娘よ…！」

エリンは苦虫を噛み碎いて、さらにゴーヤを一カジリしたような苦しい顔をした。しかし、意外と可愛かったような…

「ああん!？」

すいません…

「全くもう…話を戻しますわ。 城に行った後、直ぐに会談を始め、我々クルド側は『ある物』の返還を求めたの。」

「なにそれ。」

「前にも言ったと思うけど…アトランティス遺跡から見つかった『黒くてゴツくて四本足でデカくて金属製で『オメガ』って書いてある物体』よ。 その返還を求めたのよ。」

…ん？ なんか引かかるな…。 まあ、いいか。

「そりゃまたどうして？」

「それは…その『オメガ』ってヤツが大量破壊兵器の可能性が出てきたの。 クルド側は当初分からなかったから技術が発展してるエンプラスへ貸し出したの。 ところが、エンプラスはオメガについて何か知っていたみたいで、快く了解したの。」

「へえ。 97へえ。」

「97へえ？」

「いえ、サーセン。」

「…で、後になってアトランティス遺跡から『オメガ解体親書』なるものがいくつか出てきて、それで大量破壊兵器ということが記載されていたの。」

「あーつまり、エンプラス側も解体親書を所持していると？」

「Exactly. だから私が直々に出向いて返還を求めた訳よ。 第一アトランティス遺跡は私達の国の物なのに…」

エリンはそう言うと言を落とし、側で寝ていたコゼットの頬をつねり始めた。

「それなのに何よ！　あの女は！　苛つくわ〜」

ぐにぐに

「それに何？　あの胸！　分ければ良いじゃない！　あんなにデカいなら邪魔だろうに！！」

ぐにいぐにい

「何よそれで美人？　男と付き合ったことが無くてまだ処女？　知るかッ！」

ぐにやぐにや

おい、そろそろ止めれ。　起きるぞ。

「処女を自慢してどーする！　私だって処女だ！　あームカつく。」

ぐにやぐにやぐにぐに

おい、多分そいつ起きてるぞ。　相手が王女だから寝てる振りしてんだろうがとぼっちり受けるの俺なんだぜ！

「セックスなんてサルでもしてるわ！　エロ漫画を読んでこそ人間よ！」

ぐにぐにイー

王女が処女やらセックスやらエロ漫画とか言うんじゃない！　威厳が台無しだ！　てかコゼットの頬を抓るのは止めろ！

「はぁ…馬鹿らしいわ…」

ぐにイーぐにイー

馬鹿らしいのはアンタだよ。アンタエロ漫画なんて読んでんのか？
てかコゼットの頬が赤くなってるぞ！ 間違いなくコゼット起きて
いるから！

「ああ、松下？ ごめんなさい。話が逸れたわね。それで結局会
談は破綻して、命からがら城から逃げ出して今に至るわ。」
コゼットは泣いているぞ。

「あら…何故コゼットは泣いているの？」

「いいえ…ぐすっ…何でもありません…ぐすっ」

すまぬ。この自分が真の犯人と判らない真の邪悪が犯人だ。

「うん…松下にいじめられたり夜這いされたり無理やり〇〇〇をさ
れたりしたら言うのよ？」

「はい…ぐすっ」

いやいや、苛められたり夜這い（未遂）されたりしたのは俺だぜ？

第一〇〇〇は何だ！

「読者が適当に脳内補完してくれるわよ。」

ダメだろそれは…。どうせピーでピーなピーの言葉を補完するん
だ！

「いいじゃない。やっとシリアスから抜けたんだから。」

それより何で俺はナレーションでしか意志表現出来ないんだ!?

「」をつける!

「却下。 埒が空かないから進むわ…」

―エンプラスとクルドの国境付近―

やっとの事で国境付近に着いた松下達は、税関のチェックを通り、関所を通過しようとした時、後ろから「お待ちください!」という男の声が聞こえた。

「何ですか? 我々は政府関係者、速く戻らねばなりませんので手短に。」

エリンがそう受け答えをし、男はスタスタと馬車に近づいた。

「失礼。 お命頂戴致しま…」

男はそれ以上言葉を発せなかった。なぜなら…

「助かったわ。 感謝するわ。」

「どうってことはない。無駄無駄…」

松下が後ろから胴体から上を斬ったからだ。 無論、エリンは目を伏せている。

「あーこの残骸を掃除頼みます。」

『うおいつさあー!』

掃除を国境警備隊に任せると、すぐに警備隊はシートを持ってきて被せた。それからどこかへ持っていった。

松下はそれを確認してから馬車に乗り込むと、自分の指定席に移動する。要人警護なのでエリンの横だ。

エリンのスタイル（胸等）はフェイン・エクセル…よりは下だがそれでもかなり美人である。しかもツインテール。

「なんか失礼な事をまた言った？」

「いえ…」

「そう。」

ええい！ クルドの姫様のニュータイプ能力は化け物か!!

「ところで、試合はどうなったの？ まだ試合やってたんじゃないの？」

エリンはそんなことを知らずに召集したのか？ バカか!!

「……………あんたのせいで準決勝をドタキャンしてきたんだよ！ 試合途中でだ!! 恥ずかったぞ！」

「あらごめんなさい。 ふふふ…」

エリンは半ばしてやったりな顔を一瞬見せつけ、松下を愚弄する。が、これでも王女様なので強く言えずにそれからずっと弄られ続けた。 クルドに着くまで。

―クルド…首都リント―

あれから数時間、馬車でやっと首都まで着いてやった。エリンは既に夢の中に旅立っている。俺も寝たいんだが…

「コゼット、あとの位で王宮だい？」

今起きているコゼットに聞いてみたが、まだ頬が少し赤い。寝るまで抓られたからだ。

「…30分程度だ。…どうして私のカラダを舐め回すように見るんだ？」

「あ、いや、何故コゼットの胸が小さいんだろうな…って考え…てませんから、その刀をおしまいなさい。ね？ 危ないから、ね？」

「隊長、あなたは胸がある女性とあまり無い女性と、どちらが好き？」

「そりゃもちろん私は『貧乳派』だ。デカイ胸にはもちろん興味以上のものがあるが、人生においてはそうも言ってられない。」

「………」

「デカイ胸なぞ、男を惹きつける道具にしかない。それよりむしろ貧乳の人の別の内面を捉えれば、デカイ奴より数段は上だろう。もちろんデカイ人も中身が良い人も沢山いる。」

「…で？」

「第一デカイ胸なんて年老いたら垂れ下がる一方だ。その点に対して貧乳は素晴らしい。小さければ垂れ下がるなんて事は殆ど無いからな。」

周囲は確実に退いている。伊藤（起きてた）は頷きながらも退いている。コゼットは『うわ…変態…』という目で松下を見ている。他二名は寝ている。

「男性は、母親からの授乳によって『胸』に強烈な性的イメージを抱えている。しかし、そんな事はどうでもいい。何故なら30歳からはセックスが日常的になり、男性はお尻の方へ強く惹かれるんだ。コレは心理的にみてもくぼあ…」

コゼットは顔を真っ赤にしながら松下をぶん殴って気絶させた。

「ねえ伊藤？ この変態どうしようか？」

「…道端にでも捨てとけ。」

コゼットはそのとおりに『隊長、バイバーイ』と投げ捨てた。ドサリと落とされ、気絶からいざ復帰すると松下の目に写ったのは夕陽に消えていく馬車だけだった。

「…どうすりゃいいんだよ…俺…て、なんで落とされてるんだ？」

その夕陽の中でポツリと呟いた。そして、結局王宮に着いたのがそれより二時間後だったそうだ。

Scream.

失恋すると、5年後に素晴らしい事が起こります

エレベーターに乗ったら、ハゲて太ったあの人がいて、葉巻をくゆらせながら

「ずいぶん長いこと会わなかったね」なんて言ったりするの

フィリス・バテレ

―クルド城 時間帯…松下が馬車から突き落とされて二時間後―

クルド城の門前に松下が立っている。

そして、松下はこう言っている。

「ゴラァ！ 人をゴミみたいに馬車から捨てた人間を出しやがれえ
！」

はたからみて、何か大きな箱を持っている。 中には何か小さな刃物：ナイフのようなものがジャラジャラ入っているようだ。

「てゆーか俺入ればいいじゃん！ 仮にも『AWAKEN』隊長なんだからな！ 初めに気付けば良かった…」

松下は門をくぐり抜けて屋敷の中に入り、そのまま『AWAKEN』の本拠地がある部屋に移動する。 実は『AWAKEN』が発足した際、エリンが用意した部屋である。 ちなみに松下は行った事がない。

「えっと…左…？ いや右だ。 …で、曲がったら…？ こっちか、なるほど。 …って、迷うんですが。」

そりゃそうである。 仮にも王宮、デカくない訳がない。 部屋が呆れる程にあるのだ。 かの王宮では部屋が500を越えている所もある。 それほど此処は重要で部屋が必要…というわけではあまりない。 むしろ掃除が大変だ。 そうこうしながらも、何とか『AWAKEN』と書かれた部屋を捜し出すことに成功、ほっとしている。

「えっと、こんにちは…って、なんだ、コゼットだけか。」

そこにおりましたのは私を野道に廃棄処分してくれたコゼット嬢でした。

ちなみに本を窓辺で読んでいた。

「なんだ？ その箱は。」

コゼット嬢は読んでいた本にしおりを挟むといきなり立ち上がり、そしてスタスタと近寄ってきてダンボールの中を覗き、さらに『意味が分からない』という顔をした。

「何故にナイフを？」

「いやーね、廃棄処分された後近くにあった武器屋に寄ったんだ。 そしたら、投げナイフの特売でさあ、500本ほど買っちゃまったのさ」

「バカじゃないのか？」

「私はディ○になりたい…！」

「はあ…」

コゼットは呆れたように溜め息をつくど、再び窓辺に移動し、本のしおりを綴じ込んだ場所を開けると静かに読み始めた。

まあしかしなんだ、ここは物置か？ 床にゴミは無いが机の上にやたらと書類が積まれている。邪魔だ。

「でも、使うかもしれないから処分出来ないんだよなあ…」

書類は何時使われるか分からない。 一個人が処分していい権限なんて無いのだ。

「ゴミはゴミ箱へ…っと、片付けられる分は一応片付けた…と…」

松下はゴミ箱を部屋の端に移動させ、ついでに壁にダーツとかにかつかう100点とか書いてある丸印的を取り付けた。

そして、ダンボールの中からナイフを徐に取り出すと、的から約五メートルほど離れた。

「手袋を嵌めて…」

「何をする気なんだ？」

「曲芸。」

松下はコゼットにそう答えると、ナイフの柄の方を掴んで的に向かって投げた。

カッーン

ナイフは的に刺さらずに地面に落ちた。

「あれ：刺さらん！」

普通のハーレム最強系の小説ならば、簡単に刺さって女子からキャーキャー言われるだろうが、生憎、この小説はそんなのではない。いくらレベルが50だからって、まだまだ技術は素人。ナイフは力任せに投げてても刺さるわけがない。

「うーん：ハンドルグリップならいけるかなって思ったんだが…」

ハンドルグリップとは、ナイフの柄の部分を手で握る方法だ。怪我はしにくい方だ。

「やっぱりブレードグリップをすべきか：絶対怪我しますな。」

ブレードグリップは刃の方を握^{ブレード}んで投げる方法だ。ちなみにディ○様はこのブレードグリップ法だ。

松下は落ちたナイフを拾い上げ、いろいろ持ち方を試しながら、「URYYYYY!!!」と奇声を出しながら投げてみた。

カッーン：カラカラ：

落ちた。

「ああ、そうか、ブレードが的に当たってないのか。」
「ちょっと！」

コゼットがこちらを睨んでいる。何か彼女を怒らせる事をしただろうか？

「五月蠅い。やるなら外でやってくれない？」

「なんかキレてません？」

「キレてません。隊長は速く出てけ。本が読めない！」

「はいはいわかりましたって！ だからそんな目つきで見ないでくれえ……」

松下はダンボールから10本程ひつつかんでコゼットの『なぜか』怒った目から逃げ出すように部屋から退散した。

――中庭――

迷いながらも外に出ることには成功した。あとで地図を作っておこう。

外では既に日は沈み、暗黒が辺りを包んでいる。今の季節は、元の世界で言うところと秋から冬にかけての中間辺りだろうか。

特に寒くは無い。そういう気候だろうか。空には点々と星が浮かび、月の光を隠す雲一つ無く、そして一瞬の冷気が頬を撫でた。

「さて、夜とはいえ宮殿の光でなかなか良く見える。さて、どこで練習しようか」

数十分歩いてもなかなか良い場所が無い。大体宮殿内でナイフ投げの練習をする方がおかしい。だが松下は現代社会人の元学生。

この世界の常識が全く気にならない……わけでもないが、いかなせんこの世界の常識が分からない。

「独身者とは妻を見つけないことに成功した男である……なんて呟いたり。」

ちなみにこの言葉はアンドレ・プレヴォーだ。

「しかし：いい夜だ。星がよく見える。元の世界じゃ明るすぎて星が見え辛かったりする：。」

松下は宮殿の敷地内を散歩していると、庭を見つけた。池もなかなか大きい。松下はその池の縁に腰を下ろし、ゆっくり星空を見上げるために寝っ転がる。

「一体どれぐらいか：あの女神に召喚されて今に致まで：。急激に物事が進んだが、これからはゆっくりしていくべきか。」
この世界のどこかにあの忌々しい女神はいるのだろうか？ どうせR2000でも読んでいるのだろうか、あの能天気な女神は。一回何かガツンと言ってみたいものだ。

「ふん、柄にもなく過去を思い出してしまったなあ：ま、いいか。」
夜空の向こうには何があるのだろうか、いずれ知りたいものだ――と思う。

「過去って、後から思い出す度に美化されるものだ。そうだろ？ 隊長。」

いつの間にいたのだろう、松下が後ろを振り向くとコゼットが立っていた。

「隣、いいか？」

「構わない。ただし75センチ以上は近づくな。」

コゼットは75センチという距離に？を浮かべながら松下の隣に体操座りで座った。

「で、何故此処に？」

「いや、隊長を追い出したあと、私もナイフ投げに挑戦したんだけど、上手くいなくて、それで隊長と練習しようと思って…とか」

コゼットが言うには、今日が女子の1ヶ月に一回のあの日だそうで、イライラしていたそうだ。だから松下に冷たく接したらしい。男子の松下にはイマイチピンと来ないが、その日は女子には近づいてはならないということを知っている。女の子って厄介だ。

「そうだ、お前さんの夢は何だい？」

松下は唐突に切り出した。コゼットはしばらく考え、こう答えた。

「妹が結婚するまで守って、そして…なんだろう？」

「結婚ね…。俺には未来永劫縁もゆかりもない事だな。」

「そうね。その顔と性格じゃあね。」

「それを言わんでくれよ…」

暗黒の闇を照らしだす月(?)の光で周りはハッキリ見える程よく見える。その光は二人を照らす。75センチの間があるが。

「隊長の夢は？ どうせメイド服を女の子に着せたいとかでしょうけど。」

「まあそれもあるけどさあ…。俺の夢は…そうだな、『存在が変わるほどの夢を持つ』っていうのが当面の夢かな?」

「フフ：なにそれ？」

「まだ模索中、という事だ。　いずれ、そんな夢を見つけて見せるがな。　夢を見つけるまで捜してみるさ。　夢は逃げない。　逃げるのはいつも自分だからな。」

池から魚が泳ぐ音が聞こえ、周りの草からは虫の動く音や鳴き声がコーラスを歌っている。　それは鈴虫のような心地よい音を奏で、疲れた心を癒してくれる。　時たまガサガサっという音も聞こえる。　何かの動物だろうか？

「その…隊長は…」

「ん？」

「好きなタイプとか…は？」

「タイプですか…？　そうだな…キッチリ意見が言えて、お淑やかで、美人なら文句は無い。　まあ恋愛感情を忘れてから八年位経つからね。　人を好きになる努力はしてるけど…」

「けど？」

「男なら大丈夫だけど、どうやっても女は好きになれない。　女性に対して一種の恐怖感情を抱いている…と言えいいのかな？」

「でも、私とこうやって話してるじゃない？　大丈夫よ。」

「だからこそ75センチ空けてるんだよ。　個人的に女性に触れることには問題は無いけど、同時に恐怖感が押し寄せてくる時がある。」

だから女性が苦手なんだ。嫌いじゃ無い。」

何故そんな事になったのかは分からない。松下は何時も女性と距離を置いて生活していた。それはこの世界でも変わらない。

「そう…ごめん。嫌な思いさせちゃってさ…」

コゼットはしまった！というような表情を浮かべながら謝罪した。

このような事を聞いてしまったのは間違いだったと、コゼットは一瞬思った。しかし

「別にいい。」

それは、『自分はこれでいい』という、半ば諦めているような口調で返されたのだった。

「50年経てば、自分の愚かさに気づく。それより女性を愛せず
に一生を終えた方がまだマシだ。」

松下は自分を皮肉った。女性に近付けないのであれば、いつそ愛
しさえしなければいい。それが松下の答えだった。

「それでいいの？」

「何が言いたい？」

コゼットは気づいていた。いや、松下に関わった者みんなが既に
理解し、理解していなかったことを。

「みんなあなたを恐れている。でも、みんなその事に気づいて無

い。だからあなたは人を避けるようになった。」

「さあ…？ 何を言っているか理解出来ないな。」

松下は答えをはぐらかし、それから黙り込んでしまった。コゼットは夜空を見上げながらただ何も考えずに星を見上げていた。

―伊藤・フェイルside―

「そういえば松下さんは帰って来ましたか？」

今、二人は本部の隣の休憩室にいる。フェイルはお菓子をつまみながらお茶を飲み、伊藤は数学の問題を解いていた。

「松下は…帰って来たんじゃないか？二時間経つんだし。」

伊藤は解いた問題の答えに○をつけながらフェイルの問いに答えた。

「あの人はただじゃ起きないって言うか…なんか怖い所もあるって言うか…」

「うーん、確かにアイツは戦闘になるとメッチャ顔が怖いがねえ…友人としてはいい奴だぞ。」

「ああ、わかりますう。でも、女の勘（？）だと、あの人は危険だって告げてるんですよ？」

松下に初めてあった時、実はフェイルの中で危険信号が鳴り響いていた。『コイツは乙女の敵』だと。

「そこんところは大丈夫だろ。アイツは女性にあまり近付けないんだ。今日だって試合から逃走するとき、コゼット抱えていたんだが凄いつらそうな顔をしてた。」

伊藤が見ていたんだが、コゼットを抱えて走る松下は、冷や汗がかなり出ていたそうで、凄いきつかったらしい。しかし敢えて表情に出さずに隠していた松下に伊藤は心の中で誉めていた。まあ後で発言を巡り、廃棄したのだが…まさかホントに廃棄するとは思わなかった。

「でもあの人、リベリアちゃんには普通に触ってますよね？ まさか…ロリータ・コンプレックス!？」

「…違うと信じてる。 まあペドフィリアよりはマシだろうけど…」

「『ペドヘリア?』」

フェイルは未知の単語を耳にし、結構興味を持ったらしいが、生憎発音を間違えている。

「ペドフィリアだ。 なんだよ『ペドヘリア』って!？ よく発音できたな… ペドフィリアってのは簡単に言くとロリコンよりタチの悪い奴で、思春期前の小さい児童を性的意識で見る人の事を言うんだ。」

伊藤はロリコンとペドフィリアの違いをこと細かく説明、身振り手振りで説明した。ちなみにフェイルはそんな伊藤を天然記念物を見るような憐れんだ目で見ていた。

（うわ…ちょっと引くですよ…。でも何か反応しなくちゃ悪いですよね…）

「へえ〜。そのペドフィリアは悪いことなんだ？」 「うーん…悪いことをしたら悪いだろうが、ひとそれぞれだからな。」

「そう…まあ話は変わるけどお姉ちゃんは何処？」

フェイルは今までの話をブチ割って、話を変えた。なんか興味を無くしたらしい。全く、最後まで話を聞けよ…と思っていたのは伊藤だ。

「コゼットなら…隣の本部じゃないか？ あのゴミゴミしたところで本を読んでもらうんだろ。きっと。」

フェイルはその事を聞くと、急いで飲みかけのお茶を飲みこんで立ち上がった。

「ここで二人でいるよりは三人で話す方が楽しいですわ。いきましよう？」

フェイルは伊藤の手を引っ張り『ちょっ！ まだ○（まる）を付けてない！』と言っている伊藤を無視してドアを開け、隣の部屋のドアの所に来た。

「あれ…なんか変な音がする…？」

カッーン…カッーンと、何かが壁に当たっているようでどうやら金属の音のようだ。

「何でしょうか？　これ…」

「とりあえず様子を見るか。」

二人はドアに張り付き、耳を澄ませた。だが、周りから見るとハッキリ言って奇妙そのもので、時折通るメイドさんが失笑していたのは事実だ。

『…たら…い…』

「たらい？…タライ…」

「^{たらい}盥^{たらい}だろ？」

『当たらない…』

「当たらないでしたね。　って何が？」

『あゝもゝ！！　どうしようも無くイライラする…。　しかも当たらないし！　なによこのナイフ安物じゃない？』

「ナイフを投げているのかな？　かな？」

「誰が持ち込んだんだ？　そんなものを。」

ちなみに、松下がセールで買ったので実質的に安い。

『はあ：今日荒れてるのよねえ：。 仕方ない、松下から投げ方を教えて貰おうかしら：謝るついでに。』

カツカツという音が近付いてくる。 コレでは隠れてコソコソやっていた事が見事にバレてしまう、そう考えた二人は一旦移動しコゼットが扉を開けて出てくる前に隠れることにした。

「早く隠れなきゃ！ ん：これだわ！」

フェイルは偶然そこらに放置されていたある二つの物を凝視し、閃いた。

「マジにそれに隠れるのか!？」

「勿論よ！ 時間がないわ!! 早く」

「ええい仕方ない！」

二人は『ある物』を被り、やり過ごすことに決め、早急に隠れた。

『はあ：外かしら？ 全く：。』

コゼットはドアを開け、そう呟きながら近付いてくる。 あと3 m
：2 m：1 m：

「「……………」」

二人は全く動かず、喋りもしない。 そう、あたかもあの『蛇』の如く。

そして…

『は…はくちゅっ!』

「「…!!?」」

二人は一瞬どちらかがくしゃみをしたと思い、焦った。だが…『う…寒…』とコゼットが言って去っていったことに安堵した。「コゼットって、くしゃみはあなのか?」

「はあはあ…姉様…かわいい! (はあと)」

「追跡しないのか?」

「はあはあ…するわ!」

「拒否権と、この『ダンボール』を外していいかい?」

「D o o r D i e?」

「します。是非ともお供させてください!」

こうして、コゼットを追跡する潜入捜査が始まった。

—中庭—

(暗いですわね…)

(まあ夜だからな。 嗚呼、目が乾く…)

二人はコゼットを追い、ツインス〇ークとしてダンボールを被っていた。

その姿を見て笑ったメイド、執事は数知れず。

コゼットが裏門を開け、中庭に入った所を確認すると二人はサササつとその後についていく。無論、きっちり10mは空けながら。

『あら…あれは隊長…？』

コゼットは池の近くでのんびり空を見上げている少年を発見した。後ろの二人も発見していた。

（このあとお姉ちゃんは何するんでしょう？）

（神のみぞ知ることだ。）

（あ！ お姉ちゃんゆっくり歩き出したわ！）

（よし、二人の近くの茂みに隠れるぞ！）

二人は松下とコゼットが一望出来、なおかつ向こうから見えない茂みを見つけ、その後ろに隠れた。勿論、ダンボールは外してある。

『過去って、後から思い出す度に美化されるものだ。そうだろう？
隊長。』

（……………？）

コゼットは松下の隣（75センチ）に体操座りをし、松下は頭に『

？』を浮かべていた。二人はそれを観察していた。

『で、何故此处に？』

『いや、隊長を追い出したあと、私もナイフ投げに挑戦したんだけど、上手くいなくて、それで隊長と練習しようと思って…とか』

（…とかは要りません！ もっと自然に！）

（コゼットってツンデレ？）

二人は二人の奇妙な会話に耳を澄ませ、なかなか会話の歯車の合わない松下達にイライラを募らせていった。

（ああ、お姉ちゃん！ もうちょっと押して！）

（ええい！ キスしろ！ キスを！）

（女性が苦手？ だからなによ！）

（おい！ 松下ア！ そこはもうちょっとへたれろ！ なにが『別にいい。』だ。クールに決めるんじゃない！）

（松下さん、答えをはぐらかさないで下さい！ この小説の『もっとー』はモテない主人公の活躍なんですよ！ 自重してくださいよ！！）

（コゼットも黙り込むな！ 何かしゃべれよ）

二人はある意味での変態だ。

―松下side―

「はぁ…さあて、家に帰るか。じゃあな。」

コゼットは言葉の代わりに小さく手を振り、松下はそれを見るとサッサと去っていった。一人取り残されたコゼットは、池へ地面の石を投げ入れる。

「は…あ…隊長はやっぱり強敵だわ…」

ひとつ、ふたつ。

「まさか女性恐怖症なんてね…まあ私にはどうせ実家から『お見合』の話をさせられて軍隊を離れるから良いけど…」

（え…？）

みつつ、よつつ。

石が投げ込まれる度に波紋は生まれ、静かな波となりいずれ消える。コゼットは更にいくつも池に投げ入れては波紋を楽しむ。

（帰っていいか？）

（まだ付き合いなさい）

（……………）

「はぁ…寝よう。」

コゼットは石を投げ入れるのを止め、その場で背伸びをしたあと帰っていった。

残された伊藤・フェイルはその後ろ姿を見てほっと溜め息をする
と、茂みから脱出した。

「いやゝシリアスな空気だったな。シリアス嫌いなのにさ」

「ええ…いろいろ気になる事がありましたけど。」

フェイルは腕を回し、服に付いたゴミを起用に取り除いた。

そのあと、欠伸をひとつ。「じゃ、俺は帰るわ。もう寝たい。
カリィの事も考えたいし…」

「泣いたらしいですけど…」

「ああ、あの時はな。このあとベッドで静かに泣くさ。」

ダンボールを片付けながら呟く。

「空元気だったの？　今まで…」

「無理に元気してた。　じゃあな。」

伊藤は一瞬だが顔を俯かせたが、すぐに顔を上げて作り笑いをし、
フェイルに別れを告げた。

一人立ち尽くすフェイルは、足元の石を池に放り投げ、空を仰いだ。

その空は暗黒に宝石をちりばめたような、そんな空だった。

「こんなに空が綺麗なのに、なんでみんな元気無いんだろ…」

フェイルはそのまま空を眺めていた。

END ↓

S c r e a m (後書き)

現在、

▼累計

PV…110, 327アクセス
ユニーク…15, 325人

と、十万PVを超えました。

ありがとうございます。

今回は登場者紹介（簡単な）。

作者が小説を書いた時に感じた疑問を作者が解決します。

では、アリーヴェ・デルチ！

あと、主人公達最強系ですが、あまり最強系には致しません。だって戦いの素人が最強ってあり得ないからね。だ

だって…俺、戦闘描写ヘタクソだから…

番外編―登場者紹介

―番外編―

【登場者紹介】

松下和哉

『決着はここでつける！ 全力で始末する！』

スペック

？ 元の世界では、男子とは仲が良かったが、オタクと言うだけでハブられていた。このことが原因で女性恐怖症になったが、みんな怖がっているらしい。（クラスメイトから言われた。）

？ ブチ切れると怖い。

？ 作者自身。ですのーとの『L』に似てるらしい。脳内補完よろしく

伊藤

『人類はこれで変わる…覚悟こそ幸福だ！』

？ 普通。 常識人。 人気。

？ 背が高い。一番キャラ崩れが激しいかも。

？リアルな作者の友人がモチーフ。この扱い方で異論は無いな！
リアル伊藤！

リアル伊藤はメガネだが、小説内ではメガネ無し。容姿はジョジョ
の『DアンG』

矢島

『さよならの代わりに言うよ…行ってきます。』

？ハーレム（の予定。後述する。）

？松下・伊藤の親友。今は対立（予定。）し、戦う。

？リアル友達。この扱い方で異論は無いな？ リアル矢島！！
容姿は、リアル矢島は普通。小説内では…プリンセスラバー！の『
有馬哲平』脳内補完よろしく。

カリィ・ハイブランド

『私は…後悔しない。過去と決着をつける！』

？オリジナル。元ネタはFF4の裏切りの騎士カイン・ハイウィ
ンド。

？愛の裏切りがテーマ。

？長門にそっくり。キャラ崩れ激しい。特に言動が。脳内補完し
てくれ。

？矢島が気になる？

プリミル・プリミツシエル

『それでも…愛は不滅です。』

？オリジナル。

？いつも矢島にデレデレだが、嫉妬が激しい。

？容姿は『プリンセスラバー！』のシャルロット・ヘイゼルリンクにそっくり。脳内補完してくれ。

パス・クルーエル

『あなたは…敵！』

？元ネタは、ベッキー・クルーエル。

？性格は明るいが、時に友を叱責できる強さがある。

？容姿は…ハルヒの朝倉涼子。脳内補完してくれ。

コゼット・アナスタシア

『飛べない翼に…意味はあるのだろうか？』

？元ネタはレ・ミゼラブルのコゼット。アナスタシアは、ジョジョのアナスイ。ちなみにコレは偽名であり、本名は…

？松下の事を『隊長』とよぶ。

？容姿は…『プリンセスラバー！』よりシルヴィアⅡファン・ホッセン。に似ている。

フェイル・アナスタシア。

『生きる死ぬ以外に、人間が生まれてきた理由があるはずです！』

？元ネタ？ 携帯の予測変換です。

？魔法が得意で、描写はしていないが良く伊藤を魔法で弄る。

？容姿：乃木坂春香の秘密の乃木坂美夏だね。それを金髪・成長させた状態。 脳内補完よろしく。

・エリン・以下略・クルド

『手段は問わないわ。なんとしてでも生還しなさい！』

？エリンは元ネタ無いけど、クルドはクルセイダースが元ネタ。

クルセイドでも良かったかな？

？ツインテール・ロールを使いこなす人。最近ツインテールが多い。

？容姿：ツインテールなら誰でも可。

リベリア

『人は、思い出がないと生きていけない。でもね、思い出だけでは生きていけないんだよ…?』

? 12歳。

? なかなか可愛い。 萌える。 萌えあがる。

? 松下が好みらしく、ベッドに侵入回数数知れず。 コゼットに襲われた経験あり。 容姿は、金髪で…可愛いを脳内補完頼みます。

学校のクラスメイト

? 女子はそのまま作者自身のクラスの女子。

担任

? 漠。

校長

? カーズ様。 あるていめつとなカーズ様。 おとなしめなカーズ様。

召喚獣

? そろそろ喋らせようかしら。 影薄すぎだから。

大体このくらい。

この小説は松下を主人公とし、伊藤・矢島を副主人公、コゼット・プリミル・カリィ・パスを現時点でヒロインとします。

それ以外の登場者は名誉脇役を争っていただきます。

一応最強系と冠っていますが、彼らは素人。下手な勝ち方しか出来ません。知略、勇気などを戦いに織り込んでいきます。尚、戦いの回はコメディが少なく、シリアスが主であり、それが苦手でしたら読み飛ばしていきましょう。

作者は戦闘描写が下手ですので、突っ込まないで下さい。下手ゆえに戦闘は短いです。

漫画とかでよくある、無駄に長い戦闘はしません。だって、力の差があるならそれで瞬殺されちゃうじゃん。ジョジョとかなら力比べじゃないので面白いのですが：『ぶりーち』はインフレと力比べの代表だろう。面白いけど。

逸れた。

インタビュー

Q『作者さん、矢島は本当にハーレムですか？』

A今の描写でいくと、ハーレムじゃないですね。

Q『カリィは何故いきなり矢島が気になりだしたのですか？』

A 好きだからです。あとで書きます。

Q ジョジョネタは？

A なかなか刷り込めない。Exactly はよく使うが：頑張ります。

Q 『何故学院編を途中で切り上げたのですか？』

A コレはファンタジーだからです。

Q 『小説のスピードが速いように感じられます。なんとかありませんか』

A シリアスから抜け出して、ゆったりとした話を模索中です。会話の繋ぎ、説明をギャルゲーを手本に詳しくします。

Q 『あなたにとって、読者に求めるものは？』

A ポイント入れて欲しいです。感想は『誹謗中傷は許可しないイイ！』それ以外なら随時受け付けます。

誹謗中傷はリアル伊藤・矢島で十分です。

Q 『バカじゃないの？ こんなバカな小説投稿して、恥ずかしくないの：って別にあなたの為に言ってんじゃ無いんだからね！ 忠告よ忠告！ …もう』

A 質問ですらないっすね。

Q『サブタイトルについて一言!』

A途中から洋楽の題名を入れました。クイーンやマイケル・ジャクソン等々、興味がわいたら『ようつべ』で検索してみてください。

Q『サブタイトルに邦楽は入れるのですか?』

A基本的に作者は最近の音楽が好きではありません。カッコ良く恋の歌とかを歌ってますけど、正直意味がわかりません。でもアニソンが好きだからそっちを入れるかも。

Q『女性恐怖症は本当ですか』

A恐怖症ではありませんが、好きではありません。触ろうと思わないし行動しようとも思わない。それらが出たのは高校に入ってからです。入学してから今まで、うちのクラス女子と話した『単語』は100を超えません。むしろ作者は他高女子の方に知られてます。

Q『松下についてどう思いますか?』

Aあれは自分です。私は自分自身を客観的に見ることが出来るんです。あなたとは違うんです。

Q『で、結局松下に対するヒロインは誰ですか?』

Aリベリアとコゼットの予定です。

Q『自民党と民主党、どちらを支持しますか?』

A 断固自民党です。 鳩より麻です。

マスゴミが政治を…失礼。

Q 『質問は以上です。 ありがとうございます。』

A 最後に二言。

一言目は大会編の最初から前話まで、全て1日の範囲です。あしからず。

二言目は、こんな駄作に付き合って頂き、『感謝いたします。』

んゝマンダムッ！

Copacabana (at the cop)

離婚の動機ですって？ありますとも、弁護士さんそれは、私が結婚してるということです。

エミール・ポラック

―松下の家―

朝。

自然と目が覚めた。昨日はリベリアに見つからないように自分の部屋について就寝。ご飯は食べずに寝た。おかげで今はいつも以上のハラヘリである。

「…飯。ってなんでいるの？ リベリアちゃん。しかもベッドの中にさあ…」

「ふぁ…おはよーお兄ちゃん…」

まだ眠たそうに目をこすっているリベリアがいた。この状況は警察が見たらどう思われるだろうか？ 微笑ましく『二人は仲がいいですね』か無表情でお縄だろう。

「…だから何故いるの？」

「夜伽役を仰せ使われてるから」

誰からだよ！？ こんな12歳と寝ろなんて言う人は誰だ？

「エリン様だよ？ お兄ちゃん♪」

またエリンの差し金か！！ 俺は『ロリコン』じゃねえよ！！

「これで立派な『ロリコン』だね…お兄ちゃん♪」

俺は犯罪者か！？ …確かにリベリアはあと6年経てばナイスに育つだろうけどさ…

「とりあえず、腰に乗らないでくれる？ いや、マウントポジションなのは分かるよ？ でも人に見られたら…」

『失礼しま…あ！？』

その声に反応して松下はドアを注目すると、起こしに来たのであるう、カチューシャを付けたメイドさんが立っていた。

「え…ちよ、誤解しないでく『失礼しました！！』れ……。」

人生…終わったな。メイドさんは全速力で逃げ出したし、間違はなく朝食で白い目で見られることは必至だ。

「邪魔者は消えたし、続き、ヤろっか？」 「しねえよ！！」

リベリアを何とか引き剥がし、急いで私服に着替える。そして、逃げ出したメイド

を探しに行こうとすると、リベリアは松下の袖をぎゅ…と掴み、

「いっっちゃダメエ…」

と上目使いで見上げてくる。正直、たまりません。でも私には

あのメイドさんの誤解を解くという重大な任務があるんだ！　ここは惑わされてはならない！

「ごめん…俺…」

「私を捨てるの！？　心も体も貴方に捧げた、この私を捨てるの？」

「え…いや、声が大きい『アナタ！』…やべ…誤解される」

既にメイドさんが五、六人は廊下を通った事は感覚で分かる。この部屋の前で歩みを止めてすぐに走って行った事も！！

「私の処女を捧げたのに！？　私を…」

「俺は童貞…あ！？　部屋から遠ざかる足音が急激に増えた！？」

「もう離婚よ離婚！　お終いよ！！」

「結婚してないから！　お終いなのは俺の人生だから！」

リベリアは終始涙声でしゃべっていたのだが、顔は晴れやかな笑顔である。　図ったな！？　リベリアアアア！

「早く誤解を解きに行かないと…ぐ！？」

自分がドアを開けようと後ろを向いた途端、いきなり背中にしがみつい付いてきた。　そして首に腕を回し、締めた。

「グオオオオ：ストップストップ！」

リベリアは素直に力を緩め、普通のおんぶの状態になった。

「食堂までお願い♪」

「いや、キツ：グオオオオ：分かりました。」

ここまで主人を振り回す夜伽役がかつていただろうか？ もはや殺人的ですらある。

早くレディの躰をさせなければ：

―食堂―

食堂に入る（リベリアとのドッキングは外した）と、料理人、メイドさん並びに様々な人達が俺達を見てくる。俺はもちろん犯罪者を見るような目で。

リベリアには同情、憐れみ、慰めの目で。フツわかっていたよ：流石一つのソサエティ。噂が広まるのもインフルエンザ並みか。

「ご主人様。こちらです。」

「あ、はい。 すいません：って、何ですか？」

「いえ、別に。」

（こ：このメイドさんの目……：養豚場のブタでも見るかのように冷たい目だ：残酷な目だ：『かわいそうだけど明日の朝にはお肉屋さんの店先に並ぶ運命なのね』ってかんじの！）

メイドさんは松下をテーブルまで案内し、椅子を引く。その引かれていた椅子に座ろうとしたのだが、メイドさんは乱暴に椅子を入れ、松下はかなり痛い思いをした。

「はいりベリアちゃん♪ 座って〜」

「うん！ ありがとう」

そのメイドさんはリベリアの椅子を丁寧に入れた。明らかに待遇が違うんですけど…主人俺なんだが…

「ご主人様。 お食事でございます。」

次なるメイドさんは、皿を持ってくると、乱暴にテーブルに置いた。無論、そこはプロで、中の食べ物が落ちない程度ではある。

「リベリアちゃん♪ ご飯ですよ〜」

「ありがとう〜！」

見事だ。 皆さん俺をゴミかなんかしか見ていないようだ。 あたかも『仕えてやってるんだから感謝しろ』みたいな。

「まあいただきます。」

そう言って食べ始めたのは良いんだが、皆さん俺をじっくり見過ぎです。

「…なにか？」

作法は完璧のハズ。伊藤は知らないが、この人達は食べながら視線を送っている！

「……………」

ああ、この空気、キツイです。

俺が非難されている事が凄い分かるよ。

でも…主人は俺だぜ？ なぜこの仕打ちなわけ？

「はあ…ごちそうさまでした。」

堪らなくなり、早めに朝食を切り上げることにした。食器はカウンターに置き、食堂が出る。ああ、ハラヘリが…

「あ…お兄ちゃん…」

リベリアはまだ食べている。その仕草に恐らくここにいる全てのメイド執事一同は魅力されているのであろう。恐るべし、集団ロリコン。

―自室―

自室に戻った松下は『AWAKEN』の制服を身に纏う。これは自分が『AWAKEN』団員であることを証明する唯一の専用制服だ。黒を基調とし、剣がさせる所も腰に完備。正宗は長すぎて差せないがね。

「この制服カッコ良すぎて俺に合わなすぎと思うぜ…」

ちなみに今日がコレを始めて着ける日だったりする。鏡越しに自

画を眺めても『かつこいい』という事はまず無いだろう。この姿を見てかつこいいなんて言われた日には間違はなく美しさの基準が逆転した時代なんだろうな。昔と今の美の基準は違うわけだ。

「さて：」

それから松下は新聞に手を付ける。元の世界ではテレビ欄と漫画と占いぐらいしか見なかったが、今は世の中の情勢を知るために新聞を読む。

まず目に付いたのは、デカデカと書かれた『クルドとエンプラスとの対立深まる』との見出しだ。それによると、エンプラス内でのクルド占領支持が50%を占め、それを知ったクルド側はエンプラスを牽制し始めたということだ。さらに読み進める。

すると、『大会勝利はエンプラス』との見出しを発見した。それによると、矢島達は決勝に進む権利が与えられたが、後程辞退したという。結局は『5th・ルナ』が勝利したらしい。新聞にはこうも書かれていた。

『いつも初戦敗退のクルドが優勝候補を叩き潰したのは驚いた。第一にあのまま決勝まで進んでいたら間違いなく優勝はクルドであっただろう。惜しいものだ。』

「なるほど、優勝したのは矢島達じゃないのか…」

松下は新聞を畳み、ポイツとテーブルに投げる。そのまま窓を開けると、眩しい朝の光が目染みた。同時に外の風が松下を貫いた。

ここ『メサイア』という大陸は常に暖かく、冬でも薄着はそこそ

こいるらしい。夏はマジに暑いらしいが今は季節で冬。少し寒い
が快適に過ごせる気温だ。

「さて、いざ王宮！ さあ来るがいい！ゼロ！」

そう叫ぶと、まだ腰ぐらいしかない、バハムート零式の子ども、ゼロ
ロが蒼空から飛んできた。

『きゅいイイイイ！！』

あ、何かね、ロマンティックは止まらないという奴かね？

「フ…そう見せかけて目の前で止まるオチだろぶほあ！！」

高速滑空してきたゼロは見事に松下を直撃したのはおわかりであろう。
今は松下は腹を押さえて悶えている。

「きゅい…」

ゼロはすまなそうに鳴くと、松下の顔をペロペロ舐めてきた。顔
は十分大人でなかなか厳ついが、十分子どもで相応の可愛さを持ち
合わせており、仕草も子どもだ。

「大丈夫だ。じゃあ行こうか。仕事へ。」

ゼロを肩に寄せ廊下を出ると、朝にリベリアとのマウントを目撃し
たメイドさんがいた。

「あの…何か『すみませんでした！』」

メイドさんは頭を思いつきり下げ、大きな声で謝罪した。

実はかなりビビってしまったのは秘密だ。

「私が下手に噂を流してしまって、ご主人様にご迷惑をおかけしまつて…それにリベリアちゃんが夜伽役なんて聞いていませんでしたから…夜伽役ならあんなことは仕方ありませんわ…」

「あの…別にリベリアちゃんを襲ってませんよ？ あれは勝手にリベリアちゃんがマウントポジションを取っただけです。誤解されるのも仕方ありません。」

「でも…」

「それにその後の事も全部違いますからね？ リベリアちゃんから聞いてみてください。」

「…ご主人様が退席なされたあと、リベリアちゃんは必死に説明しておられました。『お兄ちゃんはロリコンだけど、そんなに悪い人じゃない』と。」

「ああ、ロリコンなのは決定ですか。」

「はい。」

なんて言うか…お前達もロリコンだろと言いたいです。 とても。

「だから…その…抱いて!!」

いきなり爆弾発言をして松下に抱きつく。すると、背筋から『恐怖』という感情が体を駆け巡る。それは脳にも到達し、混乱させる。

「うう…うわあああああ！ 来るな来るな来るな来るな来るなああ

ああー！」

そして、感情を爆発させた。

溢れ出た感情は恐怖、不信、絶望。それが今の彼を支配していた。彼はかなり汗を掻き、手は震え、必死に逃げようと手を伸ばす。

「え？ ご主人様どうなされましたか！？」

その様子を咄然として見ていたメイドさんは我に帰り、松下を揺さぶる。

それが更に松下の恐怖心を煽り立てる行為だとは気付かずに。

「俺は…俺は…うわあああああ！」

松下は頭を抱え込み、ガタガタと震え上がり、メイドさんを見るとその恐怖心をより露わにし、それはあたかも動物の赤ん坊のようだ。

これはいけない。そう思ったメイドさんは懷から携帯を取り出すと、応援を要請し、松下をなだめていた。しかし、暴走が止まらない松下を見て、メイドさんは焦り始めていた。

END↓

Fat Bottomed Girls.

辞めましょうか。どうせつまらぬ人生なんだから。

シェイクスピア

「ああ、どうしましょう！　どうすれば…」

「そこで幼児化しつつある松下を尻目にメイドさんはマジに焦っていた。」

なにせ、始めてメイドさんになってやっと二週間のまだまだ素人さん。こんな状況には慣れていない。（いや、こんな状況は誰も経験したことはないだろうが）

もはやメイドさんの目には涙が溢れ出していた。

「ううっ…うわああああ！！　どうすればいいのよー！」

渾身の叫び声をあげる。メイドさんは思いっきり泣き出し、パニックに陥りつつあった。

ついでに松下は気絶していた。

「あ、あそこです！」

応援に駆けつけたメイド隊が数人駆け寄ってきた。皆さん凄い物を見てしまったという感じで一瞬思考回路は停止したらしいがそこはプロ。一瞬で思考回路を組み直し、行動する。

「とりあえずご主人様を部屋に担ぎ込みます。各員、ご主人様を丁重に！」

『ハイッ!』

「ひっくひっく…」

「貴女はいつまで泣いてるんですか!! 今は手伝いなさい! それでも泣くなら数十枚ほど反省文を書いていただきます。」

メイド隊のメイド長はその新米メイドを叱責し、そのまま松下を抱えて部屋に入っていた。

その後…とあるメイドが夜遅くまで反省文を泣きながら書いていた…ということだ。

「???」

そこは真っ白な世界だった。 正に真っ白。 一点の穢れもない、透き通った純白。

「ああ、どこでしょうか?」

呟いてみたが以前反応なし。 ふと自分の体を見ると何と体が無いではないか!! しかしこのくらいで慌てていたら戦場では生きては行けない。 ここは前向きに『意識があるから良いじゃないか!』というポジティブさで乗り越えるべきだ。

「しかし真っ白…ん?」

松下は一点を凝視した。 何かがある。 いや、真っ白の中で唯一目立つ穢れみたいなものが見える。 目を凝らせば、それが物体で

あるということも把握できる。そして奇妙だ。…いや、何だ？

松下は立ち上がり、その穢れの場所に向かって移動してみた。
歩いた感覚は全く無く、なんというか…浮遊？ まあそんな感じだ。
浮いてます。

その物体に近づけば近付くほど輪郭がハッキリして来る。

「何だ…刀…か？」

そこには、黒い光を放つ、禍々しくて、神々しい存在感を持つ、一振りの刀と鞘が別れて真っ白い空間に突き刺さっていた。不思議に思っただけで行って見ると、その刀は村正に似ており、いやに親近感を覚えるような、そんな錯覚に陥った。

「で、何でこの空間にあるの？ まあそれ以前にこの空間が何なのかを知りたいけどね。」

真っ白の空間に禍々しいっぽい刀。絵には成るだろうが生憎美術の才能は持ち合わせてはいない。しかし、その対比がなかなかに栄える。

「とりあえず引き抜きましようか…。3…2…1…URYYYYY！
！」

どうしたとか、何故か抜けないではないか！。よくよく考えて見ると、松下には肉体らしきものが無い。つまり踏ん張れないのだ。抜こうとしても無駄無駄なのだ。↑結論

「どうしようか…。素数を数えるか…2・3・5・7・11・13・17・19・23・29…」

ふと、刀を見入る。刃の白い輝きに柄がある禍々しいっぽい刀。この白い輝きから黒い光が出ている、そんな感じの刀。その時、この刀に名前を付けよう、そう思った。なんだか刀自身が自分自身の心を表しているような気がして。名前ぐらいあったって良いだろう。なんか可哀想な雰囲気だから。孤独そうだから。

「お前さんの名前は何かいいかい？ 刀さん。」

無論、返事は無い。

「じゃ、カッコ良い奴にしてやるか…」

松下は考えてみた。すると『夜霧』とか『神無限刀』とか、中二病くさい名前が浮かび、溜め息をつかざるを得なかった。

「『爪楊枝』…は流石に嫌だよな。」

流石に失礼かと思い、撤回した。

普通刀等の武器には銘が掘られているのだが、奇妙なことに見つからない。無銘刀か？

どうせ付けるなら、神々がいい、松下はふと思い立った。戦いの神なら…

『阿修羅』で良いか！！ あの帝釈天と戦った阿修羅王で！！」

松下は戦いの神々を考えたとき、ミネルヴァ（ローマ神話での呼び名でギリシャ神話の呼び名はアテナ）とか考えたが、コレは日本刀。そんな洋風な名前など似合うわけがない。ならばと『阿修羅王』

を選択した。

「お前さんは今から『阿修羅』だ。 良かったな…」

その時、刀に異変が起こった。 刀の刃の部分に『阿修羅』と刻まれ、瞬く間に刀の持つ禍々しく、かつ神々しい黒い光が辺りを飲み込む。 一面暗黒と化し、自分自身さえも暗黒に飲まれ、見えなくなる。

その時、奇妙な声が聞こえた。 女性の声だ。

『あなたが知るべきは真の闇。 私はあなたの心の闇。 私は『阿修羅』。 あなたが必要とする時には力を貸そう…』

その声を聞いた途端。 この不思議な世界は消えた。 自分自身さえ。 すべて――

――自室――

「…ここは…どこだ？」

「隊長の自室だぞ。」

そこにはコゼットが『AWAKEN』の黒を基調とした制服を着て椅子に座っていた。

松下は上半身を起こすと途端にさっきの得体の知れない空間のことを思い出す。

「どうした？ 隊長…」

「あ、いや別に。それよりなんで俺はここで寝ているんだ？　しかも何故コゼットが此処に？」

「質問は一つずつしてもらおうと助かる。」

コゼットは若干ふてくされたように言い返す。髪をいじりながら、だ。

「隊長がパニックを起こしたって、伊藤から連絡を受けて、よ。別に隊長が気になってとかじゃなくてコレは隊の問題。見舞いはそりゃ来るわよ…。」

「パニック…ああ、いきなり抱きつかれてあのパニックを起こしたか…」

あのパニックは壮絶だった。いきなり抱きついて来たのだからな…久々に骨の髄までゾクツと来たぜ。後はまあ…覚えてませんが。

「それはそうと、伊藤とフェイルは？」

「あの二人は王宮で待機中。一斉に来たら悪いでしょう？」

「む…だな。さてと、俺らも行こうぜ。」

「大丈夫？　今日は休んだらどう？」

「いや、大丈夫だ。具合は悪くないし…今何時？」

コゼットは9時54分と答えると、松下は溜め息を漏らしながらベツドを出た。

ゼロを肩に乗せ、ドアを開け、廊下を歩く。すると、コゼットはある疑問を呈した。

「そういえば、隊長は私と一緒に寝たことがあるわよね？　その時は何故パニックにならなかったの？」

松下はその疑問に対してあるわけ無いだろ：と言おうとしたが、脳内検索で引っかった件が一件あった。
大会編―？の冒頭である。

「：なんでだろ？　あの時コゼットに絡み付かれてパニックにならなかったんだ？」

「絡み付かれて、は言わないで：恥ずかしい：」

「ああ、すまん。　ともかく、パニックは起こさなかったからいいじゃん。　気にしなくても俺と寝る機会なんて一生ないよ。」

松下はやや笑いながらそう答えた。　ある意味ホツとしたコゼットだったが、よく考えてみると：

一緒に寝ているリベリアちゃんにはパニックを起こさない＝眼中には無い。
は無い。

一緒に寝ているコゼットにはパニックを起こさない＝眼中には無い。

「どうした？　コゼツぶおっ！」

一発殴った。

―王宮―

「…あ、あのく大丈夫…ですか？」

ああ、フェイルは間違いなく私の事を心配してくれている。まあそれはわかるけどさあ…

「大丈夫…だよ。でも、なんでナイフを握り締めてるの？」

フェイルの手には、松下が昨日購入したナイフが握り締められており、それを使って暇潰しでもしていたかのようにだ。

「これはですね、暇潰しにとナイフを投げていたら面白くなって…ダメ？」

フェイルは腕を交差させて×を作った。

「いや、元々暇潰し用に買ってきたものだから、怪我しないように気を付ければやっていいよ。」

フェイルはその言葉を聞くと子供のように目を輝かせた。ちなみに投げナイフの刃は焼き込みがされており、キレイないようにしてある。怪我はしにくい。

「隊長と伊藤。これからの日程なんだが、ちょっといいか？」

「「日程…？」」

コゼットは松下と伊藤を呼び、周りに集めさせた。コゼットは懐からある羊皮紙を取り出し、松下らに見せた。

「…なに？　女王との謁見だと？」

「何故？」

二人とも口を揃えて疑問を呈す。

そりゃいきなり女王との謁見だ、なんて言われたらビビります。

「しょうがないのよ。既に決まっていて取り消しが効かないし、何よりあと一時間後に始まるのよ…とりあえず、適当に話してれば良いから！」

「いやいや、相手はこの国の最高指導者で、下手にしくじれば頭と胴体が離れ離れになるかも知れんし…」

あのエリンの親だとしても、結局は最高指導者、権力が強いのだ。下手すれば女神の所まで行く羽目になるかも知れない。あのエリンの性格の元凶になっていた、もしくはもっと悪かったら尚更だ。

「とにかく、これは女王様の『最高命令』なの。違反したら国家反逆罪で『すぱーん』されるわ。」

つまり、いずれにしても女王に会わなくてはならない。厄介な仕事だ。

「やれやれ…だぜ」

諦めたように椅子に座り込み、これからの人生について考え…溜め息をついた。

しかし…気絶していた時のあの空間は何だったのだろうか…？

これで何回目かの疑問が浮かび、今更わからないと考え、振り払った。

そして、これからの女王との謁見のことについて悩むのだった。

今日はいつにもなく素晴らしい青空だ。

ふと、空を見上げた松下は自然にそう思えた。

END↓

Fat Bottomed Girls. (後書き)

【NGシーン】

「お前さんの名は今から『爪楊枝』だ。良かったな…」

～中略～

『あなたが知るべきは爪楊枝の便利さ。私は便利な爪楊枝。私は『爪楊枝』。あなたが必要な時に使うが良い…』 私

→一瞬マジに考えたこと。

最近Queenやマイケルの曲を題名に。

Read Em and Weep.

「人間は誰でも不安や恐怖を克服して安心を得るために生きる」
名声を手に入れたり人を支配したり金もうけをするのも安心するためだ

！結婚したり友人をつくったりするのも安心するためだ！
人のために役立つだとか愛と平和のためにだとかすべて自分を安心させるためだ！

安心を求める事こそ人間の目的だ！

ディオ・ブランドー

―王宮・謁見の間―

いま、俺達は謁見の間というところにいる。詳しく言うと、『AWAKEN』本部から王宮を歩いて約数分の場所に位置しており、部屋の中は巨大だ。

俺達の目の前になかなかに大きい椅子、その横にメイドさん達が並んでおり、なかなか壮観である。

（で、いつ女王は来るんだ？）

（そのうち来るわ。 静かに。）

その時、ある男が部屋に入って来た。

『女王陛下のお着きである。 皆ひれ伏せ！！』

男はそう叫ぶと、周りにいた人達全員が頭を下げ、コゼット姉妹に
関しては膝をついている。一応松下・伊藤もそれに倣う。

そして、扉からひとりの女性が入って来た。侍女に連れられ椅子
に座ったらしく、侍女は傍らに移動した。

松下らは顔を下げているので未だ拝むことは叶ってないが、心
中でどんな顔なのかと妄想する。

『顔を上げよ。』

エリンのような声の通りに顔を上げると、エリンに非常によく似た
美人がそこに鎮座していた。

「:It's a Miracle:美人だなあ:」

伊藤はその姿に暫し見とれ、口をポカンと開けていた。だらしな
い…

一応伊藤の気持ちは分からなくもないが、松下の目にはどうしても
王冠を被せられたスレンダーで華麗なエリンとしか考えられなかつ
た。

『他の者は退出しなさい。早く。』

女王の厳格な声が響く。ソプラノボイスではあるが、どこか気品
と王としての責任が込められているような響きだった。

その声に反応した執事、メイドさん達は皆部屋を退出し各持ち場
に戻った。侍女は女王が帰るまでお側に付いているらしい。

「陛下、我々のような一部隊のために時間を裂いていただき、感謝

します。」

松下は膝を付いたままそのように謝辞を述べ、相手の出方を窺う。

「そう睨むでない。私はエリンの私兵部隊でありながらエリンに敬語ではなくタメ口を利いている人物達に興味を持ったまで。」

「は、申し訳御座いません。そのように仰るならば、以後エリン様の前では決して汚い言葉など吐きませぬ。」

お互い、腹の探り合いをしている、コゼットは客観的に見てそう感じた。あの権力を恐れない松下が敬語を使って喋っていることに凄い違和感を感じ、それ故に何かあるのだらうと思った。

「それは構わぬ。我が娘もそれで良いと言っているから今までの接し方でよい。」

「は、承知致しました。」

「話は最初に戻ろう。先ずは自己紹介からしてはくれぬか？」

女王にそのように言われ、渋々立ち上がった松下は次のように言った。まあただの自己紹介なのだが。

「私の名は松下和哉と言い、現在は小さな部隊の『AWAKEN』を率いております。ランクはS。そして彼らはコゼット、そして妹のフェイル。ランクは二人ともA。残りのひとりが副隊長の伊藤勇樹。ランクS。以上です。」

松下はひとりずつ紹介していき、紹介された者は軽く頭を垂れた。そして女王はそれを喜ばしそうに見た。

「私はクルド王国においての最高権力者、つまり女王です。名前は『エヴァ』。普通にエヴァ様、女王、陛下と呼びなさい。」

「それでは陛下。誠に失礼ながらもこの質問をさせていただきたい。」

「堅くならずともよい。して、質問とは？」

相変わらず堅い人達だ、などと完全に檻の外にいる三人は思った。松下は質問を続ける。

「例えば、民衆に飢饉が広がり、その痛手が貴族に来てヘルプを出しているのでしょうか。あなたは先ずはどちらを助けますか？」

平民か：貴族か。どちらを？」

松下は些か厄介な問題を呈した。しかし、女王は素早くこう切り返した。

「無論平民じゃ。平民有ってこそその貴族だと言うのに、先ずは貴族を救済するか？ 平民が回復したら自然と貴族も力を取り戻すだろう。」

「流石。」

どうやらなかなか出来る人らしい。この質問は、欲に溺れ、自分さえ良ければいいという人間は大抵貴族を選ぶ。良心から見れば平民を選ぶ。松下は女王を試したのだ。平民目線の政治か、貴族目線の政治か。これでかなり国のあり方が変わってくるのだ。

「もう一つ、よろしいでしょうか？」

「よい。話せ。」

「では、エンプラスとはこのあとどの様な外交をしていく予定なのでしょうか？ 幾分、エンプラスとは仲が悪いと聴いておりましたので。」

エンプラスとは以前エリンが話していたとおり、かなり仲が悪いとのことだ。

更に矢島達もいる。これからの動向を知る必要があるのだ。

女王はこの質問にこう答えた。

「確かに我々とエンプラスとの仲は悪い。しかし、エンプラス側から見れば我々クルドが必要なのだ。向こうでは採れない資源がたくさん有るのでな。」

「つまり、これからも対等な立場で外交を進めると？」

「Exactly. しかし、最近エンプラス側からの資源の購入量が少し変なのが気になる。我々も最悪の事態を見込んで軍備拡張を考えなければならん。」

女王が言った『最悪の事態』とは、クルドとエンプラスとの全面戦争である。こうしたことも考えなければ国民は導けないのだ。

最悪の事態に備えるということは直接言えば国民を守ることに直結するのだ。

「陛下の覚悟はわかりました。私達は全力で陛下に仕えましょう。」

「それを聞いて安心した。ランクSが逃げたらどうしようか考えていたのじゃが…心配無用じゃったな！」

女王は控えめに、だが嬉しそうに笑う姿はエリンが笑った所とそっくりだ。流石同じ血を持っているだけはある。

しかしこの人から本当にエリンが生まれたのかと思うほど性格は逆のようだ。

「そうじゃ！二つ名を授けてやろう。」

「二つ名…ですか？」

「そうじゃ。悪いか？」

女王は唐突に頭に閃いたように言い出した。もしかしたらエリンの唐突さは遺伝かも知れない。

しかし、二つ名か…どんなのだろうか？

「そうじゃな…『鋼翼』一じゃな！」

「…こうよく？」

「そうじゃ。鋼の翼はしなやかに、しかし頑丈。まあ取っついておいておくがよい。」

「は！」

何故『鋼翼』なのかはさっぱりだが、名前自体は悪くは無いのでもらっておこう。あと、伊藤達はそれなりの結果から考えるらしい。

つまりまだ貰えないとのこと。

「女王様、時間で御座います。」

その時、女王のお付きの侍女がタイムをした。 時間切れとのことだ。

「そうか…残念じゃ。 あと松下よ、貴殿に依頼が来ている。 後からメイドにその紙を貰っておくがよい。」

「は！」

女王は椅子から立ち上がり侍女を傍らに付け、ドアを開けていった。松下らはその後ろ姿を確認したあとで謁見の間を出た。

『松下様。 こちらが依頼書で御座います。』

「お!？」

出た瞬間、いきなりメイドさんが待ち構えていたように一枚の紙を差し出してきた。

それを受け取り、ざっと目を通してみた。

その差出人はハンターギルドからであり、極秘任務との旨が記されている。

それによると…かなりヤバい任務である事がわかる。

「どうしたんだよ松下あ？」

伊藤は動かない松下に話し掛けてみるが返事が来ない。

「おい…？ 何が書いてあるんだ？ それ」

「…？ ああ、ゴメンゴメン。 何にもない。」
「……？」

伊藤はその反応が腑に落ちないらしいが、松下は思い立ったように廊下を歩き出す。そして、いきなり止まったと思うとメイドさんの方を振り向き、

「この任務、了解したとギルドに伝えてくれ。 明日にでも任務を遂行すると。」

メイドさんは『確かに承りました。』と一礼すると、何処かへ行ってしまった。

「一体なんの任務だ？ ギルドからの直接の任務なんて聞いたことが無いぞ？ 隊長…」

コゼットは不思議な顔で松下を見た。

松下は紙をポケットへ畳んで入れ、廊下を歩き出した。

「そこまで変か？」

「ああ。 大体ギルドは民間の集まりだからな。 民間人が出した依頼をハンターが解決するのが普通なんだ。 だからギルドからの直接の依頼なんて普通有り得ないんだ。」

ギルドは国の中でそれぞれ民間企業が経営している。 そのトップからの直接の依頼だ。 恐らく危険な仕事ということはコゼット側から見てもわかる。

「確かに危険な仕事らしいが、これは緊急な依頼みたいだからな。引き受けるしかないさ。」

松下は何かを考えるように頭を捻り、コゼット達は頭にクエスチョンを浮かべる。

「あ、そうそう！ 松下さんは二つ名を貰ったんですよね？」
フェイルはその空気を変えようとしたのか、摩訶不思議な事を言い出した。

「ですよねって…目の前にいただろ？」

「まあ良いじゃないですか？ で、嬉しかったです？」

「ああ、『鋼翼』という二つ名には満足している。フェイルも頑張って結果を残せば二つ名なんかすぐ貰えるさ。」

そう言いながらフェイルの頭をなでなでする。それが気持ちいいのか、『えへへ…』なんと呟いている。

全く…こんなキモメンからなでなでされて、気持ちいいのか？

「隊長…」

その横で物欲しそうな目でなでなでされているフェイルを見ていたコゼットがい立ち尽くしていたが、松下は全く気が付かなかった。

―松下・伊藤邸―

「お兄ちゃん…本当に行くの（キラッ）？」

「ああ、任務だからな。多分数日は帰れない。ゼロは預けておく。」

リベリアは悲しそうな顔をしながら目をキラキラしている。正に策士である。

「…よし、荷物は十分。」

松下は四次元バックに荷物をいれ、正宗をしまふやり方と同じように異次元に収納し、メイドさんから渡された依頼書を眺める。

「なんで俺一人なの…？」

依頼書の内容は以下の通りだ。

『クルド王国・エンプラス国境付近部に位置するリース村を壊滅させて欲しい。村人は全員吸血鬼・グールである事は確認済みであり、君にこれらを討伐してほしい。無論女子供も、だ。抵抗があるのなら夜に行ってみると良い。ただし秘密保持の為一人で行ってもらいたい。以上だ。 ギルド代表ギリア・エスタード』

何度みてもこの依頼書の文字が変わる訳ではないがつつい何度も見直してしまう。ギルド代表のギリア・エスタードという人物はかなり人扱いが酷いとみえるな。

「たしかリース村はここからそう遠くない。 という事は首都が危ないからか…成る程な。」

「お兄ちゃん・・・今夜は愛して!」

「しませんよ。 お兄ちゃんが捕まるからね?」

「うう：（キラキラッ）」

まだこのリベリアは諦めないらしい。 その瞳の語り出すキラキラな物語は究極幻想なのだろう、クリスタルのように輝く。もはや猟期的だ。

「わかったわかった：早いけど寝ようか。」
「うん!」

リベリアはサツとベッドに入り込み、ヒョイと布団から顔を出す。

それはさしずめ小動物が顔を出したかのようだ。

その顔が松下を見ながら目を瞑り、早々と睡眠を貪っているようで、すぐに寝てしまった。

「抱いて欲しいなら起きとけよな? ま、まだ小学生ぐらいの年だから無理だろうが。」

松下はベッドに入り、リベリアの小さい体をそっと抱き寄せた。

髪をなでなでし、熟睡しているリベリアの寝息を聞きながらこう思った。

（俺は：ロリコン：）

そして、すぐさま意識を手放した。

END
↓

BIOHAZARD

生きるか死ぬか。

それが人生最大の分岐点である。

作者

―リース村―

「はーるばる来たぜリース村あゝ」

昼、松下は一人でリース村に到着した。無論、いきなり突きつけられた任務の為である。

何故昼かと言うと、昼ならグール、吸血鬼は人を襲わないらしいからである。だから人と区別がつきにくいらしいが…

しかしあの後リベリアをなだめるのが疲れた…。『あなた！』

また仕事？ 少しは家庭の面倒を見たらどうです！？ まったく…
なんて言ってくるから焦った焦った。

「さてと、村人は…っと、いたいた！」

周囲を見渡すとチラホラ歩いている村人が見える。その内の『オノ』を持って薪割りをしているお婆さんに話を聞くために近寄ってみた。

「あの…すいません。リース村はここですよね？」

お婆さんは薪割りを止め、こちらを向いた。

「！！ ウン・フォラステロ！」

「え？」

お婆さんは家の中に逃げるように入ってしまった。どうしたんだ？ 怯えている様には見えなかったが… むしろビビった位か。

その後、道行く人らしき者に手当たり次第に聞いたのだが見事に逃げられてしまった。人がいるような所を搜索してみるも今一つ。いるのはニワトリ、ブタ、その他…だ。仕方ないので家にお邪魔する事にした。

いささか失礼だが、きちんとノックをして反応が無ければ…不法侵入する予定だ。

「すいませえん…」

ノックを二回。更に二回…反応無し。

ドアノブに手をかけ、回してみる。開いた。

『計画通り』

そこで松下が見たものは、明らかに危険なものだった。

「これは…」

テーブルの上に昼食であろうものがあった。しかしそれだけならまだいい。問題はその皿の上に盛られている『ウ○虫（ハエの子供）

』、『蛾の幼虫』、そしてそれらを刺しているフォーク。異常だ。しかも動いている！！生きているのだ！

「う…」

それらを見た瞬間、物凄い吐き気を催した。胃液が逆流しているかのような感じに襲われ、喉が焼けるような、溶かされるような強い酸性の味がした。

この様な異常な物を見れば誰しも同じ反応を起こすだろう。それ程までに強烈な光景だった。

松下は走って奥に進んだ。吐き気はなんとかあったが、ちょっと精神的にもよくない、そう判断して走ったのだが…その先には『キッチン』があった。

「……………う…」

キッチンの上には鍋が設置されていた。何かを煮込んでいたようだが…。それを止せばいいのに興味本位で覗いてしまった。

煮込まれていたのは…さっき見たウ○虫、蛾の幼虫、そして…ブラック・モンスターもとい『ゴキブリ』。それらを大量にぶち込み、ぐっちゃんぐちゃんに煮込まれている。至る所からウ○虫、ゴキブリの体の破片が確認でき、スープは黒い。しかも腐ったような異臭を発し、お粗末にも衛生的にもよくないのは分かる。

ふと…その隣を見てみた。そして、後悔した。

「ああ…ぐ！」

思わず口を抑えてしまう。強烈だった。あまりにも酷い。酷過ぎる。

そこには：『人間の子供』がバラバラに切断され、内蔵、腕は鍋に入れられ煮込まれたような、酷い物があった。

頭は切断されてから野放しでゴミ箱に打ち捨てられたあとそれにハエが集り、切断に使ったのだろう馬鹿デカイ包丁は血塗れで放置されていた。子供の足の大きさから見ると、まだ七歳、それも男の子といった所だろうか。

壁は血で薄く汚れ、全体的に薄暗い。

ここでこの子供はどのような断末魔を挙げたのか…。

「なんなんだ…何が起こったんだ!？」

その時、後ろから声が聞こえた。まさか…

『アイエスタ!』

『アガラロ!』

後ろにいたのは、数人の村人だった。

「クソッ!」

松下は急いで駆け出し、裏口を探した。

その間にも奴らは追いかけてくる。

「ちい! 裏口が…いや、窓しか無い!」

偶然に見つけた窓を魔法で破壊し、そこに向かって飛び出した。

窓の向こうには…沢山の村人。

絶対絶命だ。

「…ああもう！今はリース村を出るしかない！」

コイツ達を相手をするには些か準備が足りなかった。確かに、今正宗を展開させて風呂払う事も出来るだろうが、あんなモノを見せられて戦える奴はいない。だから今は気持ちの整理をしなくてはならない。戦うのは夜だ。

「さて…逃げるッ！」

『アガラロ！』

『コヘッドロ！』

『テ・ボイヤ・アセル・ビガデュージョ！』

言っている意味は分らんが、間違いなく共通しているのは…捕まったら煮込まれる。間違いなく。

異次元から急いで投げナイフを取り出すとブレードグリップに持ち替え目の前にいる村人に投げつけ、怯んだ所を正宗で一刀両断する。

『エソ・セード！』

『テ・ボイヤ・マタル！！』

それでも大量にワラワラ出てくる。冗談抜きでヤバイ。

「くう…『エクスプロージョン！！（ル〇ズver）』

エクスプロージョンによって発生した強烈な光により、村人は目が眩んだように目を押さえてうずくまる。

それをチャンスと、松下は思いつきダッシュし、逃走した。

―リース村の入り口より外―

「ハアハア…キツ…」

松下は吐いた。中身が何であれ思いっきり吐いた。昼飯のこともそうだが、何よりショックだったのが子供の惨殺死体だ。ドラマとかでもああいいう死体は出ないし、実際殺された死体を見たのはコレが始めてだ。しかもバラバラにされ、鍋に突っ込まれている死体なんてゲームですら見たことがない。

しかもあの死体はまだ新しかったのだろう、血の滴りがまだ包丁に付いているのを覚えている。

もはや女性恐怖症以上のトラウマになるかもしれない。

「とりあえず夜まで待とう…うう!…」

松下は何度か吐き気に襲われた。それと同時に静かな怒りも覚えた。

（この俺に…恐怖を覚えさせるなんて…許さねえ。あの子供の分の仇も打ち取ってやる…）

そして、時は過ぎていく……

そして、村人が全員『魔族』という真相を知らない後の学者たちにより『リース村の惨劇』と呼ばれる事件は始まりを告げるのだ。

END↓

BIOHAZARD（後書き）

グロいグロくないとか個人差はありますが、スルーで。

アイエスタ…そこだ！

ウン・フォラステロ…よそ者だ！

アラガロ…捕まえろ！

エソ・セード…ちくしょうめ！

コヘツドロ…捕まえろ！

テ・ボイヤ・アセル・ビガディージョ…ミンチにしてやる！

テ・ボイヤ・マタル…ぶっ殺す！

バイオ4がテーマで、ガナードが喋る言葉を書いたんですが…読み方がサイトによってまちまちなので、とりあえずw a z a pを引用します。

しかし…書いてるときに吐き気を催したのは始めてだよ。
本来矢島達を書こうか悩んだんですが、リース村の惨劇編の後に書きます。

あ、エナジー・フローは片手なら、なかなか弾けるようになったよ。

高一で弾くとなると、エナジー・フローはハードル高すぎだ。

LAST ESCAPE

愛とか恋愛とか、そんなもの地球が消えるころにはすべて無意味だ。

だから俺は一人で生きる。

作者

人生のなかで、一番怖いと思うときはいつであろうか。
生まれたての赤ん坊の頃だろうか？

学生の時だろうか？

結婚して鬼嫁を妻にしまった時だろうか？

いずれにしても、自分の恐怖はいつかは忘れてしまう。

そうやって人類は恐怖を乗り越えてきた。

戦争の時も。 大不況の時も。

では『殺す』という恐怖はどうだろうか？

それは誰にもわからない。 わかつてはならない。

―夜…リース村前―

「…時間だ。行くか。」

松下は下ろしていた重い腰をあげると、リース村に向かって歩き出した。

現在の装備は邪悪装備で、黒に染まっている。 正宗を展開させ、

ナイフを腰に差し、ゆつくりとリース村の入り口を通過する。
昼に来たときと形こそ変わらないが、月の照らす光によってうっすらと明るい。しかしそれでも不気味であることは間違いない。

「昼の様にはいかないぜ…！」

松下は周囲に気を配りながら慎重に進んでいく。もはやバ〇オの雰囲気をプンプンさせてやがる。

『おっぱいのベラベラソース！』↑空耳

「来たか…！」

村人の一人に見つかってしまったようだ。しかしたった一人だけらしく他の村人には気づかれてはいないようだ…なんて思っていると、『オノ』をブン投げてきた。

「お！？ 危ねえ！」

なんとか体を捻り、ギリギリのところでかわしたが頬にうっすらと血がにじむ。

避けられたと見るやいきなり走り出てきた村人を投げナイフで足を刺し、その隙に正宗で首を撥ねた。

「これで死んだか…？」

流石に首を撥ねたので死んだとは思うがそこは魔族。生きているかも知れない。

松下は慎重に近付き、頭を蹴っ飛ばしたりして確認したが、どうやら死んでいるようだ。

「流石に頭が無けりや死ぬか…」

最後に頭を足で潰し、更に村へ入っていく。

すると、村人が集まっている広場を見つけた。 松下は見つからないような場所を確認し、隠れた。

「集会でもやっているのか…いや、見回りか？」

村人は鎌を手を持っている奴や、オノ、包丁を所持している奴など様々である。

なんかこんな風な風景をゲームかなんかで見たような気がするが…

「まずは先手を打つか。 よし！」

松下はその場所を離れると一気に村人たちの所へ走り出した。

まずは気づかれない内に殺す。 それだけよ。

松下は左手に魔力を集中させた。

「…ファイラ！ ブリザラ！」

左手から放たれた炎と氷は複数の村人を巻き込んで爆発し、体を貫いた。

それを確認すると、松下はまだ残っている村人を正宗で殺害した。 返り血を浴び、血に塗れた正宗をハンカチで拭う。 それはあたかも冷酷な殺人鬼のようだ。

「フン…生きる価値の無いものは死ね。」

もはや罪悪感はない。 昼に見た子供の惨殺死体を見てからコイツ

らに対する罪悪感のひとつかけらも残ってはいなかった。

『マトロ!!』

『アガラロォ!!』

異変に気づいた村人がそれぞれの武器を持ってきながら走ってきた。てゅーか投げつけてきた。

「無駄無駄ア!! この甘っちょろい攻撃ィ! 当たるわけがないィ!!!」

ひらりとかわしながらナイフを投げつけていく。最近急激に上手くなったなあ…

投げつけてやったナイフは見事に『すこーん』という擬音を表示しながら村人の額に突き刺さる。

「……あ、まだ生きてるんですか…?」

『マトロ!! マトロ!!』

『アイエスタ! マトロ!!』

村人は額を押さえながらこちらに近づいてくる。これがお化け屋敷なら絶叫ものは間違いない。

「無駄ア!」

正宗で村人Aの首を撥ね、続いてBの首も跳ねる。斬られた首は地面に『ぐしゃあ』と落ち、胴体から血が噴き出す。その血を浴びながら正宗を拭いた。

「全く：やれやれだぜ。」

松下は再び村人を探して歩いた。そして、ある事を思い始めた。

（おかしい…。もつといて良いはずじゃないのか？）

それは探しても村人が見つからないのだ。さっきの奴らが見回りだとすれば他は何処へ行ったのか？

そう思い始めたその時、音が聞こえた。

「なんだ…？ 敵か！？」

そこから現れたのは：『犬』だった。しかし、皮膚はただれ、肉は露出しており腐敗していた。

「・・・ああ、あの犬の種類はドーベルマンだ。機動力に優れていて軍用犬や警察犬に使われる種類だな。」

それにしても、なぜここにいるのか？

犬はジッとこちらを見ている。

「しかし・・・犬もグールとかになったりしてな…なんて」犬はこちらに走り出した。

しかしこちらに来るスピードが異常に早い。

『GYAAAA!!』

「フン！」

ブォカァ！ という音と共に犬が吹っ飛んでいく。それは松下が

回し蹴りをしたからだ。

「犬！蹴らずにはいられない！ 訳でもない！」

些か意味が分からないが、蹴られて吹っ飛んだ犬はまだ生きているように皮膚がズルズルと落ちながらもこちらに走ってくる。

「俺は犬が嫌いだ……。怖いんじゃない。人間にへーこらする態度に虫酸が走るのだが…お前みたいな人間に刃向かう犬は気に入った。…でも」

正宗を振り上げ、頭から尻尾まで綺麗に斬った。直後、おびたらしい量の血液が辺りを染め上げる。

「俺に向かって来る奴は斬る。」

もはや主人公格では無いような性格であるが元々こういう性格である。

正に悪役。

「次は……。あっちだな。」

投げつけたナイフを回収しながら中心部へ進んでいく。もちろん道々遭遇する村人を狩りながら、だ。

正直、こう思ったりしていた。

（これって他人から見ると完全に悪役だよな、俺。）
理解していた。

— 中心部 —

『アガラロオ!』

『おっぱいのベラベラソース!』

『アイエスタ!』

『アボラル』

呻き声のような声が目の前から聞こえる。てゆうーか見つかりました。約100人程に。

「やるしか・・・ないか。」

女の村人が鍬をもって襲いかかってきた。無論リーチの長い正宗で風ってやった。その女は血を吹きながら絶命、地面に付した。

「オラァ! もっとかかってこいよ…俺に生きる実感をくれ!」

その挑発に反応したのか約10名程こちらに突っ込んでくる。オノを振り上げ、松下を狙う。

「フン! ゲスな生物が・・・俺に触るんじゃないぜ…」

ナイフで足を攻撃し、膝を着いたところを足で頭を蹴り上げる。蹴り上げられた反動で村人Aは後ろにのけぞり、そこを松下が腹を蹴り、首を斬る。

「さて…早く帰りたいから終わらせようか。でも、この松下、容赦せん!」

松下は正宗を振り上げ、殺戮を開始した。

—10分後—

『UVOAAA…』

その中心部にいた最後の一人は討伐し、とりあえず目に付く範囲も一掃した。

松下は家々を巡り、そこにいた村人を皆殺しした。もちろん女子供関係なく殺した。

子供を斬ることはもちろん罪悪感は芽生えた。しかし、任務遂行の為、殺した。

「俺は・・・悪魔みたいだな。女神に召喚された天使が悪魔に堕天したような感覚…。」

部隊のみんなが見れば、確実に非難の嵐は確定、離反するのは分かっている。今、それに値する一方的な惨殺をしているのだ。

（：一人で良かった。フェイルを連れてきていたら気絶していただろうな。）

案外コゼットは大丈夫だろうが、フェイルがいたらすぐに逃げていることは容易に想像出来る。

伊藤は松下と同じように悪魔に墮天していただろう。

（しかし：何故ギルドは俺に任せただろうか…？ ギルドのハンターを使えば容易なはずだ。いや、まさか出来なかった理由があるのか…？）

考えてみれば、ギルドハンターやモンスターハンターに頼めばすぐ片付けられる問題ではないだろうか。国営の軍隊ではないし、十分可能だったはずだ。なのにいちいち松下個人に頼むなんて少しおかしい気がするが…

ブイイイイン！

どこかで何かが動く音がした。

「なんだこの音は…？近い…？」

そして、その音は近づいてくる。 ゆっくり、ゆっくりと。

そして、『木を切る為の、いろいろな意味で最強な武器』を持った男がこちらを見つけ、睨んでいた。

END↓

LAST ESCAPE (後書き)

ジョジョとバカテスのFF誰か書いてくれんなかぁ？

多分ウケるんじゃない？

先生役↓承太郎

とか、召喚したやつがスタンドとか。

無理かWWW

あと、ネタとしては第一部のディオ様。

実は『何をするだー』を入れる筈だったんだけど…

Thiller.

俺は成長するッ……!!

大切なのは成長して祝福される事だッ!

リキエル(ジョジョ第六部…スカイ・ハイ)

―リース村…夜―

ええ、はっきりこの際今俺がやっている事を言いましょう。

「ふ…死んだな俺。」

『GYAAAA!』

走ってます。全力でね。

でも、あれは無いだろ? 後ろでやたら『チェーンソー』を振り回す
ってのはさあ…

「とにかく…逃げるウウウ!」

『G A A A A! ! ! !』

チェーンソーをやたら振り回しながら、マジにイったようにこちら
を追ってくる。この時代にエンジンあったんかい…なんて思っ
ている暇はないッ!!

とにかく、奴を倒すのが先決。正宗を使えば間違いなくポッキリ
逝くか、もしくは刃こぼれで使えなくなる。つまり、魔法なんか
で殺るしかないのだ。

「いや無理無理！」

考えながら逃げるのは必然的に遅くなる。かといって考えないのも駄目だ。

ああ、絶対絶命ってやつですね。

「逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだー無理だッ！」

そう、『STAND UP TO（立ち向かう）』しなければなら
ない。

『URYYYYY！！！！』

「ちい！ うざいぞ！」

まあ：立ち向かうといっても、どう立ち向かうべきか：松下和哉は
考える。

脳をフルに活用し、走りながら考える。

約二秒でこんなに考えたのは初めてかも知れない。

そして、一つの案が浮かんだ。

（建物ごとこいつを下敷きにしまえばいいんじゃないかね？）

道行くまだ残っていた村人を正宗で斬りながらチェーンソー男から
逃げる。

そうと決まればどこがいいか：

ふと、木造の家があった。

（ここだ！）

後ろのチェーンソー男の足元に向かってナイフを投げつけて（一応

足止め）、その木造建築の家のドアを急いで開けて入った。

「ハアハア…ご都合主義にも限度…ある…ぜ…」

木造建築のその家はどうかやら二階建てらしく、松下は息絶え絶えに二階に登った。

電気は勿論ついてない。

その時、下の方からドアを破壊する音が聞こえた。これは恐らくはチェーンソー男だろう。

さて、家をぶっ潰すなら何をすべきか？

約10秒以内で答えよ。

「…こうなったら！」

松下は魔法を使い、『コメント』という魔法を使った。ふつと思いついたのがそれだった。

右手に約5秒で魔力を集め、真上（屋根）にその魔力の塊を約2秒でビュンと全力で投げた。

『UR Y A A A…』

「三秒前ッ！！」

チェーンソー男は階段を上り、両手でチェーンソー男をしっかりと掴み、こちらを見つけると嬉しそうな表情をした。

『UR Y Y Y Y Y！！！！』

「二秒前！！」

チェーンソー男が大きく振りかぶり、こちらを切り裂こうとこちらに走り出した。その走りは迷いが無い。ただ殺意しかない。

流石に命の危機を感じた松下は、ナイフを素早く投げて足を攻撃し、その隙に窓から脱出した。

「『一秒前：そして物語は動き出す。』」

刹那。

隕石が家に衝突した。約一メートル程の巨大な隕石が空から凄まじい勢いで落下、結果的に爆発した。

「ぎにゃあああああゝ！！」

なんでこうなるんだよゝなんて呟きながらぶっ飛んだ。

その衝撃で松下は十数メートル先の別の家に叩きつけられる。しかもその周囲にいた村人達もぶっ飛ばされている。

「いたた：『ケアルア』：」

怪我はそこまで大きくなく、難なく魔法で直し、周囲を確認する。そこら中に沢山の死体があった。どうやら先ほどの爆発の衝撃で死んでしまったようで、辺りから血のむせかえるような匂いをする。

「流石に血を見ると吐き気がするわ：」

血の匂いを嗅ぎながらあのチェインソー男の姿を探しながら先ほどのグラウンド・ゼロの場所に向かう。

「死んでなければ死体がある筈だ。はあゝ死体なんてもう見たくねえな：」

魔族、だが自分が奪った命の抜け殻を探すのはやはり気が引ける。いくらグールであっても、そこんところの死体に対する恐怖はある。

つまりは、ゲームで人を殺してその殺した人の死体を見てもなんとも思わないのとは違うのである。

足取りは遅いが、やっとの事でグラウンド・ゼロに到着した。

「チェインソー男…いた。」

チェインソー男は巨大な木の柱に頭を潰されたようで、動く心配はなさそうだ。

チェインソーも大破している。

「良かった・・・」

心のそこからそう思う。銃でも所持していないと倒せない相手だったからね。チェインソーに刀は相性が悪すぎだ。

本当に倒せて良かったぜ。

ーグラウンド・ゼロー

グラウンド・ゼロの中心部にはかなり大きい隕石がバラバラに砕けており、デカイクレーターを造形している。松下はグラウンド・ゼロクレーターを滑り降り何かを考えていた。

（…この隕石なんかに使えるかなあ？ 確か宇宙金属は希少…クルド側としては欲しい筈だ。 持って帰るか。）

松下はクレーター内の散らばった隕石を回収し、四次元バックに突

っ込んでいく。

途中、明らかに入らない隕石は鑿と鎚（民家から回収）でバックに入る大きさまで割り、詰め込む。

ちなみに以前松下はメテオを使ったが、あのタイプの岩は実質的にはただの岩であるために回収しても使えない。

しかしコメットの隕石は威力向上の為の特別上質な隕石を呼ぶため、かなり美しいらしく、商業的価値はあるとみた。

「これでよし…っと。・・・ん？ 鐘…？」

十分に集め終わって満足していると、どこからか鐘の音が響いてきた。

教会だろうか？ しかし調べないわけにもいかない。

松下はその音がする方へクレーターをよじ登ってから歩いた。

―教会…礼拝堂―

松下は鐘の音、つまり教会の門前に来た。ドアは大きく、十字架がかけられている。

ちなみにここ『メサイア』の崇拜宗教は『女神教』である。

今日のキリスト教を女神がパクって異世界で女神教として普及させているのは間違いないなく。

更に豆知識では、『イエス・キリスト』と言われてはいなかったそうだ。

正式には『ナザレのイエス』と呼ばれていたそうで、キリストとは呼ばれていなかったらしい。『キリスト』は王を表す名前であり、救世主という意味合いもあり…すまない。話を戻そう。

そんなこんなでドアを開ける。

「こんにちは」

『いらっしゃい！』

「あ、ども…！？」

まさかの返事が返って来た。

松下はその声の主を探す。

『こっちだよ？』

「誰だ！」

『君から約10 meter 先の前から2列目の右の三番目の席に座っている吸血鬼と人間のハーフの半純血のプリンスだよ。』

若干緩い声が返って来たことに松下は少し脱力してしまったが、一応探してみる。

緩い言葉を確かめるべく、その場から約10 meter 先の前から2列目の右から三番目の席の場所を搜してみると…いた。

「お前がこのリース村をグールだらけにしたのか…ってこのイケメンが…！」

よく見てみるとその人物はあまりにかっこよかった。髪は金髪、目はみずみずしく潤み、頬は白い。はっきり言うと女っぽい。分類としては可愛いイケメンだ。

『初めて会う人はみんなそう言うんだよね。参っちゃうんだよね。本当にねえ。』

声は高く、心が癒やされるほど透き通っており、体は華奢で白いマントを羽織っている。

プリンスと言うからには男だろう。 歳は同年代と見る。

「…吸血鬼さんか？ あんた。」

『むう。人に対して『あんた』というのはあまりよろしくないなあ。』 しかも正確にはハーフだって！』

「…ああ。 そりゃすまん。で、この事態はあんたがやらかしたのかい？」

やや目移りしながらもそう質問する。 しかし輝いている。

『正確にはお父さんが約五年前に一人だけ召使い用にグールにしただけ。お父さんは死んじゃったし、そのグールは脱走して今の有り様になるし…散々だよ。』

「そうか…。俺はこの村を殲滅するように任務を受けているが…正直お前さんみたいな奴を斬りたくはない。」

『あれ、そうなのかい？ 別にこの村はグールだらけだし殲滅しちゃってもいいけど、僕は殺さなくていいのかい？』

正直この煌びやかな青年を血に染めたくはない。 テレビアニメ化された暁には全国の女性からクレームがくることは間違いないからな。

「お前さんは見たところ普通の人間のようにだしな。腐ってる奴らを斬っても罪悪感湧かないけど、流石にお前さんを斬ると殺人したように思うからねえ…。」

『意外と優しいんだね』

「イケメンには厳しいがな。」

二人で小さく笑う。

意外だ。 コイツとは仲良く出来るかもしれん。

イケメンは好きじゃないがこういう奴は大好きだ。

「よし、決めた。お前さんは俺の部隊に入りなさい。」

『部隊…？　もしかして隊長クラスの人かい？』

吸血鬼は目を丸くする。無理もない。いきなり部隊に入れなんて誰も言わないからな。

しかし、そこは俺。常識は通用しないのだよ。

「俺は『クルド王国女王直属部隊兼王女私兵部隊の『AWAKEN』隊長』、松下和哉だ。お前さんは我が『AWAKEN』に入って欲しい。」

『自己紹介を兼ねた勧誘かい？　だったら僕も答えなきゃね。僕は昔この辺りを治めていた吸血鬼の末裔で名前は『ノア・レッドフイールド』。今は没落だけどね。』

ノアはそう笑いながら言った。全く、可愛い奴め。あ、勘違いしないでほしいが俺は女の子が好きだ。勘違いするなよ？

『今の勧誘の返事だけど…』

「どうする？　いずれにしてもこの村は焼き払うが。」

『ああ、それじゃ仕方ないよね…。わかった。了解したよ。』

「そうか…。なんかすまないな…。」

『いいって。任務なんでしょう？』

ノアはそういうと再び小さく笑った。いやむしろ『はにかんだ』という表現が正しいかも知れない。それぐらいいい笑顔だった。

『でも…。僕は実は『マティウス魔法学院』にいかなきゃならないんだ。だから…。その…。なにイツ！』ごめんなさい！』

「いや、今『マティウス魔法学院』と言ったな？」

『うん：だから』

「フハハハハ：『命』を『運』んでくると書いて『運命』：フ：よく言ったものだな！！」

『え！？ どうしたんだい？』

ノアはいきなりの松下の豹変ぶりに戸惑いを隠せない。

松下は高らかに笑っている。

「よし：ノア、君に任務を言い渡す。魔法学院に在籍している『ある人物』を監視してほしい。」

『え？ 話が見えないんだけど：』

「大丈夫。君は予定通り魔法学院にいつて欲しい。そこで『矢島』という人物を監視して定期的に様子を教えてくれればいい。」

『あゝつまり、監視役かい？』

「そうだ。卒業まで監視してほしい。」

ノアは少し考える仕草をする。チクショウ、小動物に見えてきた。女の子だったらすぐさま連れ帰っていたところだ。

『：その『ヤジマ』という人は魔法学院にいるんだね？ わかった。』

ノアはコクンと頷いてはにかんだ。

松下はその言葉に謝辞を述べると、二人で教会を出た。

「一人で大丈夫か？」

『大丈夫。地理は完璧にわかっている。これでも吸血鬼のハ』

フなんだよ？ 戦闘能力も伊達じゃない。』
そう言うとノアは森の方へ駆け出していった。

「まさか、スパイが出来るとはね…心外だわ。」

松下は村の方を向き直し、呪文を唱え始めた。

―リース村…高場―

「隊長…これは一体…」

リース村を一望できる高台から二人の人間がいた。一人は華奢な体で女性のような体。

「何だろうか…村人が殺されている。何か鋭利な刃物で斬られたかのようなだ。」

一方、低い声で双眼鏡を覗く男が一人いた。
その男は双眼鏡越しにある者を見つけた。

「おい、あいつは何だ？ 黒い鎧を着込んだ奴。」
男のその言葉に反応し、女自身の双眼鏡を覗き込む。

「え？ あ…確かに。」

確かに変だ。あの鎧を着た『奴』は何か長い剣を手を持ち、何かをしようとしている。そして、『奴』は村人に切りかかった。そして村人を一斬の下に葬り去る。

「隊長！！おかしいじゃないですか！？　何なんですか！」

「わからん。　ただ俺達があそこへいくと、確実に返り討ちに合う。辞めとけ。」

男は感情的になってリース村に行こうとした女を制する。

「俺達の任務は何だっけ？」

「クルドの状況をヒューミントする…」

「そうだ。　この事態はクルドの政府によるものかわからんが、とにかくエンプラスに知らせないといけない。」

「つまりこの虐殺を黙ってみてろ、って事ですか？」

「そうだ。」

男は頷く。　女自身は頭で納得しているが理解は出来ない。　この虐殺を傍観者として指をくわえて見ているしか出来ないことに自分に怒りさえ感じた。

（なんて私は無力なんだろう・・・。）

女は自分の無力さを呪った。

そして、『奴』が自分の腕を空に挙げ呪文を唱えた――

瞬間、大きな火の玉が『奴』の頭上の生成され、『奴』が腕を振る。すると、その火の玉がリース村の家々に衝突し、とたんに村は火の海に包まれた。それに驚き逃げ惑う村人を『奴』は長い剣で切り裂いていく。

その様子はまさに悪魔だった。

「虐殺…だな。」

「そう・・・ですね。」

女は目の前で虐殺が行われているという事を肌で感じた。
これが現実に行われているということを理解したくはない。
だが、目の前で起きている事実であり、人は死んでいる。とても
耐えられそうになかった。

「隊長・・・帰りましょう。もう十分です…。」
「…わかった。帰還する。」

『奴』が何故村人を斬っているかはわからないが絶対に許されない
凶行だ。

二人は立ち上がり、このことを報告するため急いで森を駆け抜ける。

「そうだ、奴の呼び名だが…」

突然男は言い出した。

「奴の呼び名は…『メガリス』…この呼び名にする。」

女はコクンと頷くと、更にスピードを上げた。

END↓

Thiller. (後書き)

次回からややパロディネタは押さえ気味にしてみようと思う。

オリジナリティを出すため、パロディネタに頼らずにしてみよう、
そう数学の時間に考えた私です。

いや、使える時は使いますが…

試しに矢島の学院編を書こうと思ってたり…それにノアを出そうと…

ちなみにノア・レッドフィールドは、ノアの部分が『えむえむ！』
の柊ノア、レッドフィールドがバイオです。

レッドフィールドはリース村の血に染められた赤い大地という意味
も込めました。

実はラーメン屋から投稿…

矢島編 FIRST OF MAY

ハーレムの末路は、必ずバッドエンドだ。

作者

ここからは、松下がリース村の惨劇を起こした2日後の矢島達の学院編である。

基本的に、ハーレムやカリィ、プリミルのことについて補完を行う部であることを覚えておいて欲しい。

尚、学院ストーリーになることは間違いないので、それに嫌悪感を持つ人は申し訳ないが本編までまっていただきたい。

では、リア充な学院編を――

――魔法学院――

「はあ……」

もはや溜め息しか出ない。

最近出来事がめまぐるしく回っている。

それに対して溜め息をつくのは悪いことだろうかねえ？

まあ言いたいことは色々あったわけって事。最近はとくにね。

「大丈夫か？ 矢島よお」と、その様子を見かねたのか、クラスメイトが話しかけてくる。

心配されるほど気疲れしているようにみえるのかねえ……？

「ああ、だいじょーぶだよ。心配するな」

「そうか、お前には彼女がいるもんなークソツ」

「なにを…お前だって作ればいいだろ？」

「てめえ…とんだハーレム発言しやがって…お前みたいにそう易々とできるかよ！」

「それはあんた自身の問題だろ？ 外見じゃなく内面で勝負しろよ？」

「バカやろうッ！ 女ってのはなあ、内面よりも外見を重視するもんなんだ！ 第一美人が内面イケメンのキモい男と付き合ってる奴がいるか？」

若干キレたように言う。まあ彼の言い分は分からないでもないが。

「それは…いるかも知れないだろ。…多分」

「いないッ！ いるわけが無いッ。」

そういう風に話すとなんだか気分が少しは楽になった。もしかしてこれをねらっていたのか？

「んなわけねえよバーカッ」

ま、一応はそういうことにしといてやるさ。

「そーいや、この前のアイツ、すごかったなあ。」

『アイツ』とはおそらく伊藤達のことだろう。

その中でもこの俺をフルボッコにした松下の事だと思う。

「まあ…な。」

「あのあと、アイツらどこいったんだろうな…？　なあ、矢島よ。」

確かに、次に目覚めた時、既に彼はいなかった。俺の意識が途絶える前にどこかに連絡を取っていた。

それが軍の関係ならばまあ納得できるが…伊藤はともかくあの人間嫌いの松下が、人の下につくということが想像できない。人間嫌いというより人見知りだろうが…

「矢島く〜ん！」

まあそんなことを考えていた時、教室の入り口でパスが俺を呼んだ。何だろうか？　別に悪い事はしてないが…

「はあ…モテる男は良いよなあ？　彼女がいるクセにまだ女が寄ってくる。」

隣にいたクラスメートが愚痴を吐いてくる。だから別に寄ってくるわけじゃないんだが…

「そうだぜ！　大体お前は顔が良いからな。」

「いやいやいや！　何を言っているんだよ！？」

彼女達はそのような感情で来てるんじゃないって…

「チッ！」

「この鈍感野郎…」

「このイケメンが…！」

「一編氏ねばいいのに…」

「ファンクラブに報告…」

「殺るか？」

なんかクラスの男子がザワザワしてきた。更に殺意まで感じるとはどういう事だ？

「矢島…」

クラスメートが肩に手を乗せて真剣な眼差しでこちらを見てくる。そして

「今の鈍感発言は…命に関わるぜ？」

乗せられた手が思いっきり肩に食い込…つか痛い痛い痛いッ！！

「今のは力が入りすぎた。気にするな。」

などと言いながら更に肩に食い込む。コイツ…ワザとやっているな！矢島はギリギリと食い込むその手を払い、逃げるようにパスの方へ移動した。

「いろいろ悲惨だね」

「ハアハア…まあ。」

「うん！ それこそ青春だよ。 あんな発言したら流石にああなるけどね」

「そんな青春したくはないわ！！」

一応現在進行形でその青春を送ってますが。

「で、何のようだい？」

「ああそうだった。要件はね、この新聞について、少し聞いてみたいことがね。」

そういうパスの右手には新聞紙もとい校内情報誌『ざ・わーんど』が握られている。

この情報誌は校内及び校外の出来事が掲載されていてそこの新聞紙より情報の質が高かったりする。

「ここの一面の…」

「この『今校内で殺りたい奴No. 1 決定選!!』という見出しのかい?」

その見出しがデカデカと掲げられた『今校内で殺りたい奴No. 1 決定選!!』というなんとも怪しげな記事は写真付きで掲載されている。

「えっと…何?」

ものは試しに閲覧してみた。

『急遽開催することになったこの選手権は皆様の投票に基づいて作成されています。中略。そして栄えあるNo. 1は…ぶっちぎりで他の選手を超越したヤジマ・ユウキさんに決定しました!』

「おい!!」

なんで俺の名前が!? しかも一位!?

更に先を読み進めると…

『理由の大半が”女子とイチャイチャしていて毎日リアルが充実してそうだから”でした!』

確かに彼はカッコいいですが、その事で嫉妬されて現在の評価になったと考えられます。

しかしながら、”付き合いたい男ナンバーワン”で見事一位を獲得していますから、その事も更に拍車をかけているでしょう。』

理由が…切ねえ…。

男子から猛烈なバッシングを受けていると知った矢島はグリーンと肩を落としてしまうのだった。

この新聞はこういった校内アンケートも実施しており、生徒の考え

が良くわかるシステムである。

逆に、先生の人気投票なども同時に実施されるので先生方は内心気にしている。

こういった行為にも学院側が絡んで来ないのもそのお陰だといって良いだろう。

「どこ見てんのさ！ 此処よここ！」

やや顔を膨らましたパスは矢島に無理やりその記事を指し示す。

「これか？ えっと：『リース村の怪奇』：コレがどうかしたのかい？」

「読んで。」

「：？ 分かった。」

渋々記事に目を通す。

内容はこう書かれていた。

『クルド国のリース村へ出掛けたわが国の旅行者が先日、あることを目撃した。それは、リース村が襲撃されていたというのである。目撃者によると、同日夜、宿泊しようとしてリース村を訪ねようとA氏とB氏は先ず村の位置を確認しようと高台へ行った。そこで事件は起きた。

村人がある男に惨殺されていたのだ。勇敢にもその男を追い払おうとした村人を約1m80？はあろうかというほど非常に長い剣で殺害、最終的には村を焼き払っていったと言うのだ。

その男はその剣を片手で振り回し、驚異的な力を持っていることが予想される。

両名は急いでエンプラスに帰国し、軍に調査を依頼した。そこで軍はクルド側にコンタクトを取ったがクルド側は一貫として認めようとはせず、”元よりリース村という村はわが国には存在しない”

との返答をした。

確かに、『リース村』は筆者すら聞いたことが無く、そういわれても仕方が無いかも知れないが、クルド側が何かを隠している可能性がある。

そこで直接調査に赴いたのだが、奇妙なことにリース村一帯はクルド軍により閉鎖されていた。嚴重な警備が敷かれ、リース村の存在は確認出来なかった。

しかしながら軍が此処まで動くとなると、何かしら関与しているのはもはや疑い用がない。

今後、この事について追跡調査をする予定である。

ちなみに、今回の事件を起こしたとされる男については、”メガリス”という呼称をする。」

…なんだ、ただの記事じゃないか。

「はあ…よく考えてみれば？」

パスは若干呆れたような表情をした。

「…普通の記事じゃないか。そこまでおかしいのかい？」

「よく見て。『1m80?の剣を振り回す』という所…心当たり、ない？」

…ないな。そんな長い剣なんか持てる筈もないのに。

「最近会ったわよ？ 忘れたの？」

そんな言われても分からん、とパスに言い、自分の脳内ファイルを漁る。

…少なくともそんな奴には該当せず。

「はあ…松下って知ってるわよね？」

…該当者…アリ。って、あの松下か!?

「そう。たぶんあなたの思っている松下で合っていると思う。私が知っている限り：まあ意識は無かったんだけど、写真で見たからピンツときたの。」

確かにあの時パスは気絶していたなって写真あるんかい！

「つまり、この当事者が松下だと？」

「ええ、おそらく。ただ気になる点がいくつかあるのよねえ。」

パス曰く、疑問は二つある。

一つは、なぜこの男：いや『メガリス』はリース村を襲ったのか？もう一つは目撃者がなぜクルド側へ通報しなかったのか？

「最初の疑問は分からないけど、後の疑問はたぶん焦っていただけじゃない？」

そんな場面を見せられておびえない人は居ないと思うけど・・・」

「そうね。どちらの疑問も本人しか分からないだろうけど、多分両者にも裏がある。私はそれが知りたい。」

いつになく真剣な表情でパスは矢島を見ている。

あの五月蠅い娘が静かなのは合わないようだ。

「とにかく、今この問題を俺たちが考えたってしょうがないんじゃないか？」

「うん：そうだけどさあ・・・なんか不安なんだよね。いつになく。」

珍しいこともあるものだ。パスは悩みなんかないと思っていた、天真爛漫な女の子だと思っていたのだけれど。

「いつか真実がわかるさ。いつだって真実は一つだからね。」

矢島がそう励ますとパスはいつもの明るい笑顔に戻っていった。そして。

「あ、そうそう、明後日辺りに転校生が来るらしいよ？ 知ってた？
？ どんなか気になるよね？ あ、男かな？ 女かな？ いやニューハーフ
フだったりして！」
いつもの騒がしい娘に戻っていた。

T o b e c o n t i n u e d . . . ?

ALFIE

ピンポン

『呼び出すぞ』 矢島あゝ今すぐ職員室に來い。繰り返す。矢島あゝ今すぐ職員室ゝにゝカモゝン』

昼休み、男子達と雑談している時に、いきなり校内放送が掛かる。なんというやる気のない校内放送だろうか。こちらのやる気が根こそぎ持って行かれそうだ。

「なんか悪いことしたのか…って、女関係か…」

「いやいやいや、それは無い。断じて」

別に悪い事はしていないはずんだけどなあ…
女性関係？ いや無い。それに関しては絶対に無い。断言しよう。
何故ならプリミルが目を光らせているからだ。俺に近付こうとした女の子に対して敵対心むき出しだったからそれ以来女性関係のことはしていないぞ…

「早くいったらどうだ？」

クラスメイトに催促されて疑問に感じながらも職員室に移動する。

「一体何やらかしたんだ？俺は…」

心当たりは全く無し。

脳内フォルダも一斉検索したがなにもヒットせず。じゃあなんだろう？

「失礼します：担任先生はー？」

「おお、待ってはいなかったぞ。早かったな。」

いや、そこは待っていようよ担任：

「で、用は何でしょうか？ そろそろ授業が：」

「心配しないでいい。君には頼まれて欲しいことがあるだけだ。」

「はあ：」

なんかよく分からない。

依頼なんて生徒会辺りに頼んだ方が速くないか？ なんて事を伝え
たが、答えは”生徒会は忙しいから駄目”とのこと。

「依頼ってのは：何ですか？」

「君は、転校生のウワサを聞いた事があるかい？」

「転校生？ ありますけど？」

転校生：パスがやたら喋っていたウワサか。

あのよく喋る娘の情報が当たったとは：侮れん。

「君に転校生の案内を任せたいんだが、いいか？ もちろん授業は
公認するぞ？」

「それはいつ：」

「今日だ。しかもあと10分で生徒昇降口に到着予定だ。 生憎
私も授業がある。頼んだよ。」

「あーわかりました。案内する場所はどこにするんですか？」

「まず編入手続きに一度事務室、それから適当に校舎を一時時間程回
つてくれればいい。」

矢島はその頼みを聞き、授業を公認という条件で引き換えた。
たしか次の授業は魔法史。

スーパ―に素晴らしい条件ではないか。

そして担任は次なる授業に出向く為に職員室を出る際、こう言った。

「そうそう、転校生の名前は”ノア・レッドフィールド”だそうだ。
じゃ、頑張れ。」

そう言って、担任は外に出て魔法を使って飛び、教室のガラスに激
突した：ってかああいう風にやっていたのか！？

「”ノア・レッドフィールド”か：あと数分で到着ね。急ごう。」

矢島は急いで靴箱で靴を履き替え、昇降口に向かった。

―エンプラス魔法学院前―

「ふう：もうすぐ。もうすぐであの『矢島』君に会える。楽しみだ
よ。」

パカッパカッと馬車は走る。

この世界には魔法という手段があるが、依然として移動用の魔法の
開発が進んでいない。

大抵の場合、タクシードラゴンか馬車で移動する。

この少年は今日、エンプラス魔法学院に編入するためにこの馬車に乗っている。

しかし、少年には目的があった。

―矢島の様子を観察し、松下に伝える―

これが彼の任務だ。　リース村から脱出した後、急いで隣国に渡った。

そこで、松下との通信手段にするために伝書鳩を購入、今は馬車内の荷物の中に入っている。

「一応学院側に”矢島君を出迎えとして欲しい”と言っておいたから…出迎えた人が矢島君か、どんなのだろ？」

少年もといノアは期待と不安を胸に目を静かに閉じた。だが、疲れていたのかつつい寝てしまった。

それから一時間後、馬車を運転していた人に優しく揺さぶられて目を覚ました時、スデに学院に到着していた。

「ああ、ごめんなさい。今降ります。」

「足元にお気をつけて。」

あちらに出迎えがおりますのでまずはそちらへ行かれたらどうですか？」

足元に気をつけながらゆっくりと馬車を降りる。

そして、少し寒い空気と照りつける光がノアの金髪を照りつける。

「う…ん、」

ノアはすっかり凝ってしまった肩を回しながら周囲を見渡すと、黒髪の少年がそこに立っていた。

（あれが、矢島君か…？）

よく見ると、人種としての造形は松下と似ており、何より松下と似たような印象を感じた。

ノアはよし、と意気込み黒髪の少年の方へ歩み寄っていった。

―矢島side―

”ノア・レッドフィールド”とおぼしき人物はこちらにゆっくり歩いてきた。

容姿は金髪、イケメン、なんか可愛い。そんな印象だ。

矢島は確かめようと話し掛けてみた。

「君は、”ノア・レッドフィールド”だね？」

「そういう君は、”矢島 裕樹”君。」

返事をする事でこちらの質問は肯定された…って、なんで俺の名前を？

「細かいことは気にしない気にしない！」

さ、速く行こう？”矢島君”」

やけに馴れ馴れしい人だな…おっと、そうだった。案内するんだっ
た。

「鞆、持とうか？」

「あ、いいよ。君の手を汚すことはないよ。鞆は業者さんが運んでくれる。」

ん…本人が言うなら仕方ない。

今はこの人を案内しよう。

最初は…事務室だっけ？

「矢島君」

「ん、どうかしたかい？」

そこで晴れやかな笑顔を作る。

そこで、矢島は奇妙な感覚に溺れた。

「…やっぱりいいや。速く行こっ！」

ノアはニコニコした時、何故か俺のハートはブレイクした。

いや、別に深い意味はなくて、なんというか…保護欲？みたいなのを感じたというか…

「どうしたの？」

「いや、行こう。」

うーん…男だな？ ダメだ、可愛く見えてきた。愛とかはなくて、あくまで”可愛らしい”という愛らしさだからな？

矢島はそんな感情を抱えつつ、先を歩いた。

―ノア side―

（おゝカッコイイなあ…矢島くんってモテるんだろうなあ…）

せめて彼に負けじと笑顔を見せつける。

ノアの経験上、これで堕ちない村人はいなかった。昔は笑顔をするだけで大根とかイモとか貰っていた。

ノア自身もこれを自覚しており、”笑顔は武器”という父の言葉は座右の銘だ。

笑顔を見せつけると案の定、矢島は動揺し始めた。掛かったね…

ノアは素知らぬ顔で矢島に速く行くよう催促し、ここに任務は実行に移されたのだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . ?

ALFIE (後書き)

実はこの小説に対してスラッンプに陥っております。

ぶっちゃけ、カリィをどうするか悩み続けて、結局は伊藤が好きという方向にもって行きたい。

しかし、設定が邪魔をする…

今話はそんなスラッンプの中で書いた駄作です。

マジで内容物がつまらない。書いている本人がそう感じました。

しかし、ノアの矢島との接触なので投稿せざるを得ない←

うーん…

あと、スラッンプの時の理性の捌け口として別の小説を書いてみた。反省は物凄くしている。

あと、リアル伊藤が『俺はまだ童貞だ!』ですって。
バカ。

Save Me

最終的には俺はモテたい。

でもな、この先十年二十年のことを考えると、この思いが本当に正しいのかわからないんだ。

結局俺ってなんなんだよ…

by 作者の友達

―マティウス魔法学院―

『えっと…”ノア・レッドフィールド”です。よろしくっ!』

黒板にはデカデカと”ノア・レッドフィールド”との文字が書いてある。

彼はクルドの『スルーク地方』の出身だそうだ。

『彼の親父さんが無くなって、暫定的にこの学院に転入になった。仲良くしろよ!』

担任はそう言うとなアの席を指定し始め、周りの女子は黄色い声を発して何としてでも隣に座らせようとしている。

『あー矢島の隣に座ってくれ。何かわかんない事があったら彼に聞いてくれな。』

「はい。わかりました。」

ノアはニツコリ笑うと、元から空いていた矢島の隣に…座れなかつ

た。

「きゃあああん！可愛い」

「ちょー可愛いっ！身長何センチ？」

「私に触らしてよ！！」

「退きなさいよ！ 最初は私よ！」

『え？ ちよつと…あの…』

いきなり出現した女子たちに、ノアは約三秒で包囲されてしまう。その状況であたふたするノアは、正に愛玩動物のようだ。

「ねえねえ、彼女いる！？ いなかったら是非私と〜」

「何言ってるのよ？ 私よ！」

「ノアさん…いい香り〜」

『あ…えと…その…』

「いやーん！ その声可愛い〜！！」

挙げ句の果てには服のボタンを外され、服をはだけさせてしまう。

女子たちはそれを見て更に興奮…じゃない保護欲を掻き立てられている。

ちなみにそれを眺めていた男子は、普通そんな場面に遭遇するとマジな殺意を覚えるが、ノアを見た時は全くそんな気は起こらなかったらしい。

「まあまあ、それぐらいにしたらどうだい？」

なんか目に堪えなくなってしまったので、とりあえず止めてみる。聞いてくれればいいんだけど。

「え〜やだぁー」

「この動物はこんな風にするのが一番よ！」

むう…聞かんか…

「はいはい、席に着きなさい！　今から文化祭についての会議を始めるんだから」

「え〜」

その時、その場を丸く収めたのはプリミルだった。　彼女はその後話し合われる文化祭の実行委員である。

「ほらほら、散りなさい。」

「ちえっ！」

「またねーノアくん」

ノアは服をはだけさせて、その美しい白い肌を肩まで露出させていた。　しかも目をうるうるしながら怯える様は、間違いなく愛玩動物に匹敵する破壊力を備えている。

「うう…汚れちゃった…」

相当彼には響いたようで、ボタンを閉めながら目を潤ましている様子は、何か心をブレイクさせてくれる。

服をちゃんと着た後はちゃんと席についた。　まあ、女子達からはジっと思つめられていたが。　トラウマにはならなければいいんだけど。

『では、今から文化祭で何をするかを話し合います。　あ、一時間目も通すから。』

「え〜」

『では、何がしたいですか〜？』

こういった会議の時は大体発言する人は決まっているのは皆さんご存知だろう。しかし、熱い欲望を持つ男子はそれを覆すのも王道だ。

「はい!!」

『生徒Aさん、どうぞ。』

「生徒Aって…まあいいや。”メイド喫茶”がいいです!」

プリミルはメイド喫茶と黒板に書いていく。しかし王道中の王道だなあ

「はい!!」

『生徒Bさん、どうぞ。』

「生徒B…まあいいや。奴隷喫茶うわなにするやめ…」

生徒Bは女子達の発した魔法で拘束、後に血祭りに上げられたという。発見された時には衣服は下着のパンツ一丁だけだったそう。

『他には?』

プリミルは周囲を確認し、手が上がらないと分かると周囲の人と相談させることにした。

「なあ…ノアは何かいいんだい?」

とりあえずノアに意見を聞いてみた。

やっぱり転校したてでやりたいことがなかなか発表出来ないだろうと思った。

「うーん…個人的にはメイド喫茶で十分良いと思うけど…」

「みんなあ!!」 ノアちゃんがメイド喫茶を志望しているわよ!」

ノアが発言した瞬間、まさかの隣からの女子の地獄耳。一瞬でその事が広まった。…まさか！

「みんなあー！！ ノアちゃんがメイドになりたいそうよ！」

「えっ！！ ちょっと、違っ！」

「ノアちゃんのメイド…軽く抜けるわ…」

「オカズにはイけるかも…」

「ノアちゃんのメイド姿かぁー写真集で売り出せば儲かるかな？」

クラス全員が見事に妄想をしている…ある意味凄いクラスかも知れない。

プリミルは腕を組んでコレが成功するか考えていたが、一つの結論に達したようにおもむろに黒板に『メイド喫茶、主役”ノアちゃん” 決定』と書いている。

矢島はその団結力を恐怖に感じながら、ある種の憐れみをノアに向けてざるを得なかった…

Save Me (後書き)

スランプの中で考えた場面。ファンタジー関係ねええー！！

やはりこのまま文化祭までいくかー

しかし、自分語りが治らん。困るなあ：

イメージとしては『けんふファー』の女子部に転入するときの部分。

そうそう、『恋愛応援部っ！』なるものをスランプ中の理性の吐き口として書きました。

ジョジョ系なので、興味ある方は御一読ください。

Billie Jean

学園ものの小説において、もはや王道と呼ばれる『メイド喫茶』。
ああ、人生の内にも一回でもいいから見てみたい…
それが、私の願いです。

by 作者の嘆き

―文化祭まで、あと一ヶ月―

「ノアちゃんにはメイドをやってもらうわ。残念だけど、これも運命・・・ハアハア」

「おいおい、息遣い荒いぞ。自分の欲望が丸出しじゃないか」

「うるさいわね。作者に名前すらつけてもらえてない『生徒A』の分際で…」

「『生徒A』で悪かったな。だがお前だって『生徒A』という呼び名が無いよりはマシだな。」

放課後。文化祭の準備を着々と進めているチーム『ノアーズ』…それはノアに無理やりメイド服を着させるため、その姿を見るため、自らの欲望を満たすために結成されたプリミル率いる最強で欲に塗れたクラスチームである。

ぶっちゃけていえばただノアのメイド姿が見たい奴らの集まり。

「ノア君は？ 彼の体の採寸を…ムフフフ…」
とまあこんな感じである。

―ノア視点―

今教室は正におかしくなってる。

僕の姿をみてなんとも奇妙な笑顔を浮かべてきて若干だけど悪寒さえ感じる今日このごろ。

「はい、やってまいりました！新聞部です！今日は取材をさせて頂きます！」

「あ：うん。よろしく・・・」

目の前には女子生徒記者。さっき強制的に連行されて新聞部に連れてこられた。

彼女が言うからにはちゃんと許可を取っているそう。誰から？

「今回は今注目の的、ノア・レッドフィールドちゃんの取材だよー！今日はいろいろ根掘り葉掘り聞いちゃうんだから覚悟おー！」

えらいテンションが高い人だなあ

常々思うんだけど、この学校変な人多すぎじゃない？クラスの女性といい、ストーリーキングする人といい、どこかハイテンション。

「ノアちゃん、ゆっくりリラックスして：ね？リラックスして少し寝ちゃった所を服を脱がしてアナタの貞操を奪っちゃうんだから！」
「いえ：遠慮します・・・」

ノアはそのテンションの高さに、顔をひきつらせながら笑うしかなかった。

――取材中――

「質問その一、彼女はいますか？」

そんなこんなで始まった先の見えない取材。最初の質問はこれだった。うーん、唐突だなあ

「え？　いませんよ」

「そう？　そんなにモテるのに？　もったいないー！」

いや、モテるのは認めますが困るんですよ。トイレ行きたいのにストーキングされたり、ご飯を食べている時は『愛玩動物』をみるような目で見つめてくる。本当食べづらいのよ。

「質問その二、好きな人はいるー？　それと一目惚れとかはー？」

「好きな人は今はいません。一目惚れも未経験です。」

好きな人は今はいない。一目惚れも未経験。こう答えとけば大丈夫かな…

「うーん…あまりネタにならないなあ。お姉さん、困っちゃう！」

「あは…あはは…」

困っちゃうならさっさと終わらせて欲しい。僕は切にそう願います。

「あ、質問その三。今度の文化祭にはメイドとしてやるって聞いたんだけど、それについての意気込みをどうぞっ！」

なんでそんなシビアな質問するかなあ…。僕個人としてはとても困るんです。

第一メイドになりたくてメイド喫茶を推したんじゃないのに、どこをどう変えたのか僕がメイドになるなんて想像の範囲外だったのにさ…

「あー何ていったらいいかなあ…」

スッゴく悩む。

ここは女になりきる為の意気込みを言うべきか…男としての意気込みか…

「まあ、とにかく一端のメイドとして頑張ります。」

「のんのん…そこは”女として可愛く、愛らしく頑張ります”だよ？」

女子生徒記者はスラスラと魔法でメモを取っている。魔法でペンを自動的に動かしているようだ。恐らく何かしらよからぬ事を書いているのだろう、ノアにとっては背筋が凍るようなことだった。

「じゃ、次の質問その四、君は人に言えない秘密を持っているのかなあ？」

その言葉をきいて若干吹きそうになった。ちょうど目の前に用意されたお茶を飲んでいたときだったので、かなりむせた。

「れれ…？むせたって事は少なからずあるって事ですよね？」

記者は無駄に僕の顔に近づけてくる。綺麗な顔をしていて、ふわっと甘い香りさえする。

（秘密を喋ったら秘密にならないでしょ？）

「秘密を話たら秘密にならないでしょ？とかなんとか考えてませんか？」

（…あなたはエスパーですか？）

正直、女性が怖くなってきた。

「じゃ、次の質問その五、好きなタイプは？」

「えっと…特には・・・」

「なるほど、見た目では判断しない、と言うことですね！」

「あ…まあ、うん…」

さつきからクレッシェンド並みにだんだん音が高くなってきている。
こいつはやばい。

「じゃ、大体で答えて下さい」

「え…まあうん…静かめで主張が出来て美人…かな？」

「まあうれしく！ 私そのものじゃーん！」

おい、と心の中で三度程ツツコミを入れたノアだった。

「じゃ、以上でしゅーりょーします。お疲れ様でした」

「え、終わりがいい？」

「はーい。以上でしゅーりょーです。新聞は明後日には完成します
ので楽しみにしといて下さい」

最初から最後までハイテンションな人だったが、ここでやっと終了。
ここまで疲れる話し合いは村育ちのノアにとって初めての事だった。

――明後日――

「ん？」

取材から2日、今日も元気に軽快に登校しようとしたノアは、校門
で歩みを止めた。

「なんだろ…あれ」

ノアの視線の先に、奇妙な人ばかりがあった。生徒玄関の前でなにかやっているようだ。

ノアは奇妙に思いながらもその集団の中に入ってみた。すると、新聞部と腕章をつけた生徒が生徒新聞『ざ・わーるど』を配っている。ノアも一部を貰い、その新聞を目を通した。そのとき、大きく書かれた”見出し”に目を留めた。それは――

『我が校が誇る愛玩動物、ノア・レッドフィールドことノアちゃんの独占取材成功!』

「…なにこれ」

『ノアちゃんは最近転校してきた童顔金髪で、可愛い弟という印象を受ける。しかも最近行われる文化祭で『メイド』として活動するとのこと。彼はそのことについてこう答えた。

「はい、僕個人としては女として、メイドとして、愛らしく可愛いらしいメイドとして頑張りますのでよろしくお願いします。」

筆者は男がメイドを言うことに些か驚きを隠せないが、彼なら立派なメイドとして活躍出来ることだろう。

彼には彼女はいないらしいが、好きなタイプは献身的な女性、だそうだがそれ以外でも構わないそうだ。昔から攻めるものには――』

なんだこの捏造記事は。

あまりに捏造記事ばかりなので途中で読むのは止めた。

「…なにこれ。あることないこと書いてるよぉ」

「別に捏造記事じゃありませんよ」

「ひゃっ! いつの間に…」

いつの間にか後ろにあの女子生徒記者が仁王立ちしていた。いつの間にも。

「それはあなたが話した内容と私の記憶を頼りに書いた記事だから、千分の一も狂いはない筈よ？」

「それが捏造ですってば…」

現代でいう朝θ新聞みたいな事をやってくれる。ありのままに書かなきゃそれは捏造なんですよ！

「じゃ、また文化祭が終わったら取材させていただくわね。じゃっ！」

そう言うとその女子生徒は再び新聞を渡す作業に戻った。やれやれ、間違いなく教室で何かしら言われるのは確定しているので、今後の展開に気分が悪くなるノアだった。

t o b e c o n t i n u e d . . . ?

**N
e
w

c
i
n
e
m
a

p
a
r
a
d
i
s
e
(前書き)**

もうね、グダグダよ…

New cinema paradise

目の前で悲しんでいる人を見つけたら何とかして笑わせたい。
そのためなら警察につかまってもいい。
寿命が縮まってもいい。

江頭2・50

―魔法学院―

明日は皆さんが待ちに待った文化祭。そして僕、ノアにとって身だけではなく心まで汚される日。

明日が文化祭だというので教室内に様々な荷物を運び入れているクラスメイト達は、何故かわからないけどチラッと僕の方を見て”よしっ”と意気込んでいる。なんか凄く視姦されてる気分だ。

別に見るのはいいんだけど、偶に変な目で見てくる人がいるからちょっと警戒中なのだ。

「あ、いたいた〜ノアちゃん！」

ふと、教室のなかに響き渡る女子の声。その声の主は文化祭の実行委員のプリミルであった。

ノアは呼ばれるままにプリミルの方へ歩み寄った。

「なんですか？ 何か用事でもあるんですか？」

「うん。用事というより、試着ね。やっとあなた専用のメイド服が完成したわ。その試着を頼みたいのよ。」

来た。遂に来了。これこそノアが最も危険視していた事柄だった。

実はこの前のクラス会でノアがメイドになる事が全会一致で決定された際、メイド服は皆それぞれで自作しようと言うことになったのだ。その時、クラス女子は極秘裏にノア専用のメイド服を制作する事を決定していた。そして今日、完成したのだろう。

「いま…だよね？もちろん…」

もはや逃れられない事は理解してみるが、敢えて質問してみる。

「もちろん！」

その質問は、満面の笑みによる全力の肯定によって答えられた。それを受けてノアは思いつきり落胆した。

―女子更衣室―

「ココハ女子更衣室デスヨネ？」

ノアがプリミルに連れてこられたのは、『女子更衣室』だった。まさか…とは思うが、ここで着替えさせられるということは…

「ここでお着替えよ。準備も万端だし、心おきなく楽しんでね！」

「女子更衣室で…？」

「うん。あなた女の子でしょ？」

いやいやいや、僕は男です。女の子じゃありませんよ。

「どうでもいいわ」

「よくないですよ僕は男ですから…」

「はいはい入りなさいよ！」

プリミルはノアにサイコネシスを掛けて浮かび上がらせ、抵抗するノアをドSな眼差しで女子更衣室に押し込んだ。

「いった…ん？」

中に入った方がいいが…まだ女子の皆さんがお着替え中でした。そして、殴られたりする事に対して覚悟を決めました。覚悟こそ幸福って言うからね。

「あ…ああ…」

ほら、皆さん羞恥心にまみれてる。殴られたりする…よね。はあ…

「きゃああああ！ノアちゃんよー！」

「みんなッ！！準備はいい！？」

「万端です！」

「よし、行くわよ！！ノア・プロジェクト、始動！！」

「了解！！」

ノアは目をパチクリさせてこの事態について理解しようとしている。女子はそんなノアを見て、保護欲に駆られたのか知らないが、ノアを見る度に息づかいが荒くなっていた。

「え…？まさか…」

「まずはズボンをッ」

「いやっ！そこはらめえ！」

女子達はノアの腕をガッチリと抑え、ズボンを脱がそうとベルトに

手を伸ばす。

そんな女子達を見て、ノアは心底恐怖を味わった。
そして…その後は思い出したくない…

「「きゃああああ！　かわいい！」」

「うう…ぐすん…」

身も心も十分犯されまくったノアは、メイド服を着させられていた。
何故かは知らないが、ノアの試着しているメイド服はやたら肩を出していたり、ヘソも見えていたり、結構露出度が高い。
コレもこの女子達の策略なのだろうか…いや、趣味であろう。

「やっぱり、ノアちゃんにはピッタリだわ」

「僕の人権はどうなっているんだい…」

「そこらへんの女子より格別の可愛さと小動物並みの愛らしさ…」

もはや逃れられない。

このまま行けば、確実に女の子として認定されてしまう。そうなったら天の国に居るであろう父上と母上、そして松下に顔向けが出来ない。ああ、こんなふしだらな息子をお許してください…

「たしか今回の文化祭に、メサイア新聞が来るんですって。」

「あゝ確か全国に売っている新聞よね？」

なんの話をしているのかさっぱりわからないけど、多分ロクなことじゃないんだろう…

「ま、とにかく後は微調整で終わりだから、まだここにいてね！」

「え…？　いや、流石に…」

「私達の裸を見てもいいわよ？　むしろ見られたい！！」

な…何を爆弾発言しちゃってるんですかアーーー!!
羞恥心を持ってないのかよオーーー!

「別にいいですから、はやくここから出して下さいよ!」

「駄目。」

「どうしてですかあ?」

もう泣きそうだ。でも泣いたら更に喜ばれるから泣かない。泣くもんか! うう…

「あなたは…ペットだから…眠ってて。」

そう言うのと、いきなり睡魔が襲って来てそこで意識は途切れた…。

―クルド国、王宮騎士団―

「ふあああ…つと」

昼。別に仕事がない松下と伊藤は『AWAKEN』本部で時間を潰していた。

仕事が無い込まず、とても暇。自分からギルドに行って仕事を受けてモンハンするのも一興かと、暇過ぎるのでだんだんそう思えてきた今日この頃。あくびも自然に出る。

「いとー」

「なんだ」

「ひま。暇過ぎる」

「ぶっちゃけ俺もだ。」

昼食は満足に採り、外はポカポカ陽気。自然と眠たくなる。これで眠くならないやつは相当な人物だろう、そのくらい暇で気持ち良かった。

「しりとり」

「リス」

「スイカ」

「カップ」

「パン」

いきなり伊藤がしりとりを始めた。

だが、いきなり『パン』で詰まってしまった。しかし…

「ンジャメナ」

皆さん『ンジャメナ』というのをご存知だろうか？

ンジャメナとは、平均気温は27.8℃、年間雨量は556ミリのアフリカのどこかにあるチャドという国の首都である。

最初に『ん』が付くために、終わってしまったしりとり合戦を起死回生させる手段として、偶に用いられる技である。

「南京」

「…ンガウンデレ」

『ンガウンデレ』とは、カメルーンの都市である。

「レーズン」

「……ングル」

ングルとは、ナイジェリアの都市。

「ルーン」

「……えっと…ンギグミ」

ンギグミとは、ニジェールの都市である。

「ミカン」

「………もう、終わろうか？」

完璧にネタが尽きた松下だった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

New cinema paradise (後書き)

矢島編というよりノア編だな。

文化祭を早めに切り上げて、ふぁんたじーな小説に戻そう：

3月13日は作者の誕生日です。

ホワイトデー？ あれはアインシュタインの生まれた日だろう？

あ、鼻血出てきた。ティツシユー！

MODERN LOVE

俺、実は故郷に許嫁がいるんすよ。

この戦いが終わったら、軍を止めてその人と結婚式を挙げようと思
ってます。

その時は司会をお願いしますよ。

by 恐らく、この戦いで散ったであろう、ある男の最後の言葉

―文化祭イイイー！―

文化祭は午前8…00に開始された。

運動場で開式の弁は語られ、花火は打ちあがる。花火とは言っ
ても魔法で作られた花火で、打ち上げる係の生徒は杖をもって頑張っ
ていた。

そして、その開式は終わり、皆教室に急いで移動し、出店やその
他諸々の準備を始めていた。

「ついに…ついに来たわ！天国の時よ！！」

その熱気はノアのクラスも変わらなかった…いや、それ以上の熱気
を放っていた。

「ちょっと…見～え～な～い～」

「退きなさい。ノアちゃんが見えないわ」

「あたしだって見たいわよ！」

そして、ノアはメイド服を着せられていた：

「そ…そんなに見ないでよお」

ノアの着用しているメイド服は、何故か露出が多かったりするのだが…今日の服はまた一段と進化を遂げていた。

肩の露出はもちろんのこと、黒と白を基調とし、スカートを完備。他のメイド服と比べても明らかに違う。

「はい、ノアちゃん。接客の大事なことは？」

「うう…笑顔お」

「よく出来ました。あとは…お客様をメロメロにしちゃって下さいね！」

実行委員のプリミルがにこやかに微笑む。　　うわーん、この影ならぬ優しさが逆に僕自身を追い詰める…

「ノア」

「なに…？」

矢島はそんな可哀想で可愛いノアに話しかけた。

「君は十分可愛い。あとは笑顔だよ？」

「うん…やってみる」

「よし、君の可愛さなら誰にも負けないからな…って、なに？　プリミル」

いつの間にかプリミルが矢島の隣に立っていた。その顔は微笑みを称えているが、その裏にある邪気を、吸血鬼のハーフであるノア

は明確に感じとり、二、三步ほど距離を取った。

「あなた・・・いくらノアちゃんが可愛いからって、私以外の人に
”可愛さなら誰にも負けない” ってのはダメよ？」

「あっ、すまん。許してくれ」

「だゝめ！ 今からみっちり体に刻み込んであ・げ・る」

「え…なに？」

矢島はやっとその事に気付いたのだろう、彼の額には冷や汗が流
れていた。

「あなたは私以外の『女の子』に”可愛い”と言ってはならない！
あなたの愛を受け止められるのは、このプリミル・プリミッシ
エルだけでいい！」

プリミルは、まさに新しい『ジョジョ立ち』とも呼べる、人体構
造を完全無視したポーシングをした！ その姿は、奇妙でありなが
らも何者をも注目させ、魅惑的な色気を醸し出す究極のポーシング
ッ！！

コレがッ！！

『女の嫉妬』だアアアアッ！！

「だからッ！！」

「わッ！！」

プリミルはいきなり矢島を押し倒し、彼の腹の上、つまりマウン
ト・ポジションを奪った。

そしてそのまま…

「私はあなたを…お慕い申しております…」

「うむっ…」

プリミルは、矢島に情熱的で初々しい、キスをした。

「う~~~~」

矢島はこの行為が周知の目に晒される事に、ちょっとした恥ずかしい思いはしたが―そのままプリミルのされるがままに従った。

「ぷはっー」

プリミルは勢いよく唇を離して大きく息を吸った。彼女の目はまさに獲物を捉えて捕獲したあとの達成感に満ち溢れていた。

「ねえ、さっきのキス…ファーストだったのよ。 どうだった？」

「あ……………うん」

「ねえ…答えて」

「オレンジ」

「へ？」

「オレンジの味がした…」

正直、あまりに咄嗟の出来事だったので頭がついて行かない。ただ覚えているのは…甘酸っぱい青春の味。オレンジ。

「他には？」

「あ~~~~重い…ぐはっ」

実は矢島の胸、つまり肺の真上にプリミルがマウントしていたの

で呼吸が僅かしか出来ない。それは彼女が全体重を矢島にかけているからである。約（秘密事項です）キロ。

「ああ、ごめんなさい！」

プリミルは急いで矢島を解放する。やっとプリミルの拘束という呪縛から逃れられた矢島は空気を肺にたくさん送り込む。

正直、あれはシャレにならない程ヤバかった。いきなりマウントはねえ…

「もう…強引なんだからッ！」

「強引って言ったってなあ…俺の純潔を…」

クラス全員が見てる前で夫婦の如く言い争う二人は、それから十分後に周りから白い目で見られている事に気付いたのだった。

―メイド喫茶、開店―

「お帰りなさいませ。御主人様！」

開店してから早くも十分。教室内は見事な満員だった。その中で、ノアは忙しく動き回っていた。

「お…お帰りなさいませ、御主人様！」

いまだに慣れない挨拶をする。

しかし、コレが定番であると、女子からみっちり教育はされたので、一応は合っているはず。

しかもノア自身の性別は男の子なので、なんというか…自分を騙しているように感じてしまい、ちょっと違和感を感じざるを得なかった。

「一番テーブルにノアちゃん指名で〜す！」

一息も付く暇がない。何故男の子である自分がメイドなんてしているのだろう。凄く虚無感を感じるが、一応は仕事。ノアは急いで一番テーブルに向かった。

「むっふっふっふ…」

「あ…新聞の…」

一番テーブルに居たのは、つい先日ノアを取材したあの女子生徒とetc.

まあ…嫌な予感はします。

「やあ、よく似合いますよ」

「あ、ありがとうございます…」

正直それは嬉しい。上手く女の子になれているか些か心配だったから、当の女子から似合うと言われたら結構うれしい。

「ご、ご注文はいかがなさいますか？」

「いえ、別にいいわ」

「え…でも」

「私達がオーダーしたいのは、あなた。ノアちゃんの取材及び写真の撮影権の独占よ」

『構いません。その代わり、別途高額料金が掛かりますがよろしいですか？』

「うわっ！ 会計担当さん…」

この人、会計担当こと『ミルフィオリ』さんはいきなりノアの隣に出現。 まあそりゃ吃驚しましたとも。

「ミルフィオリさん…どういう」

「大体値段としては…金貨三枚で権利を売りますがいかがでしょうか？」

「いや、まだです。 確かにそれだけの価値は有りますが、此方とて退くわけには行きません。 金貨二枚と銀貨四枚で」

「…金貨二枚銀貨八枚」

「金貨二枚銀貨四枚」

「金貨二枚銀貨…五枚」

「金貨二枚銀貨四枚ッ！…」

「…はあ、わかりました。 金貨二枚銀貨四枚で手を打ちましょう。 ただし、時間は十分だけです。 ではごゆっくり」

会計担当…じゃなくてミルフィオリさんはその女子記者さんから金貨と銀貨をやりとりし、その後何もなかった様にミルフィオリさんは持ち場に戻った。

…まさかミルフィオリさんが僕を売った…なんて無いよねえ

「ノアちゃん」

「は…はい？」

若干目の前の取引に暫し呆然となっていて、女子記者さんの呼び掛けに過剰に反応してしまった。

これからの最悪の予想が当たらないといいのだが…

女子記者さんはその席に座るように促した。

「ノアちゃん。とても似合ってる」

「ありがとうございます」

「今の心境はどう？」

女子記者の顔はさっきまでのディーラーの様なヌケヌケとした顔つきではない。今の彼女の顔は一流の新聞記者の顔だ。

「とても恥ずかしい…です」

ノアはもじもじと答え、女子記者さんは淡々とメモ用紙に文字が羅列されていく。

「あらあら…じゃあ、楽しい？」

「はい！」

これは本当。

好きとかそう言った感情じゃないが、何というか…人の反応が面白い。そうじゃなきゃやってらんない。

「楽しい、と。じゃあ次ね。ノアちゃんは男の子よね？」

「はい。男ですが…」

「アレ、はどうしたの？ パンツに隠してるの？」

うわーなんてことを言ってくれるんだよ…。実はノアの”男の証明”はパンツにそのままある。だってしょうがないじゃないか。スペースがないんだから。

「どうなの？ 男の証明のほうは…ニヤリ…」

女子記者さんはニヒルな笑みを浮かべる。まさか狙っていたのか：狙っていたな。

ぶっちゃけ、アレは…その…失礼だけど…『〇〇寸前』なんです。

その、網タイツっていうのかまあそんなものが僕のアレを刺激するとうか：心地よいとうか…。

真面目にアレが人前で『こんにちは』したら一発で身の危険とうか：まあ、男の子だから仕方ないよねっ！

「んっ：ちよつとイカ臭くない？」

その言葉を聞いて心臓はドクドクとかなり早いペースで脈打っているのをノアは感じた。

「嘘よ。ウソパチ。そんな顔しないで」

「うきゅ」

「んあっ！可愛いわ」

嘘でも言わないでください。心臓に悪いです。

「じゃ、最後に写真撮影と行くわよ！ジツとして」

女子記者さんはどこからともなくカメラを取り出し、その事にノアが呆然としている間に彼女は写真を取りまくる。

「もうちよつと恥じらいを感じさせて、あ、いいいいよその調子で。次は：そうっ涙目よ！その表情最高よオオオオーッ！！」

「ふえっ！ふえええー！」

女子記者の連れ、つまりさっきetc.でまとめられた人達も一丸

となってシャッターを切る。

女子記者さん以外はフラッシュは炊いていないのでそこまで眩しいことはなかったのだが、ノアの中で何か大事なモノがガラガラと音を立てて崩壊するのをノアはひしひしと感じていた…

―午後5時―

あの男としてのモラルが崩れ去ってから早くも終わりの時間がやって来た。

このクラスの出し物のメイド喫茶は大反響をもたらしたらしく、開店してから一時間、また一時間と時間が経つにつれてお客さんの数が増え、一時は行列さえ出来た程だ。

その中でもノア・レッドフィールドことノアちゃんはその店の顔だった。彼女：じゃなくて彼目当てに来る客がかなりの量に達したのだ。おかげさまでかなりの儲けが出たと会計担当のミルフィオリは語る。

「お疲れ様、ノア」

「良かったわ。 本当に女の子みたい」

やっと終了して服も着替えずに一息ついている時、矢島とプリミルが話しかけてきた。それに笑顔で返す。

「なあ、クラス全員で記念撮影するんだ。 集まられて言っていたぜ」

矢島が指差す先には人だかりが出来ており、その周りは机を片付けて写真撮影のスペースを作る男子生徒の姿があった。魔法を使わずに持って片付けている。男子は何もなかった罰として魔法を使

わずに片付けをするように言われているらしい。

「野郎ども、後でノアちゃんの生写真が貰えるそうだし！ だから速く片付けやがれッ！！」

一人の男子生徒がそう宣言する。すると他の作業している男子生徒も一段と動きのキレが鋭くなり、早三分で終了した。

「やったわね。じゃ、速く並んで」

学級委員のカリィがそう呼び掛ける。ノアはそれに従って適当に並ぼうとしたが…

「ノアちゃん、あなたは真ん中よ」

プリミルがノアを引き留めた。彼女はノアの腕を引っ張って真ん中に立たせ、自身はその右隣に座った。

「じゃあ、俺はノアの左側にすわるぜ。いいよな？」

ノアは快く承諾し、矢島を座らせた。他の人達がブーイングをやり始めたが、プリミルの鋭い眼光に、いかにしてノアの後ろを陣取るか考え始めた。…なんというか、プリミルさん怖いです。

「行くわよ」

よく写真撮影の際に使われる大きな機材が目の前にあった。

写真の撮影係はあの女子記者さんがやるらしい。あんな大きな撮影機材をどこで入手したんだろう…？ 後でなんか写真集でも出す気なんだろうか？

「はい、チーズ」

一瞬のフラッシュが炊かれる。少し眩しいと感じたがすぐに回復し、それからまた一回撮影した。

「はい、おっけーでえーす！ 写真の現像は明後日には出来るからその時に配りまーす」

女子記者さんは素早く機材をアタッシュケースに収め、さっさと教室を出て行った。多分新聞と写真の現像をしに行ったのだろう。

で、現像した写真を焼き増し、売りに出すんだろぅなあ…

「ふう…伊藤と一緒に写りたかったな…」

矢島はそこで小さく呟いた…。

MODERN LOVE (後書き)

終わるのが早すぎ。

実はもっと文化祭を書きたかったんですが、それじゃ完璧に学園じやないかと。

ファンタジーに戻します。

血闘編―Killer Queen

人類の社会には思想の潮流が二つあるんだ

人の命より価値があるという説と

命に優るものはないという説だ

人は戦いをはじめるとき、前者を口実にし

やめる時に後者を理由にする

それを何百年何千年と続けてきた

銀英の言葉

―リンドバーグ国―

その日、メサイア大陸は厚い雲に覆われていた。日の光がうつすらとしか届かず、更に雨も降り出していた。

その日リンドバーグという国の王宮では、ある会議が行われていた。

「閣下、ご決断を。やや国力が低下してきているクルドを我が物にするのです」

低く響き渡る男の声。

閣下と呼ばれた者暫しの間をおき、こう告げた。

「…つまり、クルドに対して宣戦布告を行え、と…こういう事か？」

その声は高く響き渡り、周囲の者の心に問いかける。

「はい、そのとおりです。現在エンプラスといささか仲が悪い状態で、ついこの間はクルド国の一つの村が壊滅したとの事。村一つ守りきれない国力ではすぐに決着がつかましよう。」

その低い声を発する人物：『アルセム・ジョイ』は静かに彼が使える主人を諭す。

「…そなた、なにか企んでいるのか？ クルドに対して何故そこまで固執する？」

冷たい眼光をアルセムに叩きつける高い声の人物は、彼に問う。
アルセムはゆっくり口を開いた。

「いえ、特に何も御座いません。今がチャンスと感じたからです。
『キラークイーン』：」
「それは止めると、何度言ったら分かるのか？ それはただのあだ名だ」

『キラークイーン』と呼ばれた人物は、冷ややかな目でアルセムを見る。アルセム自身は既に何度もその目で見られているので慣れたものと、華麗にスルーしている。

「いつも通りでよい。アルセムよ」
「は、では：『冷酷な女王』：リア・リンドバーグ閣下」

リア・リンドバーグと呼ばれた人物は弱冠十六歳でリンドバーグ国の女王に君臨した。容姿は未発達の部分はあるものの松下と同じ程の身長だ。

「お主は一言多いの」

リアは呆れ顔で言った。当の本人はまるで聞いちゃいないようだ。

「しかし…クルドか。最近部隊が増設されたらしいが、そなたはどう見る？」

「…AWAKEN、ですか。あれはただ単なる守衛部隊の一角だと聞いていますが、対して戦力にはなりませんまい」

「そうか。わかった…クルドに対して宣戦布告の発表をする。報道陣を集めて演説を私自らする。準備せよ」

「はっ！！」

アルセムはその言葉を聞き、すぐさま準備すべく足早にその場から立ち去った。

「やれやれだわ…よりによって戦争とはね。厄介なものね」

リアはハア…と溜め息を付くと、自身の演説の言葉を考え始めた。

リンドバーグ国はもともと女系の者が王位を継承するという風習がある。なぜなら昔、それまで男が王位を継承してきたのだが、ある一人の男が徹底的な男尊女卑の考えをもっており、多くの女が虐げられてきた。

ある者は性奴隷として売られ、ある者は農業などに従事させられていた。

しかし、今の女王、リアの祖先である女性がその王を殺害し、王位を剥奪したのがキツカケで男が治めるより女がした方がいい、という考え方が誕生した。そしてその考え方は現在も引き継がれている。

「さて、私も演説の言葉を考えるとしよう…」

リアは席を立ち、急ぎ足で自らの部屋に籠もった。

―それから、二時間後…―

「おい、聞いたか？ クルドとドンパチやるんだってよ」

「聞いたぜ。国力が低下してる今を狙うんだと」

「なんかメリットあるのか？」

「さあ…」

リンドバーク王宮に集まったメディア・報道陣、大使館関係者はだんだんとその数を増し始めている。

その中に、一段焦りを隠せない人物がいた。

「クソッ！　なんてこった…戦争やるのか…！」

その人物はクルド大使館関係者だった。彼はこの演説を聞き、クルドに伝える任務がある。ぶっちゃけ任務なぞどうでもいいのだが祖国の危機である今、この任務は重大なのだ。

「おい、来たぞ…『キラークイーン』だ！」

リアは遂にその会場に現れた。宣戦布告をするためである。

「流石に美しい…」

「あれが…キラークイーン…」

会場はリアの登場に騒がしくなる。余り表に出ないリアを、この

場で見れたのだから。

しかし、クルド大使館関係者にとっては敵になるやもしれない国の元首が目の前にいる、その事で警戒心を強めた。

「皆、静まれ。」

王宮に低いアルセムの声が響き渡る。

アルセムはリアの隣にいた。彼は腰に剣を下げ、リアを守ることの出来る位地に常にいる。

「今から閣下が演説をなさる。私語をした者は首と胴体が離れることになる。覚えておけ」

その言葉でシン…と静まり返る。それほどこの言葉は現実味のある言葉だった。

その時、リアは静かに口を開いた。

『我々、リンドバーグ国は…クルド国に対して宣戦布告をする』

透き通るような冷ややかな声。

この冷たい言葉の裏には、まさに絶対零度の意味も込められている。

『長年クルドとは仲良くしてきた。時には物資を提供されたり資金貸してくれたりした。無論クルド側にそれに見合う対価を支払った。しかし、毎年毎年続けていくにつれその対価が大きくなった。これはゆゆしき問題だ。』

しかし、これにはかなりの嘘がある。

確かにリアが説明したようにクルド側は物資を提供したりしていた。だが、年を重ねるにつれ対価が大きくなったことはない。むしろ縮小している。こういった事実は宣戦布告の為の嘘である。無論、クルド大使館関係者はそのことに気付いていた。

『この宣戦布告には命より価値のある事柄を得る為の布石、言わば足がかりである。諸君らはそのことを覚えていて欲しい』

「冗談じゃない…ッ！　じゃあんたの言う命より価値のある事はなんなんだ!？」

クルドの関係者はたまらずに疑問を発した。これ以上祖国を汚されるのは苦痛だったからだ。

「テメーは死にたいのか？　殺すぜ？」

「貴様には聞いていないッ！　さあ、答えろ！」

そこでブチ切れたアルセムは抜刀しクルドの関係者に向かって切りかかる。ひとつ飛びで関係者の元へ着地し、首に剣をピタリと着ける。

「演説中は喋るなって…いったらうがよお。テメーの耳は掃除してんのか？　ああ!？」

「くッ…」

『止めよ。　殺すな』

間一髪。リアの言葉でブチ切れ寸前のアルセムは従者の首の剣を下げた。

リアはもの言わぬ絶対零度の視線でアルセムを戒める。

『その者はクルドに宣戦布告のことを知らせる義務があるのでな。流石に非通知では可哀相だ』

従者は一瞬だがリアに感謝した。しかし、所詮自分は国の駒ということに腹が立ちリアに対する感謝はかき消された。

彼女はただ『非通知による開戦』が嫌だから、今は自分を殺さない。これほどの苦痛はない。

『我々は十分な戦力を保持している。この戦力ならば戦争の期間はそうかかるまい。』

「では、何日で首都を落とすんだ？ 1ヶ月か？」

敬意も敬語もへったくれもない、完全にタメ口で従者は聞く。

『お主は口が悪いのう：そうじゃな、一週間あれば出来る』

「それ程戦力には自信があるのか？」

『こちらにはアルセムや、殺戮を得意とする者がいる。ドラゴン部隊がいる。一週間あれば十分よ』

大した自信だ、と従者は感じた。

確かにリンドバーグはなかなか大きく、経済は活気付いている。戦力はかなりのものだろう。

『終わりか？ では行くがよい。所詮そなたらは我が軍門に下る事になる』

リアがそう言うのを聞き届け、従者は退席した。

それを見届け、リアは続ける。

「『安定した平和』とは！ 平等なる者同士の固い『握手』よりも

絶対的優位に立つ者が治める事で成り立つのがこの『人の世の現実』！！これは『円卓のナプキン』よ！世界中の後の者はそれに従わなくてはならない！！」

リアは腕を振り上げ、自ら考える思想を、この場にいる者全員に語る。

その圧倒的なカリスマに、もはや口を出すものはいなかった。

「私の目的とはッ！！ 『力』！！ 『栄光』！！ 『幸福』！！ 『文明』 『法律』 『金』！ 『食料』 『民衆の心』！！ この私がッ！！ 全てを手に入れて『安定した平和』を創造しなくてはならないッ！！ その為に我々はクルドを手に入れるッ！！」

弱冠十六歳の娘が、まだそこまで世間を知らない娘が、こうして自らが目指す人類の幸福の為に計画を語る。

メディア・報道陣はその一つ一つの言葉に、いつの間にか引きずり込まれていた。

「これが、全て」

そうリアは言い、踵を返して宮殿へと戻っていった。

そして、その演説は後々の名演説として語られ、その演説が生み出した世論効果は絶大なものとなったことは間違いない。

t o b e c o n t i n u e d . . .

血闘編―Killer Queen（後書き）

おお…ファンタジーらしいじゃないか…

ネタとしてはステイル・ボール・ラン二十巻の大統領。

Seven Seas of Rhye

自国民を戦争に巻き込む前にためらわない指導者は、指導者として失格だ。

b y ゴルダ・メイア

リンドバーグの歴史的な演説から約七時間が経過した。

しかし、まだ従者はクルドに着いておらず、宣戦布告という重大な事をクルド側はまだ知らなかった。

その時、松下、伊藤は王宮内にあるホールにて、全部隊の隊長、副隊長が一斉に顔を合わせる会議室にいた。

「私がクルド王国女王直属兼王女私兵部隊の松下と言います。よろしく」

「ついでに俺：私が伊藤です。よろしくお願いします」

その会議の始めは新たに参入した『AWAKEN』の自己紹介だった。

始めに松下、伊藤と続く。

「と、言うわけで彼ら二人が新たに加わります。彼らは私の直属の部分なのでいろいろ指示系統も変わりますが、よろしく願います」

松下の隣に座っているエリン王女が一礼する。 どうでもいいが今日は普通のストレートの髪だ。

いまいちこの王女様の直属の部隊ってのが気に入らないが仕方ない。今、この場にある部隊は全部で六つ。

守護部隊、一般軍の統括、治安部隊、治癒部隊、私兵部隊のAWA KEN、そして：暗殺部隊だ。

暗殺部隊はもともコゼット・アナスタシアが所属していた部隊で、聞くところによれば情報収集、隠密、暗殺など多岐に渡り、超攻撃型の精鋭が集うエリート部隊。

だが、表にあまり出ないのが幸いしたのか変態が多いとのことだ。コゼットによれば、ロリコン、武器商人、刃物の美しさを追求する者など一般的なものから想像すらぶつちぎりで超越するような嗜好をもつ者がいるらしい。

「わかった。よろしく頼むよ、松下さんと伊藤くん」

すると、一人の男が手を差し出してきた。とてもイケメンな男で年は二八歳といったところだろうか。

顎髭も貫禄を示している。まさにイケメンだ。

「あなたは？」

「ああ、私は暗殺部隊隊長、ハンス・ウルリッヒ・ルーデルっていうんだ。よろしくな」

ハンス・以下略の手を松下は握り返す。そしてしっかりとハンスの手の暖かさが伝わり、ほどなくして手を放す。

「ところで松下くん」

「はい？」

「敬語はいらないよ。ここは円卓会議だからね。ま、王女様は敬

語付きだけど」

今、会議室で行われているのは通称『円卓会議』。大きな円卓を囲み、それぞれが自由に意見を出し合う場だ。

その際には敬語は邪魔、という理由で敬語は使わないらしい。

「わかった。ハンス」

「ものわかりがいいね。ところで、君は小さな女の子は好きかい？」
「…え？」

小さな女の子…？ なんのこっちゃ。

隊長クラスだから別に変態ではないはずだが…。

まあ適当に答えよう。

「個人的には可愛らしいと思うが…」

「違う違う。君は小さな女の子に興奮するかって話をしているんだぜ」

ああ、小さな女の子が好きか聞いているのか。なら俺もリベリアがいるから………なんですとオオオオーツ！！

「それって…もしや…ロリコンか…？」

「そうだ。俺はロリコン、小さな女の子が好きなんだ」

そう言うと、ハンスは懷から数枚の写真を取り出した。

「こいつを見てくれ。どう思う？」

その写真は…可愛らしい女の子が映った、盗撮写真らしきものだ

った。…いいのか？ 犯罪じゃ…ないのか？
まあとりあえずその殺気立った目を止めてくれ。

「…とても、可愛らしい…な」

「そうか…同志よ、歓迎する」

そして再び握手。

なにを期待しているのかは知らないが、何かしら巻き込まれる気がした。

そして、何故暗殺部隊が変態なのか、すこし理解した。

「私は治癒部隊隊長のローザ・ルクセンブルクよ。

まあ、趣味は花を鑑賞することですけど」

松下はハンスの手をほどこいた後、席に座った。ハンスは…変態だ。次に自己紹介したのはローザ・ルクセンブルクという女性だった。

髪は金髪で長く、歳はさほど松下と変わらないようだった。

「松下さん、あなた…花は好きかしら？」

花…？ 花か…

「自分としては、ガーベラが好きだが…」

「ガーベラ？ 知らないわねえ…」

ローザは首を傾げる。それは無理もない。異世界に『ガーベラ』

という名称の花は存在しないのだ。

松下の元の世界の情報は、この異世界では一切通用しない。ただし、自然現象、科学ではその限りではない。

「さ、済んだわね。じゃ、本題に…」

『王女様っ!!!』

その後も部隊長たちの自己紹介も進み、会議は本題に入る、まさにその時だった。

リンドバーグより帰還した従者がクルド王宮に到着したのだ。

その知らせと従者が伝えてきた情報を持ってきた執事は大慌てで会議室に入ってきたのだ。

「少し落ち着きなさい。で、何が大変なのですか？」

「はあはあ…リンドバーグがつ、宣…布告を…」

「だから、落ち着きなさいって。ったく、伊藤、椅子を貸してやって。」

「…ん、わかった。ほら、座りなよ」

伊藤はそう言って執事に自分の席を譲り、座らせた。

執事は息を整え、伊藤に謝辞を述べた。

そして、重い口をゆっくり開いた。

『リンドバーグが、わが国に対して宣戦布告をしました』

その瞬間、部屋の空気が凍りついた。

Seven Seas of Rhye (後書き)

ハンス・ウルリッヒ・ルーデルって知ってるかい？

ナチスの事を勉強してる人なら知ってるかも知れないけど、この人はナチスドイツの英雄です。

なにしろその戦績が余りにも突出しているから、スターリンが演説の中で「ソ連人民最大の敵」と名指しで口撃した事さえある人物で、また、全国防軍将兵の中で唯一

「黄金柏葉剣付ダイヤモンド騎士鉄十字勲章」

を授与された人物。勲章名無駄に長いな。

最終階級は大佐らしい。

ローザ・ルクセンブルクって人も歴史人物。

ユダヤ人でポーランド人、しかも女性の社会主義者。結局は反革命の兵士に殺されてしまう。

名前が浮かばないから歴史人物を使いました。

一部Wikipedia抜粋。

なんか：こんな駄作を読ませてしまって申し訳無い。
願わくば、クラス的女子にこの小説が見つかりませんように…

Of the Wall (前書き)

今回キモイです

Off the Wall

平和は神から人間への贈り物ではなく、人間同士の贈り物であることを忘れてはいけない。

b y イーリー・ウィーゼル

『リンドバーグが、我が国に対して宣戦布告をしましたしました』

その言葉を素直に受け止められなかった。

エリンはその顔に汗が伝っていくのを感じた。

「それは：どういうこと？ 説明して」

「はい。約数時間前、リンドバーグ国王のリア・リンドバーグ女王が我が国に対して宣戦布告をしたということです」

「待て：あの『キラークイーン』がか！？」

「はい」

ハンスは頭を抱え、机に伏せる。松下はそんな彼女を見て疑問に思った。

「なあエリン、そのキラークイーンってのはなんだ？」

「知らないの？ 呆れた：」

エリンは頭に手を当てて嘆いた。伊藤はさっきからいわゆるKY D（空気を読んで黙る）をキメ込んでいるために一向に喋ろうとはせず、結果的にKY（空気読めない）な人物は松下となった。

「いい？ 後で調べなさい。今は会議をするわ」

「久々にあんたが王女らしい姿を見た…」

「はい席に着け」

教えろよ、と思いつつも渋々席に着いた松下は手元にある資料を手を取った。

「今からする予定だった会議は後でやるわ。今はこの事態をどうするかよ」

「まさに、『君ならどうする？ この状況。』な訳だな」

「そう、この状況を打破しなきゃいけない。王族として、義務は果たす」

エリンはいつもの只の娘の目ではなかった。彼女の目は、確かにこの国を守る義務を背負う王族の目をしていた。

その言葉に感激をしたのか、円卓を囲む国の官僚並びに部隊長が立ち上がる。

「やるしかないわ…全面的に開戦する。異論はある！？」

「無いぜ、国は俺らが護るんだ。好き勝手にやらせるかよ！」

「やれやれ、一般兵士の訓練に力を入れなきゃなりませんね」

国を守る守護部隊長と、一般軍の統括はそう意気込む。無駄に守護部隊長は熱い奴だ。統括は冷静だが。

「分かったわ。一時間後、大広間で演説を行う。各員、準備を頼んだわ！」

「了解ッ！！」

全部隊長は急いで会議室を退出する。松下と伊藤もそれに倣うように退出しようとしたが、その時エリンが二人を呼んだ。

「なんだ？」

「あんた達はする事が分からないでしょ？ 護衛として私に付いておきなさい」

「あいよ了解」

エリンの命令に、今までKYDを貫いていた伊藤が答えた。

―クルド王宮―

その王宮内はまさに静まり返っていた。

既に喋ろうとする輩はいない。皆、この後に行われる演説を聞きにきたのだ。

今ここにいる者はメディア、報道関係者と部隊長、更に各界の幹部、クルドの住民だった。

「行くわよ」

「ああ、了解」

「同じく」

三人はゆっくり会場に入場した。エリンが先頭で二人が後ろを固め

る。

「皆様、この忙しい時に集まってくださり、ありがとうございます」
最初にエリンは深々と一礼をする。その際に髪が垂れるのを鬱陶しいようにエリンは髪をかきあげた。

「母は今、とても忙しいので私が皆様にお話します。メディア・新聞関係者の方々は既に知っておられるでしょうが：先ほど、我が国と友好関係にあったリンドバーグが宣戦布告を我が国に対して発表しました」

一瞬、場内は静まり返った。皆、信じられないと言ったように目を丸くしている。

「理由は：詳しくは聞いておりませんが、これはゆゆしき事態と考えられます。我が国の閣僚と部隊長で話し合った結果：リンドバーグ国と全面的に開戦をするという結論にたどり着きました」

『それは、どういった理由でしょうか？』

演説を聞いていた記者が質問をする。

「これは明らかにリンドバーグ国による侵略戦争になると考えられたからです。皆様の知っている通り、リンドバーグ国の女王はあの『キラークイーン』と呼ばれる程の非情な方。ですから我々は開戦に踏み切りました」

ここに来ていた聴衆は、”キラークイーン”という単語を耳にした途端に顔を青くしていった。「あ：あのキラークイーンと：」と呟いている者もいた。

松下と伊藤はキラークイーンがどんな人物か知らないが、相当恐れられていると理解した。

「戦争に負けた場合、我が国は確実に崩壊し、リンドバーグに接收されましょう。だからと言って抵抗しないのも意味がありません。古来より我々が住み続けて来た土地を明け渡す気は王族として：一人の一市民として：ありません。ですから：我々と、戦って下さい：！」

声を震わせながら一言一言の言葉を紡ぎ出すエリンの頬には、涙が伝っていた。

それに感化された聴衆も次第に座っていた椅子から立ち上がる。

「もし負けた場合は：私は死にます。私はこの戦争でその位の覚悟を持って挑むつもりですのでよろしくお願いします」

エリンは再び深々と一礼する。王女の覚悟を知ったり聴衆は一斉に手を叩き始めた。

松下はその様子を見て、彼女への評価を再び改めるのだった。

TO BE CONTINUED：

Sign

戦いにおいては、敵と味方の兵力のバランスが勝敗の4分の1を決める。そして、戦いの4分の3は戦士の勢いで決まる。

ナポレオン・ボナパルト

松下らがこの世界に召喚されてから約八ヶ月になる。この期間で彼等はこの世界を学び、社会に参加してきた。

しかし、今回ばかりは頭が上がらない問題が浮上してきてしまった。リンドバーグ国がよりによって宣戦布告をしてきたのだ。

今まで日本という平和そのものの国で育ってきた松下・伊藤にとっては正に厄介な事だった。それは、彼等が国を支える部隊の一端だからだ。つまり戦士。

今までドラゴンやらグールやら倒してきた青年達だが、今度の敵は人間だ。抵抗が無い訳がない。

「どうすりゃいいんだ…」

『AWAKEN』の専用の個室で松下は頭を抱えていた。

「どうしたの？ そんな頭を抱えて」

「ん、コゼットか。いや、今度の戦争についてな…」

コゼットはそんな松下を見て首を傾げるように言った。

「隊長はどうせ千人切りでもしたことあるんでしょ？ 何を悩んで

いるんだ？」

「どんな発想だ！？ 俺は人間を殺した事が無いから悩んでるんじゃないか……」

コゼットから千人切りという言葉が出た事が正直驚きだ。彼女からそんな風に見られているとは……遺憾である。

「だって貴方、ドラゴンをズバズバ殺っていたじゃないか？」

「いや、違いますから。俺自身そんなに強くはないから」

そこまで誤解されていたとは知らなかったな。別にドラゴンスレイヤーじゃないんだが。

松下は今の自分の心境と自らの育った国の事をコゼットに話した。彼女はあまり興味は無い様だが、取り敢えず説明してみた。

「……つまり、隊長は人間を殺害することに抵抗があると言いたいのか？」

「そうだよ」

理解し難いように言うコゼットに、俺は念押しした。

日本では戦争といっても六十年前の第二次世界大戦と受験戦争しか無かった。ここに平和ボケしてきたツケが回ってきたのか。

「敵を討つのに戸惑いや迷いを感じる、ということだ。俺は人を殺した事はないし、人間同士での命のやり取りの経験はない」

「……………」

そこでコゼットは押し黙ってしまった。頬に手を付き、何かを考えているようだ。そのまま松下も黙り、気まずい雰囲気場を支配する。

その空気の中で先に口を開いたのはコゼットだった。

「隊長、捕虜でも死刑囚でもいい。一人殺してみればいい」

冷たい声で平然と酷い事を口に出すコゼットは何も表情を変えずにいる。流石の松下もその言葉には静かに激怒した。

「コゼット…命を軽く見るな。軽々しくそんなことを…ちょっと待て、お前…人を殺した事はあるのか？」

「ある」

コゼットは即答で答えた。

そう言えばコゼットは『AWAKEN』に来る前には暗殺部隊に居たんだったな。で、小さい頃から鍛えられていたと。

「…その時の記憶はあるのか？」

「正直あまり覚えてない。実家が代々軍の役職につく家系だから鍛えられていた」

コゼットは顔を俯かせ、あまり思い出したくないように言った。成る程、あまりいい事じゃないからな…深く聞いたら失礼だろうからあまり聞かないでおく。

コゼットは何かを思い出したように松下に向き直った。

「ところで、隊長は”メガリス”って知っているか？」

「メガリス？ バンド名か？ エースコンバット4か？」

コゼットは更に渋い顔をした。む、意外と綺麗な顔に渋い顔はギャップ萌えというかなんつーかそそられる物が：

「…”メガリス”は、とある殺人鬼に付けられた二つ名だ。確か、意味は”確かなる狂気”だったか：まあそんな感じ。」

「ふーん。で？」

「前、この国に現れて村を一つ壊滅させたらしいの。村人を刀一振りで虐殺して村の建築物を魔法で焼いたり」

虐殺に放火：なかなか凄いヤツだ。現代でいえば、女性ばかり狙ったジャック・ザ・リパーというところだな。俺には真似出来ん。

「それが話によるとこの国の軍関係者らしい。単なる噂だけだね」「つまり俺にその…”メガリス”ってヤツみたいになれ、と？」

「そうじゃない。隊長は意外とそんな殺人鬼になれそうだけど、期待はしてない」

コゼットよ、俺に対してそんな偏見を持たないで欲しい。俺は立派な人間で鬼じゃないんだ。

俺は善良な人間の見本と言える人徳の深さと懐の大きさを持っているつもりだ。その誇りを殺人鬼という悪一文字で汚したくはない。

「じゃあ、俺にどうしろと？」

「別に…」

無いのかよ…ダメじゃん…

松下は無情な落胆を味わった、気がした。

―リンドバーグ国―

その日、アルセムは机に向かって事務作業をしていた。事務作業とは言ってもただ単なる書類の処理で特に苦はない仕事だ。

「貴様…見ているな？」

アルセムは振り向きもせずに、『後ろにいる人間』に対して言った。

「流石はアルセム…ねえ。よく私の気配に気付いたね…」

「貴様のようにいつも殺気を発しているヤツなら赤子でもわかる。で、なんだ？」

後ろにいる『女性』…にアルセムは問う。

「フフ…私の活躍の場はいつ作ってくれるんだい？ 私の剣が血を吸いたくて疼いているんだ…。いつ血を浴びれるんだい？」

ニヤリと嫌みな顔でその女は答えた。腰には刀が差しており、女はそれを抜きそのままアルセムの首元へ突きつける。

アルセムは横目でジッとその突きつけられた刀を睨んでいる。

「私は一週間に数人は殺さないと気が落ち着かないんだ。このまま

あんたの首を返答次第で切り落としてもいいんだよ!」

ニヒルな笑みから修羅のような顔になり女は声を荒げ、アルセムの首元を刀でなぞるように伝える。そのなぞられた後には赤い血が数滴、アルセムの首を伝う。

「やれやれ、鬼と言われるだけの迫力と実行力はある、か」

アルセムは腰に差していたレイピアを瞬時に抜刀し女の首元に突き付け、女を睨んだ。

「フン…防御しないのか」

「あんたに殺意がないからねえ…今すぐ此処であんたを始末してもいいんだよ?」

「それは困る。貴様とは違っていつも兵士をするわけにはいかないからな」

女は刀を下ろした。

それを確認したアルセムも溜め息を尽きながらも自身のレイピアを鞘に納める。

「…お前は二日後、クルドの軍事基地を襲ってもらう。後は…好きにしろ」

女はそれを聞いた途端に嬉しそうな笑みを浮かべ、アルセムに背を向けて部屋を出て行った。

一人部屋に残ったアルセムは一人こう呟く。

「…死ぬかと思った」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
.
.

Sign (後書き)

洋楽のネタが尽きた。

取り敢えず今の題名は日本語で。

パソコンが手に入ったら今話のようなグダグダにはしない。

ケータイだとなかなか話が作りにくいので、パソコンが手に入るまでは我慢してください。

パソコンは年内には入手する予定です。ですのでそれまでグダグダに付き合えない！って人はお気に入りから外すなり何なりと構いませんから…

We Will Rock You (前書き)

今話は接合したもので、いきなり場所が変わります。

つまらん

We Will Rock You

人類は戦争に終止符を打たなければならない。そうでなければ戦争が人類に終止符を打つことになるだろう。

by ジョン・F・ケネディ

―クルド城―

宣戦布告から数日。未だリンドバーグは攻撃の行動を見せていない。

松下と伊藤はとりあえずリンドバーグ女王のリア・リンドバーグについて調べに図書館に来ていた。

「松下様、伊藤様」

ふと後ろで呼ぶ声がある。

そこにいたのは司書さんだった。女性。

「リンドバーグ及びキラークイーンについてのまとめ資料を作成しました。是非御一読下さい」

そう言って紙が分厚く乗せられてホッチキスで止められている。ホッチキスがあったのが正直ビックリしたが、とりあえず二部を受け取って謝辞を述べた。

とりあえず図書館の机とテーブルを借りてじっくり読もう。場所を司書さんに聞いてみた。

「あちらに」

司書さんが指差した方向には椅子とテーブルがあった。
真っ白い机だ。机の上にはいくらかの本が山積みになっている。

「わかった。ありがとう」

「いいえ、では」

司書さんに再び謝辞を述べてテーブルの方へ行き、椅子に座った。

資料として纏められたしおりはカラーではないが印刷されている。
第一章はリンドバーグの歴史からだ。

「あゝ飛ばそう」

歴史にはあまり興味が無いので次に第二章を読んでみる。
ちなみに歴史のページは無駄に文字が羅列されていて読む気にも
なかったのが本心。

第二章は『キラークイーンについて』

「松下、第二章に書いてある」

「分かってる。今開けたところだ」

二人はじっくり読んでいった。

『リア・リンドバーグ：通称キラークイーンと呼ばれるのには訳がある。』

彼女は小さい頃から戦略・政治の知識を頭に叩き込まれ、将来の王に相応しい学習をさせられていたようだ。
そのせいか、彼女は死という感情に疎くなり、インフィールドの虐殺を生み出したようだ。』

「インフィールドの虐殺…？」

「松下、p38に書いてあるぞ」

『インフィールドの虐殺…リア・リンドバーグの命によって起こされた虐殺事件。』

リア・リンドバーグによって命令を受けた暗殺部隊がインフィールドにある刑務所を襲い、全員を殺害した。
動機は不明、リア・リンドバーグは後にキラークイーンという名前を拝命する』

「…なんと」

「今噂のメガリスもビックリな内容だな…」

次のページにはその事件の詳しい解説がされてあった。

殺害人数、陣頭指揮者、構造…etc

シロクロだが写真も掲載されている。

その中で、松下は一つ気になった場所があった。

「ネメシス（凶星）…か」

第五章、ネメシスについて

『ネメシス…インフィールド事件において陣頭指揮を行い、自身も殺戮の限りを尽くした人物。』

正体は計り知れないが、唯一分かる事は女性であることのみ。
殺戮部隊の隊長であると推測され、戦場においては唯一の単独行動

権を保持していると見られる。

故にその殺人の手際は鮮やかである。

腰に帯刀している刀で返り血を浴びながら敵を切り裂く様はリンドバーク軍から恐怖と畏怖を持って”ネメシス”というコードネームを与えられた』

「メガリスとネメシス：か」

松下はこの名に奇妙な因果を感じた。

将来出会うようなーいや、出会わなければならぬ気がした。

しかし：図らずも彼らは必ず出会うことになる。それは、同じ殺人鬼としての運命だろうか、知るものはいない。

二人はその後、『リンドバーク家の家系』、『国家間の因縁』をパラパラとめくった。

「伊藤、お前は人を斬る覚悟はあるか？」

「：はッ、松下のような奴がそんな弱気なのか？」

「言ってくれるな」

「はは、すまん。ただ、言えることはなあ：その時次第、て事だよ」
「その時次第：ね」

いかにも伊藤らしい答えだ。

彼も人を斬ることはちゃんと理解しているはずだ。それを”その時次第”とは…。

ま、確かに一理ある答えでもあるが。

「戦争：か」

伊藤はポツリと漏らした。

「考えてみりゃ、俺達はずっと平和ボケしてたのかもな」

「俺達の日本には受験戦争ぐらいだからな。ボケてても仕方ないさ」

故郷の日本は、戦争なんて無かった。だが、それは一時の平和かもしれない。

いつ核が落ちてくるかわからない。

いつミサイルが来るかわからない。

そんな情勢の中で呑気に平和ボケをしていたのだからある意味恐ろしいものだとか常々感じる。

「まるで生まれた時から滅びへの道を歩んでいるようだな」

伊藤がらしくない事を言う。

こんな感傷に浸っている伊藤に接しているとなんか調子が狂ってくる。いつもならポジティブな奴なのに。

「その時次第、だろ？」

「らしくないぞ、松下」

「たまにはクサイセリフでも喋らせてくれ」

「アンタには似合わねえよ松下」

二人で笑いながら資料を読んでいた。

―クルド城獣小屋―

ここには、松下らのバハムートや、ドラゴン、巨大なサソリ、その他の主に戦争に使われるモンスターを飼育する場所である。

「おうゼロ、でっかくなったなあ」

松下の見上げる先には、かなり大きくなったバハムート零式のゼロの姿があった。

生まれた時には四本の足で立っていたのが、今ではもう二本の足で自由に歩く事ができる。

「グルルル…」

ゼロはしっかりと厳つい顔つきになった。すっかり一流のモンスターになったようだ。

松下はゼロに近付き、足にさわる。

あの黒い卵から生まれた小さな可愛いドラゴンが、こんなに大きくなってしまったことに驚きを隠せない。

もう腕に乗らないサイズに育ってくれたことに少し感動を覚えた。

「なあゼロ、背中に乗っていいか？」

「グルルル…」

どうぞ、と言わんばかりにゼロは鳴き、松下は自身の力でゼロの背中に飛び乗った。

「おっと!？」

ちょっと足を滑らせてしまったが、すぐに体制を立て直す。

三枚の翼を見ると、全く傷一つ無い、まさに鋼翼。嘗て松下に与えられた二つ名だが、ゼロの方が似合う気がする。

「ゼロ、つまらん願いなんだが…空を飛んでくれないか？」

ゼロはYESと言うように鳴き、そのまま翼を羽ばたかせる。ちよっと危険な感じがするのでゼロの頭についている触覚(?)のようなものを掴んだ。

そして下に押し付けられるような重力を感じ、それからの浮遊感。どうやら飛んだようだ。

「うお!? 高ッ!」

既に城は小さくなっている。

そのままゼロは遊泳をゆっくりと開始した。親である松下に気遣いながら。

「グール」

「か…風が結構くるなあ…」

ゼロは体を傾けて旋回する。

実は松下はジェットコースターなどのビュンビュン回ったりやたら早かったりするの苦手なのだが、これは不思議と安藤感があつた。ゼロは必ず落とさないという安心感が実感できた。

「スゲエ…」

眼下に広がる景色は正に素晴らしいものだった。

山はそびえ立ち、街は美しい形をとっている。海は太陽を反射し美しく光っている。

ゼロは楽しむように飛びまわり、松下もそれを楽しむ。あたかも兄弟のような、親友のような戯れ方だった。

それを十分間続けてゆっくりとクルド城に降り立った。

「ゼロ…お前スゲエな」

「グール」

ゼロは頭を松下にすりする甘えてくる。

この仕草は昔よくゼロが嬉しかった時によくやる仕草だ。それを理解しているのが分かる。

「ゼロ、多分お前の活躍が必要になってくるから頼むぞ」
「ギョオオオー！」

すっかり可愛げが無くなってしまったが、それでも松下にとってはまだまだ赤ちゃんに感じられた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

Show Time

戦争は常に人間の最悪の部分を引き出す。

映画 シンドラーのリストより

―クルド国東北国境基地―

「なんだあれ…」

「ちょっと待て…あれ軍艦か!? な…何しにきたんだ!?!」

「空軍…まさか、リンドバーグか!?!」

その日、東北国境基地ではパニックが起こっていた。

元々ここはリンドバーグ国境沿いにある防人の基地、つまり最重要拠点だ。そこに今、リンドバーグ空軍と思われる空飛ぶ船がいた。

そして、その空船には伝説の殺人鬼、『ネメシス』が乗船していた。

「いいねえ…興奮してきたよ…」

女は窓から見える基地の人間を見てポツリと漏らした。

彼女にとって人間とはただの血袋にしか思えない。斬ったら血が出る。それを浴びる。その行為は彼女にとって快感に感じられる。

人間なんてただの血袋だ、私に快楽を与えてくれる道具だ。

私は狂ってるなんてよく言われる。

でも、それは違う。

狂っていない。周りがおかしいだけ。

戦争は常に人間の最悪の部分を引き出す。私はそれを具体的に実行

しているだけ。

人間の最悪で本能的な部分をさらけ出しているだけ。
この世界の人間は制約に縛られているから私を狂ってる、おかしい
と言う。

だったら制約が無かったら？

法律が無かったら？

答えは…

『暴走する』。

空船のスピーカーから声が発せられる。

『総員出撃！ 血祭りにあげろオオオ！！』

その言葉に反応する軍団、全百人。

たった百人で前線基地をぶっ壊そうと言うのだからあまりにも無謀
である。

しかしそれをやってのけるのが、この『虐殺部隊』だ。

「行くよッ！！」

女（以下ネメシス）は空船から飛びだした。パラシュートも付けず
に。

「あ…姉貴いゝ待って下さいよお」

「おら行け！」

次々と隊員が空船からパラシュートを使って着地する。

それを見ていた総勢一五〇〇人余りの警備員は自前の刀や剣、遂には薙刀を装備する者もいた。
皆それぞれ必死だ。人間の本能である生存欲がそうさせる。

抗え。

抵抗しろ。

生きろ。

コレが人間を動かす。きれいな事だけじゃない、人間にはまだいろんな面がある。
愚かだったり、いやらしかったり、危険で悲嘆にくれるときだってある。

それが、人間だ。

彼らは一斉に声を上げて駆け出した。

「いいよいいよ!! その息遣い、私を興奮させてくれるッ!!」

ネメシスは自身の血塗られた刀、『狂瀾』を抜き、その鋭くも妖しい眼光を警備員に向けた。笑みを浮かべ、待ち続けていた一時を体験すべくその足は動き出す。

「さあ、私を楽しませておくれ!! 私を殺しておくれ!!」

―クルド城―

「姫様ッ!!」

またまた部隊長円卓会議中にドアが開かれた。

「…なによ想像しい」

エリンは若干不機嫌そうな顔で見た。

もうこの間の宣戦布告よりは驚かないといたたような顔だ。不機嫌だが。

「はあはあ…その」

「なによ」

「と…東北国境基地が…はあはあ」

「東北国境基地が？」

「ネメシスに襲われました」

「ネメシスに襲われまし…え？」

エリンは目を点にしている。

端から見れば滑稽な図だ。

「…ネメシスに？」

「はい…」

辺りは一斉に静寂に包まれて、人の視線が行き交う。

「…やられた？」

「やられちゃったですう…」

「……………」

「……………」

「……………」

「いやそれヤバくね？」

伊藤がその静寂を破った。いや、そうしないと何も進展しなさそうだったから。

「……う……」

王女は非常識なダメージを受けた！

王女は気絶した！

王女は担架に乘せられ搬送された！

「で、どうする？」

仕方ないので松下が議長を務めることになった。

とりあえず顎髭ロリコンに問う。

「とりあえず、誰かが救援に行くべきだ。東北国境基地はドラゴンの最高時速でなら何とか着く」

「なるほど、誰かが捨て駒な訳だな」

「……まあそうとも言うが」

ロリコンは顎に手を当てて考える仕草をする。

こうして見れば立派な武人である。だが中身はロリコン。ペドじゃないだけマシか……

「ここは最も生存率の高いランクSの松下君が行くべきだな。よし」

……さて、なんつった？

「松下、頑張れよ」

…伊藤よ、一編死ね。

第一Sランクなら伊藤もだろうがッ!!

「松下が良い人」

「ま、そうね。私は医療専門だし」

みんなは手を挙げる。

ローザさん…信じていたのに…

「よし、全会一致で逝ってよし!」

嗚呼この世界は不条理か、今現在我が国がゲスな輩に踏みにじられ、殺され、奪われているというのに。

人間は自分が関わっていない事になるとすぐに無関心だ。

「…いいだろう。俺一人で行く」

なんてシリアスな事を考えながら一人ドアを開けて退出した。

「やれやれ…至急軍を編成、東北国境基地へ救援に向かえッ!!」
「はッ!!」

ロリコンは次々に指令を出し、気絶したエリンの代わりを務める。
ローザは急いで救護部隊に戻り、伊藤も『AWAKEN』の部屋へ戻る。

さっきまでチャラけていたのが嘘のようだ。

「ネメシス…か。奴が出たのなら多分誰も生き残らないだろうな

…。

だが、ネメシスに唯一対抗出来るのはメガリス…彼だけ、か…』

最後にロリコンは呟いた。その彼のポケットには愛おしい女の子の
写真があつたのは誰にも言えない秘密だ。

t o b e c o n t i n u e d . . .

Show Time (後書き)

ネメシスの元ネタは『侍道2』の京次郎だっけ？そんな感じ。

ネメシス書くのは楽しませていただいております。
今話で不満なのは少ない&変なところがあること。

支援よろしくお願いします

One Voice

Experience is not what happens
to you. It is what you do with
what happens to you. — Aldous
L. Huxley

「経験」とは、あなたに降りかかってくることではない。

あなたに降りかかってくることに対して、あなたが対処することが、
「経験」である。

オルダス・L・ハクスリー

「畜生……畜生、畜生ーッ！」

目の前には血塗れの刀を持って次々と仲間達を切り刻んで行く女に、
幼稚な言葉しか吐くことが出来なかった。

そして今、また一人の仲間が首を切断されて地面に落ちるのを見て
しまった。

「く…狂ってやがる、こんな…」女は一人、また一人と人間を斬っ
ていく。その顔は満面の笑みで満たされていた。

—正に、悪魔。

そう呼ぶのが相応しい。

そして、刀でまた一人の心臓を貫き、刺さった死体をそのまま足で
蹴って抜く。

女は返り血を浴びながら微笑み、男の方をキッと睨んだ。

「ここいらで残ったのはあんただけだよ…。今から殺したげる…」

「や…止める！ 来るなよ、おい！」

男はじりじりと下がってはいるものの、すっかり腰が抜けているの
で立てない。

女はそれでもジリジリと近づいてくる。

「くふふふ…あんたの血は何色だい？」

「オ、オレは今から死ぬのか！？」　い…今すぐに「殺し」にくるのか！？　お前は…お前はッ！　オレのそばに近寄るなあぁー
ー
ー
ーッ」

女ーいや、ネメシスは足に力を込めて思い切り地面を蹴り、その力で瞬時に男の側に近づく。

男はもう戦意は喪失し、腰は碎けて武器は手から落としていた。

自分は今から死ぬ、その恐怖と目の前の殺人鬼の殺気に怖じ気づいていた。

男はこんな事を口走っていた。

これは現実じゃないー

「いいや現実だよ」

その惨い現実を突きつけたのはネメシスだ。

ネメシスは淫靡な笑いを浮かべながら近づいてくる。

悪魔、

死。

男はそう思った。

これが現実なものか、俺には父と母がいる。ここで死ぬわけにはいかないーだが、それはこの悪魔によって願わぬ願望と成り下がるのだ。

「いいねえ興奮するよ…。小便垂れて救命を懇願する奴よりは楽しめそうだ…」

「うわ、あ、あ、ああああ」

「私は恐怖に塗れてる声が好きだよ…。さて、どうしようか？　ゆっくりと生にしがみつきながら死んでいくのと、一気に死ぬの」

「う…うわああああ」

「決めたあ…ゆっくり死ね」

ズサッ

ネメシスは刀で男の足を切断する。まずは片足からだ。男が悲鳴をあげる。斬られた足からは黒っぽい血がドクドクと流れ出し、ネメシスの靴と裾を染め上げる。

「大丈夫さ。すぐには死なないようにちよつとづつ殺したげるからね」

「うおおおおお！？」

「次は爪でも剥がすかい？」

ネメシスはそう言う――

自前の針金で男の爪の所に当てて指の中につこみ、真っ直ぐ上に上げる。

「う！？ うおああああ！！」

「そうだよ！ その叫び声が私を興奮させてくれる！！」

ネメシスはすぐさま二本目の指の爪を剥がす。

血が出ようと関係ない。ただそれが楽しい。愉快だ。

男は自分が人間であることを呪った。既に片足は痛みがない。いや、恐怖で麻痺しているのだ。その痛みがやがて襲ってくる、そう考える――

悪夢だ。

「もう…殺…せ」

その事しか頭になかった。いつそ死にたい、舌でも噛み切ろうか…「そうだ、あんた知ってるかい？」

ネメシスはいきなり真顔で問う。

「私は自殺なんかさせないってねッ！！」

奴は懷から――猿轡を取り出した。

「猿轡はあんたが自殺させないように」

ネメシスはそう言うのと、いきなり口に猿轡を突っ込んだ。
気持ち悪、舌が噛めない。

「さて：拷問を再開しようか？」

男は、死ぬことすら許されぬ状況に絶望し、生きようとする意志を喪失した――

◇

「あれか」

松下はゼロに乗り、前方を凝視した。

前方になにやら火の手があがっている。火事が？ いや、何かの魔法か。

地図によればここらへんの筈だ。とりあえずその近くまで行ってみる事にした。

山々の激しい起伏を眼下に、超スピードで疾走する。ある意味ドラゴン種の神であるバハムートのスピードは凄まじいものだった。それもかなり急いでいるためにゼロはほとんど音速の域のスピードを出している。松下が魔法を使わなかったら既に凍死している事だろう。

そのため、呆気なく着いた。

「ゼロは上空で待機な」

「グルル…」

「よし、良い子だ」

そのままバハムートから飛び降りた。

下はかなり高い。だがそれもマテリアによる魔法でカバーする。心底魔法を持っていて良かったと思う。なかったら既に死んでいたな。そのままゆっくりと着地した。

そして前を見てみると：地獄だった。

「なんだ…これは」

目の前に広がるのは人間の死体、血溜まり…想像を絶する光景だった。

ゲームじゃない、リアルな生々しさがそこにある。首は切断されて転がって。腕も武器を持ったまま斬られて。眼球は飛び出していて。生々しい鉄の匂いが辺りを充満していた。

「これは…うっ！」

突如として吐き気に襲われ、膝を着く。

胃液が逆流し、喉が焼かれるように熱いし痛い。

一度その内容物を吐き出した。

「くっそ…この俺をこんなにしやがって…」

すぐさま正宗を出現させ、近くにあった建物を睨んだ。中からは笑い声が聞こえてくる。

許さない。人間を肉塊にして、俺をこんなにして笑い声をあげるだど？

これが同じ人間のする事か？

「殺す」

慈悲は既がない。感情で動く。汚れ仕事は俺の専売特許だ。

その時の松下の目は正に。

闇に染まった阿修羅の如く黒に染まった。

t o b e c o n t i n u e d . . .

One Voice (後書き)

テスト前。

ううむ：松下が最近やたらとでしゃばっているので伊藤をメインにしたい、そう考えています。

あくまで伊藤が英雄、松下は殺人鬼、矢島はまだ学生。それがいいんじゃないか！

Play the Game

Never put off until tomorrow
what you can do today.

訳…今日できることを明日に延ばすな



「みたか？ ああ逃げまとう姿をよお」

一人の男は酒を片手に仲間とだべっていた。

「ケッケッケ…いいねえいいねえ…止められないねえ…！」

「あの怯えきったアイツの顔はクソ笑えたぜ」

「ま、前線基地だろうが所詮はこの程度よ」

「「ガハハハハ…！！」」

男達は基地内の建物の中でたむろしている。一人は酒を飲み、また一人は肉を食って騒ぎ、仲間と祝杯をあげている。他人から見れば、確実に病んでいると言わんばかりの凶行だ。

元々この部隊はリンドバーグで罪を犯した罪人、それも極罪を犯した罪人で構成された部隊であり、構成委員は三十六名＋ネメシスによって形作られている。

その部隊が使う作戦の概要はとてつもない程危険かつ残虐なもので、主に虐殺・侵略を目的としたあまりに危険な任務を任される部隊として近隣諸国からは恐れられ、また誰も抵抗出来ない最凶部隊である。

「そうだ：思い出したんだが、この基地には変な伝承があるらしい」
「へえ、どんなだ？」

「確か…」 極罪を犯した三十六名以上の魂を捧げるべし」…だっけか？」

「意味不明だぜ、もっとこう：ドカンとデカイ奴はないのか？」

「何言ってるんだ、この伝承はなあメサイア大陸の各地に散らばっていて、全てを満たした時には伝説が再臨するって話だぜ？」

「伝説ってえと：ああ、”ドロローサへの道は開かれ、黒龍は再臨する” ってやつだな。くだらん」

男はピンとグラスを弾く。グラスの中の水の量に比例して音は高く、大きかった。

そのグラスに血のように紅いワインを並々と注ぐ。

「ま、今日は」

「乾杯ってか？」

カチーン…とグラス同士を当てて耳障りの良い音を出して一気に紅い液体を飲み干す。

ベラベラに酔った奴も居れば全く酔わない強者もいる。

しかし、皆全員つい先ほどまで殺戮の限りを尽くしたのだ、それで祝杯を上げる精神はとてつもないものだ。

「隊長も呼んでくるぜ」

そう言ってまた別の一人の男は外に出た。
雨が降っていた。そう、とても冷たい雨だった。



漆黒の殺意を目に宿し、建物に向かう。

俺はこれから人を殺すだろうな。いや、殺さないと気が済まない。
もう、後戻りは出来ない。

「……………」

雨が降りしきる中、松下：いや、メガリスは一人歩く。
片手にはかなり長い刀を。

何故だか不思議と恐怖はない。コレが無我の境地というのだろうか、
とメガリスは思っていた。

考えているうちに、メガリス自身の中に何か穴が開いたような感覚
があった。

無。

闇。

光。

正義。

それらの四つの心がメガリスの心を支配し、また同調しつつあった。
そして、砂嵐が吹き荒れるように荒々しく乱れていた。
その時、建物の扉が不意に開いた。

「隊長も呼んでくるぜ：ん？」

「……………」

男が扉をこちらを睨んできた。

男はメガリスを見ると、ニタニタとした笑みでこちらを見てきた。

「おやゝ？ 生き残り発見ゝ」

男は品の無い笑いで嬉しそうに笑い、腰に差してある血にまみれた剣を引き抜いた。血が固まってあまり使えそうになさそうだが、それだけ人を殺した証明だった。

「死ねェ!!」

男は地面を踏みしめ、襲いかかってきた。

メガリスは悠然と正宗を構えて、男が射程圏に入るのを待つ。相手はただの人殺しだ、手加減など無用。

「無駄だ…」

瞬間、メガリスは正宗を軽々と動かし、目にも止まらぬ速さで刀を振るう。

「ぎゃふ…」

そして後に続く悲鳴と赤い雨。

その赤い液体が辺りを赤黒い染め上げる。

「初めて人を殺してみたが…なんてこたあないな」

メガリスは既に肉塊と成り下がった人間を蹴ってどかし、更にゆっくりと建物に入る。その際少し靴に血が付着したがそれを気にすることはなかった。

ギギィ…と戸を開ける。

「ハッ…何者だテメェ!!」

「ふん…ッ!」

なんだ、と顔を上げた男を出始めに斬る。

返り血が半端ない量が出たが、依然として気にする様子はメガリスには見られなかった。
ただの殺人鬼と成り下がったのだった。

「野郎オオオーッ！」

男が逆上して迫り、剣を振り下ろす。それを悠々と正宗で受け止め逆弾き返す。

追撃としてファイアを二、三発打ち込み、瞬間に近付いて腕を切り落とす。

まわりに飛び散る血の一粒一粒に死と絶望、後悔をはらんでいた。
メガリスは既に元の松下へと戻る気はさらさらなかった。実はこのメガリスこそが、もう一つの松下だった。

「どういつもこいつも…笑いやがって…ウォーター」

魔法で刀に付着した血を洗い流し、再び相手を見る。

もう容赦は出来ない。人を殺してしまったから止まらない。

メガリスはそれを喜ぶように正宗を握り締めた。後戻りは出来ない、一線を越えてしまったら元に戻ることは叶わないのだ。

そうして、敵に対する憎悪を膨らませて罪悪感を感じないようとしていた。こうなれば、徹底的に…

「絶命させるッ！」

一気に地面を蹴り上げ、狭い建物の中を駆け巡る。

出会った敵は刺し、斬り殺す。それだけだ。

まず一人、首を落とす。

二人目、腕と首を。

三人目、足と腕を。

そういう風に、まだまだ凶行は続く。

心臓を射抜き、魔法で燃やし、凍らせる。魔法剣で斬りながら傷を焼く。

頭を掴み、壁に押し付けながら手に炎の魔法を発現させて燃やす。

氷の中に閉じ込めて凍死させる。

慈悲はない、ただ悪魔のように：審判を与える。

正宗はかなりの血を浴びながらもなお、優秀な切れ味を保持していた。鎧も返り血を浴びまくってもなお、いや：より一層の強固さと柔軟さ、なにより妖しく見えた。

そうして、数々の悪を、敵を殺害した。

多分、その時の俺の顔は。

笑ってたんだと、思う。

◇

その後はもはや地獄と言って良いだろう、辺り一面血だらけになっていた。

基地内にいた敵のうちほぼ討伐し、壁や床には数々の頭、眼球、足、腕：人間は肉塊と化していた。

手は血で汚れて赤くなり、気味が悪かった。

頭がボーっとする。空洞で響く。

その時、刃物が空気をきる音が聞こえてきた。

どうやら剣が空を斬る音だ。

「死ねエエエー！」

「うるせえッ！」

正宗を握り締め後ろに思いつきり風った。あとに残るのは二つの肉塊と血溜まり。

返り血を浴びまくって黒かった鎧が赤黒い血の色に染まり、一種の

悪魔のようだ。

顔にも血が付き、目は闇に閉ざされていた。

「…そういえば、これはなんだ…？」

その虚ろな目が見ているものは、先程建物の中で切り捨てた肉塊だ。くぐもった目が疑問を照らしている。

「植物…？」

何故か。

肉塊が植物化していた。

顔や腕から奇妙な幹が育ち、その先に蕾や葉が萌え、その色は赤みがかっていた。

いや、おかしい。人間に植物が生える訳がない。寄生するとしても先程まで生きていた人間にたいして素早く寄生出来る訳がない。なんだ？　これは…

「うわあああああああ！！！」

その時、後方から突然叫び声がした。

何かに怯えているような、そんな叫び声だ。

「……………」

奇妙な肉塊と植物は雨に濡れて血と風に揺れている。

メガリスはそれを蹴ってどかし、後方を見た。

そして虚ろな目でその先を見据え、叫び声の場所に向かったのだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
.
.

Play the Game (後書き)

話の始めにある名言は、止めて欲しいなら言ってくださいね。即刻止めますから。

私の小説：崩れてきたね。ちっとも面白いと感じない。この小説の最初の文体と今話の文体、テンションの差が在りすぎ。

作者が感情移入できん。グロ多いし。でもグロ描きやすいんだよねえ：ファンタジーならこんな生々しい作品もあっていいんじゃないでしょうか？

バットエンドが一番好きで今風邪を引いている作者が何か言っていました。

YOUR SONG

あるところに怪物がいた。

名を『スフィンクス』と言った。

スフィンクスは出会う旅人にある質問を投げかけ、間違える度に旅人を喰い殺した。

近隣の村の人間は次々と殺された。

しかしある時、勇敢な若者がスフィンクスを退治しにやって来た。

若者を見たスフィンクスは、いつも通り質問を投げかけた。

「朝は四本足、昼は二本足、夕方（夜）は三本足の生き物はなんだ？」

その勇敢な若者は答えた。

「人間だ」



その場は血なまぐさかった。

辺りに鉄のような生ぬるい臭いが漂い、頭をクラクラさせる。地面には元々人間だった肉塊が、そして血が染み込んでいた。

雨は無情にもそれらに水を伝え、血と共に地面に染み込む。

太陽光を分厚い雲が覆い、今は夜のような明るさだった。風は容赦なく吹き荒れ、雨も風に乗って落ちてくる。

自然がこの世界を包み込んでいた。

その中で、ネメシスは刀でゆっくり男の心臓を貫いた。
男は何も叫ばなかった。だが、猿轡をされているからではないからだった。

「いいねえ…肉を斬る感触は…」

グチャリ、と生々しい音を伴いながら刀を引き抜く。

剣先には毒々しい血がベツトリと付き、刀はそれを吸収するかのよう妖しく煌めいた。

男は既に死んでいた。

最後に指を斬られた激痛に耐えきれなくなったのか、自らの口に付けられていた猿轡を飲み込んでしまったのだ。当然窒素してしまい、死んでしまったのだ。

ネメシスはガツカリしながらそれでも尚死体を弄んだのだった。

「…風が変わった…？」

そのとき、一陣の風がネメシスを通り過ぎた。

ネメシスは感じた。

この空気に強い殺気が含まれているのを。

先ほどまで吹いていた風は血と悲痛な嘆きを含んでいたが、今はどうだ…あからさまな殺気が場に侵入してきていた。

木々はざわめき、太陽は雲に隠れ、動物は逃げ出していた。

これは…自分と同じ種類の人間、殺人することに罪悪感が湧かない異常者…殺人鬼がそこにいる。

「久し振りに楽しめそうじゃないか…！」

ネメシスは目を細めながらニヤリと笑って、その風の向こう、霧の先を見た――



風と霧のなかに、一人の死骸が目飛び込んできた。
その風と霧も更に濃くなり、灼熱の炎よりも精神と心を焼く凄まじい殺気と敵意が、どっとメガリスを押し包んできた。

（ちい：先手を取られたか！！）

この霧の中で何かが蠢いているのを感じた。それを感じたは良いが、霧で敵が見えない。確かに敵は存在する筈だ。

メガリスは目を固く閉じ、周りの空気を感じた。一応魔力を使ってマバリアを自身の周りに張り巡らせた。

強力な殺気と敵意、そして何故か楽しむような感情を発している敵に、奇妙な違和感を感じた。

（狂っているのか？　楽しんでる…）

周りは深い霧で覆われて白み、視界はかなり悪い。この状況はかなりマズい。

いつ襲われてもおかしくない状況だ。

正宗を握り締め、敵の場所を索敵する。が、霧の為か知らないが僅か2・3メートルの範囲しか索敵出来なかったため、直ぐに魔力放出を止める。

その時、空を斬る音が微かに聞こえた。

（ちい…！！）

間一髪。後ろを振り向き正宗で防御に成功した。
見えたのは血の付いた妖しい刀だった。

「お前がッ…！」

「いいねえ…ゾクゾクするよ…」

メガリスが見た者。それは狂気に満ちた女だった。

血を浴びながらもそれを幸福とし、常に死に場所を求めてきたネメシスだった。

これは危険、と感じすぐさま回し蹴りを放ち罅迫り合いから脱出する。

「お前が…ネメシス、か？」

「そういうあんたは…メガリス」

メガリス…松下は目を見開いた。

何故自分がメガリスと呼ばれなければならない？ それは別の奴だと。

「あんたは…私と同じ殺人鬼さね。同じ匂いがするのさ」

「戯れ言を」

「まあいいさね。今は…」

ネメシスは瞬時にメガリスを射程圏に収め、強烈な一撃を叩き込む。
メガリスもなんとかガードしたが、頬がスーッと切れた。

（なんと…キツいな。しかも女ってことは、拒否反応が起きそうだし…）

メガリスはファイガを正宗にセット、つまり魔法剣ファイガを使用し、正宗の刀身に炎が出現する。正宗二刀流による魔法剣乱れ撃ちも試してみたいが生憎二刀流は体得しておらず、実戦で使うのは無理だ、と諦めた。

「魔法剣：いいねえ、あんた最高だよ！」

「何を興奮しているのかは知らんが：やってやる。素数は誰にも碎けない：」

二人は瞬時に地面を蹴り、この雨の中で激突する。

こうしてメガリスとネメシス、因縁の始まりの戦いが始まった。

どちらが勝とうが、彼ら殺人者としての闇は増幅するのみだろう、闇の氾濫が起こるのも時間の問題だった…。

◇松下が出撃した後。

「伊藤くん」

伊藤は『AWAKEN』の本拠地で出動の為の準備をしていた。制服を脱いで鎧を装着していた。その折にロリコン、ハンスが訪ねてきたのだ。

伊藤はハンスを部屋へ招き入れ、ハンスはここでいい、と自身が一番好む場所へ移動した。そこは窓側、二番目で太陽光が多量入るいい場所だった。

ハンスは自身の腕を組み、足を絡ませて伊藤に言った。

「：嫌な予感がする」

「それは…？」

伊藤は些か古い窓がギギイ…と音を発しながら中に閉め、ハンスに問うた。

「彼…松下君が危険な状況にあるかもしれない」

「根拠はなんですか？」

「勘、と言ったら君は怒るかい？」

まさか、怒りませんよ…と伊藤は答え、ハンスに近づく。
ゆっくりとした足取りだが、常に友を思いながら、だ。

「俺も嫌な予感がするんです…何かヤバいことが起きるような、そんな気がして」

「確かに、ネメシスのもとへ一人で行かせたのは無理だったか…？
やはり君も行かせた方が良かったかな？」

「…過ぎた事を悩んでもしょうがないですよ、今は早急に部隊を編成して救援に行くべきです」

ハンスはふと、窓の外を眺めた。

太陽は黒い雲に覆われ、その雲から冷たい雨が降りしきっている。
だが、窓を閉めている為に雨と冷たい風は入ってくる心配はない。

「伊藤君、頼まれてくれるかい？」

「はい」

「『AWAKEN』で松下君を助けに行行って欲しい。やれるか？」

伊藤は「もちろん」と頷き、ハンスもそれを見た。

風はより一層激しく窓を叩きつけ、雨も降りしきる。

外は夜のように暗かったが、この二人の戦士の心は光に溢れていた。



「コゼット」

「ん…副隊長か」

「伊藤でいいよ」

偶然廊下を通りかかったコゼットを見つけた伊藤はすぐさま呼び止めた。

コゼットはなにか焦っているように見えた。

「伊藤…どうかしたか？」

「いや、な…今から松下を助けに行く為の徴兵だよ。フェイルは？」

「フェイルなら、今トイレだが…隊長を助けに…？」

「ああ。アイツに何か危険が迫ってるような…そんな気がするんだ。アイツとは親友だから心配だし、電話にも出ないし…」

「…男の勘って奴？」

「そうだね、うん…そうだ」

「わかった、すぐ準備する。…あ、移動方法は？」

「バハムート烈のソル…あ、俺の使い魔な」

「それって…ゼロと同じ？」

「うん。じゃ、城の出口で待ってる」

そう告げ、伊藤はドラゴン育成所で待っているソルの元へ急いだ。



コゼットとフェイルの二人は今、制服を脱ぎ戦闘時に着る鎧などを装着していた。

コゼットはロッカーから鎧を取り出し、変わりに服を入れてボタンと閉める。少し汚れていたり凹んでいるロッカーだが、他のロッカーも同じように傷が付いていたりする。

フェイルは魔法の使い易さを重視した戦闘服をロッカーから取り出す。

「いいんですか？ 姉さん」

「何が？」

服を着ながらフェイルはコゼットに問う。

「来てるんでしょ？ あの手紙」

「…あれなら破り捨てた。今更奴からの手紙なんて…」

「でも」

「…私は破棄したわ。婚約なんて」

「…やっぱり、私のせい？」

フェイルは顔を俯かせて脱いだばかりの服を握り締める。

そう、私のせいで…と落胆しているフェイルに、コゼットは言い聞かせるように優しく言った。

「決してあなたのせいじゃない。私はあなたがいればそれでいいのよ」

「だから…私が荷物で」

「いいえ、フェイル。あなたは私の宝であり全てよ。だからそんな事を言わないでね？」

フェイルの頬に小さくキスをし、ゆっくりと抱きしめる。

そのとき何故だか、フェイルは暖かな気持ちを感じられた。確かに愛おしい姉の体温と命の鼓動が感じられる。それだけで安心できた。コゼットも同様に愛らしい妹の小さな体をぎゅっと抱き締めているだけで…力が沸いてくる。この子を守るのは私であり…伊藤であり、隊長の松下……この子だけは護らなければならない。それを再確認

できる。

「行こうか、フェイル」

「うん、お姉ちゃん」

元の世界でも同じように、この世界でも姉妹の力は無限大なのだ。そして、何よりもこうして生きていることこそ最も大事なことなのだ。

t o b e c o n t i n u e d . . .

YOUR SONG (後書き)

数十話ぶりに伊藤の使い魔を出した。

わからない人は『冒険の準備中』を参考。

：ごめん、俺ファンタジーに向いてない。あまり過去のお話を読み返さないでね。

Bohemian Rhapsody

人というものは、はじめから悪の道を知っているわけではない。
何かの拍子で、小さな悪事を起してしまい、それを世間の目にふれ
させぬため、また、つぎの悪事をする。

そして、これを隠そうとして、さらに大きな悪の道へ踏み込んで行
くものなのだ。

池波正太郎「殺しの波紋」



「ちい…」

状況はかなり悪かった。

霧は一向に晴れず、動くことによる体温上昇のおかげでかなり蒸し
暑かった。鎧の下は汗塗れで下着に吸収させてはいるが、なかなか
に気持ち悪い。

敵であるネメシスの姿も同じように視認することは叶わず、攻撃の
瞬間の一瞬でしか分からない。

「霧を抜けるか…仕方ない」

地面を蹴り上げ、一気に駆動する。

しかしそんなメガリスを弄ぶように霧は更に深く、暑くなっていっ
た。

その時、ふと考える。

『これは魔力が籠もっているのではないか?』

メガリスはこの場に異常な程の魔力をさっきから感じていた。体に張り付いて蒸し蒸しする暑い水分ともう一つの感覚。まさか、この霧で俺の居場所を特定しているのではないか？

「（と、言うことは…俺も出来るんじゃないか？）」

試す価値はありそうだ。

メガリスはすぐさま魔力放出を開始し、周りの霧に漂着させていく。この霧の中の、ごく近い所で何かの反応があった。

「…そこだッ！」

懷から数本のナイフを取り出し、反応があつた場所へ思いっきり投げる。シューウウンと空を切る音と共に飛んでいき、肉が裂ける音がした。

「…やってくれるじゃないか」

霧の向こうにネメシスが腹を押さえて立っていた。押さえている手からポタポタと血が出ている。

手には刀が握られ、またその刀にも血にまみれていた。

「壁に激突して死ぬツバメがいるそうだ……」

ネメシスは腹に刺さったナイフを抜いた。だが、その傷口から多量の血液がドクドクと流れ出ていた。

「そのツバメは他のツバメよりかなり上手くエサを捕獲したりする

そうらしい…」

じりじりと歩いてくる。

メガリスは再び正宗を構え直した。

「それは宙返りの角度の限界を親から教わっていない為について無謀な角度で飛行してしまう。でもね、親は教えないんじゃないんだよ…知らないのさ。だから教えられない。なぜ事故に会いやすいのかも知らないんだよ」

「……何が言いたいんだ？」

「…あんたはどっちだい？」

ネメシスは既にメガリスを射程圏に収めていたッ！ いつものまにか

「死になッ！」

ネメシスは身をかめると思いっきり下から刀を引き放った。メガリスも正宗を防御に相手の刀を当ててダメージを減らす。そこで瞬時に腕に魔力を込めてブリザラをネメシスめがけて放つ。しかしそれすらかわしながら更に接近してきた。

「私達は虫虻さ…殺人でしかする事がない…」

敵はあくまでも俺を殺すらしい。逃がす気は殊更ないようだった。ネメシスは魔力を刀に込め、静かに『ブリザガ』と唱えて魔法剣を発動した。

そんなネメシスを見て、静かにいった。

「確かに虫虻だな」

「そうさね。人間はゴミ以下さ」

「……………一つだけ言っとく。自分を虫ケラだと思って、そこから這い上がろうとする奴は、虫ケラとは言わない…それは人間だ。」

“ガキィイーン”と金属が擦れ合う音と共に両雄は激突した。

燃える正宗に絶対零度に近い刀の威力は五分と五分。ガキィ…ガキィイーンと何度も刀を振り回しては刀で防がれる。

二人は笑っていた。

「これこそ狂気さね！！ 感じる…濡れるねえ！」
「やる…ッ！」

既に二人の精神状態は極めて乱れていた。

メガリスの目には『漆黒の殺意』が籠もっており、もはや手が付けられない。

ネメシスは言わずもがな、命のやり取りを『快樂』として感じている。

たいていの人間は心に善のタガがある。そのため思い切った行動がとれないのだ。

そう、すばらしい悪への恐れがあるのだ。だが！ごくまれに善なるタガのない人間がいる…悪のエリート！ それはネメシスに当てはまるであろう。

だが、善のタガが外れてしまっている松下は正に『メガリス』として暴走してしまった。

しかし、決着はすぐに着くだろう。

彼らを包む運命はどんな人間にも覆すことは出来ないのだ…。



「はあ…はあ…」

既に戦いが始まって十分が経過する。

既にメガリスは肩で呼吸をせざるを得なかった。

あまりに相手がしぶとすぎるのだ。あんなに刀を振り回しているのに呼吸一つ見出さないのだ。しかも唐突に地面にクエイクを仕掛けたりする。そう、今までの実戦経験が甘すぎたのだ。

「お前——かなり疲れてるようだね」

「ふん…死んだわけじゃない」

「強がりな止した方がいいさ。楽に死ぬるならそれでいいじゃないか」「生憎…まだ、死ぬ予定は…ないんで」

正宗を杖代わりにしてヨロヨロと立ち上がる。

彼の鎧には彼方此方に傷が付き、時には貫通している傷さえあった。暗黒装備は既にボロボロになりながらも、まだなんとか主を守る機能を果たしているのだった。

「八刀…一閃」

弱々しく正宗を振るメガリスだったが、それは全て空に消え、代わりにあったのは霧のみだった。

「実戦経験がまだまだ浅い…それじゃ、私を殺せないさね」

「う…ヤバ…」

「そら」

「な！？　ぐ…は…ああ…」

ぐちゃり、という音と共に感じるのは激痛。

もはや熱いというレベルでは到底言い表せない、とてつもない痛さだった。ただとても冷たい物体が肩を貫いていて、それが傷口を凍らせているかのように思えた。

その血は吹き出しながらネメシスの刀にべっちやりと付着する。

ネメシスはその血を指ですくって舌で舐めた。

「若い血はいい…ゾクゾクするよ」

既に固形化している血液を溶かすように妖しく舐めまわし、恍惚とした表情を浮かべている。その表情はとてつもなく淫靡に感じられた。

「さて、貴方ならどうする？　この状況を打破出来るかい？」

無理だ。

この圧倒的な格の差を、俺は埋めきることは出来ない。

適わない。

ここで殺される。

そう思った、その時だった。

『グオオオン！』

「隊長オオオーッ！」

「松下ア！」

空に金龍…バハムート烈が鎮座していた。その背中にコゼットや伊藤、フェイルが乗っているようだ。

「…まあいいさね。今回は…生きている事に感謝しな」

ぐちゃりと肩から刀を抜き、メガリスは地面に倒れる。

「強くなって…私を殺してくれ。それまで…お預けさね」

そうメガリスの耳もとで囁き、ネメシスは地面を蹴って姿を消した。後には、血まみれのメガリス…いや、松下が残った。バハムート烈が着地し、背中からコゼットがかけてくるのが見えた。その薄れゆく意識の中で、コゼットを見た。

「隊長…しっかりして下さい！」

ゆさゆさと揺さぶられる自分を感じながら…自らの罪を自覚した。

人を殺した。この手で。

コゼットの綺麗な顔を見ながら、現実に対して拒絶をした。

そう…こころのどこかで、精神が崩れ去っていく音が聞こえた。

t o b e c o n t i n u e d . . .

B o h e m i a n R h a p s o d y (後書き)

ごめんなさい。

作者はファンタジー及び戦闘シーン上手く書けません。

次からは伊藤が目立つ…予定。

今回はQueenより自由人の狂詩曲。

T r u e M y L o v e (きしめん) (前書き)

クスツと笑っていただければ幸いです。

True My Love (きしめん)

悪が物質から来るものとすれば、我々には必要以上の物質がある。もし悪が精神から来るものとすれば、我々には多すぎるほどの精神がある。

ヴォルテール

◇

救護隊が到着したのは、松下が力尽きて倒れてから数分後のことだった。

その救護隊を率いているのはハンスで、彼は約百人程の部下と魔術師を部隊に入れていた。

ハンスは伊藤らが出撃したあとに直ぐに出発したらしい。ここらの地形はそう複雑ではなく、容易に到達が可能だったとか。

一方、力尽きた松下は意識を失い、仮設のテントで伊藤とフェイルによる治癒を試みている。

だが、一向に目を覚ます気配が無かった。体の傷は完璧とまでは行かないがほぼ完治し、健康状態は一応良好なのだ。だがそれでも目を覚まさないとなれば、彼らアマチュアの間では解決出来ず、早急に専門の医療機関つまり、医者に見せる事が必要なのである。

丁度ハンスは松下を見舞った時に、伊藤達から頼まれると、ケータイを取り出してどこかに掛け始めた。

「ローザか？　こちらハンス、松下を回収した。急いでそちらに送るから医療班を準備たのむ」

「松下…ああ、分かったわ…で、そっちの状況はどうなの？」

「ああ、見事にやられたよ…全滅だ。そこから中から血の濃い臭いがするし、死体は転がってる…吐きそうだよ」

「へえ…生存者は？」

「推測されるのは…二名。松下と…ネメシスだよ。ネメシスは逃げたかな」

「…分かった、とりあえず王女様に伝えておくわ」

「頼む」

ピ！ と通話を切る

そのケータイをポケットにしまい込んだ。

ここに駆け付けた時、それは壮絶な惨状だった。

あちらこちらに倒れている死体、飛び出した眼球、主がない刀など様々なものが散乱していたものだ。

その中に松下は倒れていた。

「…む」

ハンスの視線はまだ血の付いた建物の壁に注がれていた。しかし、近付いてよく見ればなんてことはない、ただの血だ。既に固まっ
ていて黒く変色している。

ハンスの任務は二つ。

一つは松下の救護。

二つは味方あるいは敵の捕虜から状況を聞き出すことだ。しかし、結果は敵味方ともに全滅してしまった。

あえて言えば、ハンス自身も味方が全滅していたのは想像の範疇だったのだが…

「まさか、敵も死んでるってのは…ね」

実地見聞によれば、敵の死に方はある共通点があったらしい。その共通点は、『全で一撃で殺られている』、ということ。

曰わく、『体に傷は無く、全て急所或いは首を斬られている』だという。

味方殺し（friendly fire）の可能性は否定は出来ないが、それだとこの暗殺能力の説明が出来ない。つまり、敵を殺したのは同一犯と見るべきだ。

ネメシスか、或いは松下か。

どちらにしても事件であるのは変わらない。

「ああ、帰りたいなあ…」

『ダメ!』

「ハッ…副官様あ」

いつの間にか、ハンスの背後に小さな副官が鎮座していた。

いつ背後に回ったのか、そんな事は考えない。これまでの煩わしい思考を遠くに投げ捨て、副官に抱き付こうとハンスは…飛んだ。

「んにゅ…フアイガッ!」

「え…ちょ…!」

「変態は死ねえ!」

突如として幼女…副官の周りの空気が圧縮され、酸素が燃える。そしてそのまま…ハンスに激突。

「燃…燃えるウウウ…萌え」

「変態だけに…変耐久力は凄いのか…」

やや小さな副官はその圧倒的な変態力に気圧され一歩退くが、ハンス自身は身を焼かれようとも尚向かっていく。

「幼女こそがッ！ 俺の世界だアァー！」

「変態は…ここからいなくなれ！！」

「変態と言う名の紳士ッ！」

「変態は…変態よ！」

その後ハンスが周りの兵士七人掛かりで静止させられるまで、この攻防は続いたという。

◇城。

「…まあ、あなたまで」

あれからすぐに松下は城の医務室に運ばれた。傷は完璧に完治していたが、一向に目を覚まさないためだ。

そして治癒部隊隊長のローザ・ルクセンブルクは呆れたように頭を掻いた。

「今回も…副官にちよっかい出して、返り討ちにされたのね？」

「ははっ！ 私はただ副官が可愛かったから…」

「バカね。頭がイカレてる」

ローザの目線の先には、ボロボロになったハンスの姿があった。

実はあのあと、副官にボロボロにされて放置され、誰も治癒魔法をかけてくれなかったらしく、松下と一緒に運ばれたのだった。

副官曰わく、『あの死体は片付けなくていい、オオカミにでも喰わ

せろ』とのこと。

「まあ、それはいいとして…」

「彼…まだ目を覚まさないのか？」

ローザはハンスの隣のベッドを見る。

そこには、未だに目を覚まさない松下がいた。

「彼はまだ生きている。ただ…」

「ただ？　ただ何なんだい？」

「彼は…多分、精神が極限状態だと思う。これまでの性格から推測するに、彼は人を殺した事は無かった。だけど」

「人を殺した事実が彼を追い詰めてるってことか？」

「恐らく。あなただってそうでしょ？　“毒蛇”さん」

ローザはハンスの方を見ながら言った。

ハンスはその名で呼ばれた時に顔をしかめた。

「蛇、とか。ナンセンス」

天井を見上げながらハンスは苦々しく呟いた。

彼の二つ名、つまり裏業界の通り名は“毒蛇”である。

ハンス自身もその二つ名を必ずしもよしとは思っていない。

「我々が来たときには既に敵は死んでいた。しかもネメシスと戦闘して生き残った。つまり、彼が『メガリス』な訳だが…おかしいんだよなあ…」

そもそも、松下が裏業界で『メガリス』と言われ始めたのにはある勘違いがあるのだ。

松下が任務でグールの散乱する、ある種のバイオハザード状態だった村を焼き払った。だが偶然か、たまたま居合わせたエンブラスの隠密の勘違いによって裏業界に『メガリス』の名は知れ渡り、現在に至る…コレが真相なのだが、生憎とこれをハンスは知らなかった。いや、誰も知る訳が無かった。

「結局、どうするんだ？ 策はあるのかい？」

しかしそこでローザはとてつもなく悪趣味の笑顔を浮かべ、

「あるわ…ただ、危険だけど♪」

そう、この悪趣味な笑顔の裏にある『好奇心』はとてつもなく危険だった。

そして敢えて言うておく。

彼女の二つ名は、

『白衣の悪魔』

True My Love(きしめん) (後書き)

この前、東方の『ネイティブフェイス』を学校の女子の前で弾いたんです。

「キモイ」

「お前に似合わない」

「上手いけど顔と合っていない」

と、女子からの罵声。

俺の…数ヶ月と腕の痛みを返してくれ…

そして絶望したッ！

あとジョジョ×バカテスの二次創作作品を描こうかと…誰も描いてないし…

この後は伊藤&ハンス

※ネイティブフェイスは途中までです。てか途中までしか無理。腕が持たん。ですが原曲通りの速さ、暗譜、クオリティは再現しました。

pray

・人間は自分の行動のためにあらゆる理由を持ち出す。
犯罪のためにあらゆる弁明を持ち出す。
安全のためにあらゆる口実を持ち出す。
だが絶対に持ち出さないものがある。
それが自分の臆病さだ。

by ジョージ・バーナード・ショウ



「精神に同調…3…2…1…行けます！」

「マナ値は？」

「98%です」

「持続可能時間は？」

「持って…二十分かと」

説明しよう。

今現在、ローザさんは松下に何かを取り付けている。更にどこから持ってきたのか、辺りはかなり大きな機械で埋め尽くされていた。

「な…なによこれ…」

俺の隣にいたコゼットはついそう漏らす。無理もない。ここは明らかに病院の風景ではない。

さっきから体を感じる魔力は恐らくあの機械から発せられているのだろう。この魔力量はかなり危険ではないのか、という危機感を伊

藤は感じた。

不意にローザは口を開いた。

「これは相手の精神を呼び覚ます機械。簡単に言えば、目覚まし……といったところかしら」

こちらに顔を向けずに、ただ淡々と言った。目覚ましというならこれほどの設備は必要なのだろうか、という疑問を伊藤はあえて呈してみた。

「松下の精神は今、不安定な状態。あの戦場で何があったのかわからないけど、何かしら彼の心に罪悪感を与えて咎が出来た。それを調べる機械よ」

「どこからそんな機械を持ってきたんだ？」

「愚問ね。私にそんなことを聞くのかしら？」

愚問だが、わからないから聞いてみたい。だがそれも無駄のようだ。彼女は答える気はさらさら無いようだ。

コゼットはなにやらイラついているように机をトントン、と人差し指で数回叩いた。

「私達が着いた時、隊長は血まみれで倒れていた。それと何かしら関係が？」

イラついている口調でコゼットは聞いた。何をイライラしているのかは果てしない。

「わからない。でも、それもいずれ解明されるわ。ただ……」

「ただ？」

「ここまで精神が危険になるのは稀よ」

ローザでさえ原因はわからなかった。

幾人の犯罪者や殺人鬼を見てきたローザも、ここまで壊れるのは見たことがないらしい。

だが、伊藤には分かるような気がした。

「――俺達は、戦争のない場所から来た。恐らく、そのせいかもしれない」

「……そう言えば、あなた達はどこから来たの？ 『AWAKEN』の隊長・副隊長の情報は隠蔽されててわかんなかったのだけど」

実は、ローザは『AWAKEN』が組織された時に『AWAKEN』の情報を見せてもらっていたのだ。

しかし松下達は流石に『日本』から来た、とは書けずにいたのだ。それは、誰も異世界から来たとは信じてはくれないだろうからだ。そういったことを踏まえて、伊藤は松下と話し合って最終的に『空欄』という選択をした。

伊藤は目をつぶって今までの故郷の生活を思い返した。

「俺達の国は、一切の戦闘が禁止された平和な国だった。そこでは剣を持って戦うこともなく、殺人者が英雄として崇められることもなかった。

法律における絶対的な秩序が敷かれ、子供は学んで大人は働いた。故に戦争なんて関係なく過ごしていたんだ」

今思えば、『日本』はとてつもなく平和な国だ。子供は自由に勉強ができ、金さえあればいくらでも食べ物が入る。

日本人がエコノミック・アニマルとあだ名され、一部の国で激しく排斥されているのも、外の世界、つまりこの世界に来て初めて共感

出来たことだ。

世界には、地雷で手足がもぎ取られて苦しんだり、満足に食べ物が得られず餓死していく者が沢山いる。その中で、先進国はのうのと生きてきたのだ。

「国では俺達は学生だった。知識を蓄え、金を稼ぐ為の仕事につく為にしか生きていかなかった。

いくら飢えている人がいようと関係なかった。ボランティアにも参加していたが、それもやはり小さな偽善を満足させることだった。

俺や松下、矢島はそんな事に気付かずだった。

だから、殺人という罪の意識に精神が耐えられなかったんだと思う」

今も恐らく矢島はのうのと学校に行き、絶対的な安心のもとで生きていくのだろう。伊藤も松下に付いて行かなければ、視野を広くすることは出来なかっただろう。今思えばゾツとする。

そういった平和ボケによって人間は罪に墜ちるのに気付かないのだ。

「結局、人間ってなんなんでしょうね。殺し合うことしか能がないのに」

悲しそうにコゼットが言った。

彼女自身も手を血に染めている。それを思い出しているのだろうか。

「私の実感は軍人の家系だった。幼いころから妹と魔法を練習させられたものよ。私が初めて人を殺したのは12歳。――罪の意識はあまりなかったわ」

彼女の金髪が太陽光を跳ね返している。

しかし、その下の顔は暗かった。

光と闇が、彼女自身を押しつぶしているようだった。

「私はいつも光の中にいる気だった。でも、私は光の影——闇にかいられなかった。光は誰もいない。いるとしたら常に正義を掲げるバカな人たち」

小説に置ける主人公は、いつも自身を正当化している。例えば、魔王を倒しにくる勇者。一見すれば光の中にある正義だが、魔王にすれば悪そのものだ。いくら魔王が悪い事をしていようが、だ。生きることが正義であり、それに相対する存在は全て悪そのものなのだ。

「先生、セット完了しました」

ローザのそばで機械を調整していた女性が言った。
何だろうか、ローザにスイッチらしきものを手渡した。

「結局正義とはなんなのか、悪はどういったものか、私達には分からない。でも——」

ローザはそのスイッチを持つ。

「私達は決して悪を選ぶことが出来ないわ。私達を選ぶのは常に善よ」

そして、スイッチを押した。

t o b e c o n t i n u e d . . .

p r a y（後書き）

ストーリーが思いつかなかった。
L i a 最高

謝罪

復活。

THE UNSUNG HEROを投稿しました。これはこの作品のリメイク作となっておりますので、そちらの方をご観覧ください。

この新規に描いた作品は、この作品のおかしいところ、無駄無駄アツ！ などを改善し、更に加筆修正しております。

それに伴い、いろいろな人を削除したり目立たせたりしています。どうぞ、この機会に見てっておくんなまし！

ジョジョ的なネタは薄くなっているのは少しお許してください。

では、アリーヴェ・デルチ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n61111i/>

君ならどうする？ この状況。

2011年11月3日16時00分発行